筑波大学博士（言語学）学位請求論文

日本語における形容詞テ形節の副詞的用法に関する通時的研究

菊池　そのみ

2021 年度

目次

序章 1

1．本論文の目的 1

2．本論文の立場 5

2.1．「文法史上の位置づけ」 5

2.2．「通時的研究」 6

3．本論文の意義 9

4．本論文の構成 11

第１章　先行研究 13

1．はじめに 13

2．古代語におけるテ形節に関する研究 13

2.1．佐藤（1969） 14

2.2．山口（1980） 15

2.3．山口（1998） 18

2.4．竹部（2001） 20

2.5．近藤（2007，2012） 22

2.5.1．中古語の副助詞の分類 23

2.5.2．副助詞の下接から見るテ形節の従属度 25

2.5.3．節内の副詞の生起から見るテ形節の従属度 25

2.5.4．近藤（2007，2012）の結論 26

2.6．吉井（2017） 27

3．古代語における形容詞連用形に関する研究 28

3.1．進藤（1978） 28

3.2．和田（1987） 29

3.3．小田（2015） 31

4．現代語における形容詞テ形節・連用形に関する研究 32

4.1．吉永（1995） 32

4.2. 竹沢（2001）.....33
4.3. 津留崎（2003）.....34
4.4. 内丸（2006b）.....36
4.5. 大島（2015）.....37
5. 従属節分類に関する研究 38
5.1. 南（1964b，1974，1993）.....38
5.2. 小田（1990）.....40
5.3. 近藤（1997，2012，2013）.....40
6. 現状の整理 43
7. おわりに 46

第２章　用語と時代区分..... 47

1. はじめに 47
2. 節・テ形節 47
2.1.「節」という用語を用いること 47
2.2.「節」の認定.....49
3. 副詞的用法 52
4. 付帯状況 56
4.1. 動詞述語の副詞節に関する研究 56
4.2. 情態修飾成分に関する研究.....59
4.3. 本論文の規定.....60
5. 時代区分 61
6. おわりに 64

第３章　中古語における形容詞テ形節..... 65

1. はじめに 65
2. 副詞的用法と非副詞的用法との分類方法..... 65
3. 形容詞テ形節の概観 68
3.1. 量的分布.....69
3.2. 語彙的特徴.....70

3.2.1. テ形節となる形容詞 71
3.2.2. 形容詞とⅠ類のテ形節に下接する動詞との組み合わせ 72
4. Ⅰ類の形容詞テ形節の修飾のタイプ 73
4.1. 修飾のタイプ 74
4.1.1. 〈付帯状況〉 74
4.1.2. 〈空間〉 76
4.1.3. 〈時間〉 77
4.1.4. 〈数量〉 78
4.2. 修飾のタイプ別の量的分布 79
5. 形容詞連用形との比較 81
5.1. 差異の概観 82
5.2. 〈付帯状況〉における形容詞テ形節と形容詞連用形 87
5.3. 〈空間〉〈時間〉〈数量〉における形容詞テ形節と形容詞連用形 90
6. おわりに 91
付表 A-1 Ⅰ類のテ形節となる形容詞とその用例数 92
付表 A-2 Ⅰ類のテ形節に下接する動詞とその用例数 93

第 4 章 形容詞テ形節の副詞的用法の変遷 94

1. はじめに 94
2. 用例調査の手順 94
2.1. 調査対象 95
2.2. Ⅰ類とⅡ類との分類方法 95
3. 量的推移 97
4. Ⅰ類の形容詞テ形節となる形容詞と下接する動詞 99
5. 修飾のタイプ 102
5.1. 〈付帯状況〉 102
5.2. 〈空間〉 103
5.3. 〈時間〉 104
5.4. 〈数量〉 105
5.5. 各時期の用例数 106

6. おわりに 107
付表 B-1　資料ごとの用例数（上代～中世前期）..... 109
付表 B-2　資料ごとの用例数（中世後期～近世後期）..... 110

第５章　〈付帯状況〉を表す「形容詞＋まま」の変遷 111

1. はじめに 111
2. 「形容詞＋ママ」の用法分類 112
2.1. 先行研究 112
2.2. 本章における分類 114
2.2.1. A〈随意〉 114
2.2.2. B〈付帯状況〉 115
2.2.3. 形態の対立について 116
2.3. 現代語と中古語との差異 117
3. 用例調査 118
3.1. 調査対象 118
3.2. 中古から近世まで 119
3.3. 近代以降 121
4. 〈付帯状況〉を表す「形容詞＋ママ」の増加の背景 122
5. おわりに 126

第６章　〈付帯状況〉を表す非対格自動詞節における変化 128

1. はじめに 128
2. 先行研究 130
3. 用例調査 132
3.1. 〈付帯状況〉について 133
3.2. 〈付帯状況〉を表す非対格自動詞テ形節 134
3.3. 〈付帯状況〉を表す非対格自動詞ツツ節 137
4. 〈付帯状況〉を表す節の内部構造の変化 139
4.1. 形容詞テ形節の副詞的用法との関わり 139
4.2. 〈付帯状況〉を表す節の内部構造の変化の背景 140

4.2.1. 格標示に関する議論との関連 140
4.2.2. 日本語における活格性に関する議論 141
4.2.3. 〈付帯状況〉を表す非対格自動詞節に起きた変化の位置づけ 145
5. おわりに 146

第７章　形容詞テ形節の副詞的用法の衰退に関する文法史上の位置づけ 148

1. はじめに 148
2. 形容詞テ形節と形容詞連用形との棲み分け 148
3. 〈付帯状況〉を表す節の内部構造の変化 152
3.1. 活格性の喪失との関わり 153
3.2. 従属節分類との関わり 154
4. 〈付帯状況〉を表す形式の変遷 156
5. 古代語の「テ」と現代語の「テ」との対応関係 157
6. おわりに 162

終章 163

1. 本論文の結論 163
2. 本論文の成果 165
3. 本論文の課題 166

付録　本論文の調査範囲における形容詞テ形節の副詞的用法の全用例 169

調査・引用資料 185

参考文献 191

本論文の構成と既発表論文との関係 202

凡例

・注は各頁に脚注として示し、注番号は章ごとに振る。

・用例番号は章ごとに振る。

・図表番号は「章番号-章における通し番号」とする。

（例）第 1 章における 4 番目の表…「表 1-4」

・句読点は「、」と「。」とを用いるが、引用に際しては原文に拠る。

・先行研究から用例を引用する場合には原則として先行研究に拠り、先行研究において示されている出典（資料名、巻名・巻番号、頁番号など）を用例の末尾の丸括弧内に示す。また、先行研究によって傍線や圏点が付されている場合には特に断らない限り、そのまま引用してある。

・資料から用例を引用する場合には原則として本論文末の「調査・引用資料」に記した各資料に拠るが、ルビなどを省略する場合がある。また、原則として用例の末尾の丸括弧内に資料名、巻名・巻番号、頁番号などを示す。更に『萬葉集』や勅撰和歌集から和歌を引用する際には『新編国歌大観』の歌番号を併記する場合がある。なお、引用に際しては縦書きを横書きに改め、強調のために下線を付したり太字にしたりする場合がある。用例の引用箇所における「…」は文中の一部を省略することを示す。

・章の中で同じ用例を再掲する場合には用例の末尾に「再掲（用例番号）」と記す。

・現代語の用例に付す記号として「*」は非文であること、「?」はやや不自然であること、「??」はかなり不自然であること、「#」は当該の解釈ができないことをそれぞれ表すものである。

・説明の便宜のために用法を山括弧で括って示すことがある。

・参考文献は「氏（発行年）」として示す。ただし、丸括弧内では発行年の丸括弧を省略する。

序章

1. 本論文の目的

本論文は日本語における形容詞テ形節（形容詞連用形に助詞「て」が下接した形式）を取り上げ[1]、その通時的変化の一端を明らかにするものである[2]。本論文の目的は次の通りである[3]。

本論文の目的　形容詞テ形節の副詞的用法について古代語における様相を明らかにした上でその通時的変化を記述し、形容詞テ形節の副詞的用法の衰退という現象について文法史上の位置づけを試みること

日本語を対象とした研究において助詞「て」は古くから「詞」、「助詞」、「助辞」、「複語尾」などとして着目されてきた形式であり、助詞「て」に関する先行研究の蓄積は極めて豊富である[4]。また、上代における「當時の國民の國語に對する自識の度」について述べた

---

1 「美し」、「をかし」のような語（「形容詞」）と「あはれなり」、「清らなり」のような語（「形容動詞」）とを一括して扱う立場もあるが、本論文においては両者を区別し、特に前者のテ形節（「美しくて」、「をかしくて」）を「形容詞テ形節」として研究の対象とする。「形容詞」と「形容動詞」との区別については現代語における形容詞テ形節・形容動詞テ形節を取り上げた内丸（2006b:43，注 1）における先行研究の整理が参考になる。

2 本論文においては動詞・形容詞・形容動詞・助動詞の連用形に助詞「て」が下接する形式のことを「テ形節」と呼び、助詞「て」に上接する語の品詞を明示する際には「動詞テ形節」、「形容詞テ形節」のように呼ぶこととする。なお、本論文における「節」や「テ形節」という用語については第 2 章第 2 節において整理する。

3 本論文においては特に上代・中古における日本語を「古代語」と呼び、上代から近世までの日本語を「古典語」と呼ぶことがある。また、近代以降の日本語については近代と現代とを便宜的に区別し、「近代語」、「現代語」とそれぞれ呼ぶことがある。このような本論文における時代区分については第 2 章第 5 節において提示する。

4 本論文の議論に関わる先行研究は第 1 章において整理する。なお、助詞「て」に関する研究史は青木（1961）、春日（1967）、此島（1966，1970）、京極（1973）、佐藤（1984）などの各研究に詳しい。

山田（1936）は『萬葉集』における歌と注釈とを挙げ[5]、助詞「て」が既に上代において注目されていた形式の一つであることを指摘している。

しかし、テ形節に関する先行研究の多くは古代語または現代語において用法の分類や周辺の他の形式との比較を行うという共時的分析を試みるものであり[6]、変遷を明らかにしようとする通時的分析は充分に試みられてこなかったと言える[7]。その背景には①古代語におけるテ形節と現代語におけるテ形節とが概ね同様の用法を持つものであると捉えられており、両者の間の差異が等閑視されてきたこと、②複数の時期の資料を網羅的に調査することが困難であるという技術的な制約があったことの 2 点の課題があるものと考えられる。

まず、①については古代語におけるテ形節と現代語におけるテ形節とを比較すると、同様の事態を表す用例が多いことから一見しただけでは両者の差異を見出だしにくいと言える。例えば、（1a）は古代語（中古語）の『源氏物語』における用例であり、（1b）は現代語のエッセイにおける用例である。

（1） a. いと若うをかしげなる声の、なべての人とは聞こえぬ、「朧月夜に似るものぞなき」とうち誦じて、こなたざまには来るものか。いとうれしくて、ふと袖をとらへたまふ。（源氏物語・花宴・356）

b. それをちゃんと知っていて源一郎さんが手配したのである。わたしはうれしくて泣いてしまった。（高橋直子『芦毛のアン』1998 年）

古代語の用例である（1a）は「とてもうれしくて、さっと袖をお捉えになる」のようにテ形節のままで現代語に訳し得るものであり、「いとうれしくて」という形容詞テ形節が

---

[5] 例えば、『萬葉集』には（i）のような歌とその注釈（山括弧内）とが見られる。これについて山田（1936:30）は（ii）のように述べている。

（i）我が門ゆ鳴き過ぎ渡るほととぎすいやなつかしく聞けど飽き足らず〈も・の・は・て・に・を、六つの辞を欠く〉［毛能波氐尓乎六箇辞欠之］（萬葉集・巻第十九・4176）

（ii）…「モ」「ノ」「ハ」「ニ」「ヲ」といふ助詞と「テ」といふ複語尾とを用ゐずして歌をよんだといふことで、歌としては一種技巧を弄したものであるが、われ／＼の語學的見地から見れば、頗る重要な事実を告ぐるものである。（山田 1936:30）

[6] 周辺の形式とは「て」が下接しない述語連用形（例えば、動詞連用形、形容詞連用形）や動詞連用形に「つつ」や「ながら」が下接した形式などが挙げられる。

[7] なお、「ている」、「てある」、「ていく」などのようなアスペクトに関わる複合的な形式については坪井（2005）のようにその成立と展開とに着目する通時的研究も見受けられる。ここではそのような複合的な形式ではなく、助詞「て」に限った場合に通時的研究が乏しいことを指摘するものである。

「ふと袖をとらへたまふ」に対する〈原因・理由〉を表していると言える。同様に現代語の用例である（1b）も「うれしくて」という形容詞テ形節が「泣いてしまった」に対する〈原因・理由〉を表している。このような用例においては古代語のテ形節と現代語のテ形節との間には差異のないものと考えられる。

一方で、形容詞テ形節の副詞的用法に注目すると、古代語と現代語とで異なっている部分が明らかになる。古代語では（2a）の形容詞連用形と同様に（2b）の形容詞テ形節にも副詞的用法が見られる[8]。例えば、（2a）は「おぼつかなくなる」の意、（2b）は「心細いまま(で)（月日が)過ぎてしまった」の意であり、いずれも副詞的用法と言えるものである。この他にも古代語においては（3）のように形容詞テ形節が副詞的に働く用例が見られる。

（2） a. からうじておはしまして、「あさましく心よりほかにおぼつかなくなりぬるを、おろかになおぼしそ。御あやまちとなむ思ふ。かく参り来ること便悪しと思ふ人々、あまたあるやうに聞けば、いとほしくなむ。大方もつつましきうちに、いとどほどへぬる」とまめやかに御物語したまひて、「いざたまへ、今宵ばかり。人も見ぬ所あり。（和泉式部日記・31）

b. 中の宮は、ふと隠れたまひぬれば、いと人少なに、心細くて臥したまへるを、「などか御声をだに聞かせたまはぬ」とて、御手をとらへておどろかしきこえたまへば、「心地にはおぼえながら、もの言ふがいと苦しくてなん。日ごろ、訪れたまはざりつれば、おぼつかなくて過ぎはべりぬべきにやと口惜しくこそはべりつれ」と息の下にのたまふ。（源氏物語・総角・318）

（3） a. さて、酔ひ惑ひて、うたひ帰るままに、「御車かけよかけよ」とののしれば、困じて、いとわびしきに、いと苦しうて来ぬ。（蜻蛉日記・上・166）

b. またの日、今日は御仏など近うて拝みたてまつらむ、ものども取り置かれぬ先にと思ひて、まゐりてはべりしに、宮たちの諸堂拝みたてまつらせたまひし、見申しはべりしこそ、かかることにあはむとて、今まで生きたるなりけりとおぼえはべりしか。（大鏡・道長・356）

c. かき絶え、慰む方なくて籠りおはするを、世人も、おろかならず思ひたまへることと見聞きて、内裏よりはじめたてまつりて、御とぶらひ多かり。はかなくて日ごろは過ぎゆく。（源氏物語・総角・331）

---

[8] この「副詞的用法」とは主に動詞を修飾し、「動きや状態の実現のされ方に関わる諸相」（仁田1983:18）を表す連用修飾の働きを指すものである。その詳細は第2章第3節において述べる。

d. うらやましがりて、「なほいま一つして、同じくは」など言へば、「まな」と仰せらるれば、聞き入れず、情けなきさまにて行くに、馬場といふ所にて、人おほくてさわぐ。（枕草子・五月の御精進のほど・185）

それに対して現代語においては（4a）のような形容詞連用形や（4c）のような「まま（で）」と異なり、（4b）、（4d）のようなテ形節は副詞的用法を持たないことが分かる[9]。

（4） a. 速く走る／美しく踊る／薄く切る／面白く読む
b. #速くて走る／#美しくて踊る／#薄くて切る／#面白くて読む
c. 心細いまま（で）（月日が）過ぎる／冷たいまま（で）食べる
d. ??心細くて（月日が）過ぎる／??冷たくて食べる

（いずれも作例）

このように古代語における形容詞テ形節に副詞的用法があることは既に山口（1998）、竹部（2001）、近藤（2007）、吉井（2017）などの古代語に関する共時的研究によって指摘されており、現代語における形容詞テ形節に副詞的用法がないことは既に吉永（1995）、竹沢（2001）、津留崎（2003）、内丸（2006b）、大島（2015）などの現代語に関する共時的研究によって指摘されている。これらを踏まえると、古代語において見られた形容詞テ形節の副詞的用法が現代語においては見られず、中世から現代に至るまでの間に衰退したということになるが、その通時的な変遷を明らかにした研究は未だ見られないという状況にある。また、古代語における形容詞テ形節の副詞的用法が現代語の形容詞テ形節と異なるにも拘わらず、その通時的変化が取り上げられてこなかった理由の一つとして古代語の形容詞テ形節において副詞的用法がどの程度の割合を占めるものであったのかという点が明らかでなかったことが挙げられる。古代語の形容詞テ形節においては一見すると、その多くが（1）のように現代語と同様の用法（のみ）を有しているように見えることから、両者の差異に詳しく言及するものが少なかったものと考えられる。

次に②についてはこれまでの研究において付属語である助詞「て」の用例を多くの資料から網羅的に収集し、量的分布に基づいて共時的・通時的に検討するということ自体が技術的に非常に困難であったという事情がある。仮に当該の資料の索引が存在する場合に

[9] 「まま（で）」については第 5 章において取り上げる。

もその索引に助詞「て」が立項されていない場合や立項されていたとしても網羅的でない（多くの漏れがある）場合などがあり、散発的な挙例に留まらざるを得ないという制約が認められる。

これに対して近年、構築や拡充が進められているコーパスによって複数の資料を対象として網羅的に助詞を調査することが可能になりつつあると言える。具体的には国立国語研究所による『日本語歴史コーパス』や国文学研究資料館による『日本古典文学大系本文データベース』を始めとして用例を網羅的に収集するために利用可能なデータベースの構築が進んでいる。

本論文が取り上げる形容詞テ形節についてはこのようなコーパスの利用によって従来は技術的に不可能に近いものであった量的分布・量的推移を明らかにすることが可能になったと言える。当然ながら、これは用例を網羅的に収集することが可能になったということであり、単に用例を収集しただけでは不充分である。本論文ではこれまでの研究において実施されてきた形容詞テ形節の質的な分析を踏まえ、網羅的に収集した用例を量的な観点からも分析し、その変遷を論ずることとする。このように質的な分析に加えて量的な観点を導入するという本論文の方法はテ形節研究の進展に寄与し得るものであると言える。

以上のように、本論文は従来の研究において明らかにされていない形容詞テ形節の副詞的用法の変遷を量的な観点からのアプローチも取り入れて通時的に記述するものである。

2. 本論文の立場

次に本論文の目的に掲げた「文法史上の位置づけ」と本論文の表題に掲げた「通時的研究」とを順に取り上げ、本論文の立場について説明することとする。

2.1. 「文法史上の位置づけ」

まず、本論文は目的に掲げる通り、形容詞テ形節の副詞的用法の衰退という現象についてその「文法史上の位置づけ」を試みるものである。この「文法史上の位置づけ」とは他の形式や他の現象（他の形式に起きた変化）との関連において当該の現象を相対的に捉え直すことを意味するものである。具体的には第 3 章において形容詞テ形節と共に形容詞連用形を取り上げ、第 5 章において〈付帯状況〉を表す「形容詞＋まま」を取り上げ、第 6 章に

おいて〈付帯状況〉を表す非対格自動詞テ形節・ツツ節をそれぞれ取り上げる[10]。その上で、第 7 章において形容詞連用形との棲み分け、〈付帯状況〉を表す節における内部構造の変化、〈付帯状況〉を表す形式の変遷、の 3 つの観点から、形容詞テ形節の副詞的用法の衰退という現象を捉え直すことで「文法史上の位置づけ」を試みるという手順で議論を進めていく。このように形容詞テ形節の副詞的用法と他の形式・現象とを照らし合わせることによって形式間にどのような機能の分担があったのかという点や副詞的修飾を担う形式の中で形容詞テ形節がどのような用法を持っていたのかという点などを明らかにすることが可能になると言える。また、本論文は形容詞テ形節の副詞的用法の衰退という変化を他の形式の変化と関連づけて捉え直すことによって、日本語の文法変化において当該の現象がどのような意味を持つものであるのかという点を論じようとするものである。

なお、このように述べるのは本論文が当該の現象の「文法史上の位置づけ」を試みるものであり、当該の現象についてその変化を引き起こした要因を解明することを目指すものではないからである。当該の変化を引き起こした要因を解明するような場合には、当該の形式・現象とは別に要因となる形式・現象があることを所与の前提として議論を進めることになるが、本論文は変化についてそのような因果関係を必ずしも所与の前提とはしないという立場を採る。そして、当該の変化の初期段階からその後の変遷を記述すること、その周辺の形式との比較によって相対的な競合関係を論ずることを以て、当該の現象自体を明らかにしていくことに重きを置くものであることを申し添える。

2.2. 「通時的研究」

続いて本論文は表題に掲げる通り、形容詞テ形節の副詞的用法に関する「通時的研究」である。この通時的研究には様々な方法があるが、本論文においては古代語と現代語とを比較することで明らかになる差異を踏まえ、特に変化の初期段階に当たる古代語を対象とした共時的検討を行い、それに続いて中世語以降の複数の時期を対象とした共時的検討をそれぞれ行った上で、その結果を時期ごとに並べることで通時的検討を行うという手順を採る。本論文において古代語の共時的検討を行う際には資料の制約によって形容詞テ形節

[10] 第 5 章と第 6 章とにおいて〈付帯状況〉を表す形式を取り上げるのは第 3 章、第 4 章における分析の結果、形容詞テ形節の副詞的用法の修飾のタイプ（形容詞テ形節が下接する動詞に対して持つ意味による下位分類）として〈付帯状況〉が中心的なものであったことが明らかになったことを踏まえたものである。

の用例が多く見られる最古の時期に当たる中古語を対象としてその様相を記述する。また、通時的検討を行う際には上代語から近世語[11]までを広く対象として変化を捉えることを試みる。なお、通時的検討においては時間幅のある年代を当該の一時期と仮に看做して共時的な分類を実施し、その量的分布を明らかにした上で、各時期の結果を古いものから順に並べることによってその変遷を明らかにしようとするものであると言える。

これらに加えてここでは特に古代語と現代語とを比較するということについて補足しておく。これは北原（1984）、近藤（2000）、高山（2002）などの研究によってその有効性が説かれている古代語と現代語との「対照研究」を参考とした方法である[12]。古代語と現代語とのモダリティ形式に関する研究である高山（2002:16）は日本語の「史的研究」について（5）のように述べている。

（5）　史的対照は日本語においてはあまり行われていない。史的研究と言えば、共時的研究か通時的研究のどちらかだろうし、対照研究と言えば、日本語と外国語との対照が一般的である。しかしながら、筆者は同一の言語における特定時期の言語体系と、それとは異なる特定時期の言語体系との対照が可能であると考えている。（高山 2002:16）

高山（2002）のこのような立場は北原（1984）や近藤（2000）において提示されたものを踏まえたものであり、文法史研究の方法論について取り上げた北原（1984:130）は「共時論的視点」と「通時論的観点」との絶対的な対立を示すソシュールの言語研究論に対して（6）のように述べている。

（6）　しかし、考えてみるに、ある一つの体系＝言語状態においてある一点が変化すれば、その変化は、次の言語状態に変化をもたらし、そこではかならず何ものかによって補償がなされるはずである。ことばをかえていえば、ある変化は、それを許すような背景があってはじめて可能であるということができる。その補償するものないしは背景なるものは、共時論的観点だけからは、決して見えてこない。また、継起性の軸のうえでは「同時に一つ以上の物を考察すること

[11] 第 5 章で取り上げる「形容詞＋まま」については近代語・現代語の様相も取り上げる。
[12] この他にも日本語の各時代の文法と現代語の文法とを「対照」する試みとして川端他〔ママ〕（編）（1981）や金水（1995）などがあり、近年の試みには野田・小田（編）（2021）などがある。

はけっしてできない[13]」ところの通時論的観点だけから見ても解明することができない。やはり、それは、ある言語状態とその変化した次の言語状態とを見くらべること、すなわち、体系と体系とを重ね合わせてみることによって、はじめて可能となるものであろう。（北原 1984:130-131）

つまり、北原（1984）は「共時論的観点」、「通時論的観点」とは別に当該の言語状態同士を比較することの意義を指摘しているということになる。

また、「歴史的変化を考慮した研究方法」について取り上げた近藤（2000:79-81）は古代語と現代語との関係について古代語が変化して現代語になったと捉える立場を採る研究を「通時的研究」とし[14]、反対に「きわめてよく似た二種類の言語」と捉えて両者を比較する研究を「擬似共時的研究」としている[15]。近藤（2000）はこの「擬似共時的研究」の立場によって「第二種関係節」（いわゆる「主要部内在（型）関係節」）の古代語と現代語との差異を明らかにし得る例を挙げている。

最後にこれらの研究を踏まえた高山（2002）ではこのような「対照研究」の意義として内省が効き、作例やテストを使用することによって理論的に深く分析し得る現代語の知見を他の時代の言語の研究に応用することが可能である点を挙げている。また、現代語については古代語との対照によって言語現象を「相対化」し得るとし、「史的対照は一方通行ではなく、双方向的になされるべきである」（高山 2002:17）と述べている。高山（2002:17）の挙げる「史的対照」の有効性は（7）に示す 3 点である。

（7） a. 二つの言語体系を対照することによって、記述のターゲットとする言語のどの

[13] 原文注（12）「同右書一一三ページ。」（北原 1984:134）。なお、ここでの「同右書」は「フェルディナン・ド・ソシュール（1972）『一般言語学講義』，岩波書店（小林英夫訳）」を指す。

[14] 近藤（2000:79）は古代語（近藤 2000 における「古典語」）が一般に「平安時代の京都の言語」を指し、現代語が一般に「共通語（東京方言）」を指しており、「このふたつは話されている場所が異なることから、直接の先祖・子孫関係にはないはずである。しかし、一般には、古典語が変化して現代語となったとおおざっぱに考えられているし、それで問題のない部分も多い」と述べている。

[15] 近藤（2000:80）は日本語と朝鮮語（韓国語）とが「いわゆる音韻法則を基にした系統論において兄弟言語であることが証明しにくいほど、その直接の系統的つながりは（恐らくあるであろうが、あるとしても）弱いものである。しかし、この二つの言語は非常に類型論的に近いものであるので比較対照して研究すると有益なことが多い」とし、これを「いわゆる対照言語学的研究」としている。このようないわゆる他言語同士を突き合わせた共時的な「対照研究」に対して異なる時期の同一の言語同士を比較することが近藤（2000）における「擬似共時的研究」である。

部分が重要かがわかる。そこから、新たな問題の発見、他の時代との相対化が期待できる。（高山 2002:17,（1））

b. 現代語は内省が効くので、理論的に深いところまでわかる。その成果を活用すれば、記述中心であった古代語研究を活性化する。（高山 2002:17,（2））

c. 言語の普遍性の解明につながってくる。言語の類型論的研究への発展が期待されるのである。（高山 2002:17,（3））

これらの先行研究における指摘を踏まえ、本論文は日本語における「史的対照」という方法を取り入れ、通時的検討に先立って古代語と現代語との差異を明らかにすることを試みる。本論文は古典語（上代語～近世語）を中心的な対象として議論を進めるものであり、現代語について詳細な検討を実施するものではないが、本論文における調査・分析によって現代語（における状況）がどのような過程を経て成立したのかという点や古代語に対して現代語がどのような特徴を持っているのかという点を（言わば、間接的に）明らかにし得るものであると言える。この点で高山（2002:17）の「史的対照は一方通行ではなく、双方向的になされるべきである」という指摘にも部分的には適うものであると看做し得る。ただし、このような「双方向的」な「史的対照」は本論文における中心的な方法とは言えないことから、形容詞テ形節や「形容詞＋まま」などの個別の形式について古代語と現代語との共通点・相違点を検討することについては「対照」という語の代わりに「比較」という語を用いることとする[16]。

3. 本論文の意義

続いて本論文の意義を述べる。本論文は特にテ形節に関する研究、副詞的修飾に関する研究、従属節に関する研究のそれぞれに対して意義を持つものであると言える。ここではそれぞれについて順に述べる。

まず、テ形節に関する研究においては、これまでの研究で通時的に扱われてこなかった形容詞テ形節の副詞的用法の変遷を明らかにするという本論文の中心的な議論自体が新規性のある点であり、意義のあるものであると言える。更にこれまでの研究においては技術

[16] なお、本論文においては古代日本語と現代日本語との系統関係に関する位置づけを含むものとして「比較」という語を用いる訳ではなく、単に形式同士を比べることを指し示す語としてこれを用いるという点を強調しておく。

的に困難であった用例の収集に関する課題をコーパスの利用によって解決し、質的な分析に加えて量的な分析を導入するというアプローチはテ形節の通時的研究において新たな方法を提示するものである。

次に副詞的修飾に関する研究においては、形容詞テ形節の副詞的用法を通時的に捉えること、副詞的修飾を担う形式について通時的な変化を問い直す必要性を提示することの 2 点に意義があると言える。これまでの研究において形容詞テ形節が副詞的修飾を担う形式の一つとして議論されることは非常に稀であり[17]、あくまで古代語のテ形節の用法の一部として捉えられてきたという経緯がある。これに対して本論文は形容詞テ形節の副詞的用法の規定やその下位分類（修飾のタイプ）について検討する際に特に現代語において蓄積のある副詞的修飾に関する研究を参照し、その議論を取り入れることを試みる。これによって古代語において副詞的修飾を担う形式である形容詞テ形節と形容詞連用形との比較や古代語と現代語との比較、古代語から現代語にかけての通時的検討が可能になる。副詞的修飾を担う形式としての形容詞連用形や形容詞テ形節は古代語と現代語とを比較することも古代語から現代語にかけて通時的に検討することも詳細には試みられておらず、本論文はこのような研究において先駆的な試みであると言えよう。本論文の視点や方法はこれまで共時的な分析に留まっていた当該分野の研究を通時的な分析へと推し進める指針となるものと考えられる。

続いて従属節に関する研究においては、本論文において中心的に扱う形容詞テ形節の副詞的用法が「A 類」の節（南 1974）に概ね相当するものであることから、その変化を記述することで従属節分類を通時的に検討するという意義を持つものであると言える。従属節分類に関する研究については南不二男氏の一連の研究[18]によって現代語における従属節分類が整理され、それに引き続いて従属節（複文）に関する研究が進展してきたという経緯がある。また、古代語の従属節分類については助動詞の承接に関する北原（1969）、従属節内に現れるモダリティ形式に関する高山（1987）が早く、それに続く小田（1990，1994）や近藤（1997）によって現代語の従属節分類に対応する中古語の従属節分類の検討が試みられてきた。これらの研究は基本的に古代語（主に中古語）の従属節においても現代語と

[17] 例えば、小田（2015）は古代語における形容詞連用形による副詞的修飾を整理した上でその一部を形容詞テ形節が担うこともあると述べており、副詞的修飾を担う形式の一つとして形容詞テ形節を取り上げていると言い得る。ただし、小田（2015）は古典語（概ね上代語～近世語）の文法に関する総説であって個別の形式に関する詳細な議論を試みたものではない。

[18] 南・鈴木（1963）における話し言葉の調査報告を嚆矢として南（1964a，1964b，1974，1993）などの研究がある。なお、南氏は一貫して「従属句」と呼んでいるが、本論文においては「従属節」に統一する。「節」や「句」という用語については第 2 章第 2 節において整理する。

同様の階層性が認められることを示すものであり、その通時的変化を捉えようとするものではない[19]。本論文において取り上げる形容詞テ形節の副詞的用法は古代語にあって現代語にはないものであることから、「A 類」の節に属する形式が古代語と現代語とで異なっていることを示唆するものであると言える。このように形容詞テ形節の副詞的用法の古代語における様相と中世以降の変遷とを明らかにすることは従属節分類を通時的に検討することの一助となると言える。

4. 本論文の構成

本論文の構成は次の通りである。

序章
第 1 章　先行研究
第 2 章　用語と時代区分
第 3 章　中古語における形容詞テ形節
第 4 章　形容詞テ形節の副詞的用法の変遷
第 5 章　〈付帯状況〉を表す「形容詞＋まま」の変遷
第 6 章　〈付帯状況〉を表す非対格自動詞節における変化
第 7 章　形容詞テ形節の副詞的用法の衰退に関する文法史上の位置づけ
終章

ここでは各章についてその概要を順に述べる。

序章では本論文の目的、本論文の立場、本論文の意義をそれぞれ述べた上で、本論文の構成を示した。

第 1 章では本論文に関わる先行研究を「古代語におけるテ形節に関する研究」、「古代語における形容詞連用形に関する研究」、「現代語における形容詞テ形節・連用形に関する研究」、「従属節分類に関する研究」の 4 つに大別し、それぞれについて概観する。また、これらの先行研究を踏まえて現状を整理し、本論文の位置づけを述べる。

[19] 近年の研究である北﨑（2021）は中世末から近世において従属節分類（主に B 類、C 類）に属する形式に異同があることを指摘しており、従属節分類を通時的に捉えようとする試みの一つであると見受けられる。

第 2 章では本論文において使用する用語の規定を示すと共に本論文において採用する時代区分について述べる。用語については特に「節・テ形節」、「副詞的用法」、「付帯状況」を取り上げ、先行研究の指摘を踏まえて本論文における各用語の規定を試みる。時代区分についても同様に先行研究を整理し、本論文における時代区分を示す。

第 3 章では中古語（中古和文資料）における形容詞テ形節を対象とし、副詞的用法と非副詞的用法とを分類する手順について述べた上で副詞的用法と非副詞的用法との差異を量的分布と語彙的特徴との 2 つの観点から明らかにする。次に形容詞テ形節の副詞的用法の下位分類として下接する動詞（被修飾語）に対して持つ意味（修飾のタイプ）の観点から分析し、各タイプに該当する用例数（割合）を示す。続いて形容詞テ形節の副詞的用法と形容詞連用形の副詞的用法との差異について語彙的特徴と修飾のタイプとの 2 つの観点から明らかにすることを試みる。

第 4 章では形容詞テ形節の副詞的用法について上代・中古語から近世語にかけての用例調査を実施し、その変遷を明らかにする。特に量的推移、語彙的特徴（テ形節となる形容詞やテ形節に下接する動詞）、修飾のタイプの 3 つの観点から形容詞テ形節の副詞的用法が衰退していく過程を捉えることを試みる。

第 5 章では「形容詞＋まま」を取り上げ、現代語と中古語とにおける「形容詞＋まま」の差異を明確にした上で〈付帯状況〉を表す「形容詞＋まま」の変遷を明らかにする。更に「形容詞＋まま」が〈付帯状況〉を表すようになった背景について「動詞連用形＋た＋まま」や形容詞テ形節の副詞的用法との関わりについて検討する。

第 6 章では〈付帯状況〉を表す非対格自動詞テ形節・ツツ節に主節と異なる主語（対象主語）が現れる用例を取り上げ、これが見られなくなる時期を調査する。また、形容詞テ形節の副詞的用法との関わりを指摘し、〈付帯状況〉を表す節に対象主語が現れなくなったという変化について日本語における「活格性の喪失」との関連について検討する。

第 7 章では第 3 章～第 6 章における議論を踏まえ、形容詞テ形節の副詞的用法の衰退について形容詞連用形との棲み分け、〈付帯状況〉を表す節における内部構造の変化、〈付帯状況〉を表す形式の変遷の 3 つの観点から文法史上の位置づけを試みる。その上で古代語における「テ」と現代語における「テ」との対応関係を試みに提示する。

終章では本論文の結論、本論文の成果、本論文の課題をそれぞれ述べる。

第 1 章
先行研究

1. はじめに

本章では本論文全体に関わる先行研究を便宜的に「古代語におけるテ形節に関する研究」、「古代語における形容詞連用形に関する研究」、「現代語における形容詞テ形節・連用形に関する研究」、「従属節分類に関する研究」の 4 つに大別し、概観する。その上で現状を整理し、本論文の位置づけを述べる。

以下では先行研究において挙げられている用例を引用するに当たって縦書きを横書きに改めた場合があるが、表記や強調（下線、圏点、ゴシック体など）は基本的に先行研究に従うこととする。また、「テ形節」という用語が用いられていない先行研究について述べる際には当該の語を鉤括弧で括った上で先行研究の表現をそのまま用いることを基本とするが、説明の都合上、便宜的に「テ形節」に置き換えて述べる場合がある。なお、本章における「古代語」は上代語と中古語とを合わせた名称である[1]。

2. 古代語におけるテ形節に関する研究

初めに古代語におけるテ形節に関する研究を概観する。古代語におけるテ形節に関する記述の蓄積は豊富であるが、ここでは佐藤（1969）、山口（1980）、山口（1998）、竹部（2001）、近藤（2007）、近藤（2012）、吉井（2017）の研究を取り上げ、特に本論文全体と関わる形容詞テ形節に関する記述を中心的に見ていくこととする[2]。

---

[1] これらの用語と時代区分とについては第 2 章において改めて述べる。

[2] テ形節（助詞「て」）に関する研究史は青木（1961）、春日（1967）、此島（1966，1970）、京極（1973）、佐藤（1984）などの各研究に詳しいが、特に 1980 年頃から今日に至るまでの古代語を対象としたテ形節に関する研究を整理したものは見当たらない。

2.1. 佐藤（1969）

まず、古代語と現代語とにおける接続助詞「て」について概観している佐藤（1969）の研究を取り上げる。佐藤（1969）は接続助詞「て」が完了の助動詞「つ」の連用形から転じたものであるとし、これを助詞と見ることを可能とする理由として既に上代の文献に形容詞に「て」が下接した形式（本論文における形容詞テ形節）のあることを指摘し、(1)の例を挙げている。これについて佐藤（1969:443）は古代語において形容詞に助動詞が下接するのはカリ活用（補助活用）の場合のみであり[3]、(1)のようにカリ活用でない形容詞に助動詞が下接するのは「助動詞本来の用法ではない」ことから「て」が助詞であるという見方を強めている。

(1)　a. 許太加久氐（こだかくて）（木高くて）里はあれども

（万葉集、巻一九・四二〇九）（佐藤 1969:443）

b. 今日よりは可敝里見奈久弖（かへりみなくて）（顧みなくて）

（万葉集、巻二〇・四三七三）（佐藤 1969:443）

次に佐藤（1969:447）は「て」の意味について「助動詞「つ」は事象を確認するに[ママ]用いるので、「つ」から転じた「て」も同じ意味を表わし、ある事実の存在を確めたうえで、他の事実が並存し、または継起することを示す」と述べた上で、(2)に示すように 5 つに分類している[4]。

(2)　a. 事実の並立を表わす。

里は荒れて人は古りにし宿なれや庭もまがきも秋の野らなる

（古今集、秋上）（佐藤 1969:447, (1)）

b. 事実の継起を表わす。

春過ぎ而（て）夏来たるらし白たへの衣ほしたり天の香具山

（万葉集、巻一・二八）（佐藤 1969:447, (2)）

---

[3] 形容詞のカリ活用については形容詞の活用が揃う経緯について和文資料と訓点資料とを照らし合わせながら検討した近年の研究である木田（2011）に詳しい。

[4] 「て」が助動詞「つ」の連用形であるという立場は山田（1908）に示されたものであり、佐藤（1969）以外に『源氏物語』における形容詞連用形の機能について分析した進藤（1973）の整理においても採用されており、この説に立脚する立場はある程度、定着していると看做し得る。

c. 原因・理由を表わす。

障(さは)ることありて、なほ同じ所なり。　　（土佐日記）（佐藤 1969:447,（3））

d. 連用修飾の関係を表わす。

見渡せば柳桜をこきまぜて都ぞ春の錦なりける（古今集、春上）

月のいとあはれなるに、ながめやりてゐたれば（蜻蛉日記）

（佐藤 1969:447,（4））

e. 逆接の関係を表わす。

わが心なぐさめかねつ更級やをばすて山に照る月を見て（古今集、雑上）

（佐藤 1969:447,（5））

また、佐藤（1969:447）は特に（2d）の「連用修飾の関係を表わす」場合について「ここでいう連用修飾というのは、あとにくる用言の表わす事実について、その様態・手段などを述べて限定するものである」とし、「ながめやりてゐたれば」の例のように「あとにくる用言が補助的な機能をもつにすぎないものである」と述べている。更に（2）のような意味の分類を踏まえ、「現代語の「て」も本質的には同じ意味で用いられているということができる」としている（佐藤 1969:447）。

2.2. 山口（1980）

次に古代語の接続形式を対象とした山口（1980）の研究を取り上げる。まず、山口（1980:1）における「接続」とは「文と文、または、文相当の句と句を、ほぼ対等の資格で相関させること」であり、品詞としては「接続詞」と「接続助詞」とがその機能を担っているとされる。その上で、山口（1980:6）は「接続法に関する従来の研究といえば、品詞論的に分解された接続助詞の用法という見方に立つものが大勢を占めていたが、そういう見方だけでは不充分であろう。接続法の研究には、互いに結ばれている句的意味どうしの関係から、その接続に関与している形式の役割を分析していくことが必要である」としている。また、これは「接続表現に認められる意味関係とその接続形式がそれをどのように表示しているかという問題は切り離して考えることが必要である」（山口 1980:7）という主張にも言い換えられている[5]。

[5] 山口（1980:7）は特に接続形式が意味をどのように表示しているかという点は従来の研究に

次に山口（1980:256）は接続形式における「て」について「接続助詞「て」によって結ばれた両句に認められる意味関係の種類は、古代語におけるいかなる接続形式のそれよりも多様であろう」と述べ、「て」の「最も基本的な意味関係は、二つ（以上）の事態が、空間的にせよ時間的にせよ、ただ並列されているというだけの関係であると見てよい」と指摘した上でこのような意味関係を「並列性」としている[6]。また、山口（1980）は「て」の持つ意味関係を①条件表現、②「場面性の関係」、③手段や方法の 3 つに大別している。ここではそれらを順に概観する。

まず、①条件表現には仮定と確定との別、順接と逆接との別があり、「て」はそのいずれにも相当するとした上で「「て」自体が条件関係を明示するわけではない。「て」による条件表現の関係は、条件関係に関する理解を文脈に依存するのである」と述べている（山口 1980:258）。山口（1980）は順接確定条件の例として（3a）、（3b）のように「前句の事態が原因理由になる因由性の関係」の認められるものが少なくないことを指摘し、同様に逆接確定条件の例として（3c）、（3d）のような用例を挙げている[7]。また、順接仮定条件の用例として（4a）を挙げ、逆接仮定条件の用例として（4b）を挙げている。

（3） a. ぬばたまの黒髪山を朝越えて（而）山下露にぬれにけるかも

（万葉・七・一二四一）（山口 1980:259,（2））

b. をとこ、いとかなしくて、寝ずなりにけり。

（伊勢・六十九）（山口 1980:259,（2））

c. 格子どもゝ、人はなくして開きぬ。（竹取物語）（山口 1980:259,（1））

d. あるは、きのうふはさかえおごりて、時をうしなひ、世にわび

（古今・仮名序）（山口 1980:260,（2））

おいて「あまり考察の対象にされなかったように思う」と述べ、「その形式自体はこれというほどの意味関係を表示しないが、意味関係の理解は文脈に依存するかたちで、かえって種々の意味関係にその形式が使用されるということがある」（山口 1980:7）と補足した上で、これが特に「て」に当てはまると指摘している。

6 更に山口（1980:256-257）は「並列性」の中には「時間的に継起する関係の認められるもの」と「空間的に隣接共存する関係の認められるもの」とがあるとし、前者を「継起性」、後者を「共存性」として「並列性」に次ぐ「て」の基本的な意味関係であることを示している。

7 山口（1980:258-259）は順接確定条件の中に「前句における主体の行為が偶然の機縁になる機縁性の関係」（3a）と「前句の事態が原因理由になる因由性の関係」（3b）とがあると述べ、同様に逆接確定条件の中に「因果関係に反する因果対立性の関係」（3c）と「二者対比の関係」（3d）とがあるとしている。

(4)　a. 春日野のとぶひののもりいでゝみよ今いくかありてわかなつみてん

（古今・春上・一九・よみ人しらず）（山口 1980:260,（1））

b. 思(おも)ふこと成(な)らでは、世（の）中に生(い)きてなにかせん、と思(おも)ひしかば

（竹取物語）（山口 1980:260,（2））

山口（1980:260）はこのような条件形式について「已然形＋ば」、「未然形＋ば」、「已然形＋ど・ども」、接続助詞「に」などによっても表示されるものであるが、「て」は「用言連用形による場合を除けば、最も文脈依存度が高い」と述べている。

次に②「場面性の関係」については「を」や「ものを」などの形式が「前句の事態を根拠にして後句が希望・意志・反語などの主体的志向を担う志向性の関係」を持つことを指摘した上で、そのような関係が「に」や「て」にも認められることを指摘している[8]（山口 1980:263）。山口（1980:263）は文脈依存的であるという点で「て」は「に」に近く、「に」の持っている「前句の事態が後句の事態の成立する場面になる」という基本的な意味を「て」も持っていることから（5）のような例を「場面性の関係」を表すものとしている。

(5)　a. この帝(みかど)は顔(かほ)かたちよくおはしまして、仏(ほとけ)の御名を御心にいれて、御声(こゑ)はいとたふ(う)とくて申（し）給(たま)ふをきゝて、女はいたう泣(な)きけり。

（伊勢・六十五）（山口 1980:265）

b. 遣水(やり)もいといたうむせびて、池のこほりもえもいはずすごきに

（源氏・あさがほ）（山口 1980:265）

最後に③手段や方法については「前句が後句の手段ないしは方法にあたるという意味関係が認められる例も多い」としてこの意味関係を「方法性」としている（山口 1980:265）。山口（1980:226）は「方法性」の用例として（6a）を挙げており、その特徴について「方法性の認められる両句の主語は、必ず同一の主体である。異なる主語が立てられても、その主述関係全体がさらに他方の句の主語と相関している場合に限られよう。その意味で、両句の自立性は相対的に乏しく、方法性の関係はすでに修飾関係の一つと見ることもできよう。方法性の関係は、その意味で接続と修飾とのいわば境界上に認められる関係であるといってよい」と指摘している。また、（6b）のような用例については「「て」でむすばれる先行

[8] この「に」は古代語において述語連体形に下接して接続を担う形式であり、いわゆる格助詞の「に」とは区別されるものである。

成分が句的事態性をそなえながら、同時に後続成分を限定する修飾関係に収まっていると見うる」と指摘している（山口 1980:267）。更に山口（1980:267）は（6c）のような用例について「修飾関係において被修飾成分に「見ゆ」「思ふ」などの「と」格の成分と相関する語が来ることに伴って認められる、特殊な意味関係だといえよう」としている[9]。

（6） a. ある時には、海(うみ)の貝(かい)をとりて、命をつぐ。 （竹取物語）（山口 1980:266）
b. 三寸(ずん)ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。 （竹取物語）（山口 1980:267）
c. この扇(あふぎ)のたづぬべきゆゑ(へ)ありてみゆるを （源氏・夕がほ）（山口 1980:267）

2.3. 山口（1998）

続いて中古語の接続助詞「て」を対象とした山口（1998）の研究を取り上げる[10]。まず、山口（1998）は接続助詞「て」による接続法には「形容詞・形容動詞の連用法や副詞による成分、格助詞を伴う成分」などの「語的連用成分」とのつながりが認められる場合があることに着眼し、テ形節を「「て」連用句」として前件と後件との意味関係を整理している[11]。山口（1998）は「「て」連用句」の主句に対する意味関係には「内容表示」、「批評表示」、「状態表示」、「空間表示」、「時間表示」、「方法表示」、「因由表示」の 7 つがあるとして（7）の用例を挙げている[12]。

---

[9] 山口（1980）はこの「方法性」の意味関係に関する先んじた指摘として富士谷成章の『あゆひ抄』（中田・竹岡 1960:313,「しるしのて」）や松尾（1970:417,「との意を含んだて」）を挙げている。なお、（6b）や（6c）のような用例が前掲した山口（1980）における「方法性」の概念に収まるものであるかという点については明確に述べられていない。

[10] 山口（1998）は山口（2000）に再録されているが、ここでは初出である山口（1998）を引用する。なお、当該箇所について内容の変更がないことは確認済みである。

[11] 前掲した山口（1980）の研究と山口（1998）の研究との差異は前者が接続助詞「て」の持つ意味関係を記述することを目的としているのに対し、後者は「形容詞・形容動詞の連用法や副詞による成分、格助詞を伴う成分」（山口 1998:213）と同様のいわゆる連用修飾成分としての「「て」連用句」の持つ意味関係を記述することを目的としている点にある。つまり、前者は独立した 2 つの事態を並べる「て」を対象に含めているのに対して後者はこれを対象に含めないということになる。

[12] なお、山口（1998）は動詞テ形節、形容詞テ形節、形容動詞テ形節、助動詞テ形節（「にて」、「ずて」など）を考察対象としており、そのうち形容詞テ形節に限ると「状態表示」、「空間表示」、「時間表示」、「方法表示」、「因由表示」の 5 種の用例が見られることを指摘している。ここでは本論文との関わりを重視し、上記の 5 種については形容詞テ形節の用例を挙げ、「内容表示」と「批評表示」とについては形容詞連用形の用例を挙げる。

(7)　a. おとこ、来てかへるに、秋の夜もむなしくおぼえければ、

（伊勢・百四十三）（山口 1998:216、「内容表示」）

b. ゑひあきて、いとあやしく、しほのうみのほとりにてあざりあへり。

（土左）（山口 1998:218,「批評表示」）

c. それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。

（竹取）（山口 1998:219,「状態表示」）

d. この女寄りきたり。ちかくてみるに、いとをかしげなりければ、

（大和・百六十九）（山口 1998:223,「空間表示」）

e. 舎人して取りにつかはす。いくばくもなくて持て来ぬ。

（伊勢・七十八）（山口 1998:224,「時間表示」）

f. いのちながくて、なをくらゐ高くなども、みなし給へ。

（源氏・夕がほ）（山口 1998:227,「方法表示」）

g. みちしれる人もなくて、まどひいきけり。

（伊勢・九）（山口 1998:229,「因由表示」）

また、山口（1998:243）は形容詞・形容動詞について「「て」連用句」と「連用法」（非テ形節）との比較から「「て」連用句」は主句と「別個の主述関係として、より自覚的な判断を担った」とし、一方で「連用法」は「主句内の連用成分としての修飾語にとどまる」ことを指摘している。

更に山口（1998:220）は「形容詞による「て」連用句で、状態表示に用いられたもの」の中に「「て」連用句の主語が、主句の主語と異なるもの」があることを指摘し、(8) の用例を挙げている。これについて山口（1998:220）は（8a）の「枝ほそくて」は「ほそき枝に」のような格助詞「に」による連用成分と同様の表現であり、(8b) の「むすめいとうつくしうて」は「いとうつくしきむすめを」のような格助詞「を」よる連用成分と同様の表現であると指摘している。

(8)　a.　桜ははなびらおほきに葉の色こきが、枝ほそくて咲きたる。

（三巻本枕・木の花は）（山口 1998:220,「状態表示」）

b.　昔、大納言の、むすめいとうつくしうて、もちたまふたりけるを

（大和・百五十五）（山口 1998:220,「状態表示」）

また、これに関連して山口（1998:231）は「中古語における「て」連用句には、主述関係による状態表示と客述関係による方法表示とが、ほぼ同じ事柄の表示に用いられていることがある」として「人物の表情、声調、筆跡、服装の表示」を取り上げて説明している。これらはいずれも「「て」連用句」内が主述関係になっており――「「て」連用句」における主語と主句の主語とが異なっており――、同じような事柄を表す他動詞による「「て」連用句」があるとのことである。一例として山口（1998）における「人物の表情」について取り上げると、「状態表示」に当たる（9a）の形容詞の用例、同じく（9b）の自動詞の用例、（9b）に対応する他動詞による「方法表示」に当たる（9c）の用例を挙げている[13]。

（9） a. さりけれど、このもとの女、あしとおもへるけしきもなくて、いだしやりければ、（伊勢・二十三）（山口 1998:231,（1),「状態表示」）

b. すべて、おもてさへあかみてぞ思ひ乱るるや。

（三巻本枕・清涼殿の丑寅のすみの）（山口 1998:231,（2),「状態表示」）

c. 聟ソノカホヽミツケテ、面ヲアカメテヲドロキテカクレヌ。

（三宝絵・中・一五）（山口 1998:232,「方法表示」）

2.4. 竹部（2001）

続いて形容詞、形容動詞に「助詞テ」が下接する場合と下接しない場合とを比較することによって「助詞テ」の機能を検討した竹部（2001）の研究を取り上げる。竹部（2001）は『源氏物語』の第一部（桐壺巻～藤裏葉巻）を対象として意味関係ごとの用例数（割合）を比較する方法を採っている。竹部（2001）は「助詞テ」の前件と後件との意味関係に着眼し、「助詞テ」が下接する場合には「因果関係」、「並立関係」、「全体部分関係」、「情態修飾関係」のいずれかの意味関係を表す用例が見られるのに対し、「助詞テ」が下接しない場合には上記の 4 つの意味関係に加えて「知覚内容」、「評価」を表す用例が見られることを指摘している。竹部（2001）の挙げる用例を意味関係ごとに（10）～（15）に示す。

[13] 山口（1998:233）は（9c）のような他動詞による「「て」連用句」の用例が「漢文訓読体に偏っている」と指摘している。

（10） a. 見奉る人（惟光）もいと悲しくて、おのれ（惟光）もよゝと泣きぬ。

（夕顔　一二八②）（竹部 2001:257，1，「因果関係」）

b. 御前なる人々も、様々に悲しく、……鼻すすりあへり。

（真木柱　九五二③）（竹部 2001:262，25，「因果関係」）

（11） a.（末摘花の顔の）色は、雪恥ずかしく白うて真青に、額つきこよなうはれたるに、

（末摘花　二二〇⑪）（竹部 2001:257，7，「並立関係」）

b. 花の色濃く殊に房長きを折りて、

（藤裏葉　一〇〇二⑨）（竹部 2001:262，30，「並列関係」）

（12） a.「（大井の邸は）あたりをかしうて、（以前住んでいた明石の）海づらに通ひたる所の様になん侍りける。」

（松風　五八二③）（竹部 2001:258，13，「全体部分関係」）

b. （源氏の）けはひ著く、（源氏の衣の香りが）さと匂ひたる、

（賢木　三五一⑭）（竹部 2001:263，36，「全体部分関係」）

（13） a. 姫君の御様の、いときびはにうつくしうて、（姫君は）箏の御琴弾き給ふを、

（少女　六七九②）（竹部 2001:25，19，「情態修飾関係」）

b. 「（明石の上が）心安く（二条院の東院に）立ち出でて、」

（薄雲　六三〇⑪）（竹部 2001:264，43，「情態修飾関係」）

（14） めでたしと思ししみにける（斎宮の）御かたち、いかやうなるをかしさにか、と（源氏は）ゆかしう思ひ聞え給へど、

（絵合　五六一⑤）（竹部 2001:265，49，「知覚内容」）

（15） 「口惜しう、御供に後れ侍りにける。」

（松風　五九四⑥）（竹部 2001:264，51，「評価」）

次に竹部（2001）はそれぞれの意味関係に該当する用例数（割合）を表 1-1 のように示している[14]。

[14] 竹部（2001）は縦書きであることから、表 1-1 は竹部（2001:266）の表 2 における行と列とを入れ替えて示したものである。なお、表 1-1 の「Ⅱテなし」について用例数の合計が 3546 となっているが、実際に各項目の用例数を集計すると 3762 となり、これに従って割合を算出し直すと「A 因果関係」から順に 1.1%、22.4%、0.2%、49.5%、25.8%、1.0%となることを申し添える。

表 1-1：竹部（2001）における意味関係ごとの用例数

	A 因果関係	B 並立関係	C 全体部分関係	D 情態修飾関係	E 知覚内容	F 評価	計
Ⅰテあり	308 （49.4%）	30 （4.8%）	42 （6.7%）	243 （39.0%）			623 （100%）
Ⅱテなし	41 （1.2%）	843 （23.8%）	7 （0.2%）	1862 （46.4%）	971 （27.4%）	38 （1.1%）	3546 （100%）

竹部（2001:270）は表 1-1 を踏まえて「テは、前件が後件に直接係るところには現れず、前件だけでのまとまりの強い場合に現れると考えることができ」ると指摘している。

また、「情態修飾関係」に着目すると（16a）のような「主語―形容詞・形容動詞＋テ」の用例が（16b）のようなテの下接しない場合に比べて多く見られ、このような用例において形容詞・形容動詞の異なり語数も多いことを指摘している[15]。

（16） a. 宿直姿どもをかしうて、（女房たちは）出で入る。

（須磨　四〇二①）（竹部 2001:268，54，「情態修飾関係」）

b. 大将の君は、さらぬことだに思し寄らぬことなく、仕うまつり給ふを、

（賢木　三五四⑪）（竹部 2001:269，58，「情態修飾関係」）

これらの検討に基づいて竹部（2001:270）は「助詞テ」が持つ機能は「テの上接部分の叙述をいったんまとめ、したがって、その叙述を後続の叙述に対して独立性の高いものとしてその部分でいったん切り、更に後続の叙述へと接続する」ことであると結論づけている。

2.5. 近藤（2007，2012）

続いて古代語の従属節分類におけるテ形節について検討した近藤（2007）の研究とそれに引き続く近藤（2012）の研究を順に取り上げる。

初めに近藤（2007:176）は中古語（近藤 2007 における「平安時代語」）のテ形節には現代語のテ形節と同様に主節に対する従属度の高いものから低いものまで存在することに着眼

[15] 竹部（2001）は「テ」が下接する場合の用例は 87 例（「情態修飾関係」全体の 35.8%）であってその異なり語数は 40 語であるのに対し、「テ」が下接しない場合の用例は 53 例（「情態修飾関係」全体の 3.3%）であってその形容詞・形容動詞は「無し」、「高し」、「殊なり」の 3 語に限られることを指摘している。

し、従属度の高いものと低いものとの間に「統語的に異なる」部分があるかという点を検討している[16]。中古語におけるテ形節に関する従来の研究は「て」の前件と後件との意味関係を記述するものが中心的であったのに対し、近藤（2007）は従属節分類の観点からテ形節に下接する語や節内に現れる語に着眼している点で新しい観点を導入した研究であると言える[17]。以下では議論の前提となる中古語の副助詞の分類について整理し、近藤（2007）の指摘を概観した上で続く近藤（2012）における検討と合わせてその結論を示す。

2.5.1. 中古語の副助詞の分類

まず、中古語のテ形節に副助詞が下接する場合について前提となる中古語の副助詞の分類に関する研究として近藤（1995）と小柳（1999b）とを概観する。

近藤（1995:271）は格助詞への承接や副助詞同士の相互承接の観点から中古語の副助詞を（17）のように 2 つに分類し得ることを示している。

（17） a.「ばかり・まで」のグループ（格助詞には必ず前接する。形容詞連用形には後接しない。副助詞（「など」以外）には前接する。）

b.「のみ・だに・さへ」のグループ（格助詞には必ず後接する。形容詞連用形には後接する。副助詞には後接する。）

次に小柳（1999b）は構文上の関係に着眼し、副助詞がその上接語のみに関係するものを「第一種副助詞」とし、副助詞が句全体に関係するものを「第二種副助詞」とした。（18）に小柳（1999b）の記述を引用する。

---

[16] 近藤（2007）の研究の背景には現代語のテ形節について統語的に二分し得ることを述べた内丸（2006a）の研究がある。内丸（2006a:8）は「しか―ない」テスト、「さえ」による焦点化テスト、擬似分裂文テストによって「付帯状況を表すテ形節は VP で付加構造を形成」することと「継起，原因・理由，並列を表すテ形節は TP で等位構造を形成する」こととを述べている。また、内丸（2006a）はこのような二分が南（1974）における従属節分類に照らして「A 類」と「B 類」との区別に当たることを指摘しており、これは従来の主節との意味関係によるテ形節の分類を統語的に裏づける結果であると位置づけている。なお、内丸（2006a）に対する批判として「付帯状況」の規定がなされていない点、テストの際の用例の正誤判定の疑義、使用する例文の偏りなどに言及している吉田（2012）の研究がある。

[17] このような検討を近藤（2007）は「統語的」という用語を用いて説明しているが、この用語は内丸（2006a）に比して広い意味で使用されており、「意味関係を記述するもの」と対になる概念であると考えられる。

（18） a. 例えば「直衣ばかりを取りて」（紅葉賀、二五八④）のバカリは前者（＝引用者注：「第一種副助詞」）で、格の内側に収まることからも窺える通り「直衣」という上接語にだけ関係する。意味上も「取」るのが「直衣」だけだという意であり、バカリは「直衣」を限定する。（小柳 1999b:53）

b. これに対して「音をのみ泣き給ひて」（葵、二九四③）のノミは後者（＝引用者注：「第二種副助詞」）で、格の外側にありかつ同語反復的な「音を泣き給ひて」の「音」にだけ関係するとは認めがたいことから、「音を泣き給ひて」という句全体に関係すると考えられる。意味上も「音を泣き給」うという唯一種類だけの事態があることを表し、「泣き給ふ」のが「音」だけだというのではない。（小柳 1999b:53）

小柳（1999b）の「第一種副助詞」と「第二種副助詞」との 2 つの分類は中古語における副助詞の体系を包括し得るものであり、（17）に示した近藤（1995）の 2 つのグループ分けとも対応するものである。つまり、（17a）と（18a）とが小柳（1999b）における「第一種副助詞」であり、（17b）と（18b）とが小柳（1999b）における「第二種副助詞」である。これらを整理して表 1-2 に示す。

表 1-2：先行研究における中古語の副助詞の分類[18]

	近藤（1995）			小柳（1999b）
	承接の関係			構文上の関係
第一種副助詞 ばかり・まで	格助詞に前接する	形容詞連用形に後接しない	副助詞に前接する	上接語にだけ関係する
第二種副助詞 のみ・さへ・だに	格助詞に後接する	形容詞連用形に後接する	副助詞に後接する	句全体に関係する

[18] 近藤（1995）の分類と小柳（1999b）の分類とが対応することは既に近藤（2007，2012）において述べられている。また、近藤（2007，2012）は「第一種副助詞」、「第二種副助詞」の命名について小柳（1998）を挙げているが、これらの用語の命名は小柳（1999a:38-39）においてなされたものであると見える。また、近藤（2007，2012）は「第 1 種副助詞」、「第 2 種副助詞」のように漢数字を算用数字に改めて引用しており、小柳（1999b）に続く小柳（2011）も算用数字を用いているが、本論文では小柳（1999b）に従い、一貫して漢数字を用いて引用する。ただし、近藤（2007，2012）の指摘を鉤括弧に括って引用する際にはその限りではない。

2.5.2. 副助詞の下接から見るテ形節の従属度

以上の副助詞の分類に関する議論を踏まえ、近藤（2007）はテ形節に副助詞が下接する場合について検討している。その結果、第一種副助詞である「ばかり」、「まで」はテ形節に下接せず、第二種副助詞である「のみ」、「さへ」、「だに」はそれぞれテ形節に下接する用例が見られたことを報告している。表 1-2 にも整理したように、近藤（2007:178）は第一種副助詞について「連用の次には来ないのであって、当然、それよりもさらに外側にある接続表現の次には来ることはないと考えられる」としている[19]。また、第二種副助詞について「「御胸つとふたがりて、つゆまどろまれず、明かしねさせたまふ」（桐壺）のように、前節の主語と後節の主語とが食い違うような継起的時間を示す用法」の場合には下接しないことを述べ、（19）のように第二種副助詞が下接した場合のテ形節は「いずれも極めて連用修飾的な意味合いが強く、継起的な接続を示すものではない」としている（近藤 2007:179-180）。

（19） a. おぼつかなくてのみ年月の過ぐるなむあはれなりける

（源氏・若菜下）（近藤 2007:180，20）

b. かたはらもなきやうにてのみものしたまふめれば

（源氏・竹河）（近藤 2007:180，21）

c. 臥してのみおはするを （源氏・宿木）（近藤 2007:180，23）

このような検討から近藤（2007:181）は「第 2 種副助詞が付く、副詞的な「て」節と付かない継起的・原因理由的な「て」節は、現代語でいう A 類と B・C 類との区別にほぼ相当する」と指摘している。

2.5.3. 節内の副詞の生起から見るテ形節の従属度

次に近藤（2007）はテ形節内の副詞の生起の観点からテ形節の従属度について検討している。南（1974）による現代語の従属節分類において A 類は基本的に時制を持たず、状態副詞や程度副詞の修飾は受けるが、時の副詞やモダリティに関わる副詞の修飾は受けない

[19] 近藤（2007:178）は『源氏物語』において（i）のように「てまで」の用例が 1 例のみ見られることを述べた上でこれを「唯一の例外」としている。

（i）ならはぬ御身に、たびたびしきりてまでたまふことは、人のかくあなづりさまにのみ思ひきこえたるを、かくもありけり、と思ふばかりの御幸ひおはしませ、とこそ念じはべれ。

（源氏・東屋）（近藤 2007:178，7）

ものであることが示されている。近藤（2007）はこの点に着眼し、中古語においても評価を表す副詞である「まことに」が A 類のテ形節内に入らないことを指摘している。近藤（2007:181）によれば、(20）の「まことに」は「作者からの評価を示す副詞」であり、このように「まことに」がテ形節内に入る例のうち、第二種副助詞が下接するものは見られないとのことである。

（20）　まことにいとつらしと思ひたまひて、つゆの御いらへもしたまはず

（源氏・葵）（近藤 2007:181，29）

また、近藤（2007）は（21）のように係助詞が下接する用例が見られるが、これは係助詞が A 類のテ形節と B 類のテ形節とのいずれにも下接可能であることに起因するものであると指摘している[20]。

（21）　まことに明け方になりてぞ、宮帰りたまふ

（源氏・梅枝）（近藤 2007:182，30）

2.5.4. 近藤（2007，2012）の結論

中古語の従属節分類におけるテ形節に関する近藤（2007）の結論は以下の 2 点である。まず、「平安時代語の「て」節には、あきらかに A 類の副用語的なものと、B 類の純粋な接続表現との二種類がある」ということである（近藤 2007:182)。次にその A 類と B 類との間には「統語的環境の差」があり、整理すると（22）のようになる[21]。

（22）　A 類テ形節：第二種副助詞が下接する。評価の副詞が節内に入らない。
　　B 類テ形節：第二種副助詞が下接しない。評価の副詞が節内に入る。

更に近藤（2007）の結論を踏まえて同様の方法を使用し、『源氏物語』以外の中古和文資料

[20] 近藤（2007）はテ形節に下接する係助詞についても副助詞と同様の調査を実施しており、係助詞は第二種副助詞よりも広い範囲に下接することが可能であり、接続助詞一般に下接することを指摘している。つまり、係助詞は副助詞よりも自由に助詞に下接し得ることから、係助詞の下接の有無によって当該の節の従属度を判断することは難しいということである。

[21] （22）は近藤（2007:183）における整理に基づいたものである。

をも対象として A 類のテ形節と B 類のテ形節との差異について検討した研究として近藤（2012）がある。近藤（2012）は対象とする資料の範囲を拡げても近藤（2007）と同様の結果が得られたこと――（22）が成り立つということ――を報告している。

なお、近藤（2007, 2012）の「統語的」な観点による規定について付言すれば、近藤（2012）も述べているように[22]、副助詞の下接は A 類であるための十分条件ではあるが、必要条件では無く、評価の副詞の生起は B 類であるための十分条件ではあるが、必要条件では無い[23]。つまり、近藤（2007，2012）の規定では副助詞が下接しておらず、且つ評価の副詞が節内に生起していないものについては A 類であるか B 類であるかを導き出せないということになる[24]。

2.6. 吉井（2017）

最後に上代語の「て」が「修飾句」を構成する場合について述べた吉井（2017）の研究を取り上げる。吉井（2017:53）は（23）のように上代語（『萬葉集』に見られる）のテ形節のうち、「句的体制をもって主句の事態と関わる副詞句」について概観している[25]。特に

---

[22] 近藤（2012）は A 類について「間違いなく A 類であると思われるのが、節末に、第 2 種副助詞が後接する場合である。なお、A 類であっても副助詞が接続していない場合も当然存在するので、なければ A 類でないとは言えないことには注意しなくてはならない」（近藤 2012:52）と述べ、同様に B 類について「副助詞が接続しない場合がすべて B 類であるというわけではない」（近藤 2012:56）と述べている。

[23] 副助詞の下接は A 類のテ形節であるための十分条件ではあるが、A 類のテ形節であっても副助詞が下接しないものもあるため、必要条件では無い。同様に評価の副詞の生起は B 類のテ形節であるための十分条件ではあるが、B 類のテ形節であっても評価の副詞が生起しないものもあるため、必要条件では無い。

[24] 近藤（2007，2012）は評価の副詞が節内に生起する場合は直接的に B 類と看做し得るという立場である。また、近藤（2012）では A 類のテ形節と B 類のテ形節との差異の一つに現代語に倣って擬似分裂文を挙げている。近藤（2012:57）によれば、中古語においてテ形節を「なり」が受ける（ii）～（iv）のような擬似分裂文においては「A 類に分類したものがほとんどを占める」としている。

（ii） 君のおんもとよりといはせよと<u>て</u>なりけり　（うつほ物語）（近藤 2012:57，74）

（iii）かかる事のまぎれに<u>て</u>なりけり　（源氏物語・若菜下）（近藤 2012:57，75）

（iv）あえかに見えたまひしも、かく長かるまじく<u>て</u>なり。

（源氏物語・夕顔）（近藤 2012:57，76）

ただし、中古語の擬似分裂文を産出できないという点からはこれらが A 類であるかを判定し得ず、更に擬似分裂文でないテ形節に対して A 類か B 類かの判定に使用することは困難であると言わざるを得ない。

[25] 吉井（2017）はこのような「て」が富士谷成章『あゆひ抄』における「しるしのて」、山田（1908）における「修飾句」にそれぞれ該当することを指摘している。また、現代語のテ形節において「類似の性格をもつもの」として仁田（1995a）の「付帯状態」を挙げている。

形容詞テ形節に限れば、吉井（2017:64）は『萬葉集』における（24）の例を挙げ、「これらの例は主述的な構成で、句的事態としての価値をもって句に関わるものであるが、基本的に「～の状態で」という意味をもつ」と指摘している。

（23）　袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくらむ

（古今集二）（吉井 2017:53，②）

（24）a. しきたへの　枕をまきて　妹と我と　寐夜者無而（ぬるよはなくて）　年そ経にける

（一一・二六一五）（吉井 2017:64，①）

b. まを薦の　布能末知可久弖（ふのまちかくて）　逢はなへば　沖つま鴨の嘆きそ我がする

（一四・三五二四）（吉井 2017:64，②）

c. 谷近く　家は居れども　許太加久氐（こだかくて）　里はあれども　ほととぎす　いまだ来鳴かず……　（一九・四二〇九）（吉井 2017:64，③）

3. 古代語における形容詞連用形に関する研究

次に古代語における形容詞連用形に関する研究として進藤（1978）、和田（1987）を取り上げ、古代語における連用修飾の観点から形容詞連用形について言及している小田（2015）の整理を概観する。なお、古代語において形容詞連用形がどのような用法や機能を持つかという点のみに着目してその詳細を記述している研究は少なく、第 2 節で取り上げたようなテ形節に関する研究において部分的に述べられることが多かったものと見える。

3.1. 進藤（1978）

まず、『源氏物語』を対象に形容詞の連用形が文中でどのように働くかという点について検討した進藤（1978）の研究を取り上げる。進藤（1978:10）は「語義的性質」に配慮して 11 語の形容詞を選び[26]、それらを対象として形容詞の連用形の用例を収集した上で連用形の「構文上の性質」を（25）に示す 7 つに分類している。

[26] 進藤（1978）が対象とした 11 語の形容詞は「あさし」、「あさまし」、「あたらし（惜）」、「いとほし」、「うつくし」、「うれし」、「おもし」、「かぎりなし」、「ことごとし」、「くはし」、「つよし」である。

（25） a.「中止法」…「形容詞が単一に、乃至上文の述語をなしていて、助詞を介することなく一旦文を中止している場合。」（進藤 1978:11-12，A）

b.「上文の述語形容詞（単一形容詞の場合も含む）が「て」助詞を介して重文関係に立つもの」（進藤 1978:12，B）

c.「形容詞連用形が「あり」「侍り」「おはします」等の補語となっているもの」（進藤 1978:12，C）

d.「形容詞連用形が「思ふ」「おぼす」「見る」「聞く」等の補語になっているもので、「形容詞終止形＋と」と同義なもの」（進藤 1978:12，D）

e.「形容詞連用形が「成る」「為（す）」等の語の補語となっているもの」（進藤 1978:12，E）

f.「形容詞連用形がいわゆる副詞的修飾をなしているもの」（進藤 1978:12，F）

g.「形容詞類に上接する例」（進藤 1978:14，G）

次に進藤（1978:19-20）は（25）に示した 7 つの「構文上の性質」に当てはまる用例数の比較から「源氏物語の形容詞の連用形は下文の述語に構文的に結合して行く性格の活用形であり、その下文との係わり方は極めておおらかな性質にある如くであり、必ずしも副詞的修飾を主たる職能とするものではないようである」と述べている。更に当該の形容詞の「程度分量を表す性格の濃厚なものは自然に文意構成上副詞修飾に近い結合になることが多く、その語義が感情を表す性格の濃厚なものは自然に中止法や、あり、おぼゆ系の動詞の補語となる結合を生ずることが多いようである」と指摘している（進藤 1978:20）。

3.2. 和田（1987）

次に形容詞の活用形ごとの機能について整理した和田（1987:139）の研究を取り上げる。和田（1987:151-153）は形容詞の連用形の用法の一つとして助詞「て」が下接した「ークテ」の形式を挙げ、「接続関係にあることがはっきりするのは、接続助詞「て」を伴った場合である。ただし、「て」は接続助詞「ば」「ど」などに比べると形式的な面が強く、前後の論理関係はおおまかである」と述べている。次に和田（1987:152）は「ーク」と「ークテ」との形式の差異について（26）の例を挙げ、（26a）と（26b）とは「音数律が関係するかもしれない」とし、（26c）と（26d）とは青表紙本と河内本との同じ箇所であり、異同がある

ことから「「て」があったりなかったりで、あってもなくても同じではないかと思わせる例である」としている[27]。

（26） a. みやこ出でて君に会はむとこしものをこしかひもなく△別れぬるかな
（土佐・一月二十六日・二九頁）（和田 1987:152,（39））

b. なかりしもありつつ帰る人の子をありしもなくてくるがかなしさ
（同・二月九日・五五頁）（和田 1987:152,（40））

c. これ（藤壺）は、人の御きはまさりて思ひなしめでたく△人もえおとしめ聞こえ給はねば、　（源氏・桐壺・二三頁〈青表紙本〉）（和田 1987:152,（41））

d. これ（藤壺）は、人の御きはまさり△思ひなしめでたくて誰もえおとしめ聞こえ給はねば、　（同右・〈河内本〉）（和田 1987:152,（42））

最後に和田（1987:153）は「て」の下接しない連用形は「判断の内容を表す用法、形式動詞「あり」「す」などに続く用法などから、「ク（思ひ)」「ク（あり)」「ク（し)」などのように用言をかかえこんだ中止法の色彩が濃くあ」るとし、その一方で「て」には「「かく・て」「さ・て」などの副詞や「と・て」「に・て」など格助詞に直接する性質（クとは逆に上に用言をかかえこむ性質）があると考えられる」としている。このことから「両者が合した「ク・て」の間には何らかの用言が潜在すると考えてよい」と述べている（和田 1987:153)。これを踏まえて和田（1987:153）は（26b）の例について「ありし（元気デ一緒ニ来タ子）も、なく（なり）て（居ナイトイウ状態ニナッテ、スナワチ死ンデシマッテ連レテ帰レナイ結果ニナッテ)」と解釈して良いとした上で（27）は「明らかに「濃く（溶き）て」のように補った方が理解しやすい」と指摘している。

（27）　（大井川ハ）水の、世の常ならず、すり粉などを、濃くて流したらむやうに、白き水速く流れたり。　（更級日記・四八七頁）（和田 1987:153,（43））

[27] ただし、和田（1987:152-153）は（26c）と（26d）とにおいてそれぞれ「まさり」と「まさりて」との間にも「て」の有無の異同があることや「別本四本は青表紙系の「…て…△」か河内本系の「…△…て」かのどちらかである」ことを踏まえて「文の調子のようなものが働いているのかも知れない」と指摘している。

3.3. 小田（2015）

続いて古代語における連用修飾の観点から形容詞連用形に言及している小田（2015）を取り上げる[28]。小田（2015）は（28）のような現代語の用例を挙げた上で、これと同様に古代語の連用修飾を「状態修飾」、「評価誘導」、「判断内容」、「結果修飾」の 4 つに大別して整理している。その上で（29）にように各種に該当する形容詞連用形が存在することを示している。

（28） a. 彼がゆっくり答えた。（状態修飾）
b. 幸い、彼が答えた。（評価誘導）
c. 被害者をかわいそうに思う。（判断内容）
d. 美しく成長した。（結果修飾）（全て小田 2015:286,(3)）

（29） a. 白き水、速く流れたり。（更級）（小田 2015:285,（1），「状態修飾」）
b. 心をさなく竜を殺さむと思ひけり。（竹取）（小田 2015:286,（1），「評価誘導」）
c. 松の思はむことだに恥づかしう思う給へ侍れば（源・桐壺）
（小田 2015:288,（1），「判断内容」）
d. 御髪は惜しみ聞こえて、長うそぎたりければ（源・柏木）
（小田 2015:290,（1），「結果修飾」）

また、これ以外にも「時間を表す連用修飾」、「場所を表す連用修飾」、「程度を表す連用修飾」があることを示し、（30）のように形容詞連用形の用例を挙げている。

（30） a. 少し大殿籠もりて、日高く（＝高クナッタ頃ニ）起き給へり。
（源・初音）（小田 2015:291,（1），「時間を表す連用修飾」）
b. 所々に見やれば、遠う火を焚きて
（うつほ・国譲下）（小田 2015:291,（2），「場所を表す連用修飾」）
c. 世になく（＝世ニナイホド）清らなる玉の男御子さへ生まれ給ひぬ。
（源・桐壺）（小田 2015:292,（1），「程度を表す連用修飾」）

[28] 小田（2015）は古典語（概ね上代語～近世語）の文法に関する総説であるが、ここで取り上げる連用修飾については専ら中古語における用例が挙げられている。

4. 現代語における形容詞テ形節・連用形に関する研究

続いて現代語における形容詞テ形節・連用形に関する研究を概観する。現代語におけるテ形節・連用形については研究の蓄積が豊富であり、分析の観点や研究の方法も多岐に亘ることから、ここでは形容詞テ形節・連用形に関する研究に限ることとする。また、特に本論文全体に関わる点として、現代語における形容詞テ形節には副詞的用法がないという点に言及している先行研究の記述を取り上げることとする。以下では吉永（1995）、竹沢（2001）、津留崎（2003）、内丸（2006b）、大島（2015）の順に概観する。

4.1. 吉永（1995）

まず、動詞、形容詞の「なかどめ形」についてその分類の精緻化を試みた吉永（1995）の研究を取り上げる。吉永（1995）は連用形を「第一なかどめ形」、テ形を「第二なかどめ形」とする先行研究の議論を引き継ぎ[29]、形容詞については従属度が高いものから順に「第一なかどめ形」を「ク 1」、「ク 2」、「ク 3」と分類し、同様に「第二なかどめ形」を「クテ 1」、「クテ 2」と分類している。それぞれの分類についての吉永（1995）の説明を（31）、（32）に整理する。

（31） a. ク 1…「太郎は<u>烈しく</u>ドアを叩いた」の様に、「太郎がドアを叩いた」という主節の内容を下線部が補足している、いわゆる付帯の用法[30]。

（吉永 1995:102,「ク 1」）

b. ク 2…「このブドウは<u>すっぱく</u>食べられない」の様な、いわゆる因果用法[31]。

（吉永 1995:102,「ク 2」）

---

[29] 動詞の連用形とテ形節とを「なかどめ」という用語を用いて取り上げている言語学研究会・構文論グループ（1989）によれば、「なかどめ」という用語は明星学園・国語部（1968）と鈴木（1972）とに依拠したものであるとのことである。

[30] 吉永（1995:102）はこの「ク 1」について「連用修飾語として副詞的成分になっているが、節とみなされるかどうかという問題は今後の課題である」と述べた上で、節と看做して分類を試みている。また、吉永（1995:104）は「目的語の変化を表すもの（車を<u>赤く</u>塗った）」や「動作時の目的語の状態を表すもの（おみやげを<u>おいしく</u>いただく）」は「主節の主語の動作の状態を説明しているものではない」ことから、「ク 1」に含めないという立場である。

[31] なお、吉永（1995）は「ク 2」と「ク 3」とについて形容動詞（吉永 1995 における「ナ形容詞」）の場合には非文になると指摘している。

c. ク 3…「くに子の部屋は広くきちんとしていた」の様な、いわゆる並列用法。

（吉永 1995:102,「ク 3」）

（32） a. クテ 1…「このブドウはすっぱくて食べられない」の様な、因果用法。

（吉永 1995:102,「クテ 1」）

b. クテ 2…「くに子の部屋は広くきちんとしていた」の様な、並列用法。

（吉永 1995:102,「クテ 2」）

この分類を踏まえ、吉永（1995:103）は（31a）の「ク 1」を「烈しくて」のように置き換えると非文になることから形容詞の「付帯節[32]」は「第一なかどめ形」が選択され、この点で「第一なかどめ形」と「第二なかどめ形」とは「非対称を示している」と指摘している。また、吉永（1995:103）における「統語的基準や節間の意味基準によるテスト」の結果は表 1-3 の通りである。

表 1-3：吉永（1995）における「統語的基準や節間の意味基準によるテスト」の結果[33]

	主従節の間にソレデが入る	主従節で異主語をとりうる	主節と従属節が入れ替え可
ク1	×	×	×
ク2	○	○	×
ク3	○	○	○
クテ1	○	○	×
クテ2	○	○	○

これらの検討に基づいて吉永（1995）は形容詞の「なかどめ形」について従属度が高い順に「ク 1」、「ク 2（クテ 1）」、「ク 3（クテ 2）」であると指摘している。

4.2. 竹沢（2001）

次に日本語における「状態述語二次述部（depictive secondary predicate）」の特性について品詞分類（統語範疇）との関連から考察した竹沢（2001）の研究を取り上げる。竹沢（2001）は英語における二次述部は典型的に形容詞であることを確認した上で、（33）のように日本

[32] この「付帯節」は（31a）のように「主節の内容を下線部が補足説明している」（吉永 1995:102）ものである。

[33] 表 1-3 は吉永（1995:103）における表 3 を再現したものである。

語において形容詞連用形に「テ」が下接する「…クテ」は状態述語二次述部として用いることができないことを指摘している。

（33） a. *花子がパーティーに 美しくて 出席した（花子が美しい）

b. *太郎が酒を 熱くて／生ぬるくて 飲んだ（酒が熱い／生ぬるい）

c. *太郎が｛魚を 生臭くて／肉を 固くて／料理を 辛くて｝食べた

（魚が生臭い／肉が固い／料理が辛い）

d. *太郎が車を 古くて 買った（車が古い） （竹沢 2001:241,（8））

また、竹沢（2001:245）は「日本語の DSP は AP であってはならない[34]」という統語的制約を掲げ、(34) のように「まま」、「状態」、「姿」のような抽象的な意味の名詞を加えてその後に「デ」を付加することで「適切な DSP になる」と述べている。

（34） a. 花子がパーティーに 美しい姿で 出席した

b. 太郎が酒を 熱い／生ぬるい状態で 飲んだ

c. 太郎が魚を 生臭いままで 食べた

d. 太郎が車を 新しい状態で 買った （竹沢 2001:245,（19））

4.3. 津留崎（2003）

次に形容詞の中止形の用法について「ク中止法」と「クテ中止法」との比較を行った津留崎（2003）の研究を取り上げる[35]。津留崎（2003）は形容詞の中止法の「後続句節に対する関係的意味」を「並列」、「前提」、「先行事態」、「原因（「先行原因」、「条件」、「根拠」）」、「注釈」、「解説（「関係解説」、「原理解説」）」、「評価」、「副状態」に分類している。その上で津留崎（2003）における分類のうち、「ク中止法」のみが持つ用法――「クテ中止法」に交替できないもの――は〈評価〉のうちの一部と〈副状態〉とであると述べられている[36]。

[34] この「DSP」とは「depictive secondary predicate」の略語である。

[35] 津留崎（2003）における「ク中止法」、「クテ中止法」は本論文における「形容詞連用形」、「形容詞テ形節」にそれぞれ対応する。

[36] 津留崎（2003）は内省による判断に加えて文学作品における用例調査を実施しており、ここで挙げる〈評価〉の一部と〈副状態〉とは内省によって「ク中止法」を「クテ中止法」に置き換えられないと判断されていることに加えて実例が見られないものとのことである。

まず、津留崎（2003:24）は〈評価〉のうち、クテ中止法に交替できないものとして（35）のように「先行句節の述語ではなくなり，語として評価を表す副詞に移行している」例を挙げている[37]。

（35） a. にもかかわらず，私はどうやら若年にして運悪くニヒリズムを知っていた。

（宮迫千鶴『超少女へ』集英社文庫，津留崎 2003:24，（90））

b. 思いがけなく遅塚さんが，ここまで負って弔問してくださった。

（幸田文「父」『父・こんなこと』新潮文庫，津留崎 2003:24，（91））

次に津留崎（2003:25）は〈副状態〉を「主体の主たる状態や動作が後続句節の動詞述語で表され，それと同時に存在する主体の副次的な状態を，先行句節において述べるもの」と規定した上で（36）のような例を挙げている[38]。

（36） a. 花子は声もなく，立ちつくしている。（津留崎 2003:25，（93））

b. そういう会話を，私はお茶を持って行きながら寂しく聞いていた。

（幸田文「父」『父・こんなこと』新潮文庫，津留崎 2003:25，（94））

c. 伊勢屋ははじかれたように立ち上がり，座敷を飛び出した。しばらくして足音も荒く戻ってきた。

（宮部みゆき「鰹千両」『初ものがたり』新潮文庫，津留崎 2003:25，（98））

これらについて津留崎（2003:25）は「後続句節の目に見える全体的な運動が行われる際の，主体の目に見えない心理状態や声や音，部分的な服装や携行品など」が「ク中止法」で述べられていること、心理状態は「ク中止法」のみで、その他は「服装／携行品／声／音ハ（モ）～く」の形で用いられること、「モ」でマークされる場合や助詞のない形は組み

---

[37] なお、津留崎（2003:24）の〈評価〉のうち「クテ中止法」に交替できるのは次の（v）のように「先行句節に陳述副詞」がある場合であると指摘されている。

（v）彼女は案外足が速く，伸治がようやく追いついたときには，もう「ドルネシア」の見える場所に来ていた。

（宮部みゆき「ドルネシアへようこそ」『返事はいらない』新潮文庫，津留崎 2003:24（89））

[38] なお、津留崎（2003:25）はこの〈副状態〉に関連する点として「動詞の中止形では〈付帯状況〉とされ，動作の様子を詳しく説明する修飾成分に近い」とした上で（36a）の場合には「花子は声もない」という文が成り立ち、「声もない」と「立ちつくしている」という状態が「時間軸上に併存」することから、「〈副状態〉を表す形容詞の中止形には先行句節の述語の機能も残ると考えられる」と指摘している。

合わせが「固定化している」ことを指摘している。その上でこれらは「クテ中止形」に交替できないことを述べている。

4.4. 内丸（2006b）

次に形容詞・形容動詞のテ形節（内丸 2006b における「テ形」）が等位接続に現れる場合について考察した内丸（2006b）を取り上げる。内丸（2006b）は（37）が許容されるのに対して、動詞句を修飾する連用修飾句である（38b）、（39b）が許容されないことに着目している[39]。

（37）　そのトマトは赤くて，おいしい　（内丸 2006b:43，（1））

（38）a. 花子はごぼうを薄く切った　&　花子はごぼうを細く切った

b. *花子はごぼうを薄くて，細く切った

c. 花子はごぼうを薄く，細く切った　（内丸 2006b:43，（2））

（39）a. 花子は歌を明るく歌った　&　花子は歌を楽しく歌った

b. *花子は歌を明るくて，楽しく歌った

c. 花子は歌を明るく，楽しく歌った　（内丸 2006b:43，（3））

内丸（2006b:55）は（37）のような一次述部に現れる形容詞テ形節が「後節と TP 位置でそれぞれ独立した定形の等位接続構造を構築する」こと、形容詞テ形節が「時制辞を含む定形の等位接続形式である」ことを確認し、（38）、（39）が許容されないという点について（40）のように説明している。

（40）　動作の様態または結果状態を表す形容詞・形容動詞を等位接続した時にテ形が生起できないのは，様態構文・結果構文では非定形の構造が要求されるのに対し，形容詞・形容動詞の形態「ーくて」「ーで」が時制辞を含むテ形の等位接続形式であるため　（内丸 2006b:55）

[39] 内丸（2006b）は（38）を「形容詞を用いた結果構文」、（39）を「形容詞を用いた様態構文」としてそれぞれ取り上げている。

4.5. 大島（2015）

最後に内丸（2006b）の検証と共に、形容詞テ形節（大島 2015 における「テ形」）・連用形の機能について考察した大島（2015）の研究を取り上げる。大島（2015:7）は動詞テ形節の典型的な用法は（41a）のような「継起関係」を表すものであるとした上で、（41b）のように「動作動詞がテ形で接続される場合、同時的な解釈になるものもある」としている。

（41） a. 家に帰って、お風呂に入って、寝る。 （大島 2015:7,（23））
b. ヘッドライトをつけて運転する。 （大島 2015:7,（25））

その上で大島（2015:8）は「同時的な解釈の可否は、テ形によって結び付けられる二つの事象の間の意味的関係によって決まる」と述べ、同時的な解釈が可能である（42a）は「「のぼった」状態が「維持」される」のに対して、継起的な解釈となる（42b）はそれが「「維持」されない」と説明している。つまり、「同時的解釈は、継起的解釈の変種とみることができる」ことから、「動詞テ形の第一義的な働きは継起的関係を表すこと」であると指摘している（大島 2015:8）。

（42） a. 電気屋さんは、屋根の上にのぼって作業する。
b. 電気屋さんは、屋根の上にのぼって、（次に）床下も調べる。
（大島 2015:8,（31））

次に大島（2015:17）は形容詞・形容動詞テ形節については本来的に「状態を表す」ものであり、始点・終点を持たないことからテ形節が継起関係を表すためには「観察時点が取り出されなければならない」と述べている[40]。その上で（43）の例について「「安い」という状態を観察し、次に「おいしい」という状態を観察し、……」のような継起関係ととらえることとなる」と説明している（大島 2015:9）。

（43） あの店は、安くて、おいしくて、しかも料理がすぐ出てくる。
（大島 2015:9,（33））

[40] この「観察」とは「当該の状態が存在することを話者が認識すること」（大島 2015:9）であると述べられている。

また、大島（2015）は形容詞テ形節と形容詞連用形とを比較すると、（44a）のテ形節は（44b）の連用形よりも「大きい」ことと「便利である」こととの間の因果関係のニュアンスが強いことを指摘している。これは（44a）のテ形節が「単純に状態を示すのではなく、その状態を発話者が「観察」するという過程を介している」ことに起因していると述べている（大島 2015:10）。

（44） a. この傘は大きくて、便利だ。
b. この傘は大きく、便利だ。 （大島 2015:10，（35））

大島（2015:12）はこのように形容詞テ形に観察時点が取り出されることから、形容詞テ形節は「時制を持つ」と指摘し、「南（1974，1993）の分類によるならば、形容詞・形容動詞テ形節は時制を含む B 類（あるいはそれ以上の段階）に分類されることとなる」と述べ、「形容詞・形容動詞は、主節とは別個の独立した事態を表わすということになる」としている。

5. 従属節分類に関する研究

最後に従属節分類に関する研究として現代語を対象とした南（1964b，1974，1993）と中古語を対象とした小田（1990）、近藤（1997，2012，2013）を取り上げる[41]。

5.1. 南（1964b, 1974, 1993）

現代語の「従属句」（従属節）に関する一連の研究は国立国語研究所における「話しことば」に関する調査報告である南・鈴木（1963）の研究を嚆矢として「従属句」の階層の提示を試みた南（1964a，1964b）の研究、階層の整備を試みた南（1974，1993）の研究

[41] なお、中古語について小田（1990）、近藤（1997）とは別に従属節に生起するモダリティ形式に着目した議論として近藤（1991）、高山（1987，1992）の各研究や助動詞の承接に関する北原（1969）、小田（1994）の各研究もあるが、ここでは特に従属節分類を検討したものに限って概観することとする。また、現代語の従属節の階層性について述べた研究としては澤田（1983）の研究などがあり、中世から近世にかけての従属節分類について従属節末の意志形式について述べた近年の研究としては北﨑（2021）の研究などがある。

という流れで進められてきたものである[42]。ここでは特に南（1964b，1974，1993）の研究を取り上げる。

まず、南（1964b:1）は「述語文の構造のモデルについての一つの案を提出したい」という目的を掲げ、「文のくみたてに参加しているいろいろな要素およびそれらの要素の結びつきに、四つの「段階」を区別する」という方法を採ることを述べている[43]。

次にこれに続く南（1974:114）は「従属句」の範囲として「学校文法でいうところの接続助詞（ガ、カラ、ケレド、シ、タラ、テ、ト、ナガラ、ノデ、ノニ、バ、ツツなど）で終るものか、あるいは用言（述語的部分となっている用言）の連用形で終るもの」を掲げている[44]。その上で南（1974）は「従属句」がその中に現れる「述語的部分」や「述語的部分以外の要素」の種類によって 3 つに分けられることを示し、その種類が限られているものから順に A、B、C と区分した。それぞれの典型的な例として、A は「～ナガラ」、B は「～ノデ」、C は「～ガ」を挙げている。また、南（1974:124-126）は「ある従属句が他の従属句の一部になることがある」ことを示し、A の類の一部になれるのは A の類の「従属句」、B の類の一部になれるのは A の類と B の類との「従属句」、C の類の一部になれるのは A の類と B の類と C の類との「従属句」であると述べている[45]。

更に続く南（1993）では「従属句」の範囲について概ね南（1974）と同様であるものの「末尾が連用形または一部の接続助詞で終わっているもの」のうち、（45）のものを「従属句」と看做さないことを明記しており、南（1974）に修正を加えているものと見える。

（45） a.「ヤヤ静カニナル」のように「「ナル」「スル」に続く場合」や「～タラ・ダラ（イイ，コマル，ダメダ…）」のように「後接する言語要素とのつながりが密接なもの」 （南 1993:76, 4.6[46]）

---

[42] なお、これらに先立って「節」や「句」について述べた論考として南（1961）がある。

[43] 文の構造に関する他の研究の指摘と南不二男氏による「述語文の構造のモデル」との対応関係については南（1993）に詳しい。

[44] 南（1974:114-115）はこの他に「一部の形式名詞――アゲク、トコロ（ニ、デ、ガ）、トタンなど――で終るもの」も「従属句」とし得る可能性について言及している。

[45] なお、南（1974，1993）における従属節分類は南（1999:88）によれば、「意味的世界の領域から文法的構造の領域にかけて、複数の段階の区別を認めようとする考え方」に依拠しており、他の言語においても試みられているものである。また、南（1974，1993）の従属節分類に対しては田窪（1987）、金水（1987）、尾上（1999a，1999b）などによる批判的検討、大堀（1999）などによる検証がある。

[46] 南（1993:76）は前者に該当する例として「手ガ動カナクナル，姿勢ヲ低クスル，ネジガ抜ケナイヨウニスル」を、後者に該当する例として「～テ・デ（イイ，カマワナイ…），～テハ・デハ（イケナイ，コマル，ダメダ，…），～テモ・デモ（イイ，カマワナイ，ダメダ…），～

b.「テバヤク（塗ル）」のように「用言の連用形または用言＋テ・デの形で他の成分をともなわないもので，かつその意味・用法が状態副詞に類するもの」

（南 1993:77，4.7[47]）

5.2. 小田（1990）

次に中古語における「接続句の構造」について述べた小田（1990）の研究を取り上げる。小田（1990:38）は現代語を対象とした南（1974）の研究などを踏まえ、中古和文においても「接続句の階層が整然とした体系をなしていることを客観的に示し、併せてその違例について考察しようとするもの」である[48]。

小田（1990）は接続助詞が承接する助動詞の種類に基づいて「中古の接続句は整然とした階層」を有しており、少なくとも「ツツ―テ―トモ―未バ―已バ―ド・ドモ」の 6 つの階層に区分されることを指摘している。また、小田（1990:45）はこの階層が「助動詞の性質など、文の階層性に対応することが予想される」と述べ、北原（1969）における助動詞の分類[49]とも対応するものであることを示している。

5.3. 近藤（1997，2012，2013）

続いて現代語の従属節分類を踏まえて中古語の従属節分類について検討している近藤（1997）の研究[50]、それに引き続いて中古語の従属節分類について言及している近藤（2012）、

ト（イイ，コマル…），～ナケレバ（ナラナイ，ダメダ…），～バ（イイ，サイワイダ…）」を挙げている。

[47] 南（1993:77）は他に「ミゴトニ（仕上ゲル）」、「イバッテ（話ス）」、「トンデ（帰ル）」の例を挙げている。

[48] 小田（1990）は接続助詞による「接続句」に着目しているが、これに続く小田（1994）においては接続助詞に上接する助動詞に着目した分析が試みられている。

[49] 北原（1969:38）は「連体なり」に上接するか下接するかという観点から中古語の助動詞を「(a) 常に「連体なり」に上接するもの」、「(b) 常に「連体なりに」下接するもの」、「(c)「連体なり」に上接することも下接することもあるもの」の 3 つに分けている。また、各類について（a）は「客観的表現にあずかるもの」、(b) は「主観的表現にあずかるもの」、(c) は（a）と（b）との「二面性をもつもの」であると指摘している（北原 1969:48）。

[50] 近藤（1997）は近藤（2000）に再録されているが、ここでは初出である近藤（1997）を引用する。なお、当該箇所について内容の変更がないことは確認済みである。

近藤（2013）の研究を順に概観していくこととする[51]。

まず、近藤（1997）は南（1974）の現代語の従属節分類に照らして中古語も概ね同様に分類することが可能であると述べ、その分類を表 1-4 のように示している[52]。また、近藤（1997）における各類に属する語形の例は（46）の通りであり、『源氏物語』における各類の用例として（47）～（49）を挙げている。

表 1-4：近藤（1997）における中古語の従属節分類

	（含むことのできる節）			（節末述語）						
	A類	B類	C類	動詞	ヴォイス	アスペクト	テンス	べし	めり・なり	む・らむ
A類										
て（様態）	○	×	×	○	○	×	×	×	×	×
B類										
とも	○	△	×	○	○	△	×	○	×	×
ば（仮定）	○	△	×	○	○	○	○	○	×	×
ば（確定）	○	△	×	○	○	○	○	○	○	×
ども	○	△	×	○	○	×	○	○	○	×
C類										
を・に	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

（46） A 類　て（様態）・つつ・ながら・で（否定）・連用形

B 類　とも・ば（仮定）・は（仮定）・ば（確定）・ども・ど・ものの・ものから・ものゆゑ（に）

C 類　を・に

（47） a. 親しき女房、御乳母などを<u>遣はしつつ</u>、ありさまを聞こしめす。

（桐壺 1-102）（近藤 1997:49，9[53]，A 類）

b. 人にはさとは<u>知らせで</u>、我に得させよ。

（夕顔 1-260）（近藤 1997:49，11，A 類）

c. もとの品たかく<u>生まれながら</u>、身は沈み、位みじかくて人げなき

（帚木 1-134）（近藤 1997:49，12，A 類）

---

[51] 近藤（2012）については第 2 節においても取り上げたが、ここでは中古語の従属節分類に関する記述を中心として特に近藤（1997，2013）と関連する箇所について述べる。

[52] 表 1-4 は近藤（1997:49）における表 1 を再現したものである。表について近藤（1997:48）は表の左端の列には「各類の従属節を構成することのできる代表的な接続助詞の類」を示し、その右隣の 3 列には「各類の従属節の内部に入り込むことのできる従属節の類を示し、右の各範疇や助動詞は、ABC の類の従属節を作ることのできる要素」を示したと説明している。

[53] 近藤（1997:49，9）の該当箇所では「遣わしつつ」とあるが、再録に当たる近藤（2000）や『源氏物語』の注釈書などを踏まえて「遣はしつつ」と改めて引用した。

（48） a. 秋ならねども、あやしかりけりと見ゆ。

（玉鬘 3-090）（近藤 1997:49，15，B 類）

b. 逃げ隠れたまふとも、何のたけきことかはあらむ。

（玉鬘 3-089）（近藤 1997:49-50，16，B 類）

（49） a. 御心を乱りし罪だにいみじかりけむを、今はとて、さばかりのたまひ、

（総角 5-235）（近藤 1997:50，17，C 類）

b. 楊貴妃の例も引き出でつべくなりゆくに、いとはしたなきこと多かれど、…

（桐壺 1-094）（近藤 1997:50，18，C 類）

次にこれに続く近藤（2012）においては中古語のテ形節に関する議論を踏まえて、従属節の分類に該当する語形を（50）のように修正している。

（50） A 類　　て（A 類）・ながら・ず・で・用言連用形

B1 類（順接）　て（B 類）・ば・（く）は・つつ・ず・で・用言連用形

B2 類（逆接）　とも・ども・ものの

C 類　　を・に・が

なお、近藤（2012）においては各類を分ける基準の一つに副助詞・係助詞の下接を挙げており[54]、A 類は第二種副助詞・係助詞が下接し、B1 類は係助詞が下接し、B2 と C とについてはいずれも下接しないことを指摘している。

また、特に本論文に関わるところで言えば、近藤（1997）における（46）の分類では「つつ」が A 類であったのに対し、近藤（2012）における（50）の分類では B1 類とされている。この点については次に挙げる近藤（2013）において更に修正の加えられる箇所であるが、近藤（2012）において B1 類に分類された理由は不明である[55]。

最後に『日本語歴史コーパス』の「先行公開版」を用いて中古語の複文（従属節）におけるアスペクトについて調査した近藤（2013）の研究は「つつ」、「ながら」、「まま」に上接する助動詞を整理した上で従属節分類（A 類、B 類、C 類）との対応関係について述べている[56]。まず、「つつ」については動詞単独の場合以外の上接語がヴォイスの助動詞（「る・

[54] 近藤（2012）は「下接」ではなく、「後接」という語を用いている。

[55] 中古語においては僅かながら「つつ」に第 2 種副助詞である「のみ」が下接する用例も認められるところであり、積極的に B1 と認める根拠は乏しいように思われる。

[56] 近藤（2013）は「上接」ではなく、「前接」という語を用いている。

らる」、「す・さす」）に限られていることから A 類であると指摘している。次に「ながら」については（51）のようにヴォイス以外の助動詞「き」、「ず」が上接することがほとんどであることから B 類であると説明している[57]。続いて「まま」についてはヴォイス・テンス・アスペクト・モダリティの多様な助動詞が上接することから C 類に位置づけられることを指摘している。近藤（2013）は「つつ」、「ながら」では見られない助動詞「つ」や「り」が上接する例の一部として（52）を挙げている。

（51）　ありしながら、うち臥したるさま　（源氏・夕顔）（近藤 2013:20,（8））

（52）a. おどろかれつるままに、出で立ちて　（源氏・浮舟）（近藤 2013:21,（18））

b. 陣につかうまつりたまへるままに、調度負ひて

（枕草子）（近藤 2013:21-22,（20））

近藤（2013）は『日本語歴史コーパス』を用いた調査の結果から近藤（2012）における（50）の分類を改め、「ながら」は B 類、「つつ」は A 類、「まま」は C 類に所属するものであると修正している。近藤（2013）の指摘を反映させると（53）のようになる[58]。

（53）

A 類	て（A 類）・つつ・ず・で・用言連用形
B1 類（順接）	て（B 類）・ば・（く）は・ながら・ず・で・用言連用形
B2 類（逆接）	とも・ども・ものの
C 類	を・に・が・まま

6. 現状の整理

最後に本章で取り上げてきた先行研究の指摘を整理し、本論文の位置づけを述べる。

まず、特に古代語における形容詞テ形節の意味・用法に関する研究（山口 1998; 竹部 2001）と古代語の従属節分類におけるテ形節に関する研究（近藤 2007，2012）とを照らし合わせると、山口（1998）における「時間表示」、「空間表示」、「状態表示」、「方法表示」と

[57] 近藤（2013:20）は近藤（2012）において「つつ」を B 類とし、「ながら」を A 類としたことに触れ、「今回の詳しい分析によって、その逆に訂正しておきたい」と述べている。

[58]「ながら」については逆接とも捉えられる用例が見られ、B2 に含まれる可能性もあるものと考えられるが、この点は近藤（2013）において指摘がないことから、措くこととする。

竹部（2001）における「情態修飾関係」とが近藤（2007，2012）における「A 類」（「副用語的なもの」）に相当するものであると考えられる。更に山口（1998）における「因由表示」と竹部（2001）における「因果関係」、「並立関係」、「全体部分関係」とが近藤（2007，2012）における「B 類」（「純粋な接続表現」）に相当するものであると見える[59]。また、形容詞テ形節と共に形容詞連用形の意味・用法を取り上げた研究（山口 1998; 竹部 2001）と連用修飾の種類を概観した研究（小田 2015）とについて形容詞連用形の分類を照らし合わせると、山口（1998）における「時間表示」、「空間表示」と小田（2015）における「時間を表す連用修飾」、「場所を表す連用修飾」とがそれぞれ対応し、山口（1998）における「状態表示」と「方法表示」とを合わせたものが小田（2015）における「状態修飾」に相当するものであると考えられる。また、小田（2015）はこの他に形容詞連用形の連用修飾において「評価誘導」、「結果修飾」、「程度を表す連用修飾」、「判断内容」があることを指摘しており、前一者が山口（1998）における「批評表示」と竹部（2001）における「評価」とに対応し、後一者が山口（1998）における「内容表示」と竹部（2001）における「知覚内容」とに対応するものと見える。この二者については山口（1998）、竹部（2001）のいずれも形容詞連用形のみに見られるものであることを指摘している。なお、これに加えて小田（2015）における「結果修飾」と「程度を表す連用修飾」とについては形容詞テ形節の用例が見られるかという点に関する言及は見当たらず、他の研究においても当該の記述が認められないことから形容詞連用形のみに見られるものであった可能性が高い[60]。

---

[59] なお、この照らし合わせに際しては竹部（2001:260）が「情態修飾関係」を「修飾の関係にあるもの」であるとし、「因果関係」、「並立関係」、「全体部分関係」を「前件と後件が接続の関係にあるもの」であるとしていることを参考にした。

[60] これに関連して例えば、竹部（2001）においては小田（2015）における「結果修飾」に相当する分類項目が立てられていないことから、仮に（vi）のような「結果修飾」（小田 2015）の用例が見られた場合には「情態修飾関係」（竹部 2001）に分類されるものと見える。

（vi）御髪は惜しみ聞こえて、長うそぎたりければ（源・柏木）

（小田 2015:290,（1），再掲（29d），「結果修飾」）

また、竹部（2001:264）は「情態修飾関係」を表す形容詞・形容動詞の連用形の用例として（vii）について「明石の上が二条院の東院に移り出てくる、その移り出てくる様が、気軽な様子である、というものである」と説明し、（viii）について「鬚黒大将の北の方が起き上がる、その起き上がる様が、突然である、というものである」と説明している。この（vii）は山口（1998）における「時間表示」と小田（2015）における「時間を表す連用修飾」とに相当するものと考えられる。この他に（ix）の用例も「情態修飾関係」として挙げられているが、これは「書き給へり」という動作を行う人物が「美しい様子である」ということよりも「美しい文字をお書きになった」（＝書いた文字が美しい）ということを表すものであると考えられる。これらを踏まえると、竹部（2001）における「情態修飾関係」は小田（2015）における「状態修飾」、「結果修飾」、「時間を表す連用修飾」、「場所を表す連用修飾」、「程度を表す連用修飾」を含めた枠組みである可能性が示唆され、連用修飾の観点から見て多様なものが含まれているものと見える。

次に古代語の形容詞テ形節と現代語の形容詞テ形節との対応関係については古代語において形容詞テ形節の副詞的用法が見られる（山口 1980; 山口 1998; 竹部 2001; 近藤 2007, 2012; 吉井 2017）のに対し、現代語においては許容されない（吉永 1995; 竹沢 2001; 津留崎 2003; 内丸 2006b; 大島 2015）ということになる。

また、従属節分類については古代語においても現代語の従属節分類（南 1964b，1974，1993）と概ね同様の階層性が認められ（小田 1990; 近藤 1997，2012，2013）、従属度の高い「A 類」のテ形節が古代語にも見られる（近藤 1997，2012，2013）ことが窺える。

これらを踏まえて本論文は形容詞テ形節の副詞的用法が中古以降にどのような変遷を辿ったのかという点を明らかにするものとして位置づけられる。形容詞テ形節の副詞的用法の変遷を明らかにするに当たっては古代語に見られる形容詞テ形節の副詞的用法の様相を現代語との比較が可能になるように改めて整理することが求められる。先行研究においては主に古代語の共時的な分析のために意味・用法の分類が行われており、現代語における連用修飾成分に関する分類と照らし合わせにくいことや同様の事態を表す周辺の形式との対応関係が分かりにくいことが課題であると言える。また、そもそも古代語の形容詞テ形節において副詞的用法がどの程度の割合を占めていたのかという点が明らかでなく、変遷を検討するに当たっては初めに古代語の様相を把握することが必要であると考えられる。

そこで、本論文では現代語における連用修飾成分に関する研究も参考にしつつ古代語における形容詞テ形節の副詞的用法についてその様相を記述した上で、形容詞テ形節を対象とした通時的な調査を実施するという手順を採ることとする。更に形容詞テ形節の副詞的用法の変遷に関わる周辺の形式として〈付帯状況〉を表す「形容詞＋まま」と〈付帯状況〉を表す非対格自動詞テ形節・ツツ節とを取り上げ、それぞれの変遷・変化を明らかにした上で、形容詞テ形節の副詞的用法の衰退との関わりについて検討する。

なお、このような形容詞テ形節の副詞的用法の変遷に関する検討は時期によって従属節の各分類に属する形式に異同があることの一例を示すものと捉えることも可能であり、本論文は従属節分類を通時的に検討するものとしての側面も併せ持つものであると言える。

(vii)「(明石の上が) 心安く（二条院の東院に）立ち出でて、」
〈薄雲　六三〇⑪〉（竹部 2001:264，43）

(viii) らうたげに寄り臥し給へりしと見る程に、(鬚黒大将の北の方が) 俄かに起き上がりて、
〈真木柱　九四六⑤〉（竹部 2001:263，44）

(ix) この度はいといたうなよひたる薄様に、いと美しげに書き給へり。
〈明石　四五九⑬〉（竹部 2001:264，47）

7. おわりに

本章では本論文全体に関わる先行研究を便宜的に「古代語におけるテ形節に関する研究」、「古代語における形容詞連用形に関する研究」、「現代語における形容詞テ形節・連用形に関する研究」、「従属節分類に関する研究」の 4 つに大別し、概観した。更に先行研究の記述に基づいて現状を整理した上で本論文の位置づけを述べた。

第 2 章
用語と時代区分

1. はじめに

本章では本論文における用語の規定と本論文において採用する時代区分とについて述べる。まず、前者については本論文において特に重要であると考えられる用語として「節・テ形節」、「副詞的用法」、「付帯状況」を取り上げ、先行研究を整理した上で本論文における各用語の規定を示す。次に後者については時代区分に関する先行研究を整理し、本論文において採用する時代区分を示す。

2. 節・テ形節

まず、「節・テ形節」について取り上げる。ここでは特に「節」について（「句」という用語ではなく）「節」という用語を用いることと「節」の認定との 2 つの観点から先行研究を整理しつつ本論文における規定を示すこととする。

2.1.「節」という用語を用いること

初めに日本語の「節」について説明した仁田（1995b）は（1）のように述べている[1]。

（1）　〈節〉とは、概略、一つの述語とそれに従属していく幾つかの成分とから成り立っている。もっとも、節のタイプによって、生起する成分に制限が存在する

[1] 仁田（2007b，2014a）においても同様の説明がなされている。

し、出現する述語の文法カテゴリーにも限定が存する。また、意味的には、節とは、おおよそ一つの叙述内容つまり一つの出来事・事柄を表している。

（仁田 1995b:383-384，下線は引用者による）

また、(1) における「節のタイプ」について仁田（1995b）は「主節」とそれに「何らかのあり方で依存・従属していく節」とを挙げた上で、後者として「従属節」、「埋め込み節」、「連体修飾節」を挙げている。このうち、本論文において主に対象とするのは形容詞連用形に「て」が下接した形式であり、これは「従属節」に該当するものであると言える。

次に仁田（1995b）の「節」に概ね対応する用語として「句」を用いる研究もある[2]。ここではその代表的な研究の一つである山田（1908，1936）と本論文に特に関わる研究として南（1974，1993）とを取り上げる。

山田（1908）は「句」について（2）のように説明しており、これは広く知られるところである。山田（1908）に従えば、「句」とは一回の「統覺作用[3]」が働いたものということになる。

(2)　今内面よりの觀察によれば一の句は單一思想をあらはすものなれば、所謂統覺作用の活動の唯一回なるものならざるべからず。之を外部の方面より見れば、この單一思想が言語によりてあらはされたる一體ならざるべからず。しかもそは他と形式上獨立したる一完全體ならざるべからず　（山田 1908:1184）

また、これに続く山田（1936:399-400）においては「句と句との結合を職能とする」助詞を「接續助詞」と名づけ、「その上の句をば下の句に接續せしめて、二の句の結合によりて構成せられたる複雑なる思想を發表せしむる用をなすものなり」と説明している[4]。この点において本論文の対象とする「て」も「句と句との結合を職能とする」助詞（「接續助詞」）に含まれるということになる。

---

[2] 「句」も「節」も英語の“clause”に対応する用語として用いられているものと見えるが、これら以外にも「詞」という用語を用いた松下（1930）などの研究もある。“clause”に対応する用語に関連する研究史については服部（2000，2001）に詳しい。

[3] 山田（1908）における「統覺作用」とは種々の「觀念」を統合して「思想」とするための作用であると説明されている。

[4] 山田（1936）は助詞を「一の句の内部にあるもの」と「句と句とを結び合するもの」とに大別し、前者として「格助詞」、「副助詞」、「係助詞」、「終助詞」、「間投助詞」をそれぞれ位置づけ、後者として「接続助詞」を位置づけることで助詞を 6 種類に分けている。

次に南（1974，1993）は（3）のような形式を「従属句」としており、これらは前掲した（1）の仁田（1995b）における「節」が指し示す形式と概ね一致しているものと見える。

（3）　一応学校文法でいうところの接続助詞（ガ、カラ、ケレド、シ、タラ、テ、ト、ナガラ、ノデ、ノニ、バ、ツツなど）で終るものか、あるいは用言（述語的部分となっている用言）の連用形で終るものということにしておく。なお、一部の形式名詞――アゲク、トコロ（ニ、デ、ガ）、トタン――で終るものもそれらに準じて考えていいかもしれない。（南 1974:114）

つまり、本論文の中心的な対象である形容詞連用形に「て」が下接した形式については先行研究において「節」とも「句」とも呼ばれてきたものである。

これらを踏まえ、本論文においては英語の“clause”に概ね対応する概念として「節」という用語を用いることとし、その規定は（1）に挙げた仁田（1995b）の説明に拠ることとする。これに伴って述語連用形に「て」が下接した形式を「テ形節」と呼び、特に本論文における中心的な対象である形容詞連用形に「て」が下接した形式を「形容詞テ形節」と呼ぶこととする。同様に上接語の品詞を明示する際には「動詞テ形節」、「形容動詞テ形節」などのように呼ぶ。

なお、本論文において「句」（「従属句」、「テ形句」）を使用しないのは仁田（2007a:254）も述べるように「現在では、Clause に当たるものは、節と呼ぶことの方が一般的」であると考えるからである。

2.2.「節」の認定

続いて「節」の認定に当たって生じる「何を節と認めるか」（橋本 2003:182）という問題について取り上げる。特に形容詞テ形節の副詞的用法に関連づけて言えば、「何を述部（述語）と認めるか」（橋本 2003:183）という点や「節か成分か」（仁田 2014a）という点が問題となる。この点について日本語の複文を概観している橋本（2003:183）は「現行の多くの立場は，「述語があれば，それは節である」ということを前提としているが，述語であるかどうかが微妙な要素というものがある」として（4）のような例を挙げている。

(4)　a. 赤い帽子をかぶる。　（橋本 2003:183，(9)）

b. 花が美しく咲く。　（橋本 2003:183，(10)）

c. ?花が目に美しく咲く。　（橋本 2003:184，(11)）

橋本（2003）は（4a）の「赤い」、(4b）の「美しく」を述語と認めるかどうかという判断は研究によって異なるとした上で、(4a）は「ふちが赤い帽子をかぶる」のような形が可能であるのに対して、(4b）は（4c）のように主節と別の格成分（(4c）における「目に」）が現れにくいことから（4a）よりも「節」らしさが下がると指摘している。

また、前掲した南（1974）における「従属句」の範囲に関連して南（1993）では「従属句」の範囲に収まるものについて（3）と概ね同様であるものの「従属句として扱わない」形式を新たに (5) のように明記している。特に本論文と関わる点として南 (1993) は (5a)、(5b）のように形容詞連用形に「する」や「なる」が下接した「～くする」、「～くなる」の形や（5c)、(5d）の「手早く」のような形容詞連用形による修飾を「従属句」とは看做さないという立場を採るものであると言える。

(5)　a.「末尾が連用形または一部の接続助詞で終わっているもので，つぎにあげるような後接する言語要素とのつながりが密接なもの」

b.「ヤヤ静カニナル」「姿勢ヲ低クスル」「～タラ・ダラ (イイ，コマル，ダメダ…)」「～テ・デ（イイ，カマワナイ…)」

（南 1993:76，4.6，一部抜粋）

c.「用言の連用形または用言＋テ・デの形で他の成分をともなわないものでかつその意味・用法が状態副詞に類するもの」

d.「テバヤク (塗ル)」「ミゴトニ (仕上ゲル)」「イバッテ (話ス)」「トンデ (帰ル)」

（南 1993:77，4.7，一部抜粋）

これに加えて動詞、形容詞の「なかどめ形[5]」についてその分類の精緻化を試みた吉永（1995:102）は（6a）のような主節に対する従属度の高い形容詞連用形（吉永 1995 における「ク 1」）について「連用修飾語として副詞的成分になっているが、節とみなされるかどうか

[5] 第 1 章第 4 節でも述べたように動詞連用形と動詞連用形に「て」が下接した形式とを「なかどめ」という用語を用いて取り上げている言語学研究会・構文論グループ（1989）によれば、「なかどめ」という用語は明星学園・国語部（1968）と鈴木（1972）とに依拠したものであるとのことである。

という問題は今後の課題である」と述べた上で、「節と仮定」して分類を試みている。また、吉永（1995:104）は（6b）のように「目的語の変化を表すもの」や（6c）のように「動作時の目的語の状態を表すもの」は「主節の主語の動作の状態を説明しているものではない」ことから、「ク 1」に入れない――（6a）とは異なるものであり、節とは看做さない――という立場を採るものである。

（6）　a　太郎は烈しくドアを叩いた　（吉永 1995:102,「ク 1」）
　　b. 車を赤く塗った　（吉永 1995:104）
　　c. おみやげをおいしくいただく　（吉永 1995:104）

同様に仁田（2014a）は（7）の例を挙げ、（7a）のような節（仁田 2014a における「副詞節」）は（7b）のような「成分」に極めて近く、「節か成分かが微妙な存在」であると指摘している。

（7）　a. 彼は泣きそうな顔をして立ち上がった。
　　b. 彼は泣きそうな顔で立ち上がった。　（仁田 2014a:345）

これらを踏まえると現代語において「美しく咲く」、「静かになる」のような形容詞・形容動詞の連用形による修飾や「威張って話す」、「泣きそうな顔をして立ち上がる」のような動詞連用形に「て」が下接した形式による修飾については積極的に「節」と呼ばないという立場があることが分かる。

本論文においては主に古代語に見られる形容詞連用形に「て」が下接した形式の副詞的用法を取り上げるという点で、いわゆる「成分」との境界が曖昧になる可能性がある。しかし、本論文においては特に述語連用形に「て」が下接したものという形式の面に着目し、これを一貫して「テ形節」と呼び、「節」か「成分」かという議論には立ち入らないこととする。このような立場を採るのは本論文が通時的な視点からテ形節の内部構造についても議論するものであることに起因している。具体的には古代語における形容詞テ形節の副詞的用法において主節と異なる主語が節内に現れる場合があり、本論文ではこのような現代語において許容されない現象についても取り上げる。このように現代語と異なる時期の日本語を通時的に調査するに当たり、どのようなものを「成分」と看做して「節」と切り離すかという点について議論するためにはそれに先立って個別の形式の検討が求められる

ものと言える。本論文はこのような個別の形式の検討を中心とするものであり、「節」か「成分」かという議論はその射程を超えて次なる課題として想定し得るものである。

なお、形容詞連用形の副詞的用法については南（1993）や吉永（1995）のようにその一部を「節」に相当するものと看做し、一部を「節」に相当するものと看做さないという立場もあり、「節」と「成分」とを明確に区分することは困難であるものと見える[6]。そこで本論文では一貫して「形容詞連用形」と呼び、形容詞連用形の副詞的用法についても「節」か「成分」かという議論に立ち入らないこととする。

3. 副詞的用法

本論文において「副詞的用法」という用語を用いるのは古代語・現代語の別を問わず、テ形節を対象とした先行研究においてその用法の一つとして「副詞的用法」が掲げられてきたという経緯があることを踏まえたものである。ここではテ形節について「副詞的用法」や「副詞的」という用語を用いて説明している先行研究の一部を取り上げた上で、本論文における「副詞的用法」の規定を提示する。

まず、現代語における動詞テ形節[7]について述べた成田（1983:139）は（8）のような「様態動詞[8]」のテ形節の例を挙げてこれを「副詞的用法」とした上で、いずれも動詞テ形節が「主節の動詞のあらわす動作の主体の姿勢・状態をあらわしている」と説明している[9]。更にこのような「様態動詞」のテ形節の副詞的用法は（9）の性質を持つと指摘している。

（8）　a. 暁子は<u>黙って</u>頭を下げた。

（三好徹『消えた蜜月』徳間文庫，成田 1983:138，（4））

b. 又八郎は道場を出ると、東に歩いて徳右衛門町を抜けると、三ツ目橋のそばの

6　ここで取り上げた先行研究の他にも例えば、小池（1997:460）は連用修飾の種類として「語によるもの」、「句によるもの」、「節によるもの」の 3 種を挙げ、現代語の副詞と形容詞・形容動詞の連用形とについては「語によるもの」に含めている。

7　成田（1983）では「「て」形」とする。

8　成田（1983:137-138）における「様態動詞」とは「人間のある姿勢をあらわすような」動詞のことであり、成田（1983）は「姿勢をあらわすもの」として「立つ」、「座る」、「乗る」などを挙げ、「状態をあらわすもの」として「黙る」を挙げている。また、成田（1983）はこの「様態動詞」のテ形節が「副詞的用法」の典型であると指摘している。

9　成田（1983）が「副詞的用法」と呼ぶテ形節については第 4 節において取り上げる「付帯状況」や「付帯状態」などの用語を用いて説明する研究がある。

河岸に、ひっそりとうずくまって男を待った。

（藤沢周平『用心棒日月抄』新潮文庫，成田 1983:139，(6)）

(9)　① 主節には動作主を要求する意志動詞が用いられ、「て」形の動詞の要求する動作主は主節のそれと一致する。

② 主節末は、命令・依頼などのムード表現が可能である。

③主節の動詞のみが要求する名詞句は自由に従属節の前に位置することができる。

④「～て」を「～ながら」におきかえにくい。

⑤「～て」は、(1) Ⅰにあげられた動詞（＝引用者注：「立つ」、「座る」など「姿勢をあらわすもの」）では「～た姿勢で」に、(1) ⅠおよびⅡ（＝引用者注：「状態をあらわすもの」である「黙る」）にあげられた動詞すべてにおいて「～たまま」におきかえられる[10]。　（成田 1983:139，(7)）

また、成田（1983）は動詞テ形節を「副詞的用法」、「継起的用法」、「原因・理由をあらわす用法」、「並列的用法」の 4 種に分けている[11]。その上で（9）①の性質が「副詞的用法」と「原因・理由をあらわす用法」及び「並列的用法」との差異を示し、(9) ③の性質が「副詞的用法」と「継起的用法」との差異を示し、(9) ④の性質が「様態動詞」以外のテ形による副詞的用法との差異を示し、(9) ⑤の性質が「副詞的用法」と他の 3 用法との差異を示すものであると指摘している。特に「副詞的用法」と「継起的用法」との差異を示すものである（9）③については、(10) のような「副詞的用法」の用例が見られる一方で、(11) の「継起的用法」の用例は不自然であると判断されている。

(10)　a. 本をいすに座って読む。

b. 東京まで横になって行けるのなら楽だ。　（成田 1983:140，(11)）

(11)　a. ?学校へごはんを食べて行く。

b. ?家へ図書館で勉強して帰る。　（成田 1983:140，(12)）

成田（1983:141）は（10）のような「副詞的用法」の場合にも継起的な意味を含んでいることを指摘した上で、「典型的な継起的動作では、ふたつの動作の間に関連がうすく、前後

[10] テ形節と「～たまま」との置き換えについては三宅（1995）などに指摘のあるところである。

[11] 成田（1983:139）は「これらの用法はかなり連続的で截然と区別することが不可能な場合があり、また、それぞれの中をさらに細分しうることもある」と断っている。

関係を乱しさえしなければ、その間にどのような動作があろうとかまわないのに対し、副詞的用法では「いすに座った」結果「いすに座っている」状態を持続したまま次の動作がおこなわれるという含意」があるとし、この点で両者が異なっていると述べている[12]。

これに加えて成田（1983）は（12a）のような形容詞連用形による「副詞的用法」と（13a）のような動詞テ形の「副詞的用法」とを比較している。

（12） a. 空が青く晴れわたっている。（成田 1983:151，（54a））

b.（晴れわたった）空が青い。（成田 1983:152，（56a））

（13） a. いすに座って本を読む。

b.（本を読む）〔彼が〕いすに座っている。

c. ⎧（彼が）いすに座っている。
⎩（彼が）本を読む。（成田 1983:155，（58））

成田（1983:152）は（12a）を（12b）に言い換えることで「青く」が「文中のいずれかの名詞のあらわすものの属性」（ここでは「空」）を表していることが分かると説明している。更に成田（1983:157）は（13a）を（13b）、（13c）のように言い換える際に「～ている」を用いており、この「～ている」について「状態性述語とみなしうる」ことから副詞的用法のテ形が「状態性述語」に近いことを指摘している。つまり、この点で形容詞連用形の副詞的用法とも近接するということになる。

次に古代語のテ形節について検討した近藤（2007，2012）は現代語の従属節分類（南 1974，1993）を踏まえて「平安時代語の「て」節には、あきらかに A 類の副用語的なものと、B 類の純粋な接続表現との二種類がある」と指摘している（近藤 2007:182）。また、中古和文資料を広く調査した近藤（2012）は「A 類」に相当するものとして（14）のような例を挙げ、「B 類」に相当するものとして（15）のような例を挙げている[13]。

（14） a. おぼつかなくてのみ年月の過ぐるなむあはれなりける

（源氏・若菜下）（近藤 2012:54，39，「A 類」）

b. 見なれてのみも思ほゆるかな　（うつほ物語）（近藤 2012:54，51，「A 類」）

[12] この点は第 1 章第 4 節において取り上げた大島（2015）の指摘と同様のものと見える。

[13] なお、近藤（2012）は「A 類」のテ形節として「かくて」、「さて」、「して」、「とて」、「にて」、形容詞テ形、動詞テ形の 7 種の形式を挙げている。

（15） a. 知らぬ国に吹き寄せられて、鬼のようなるもの出で来て殺さんとしき

（竹取物語）（近藤 2012:56，57，「B 類」，「並列」）

b. まことに明け方になりてぞ、宮帰り給ふ

（源氏物語・梅枝）（近藤 2012:56，58，「B 類」，「継起」）

c. 道にてやまひしてなむ、死にける

（大和物語）（近藤 2012:56，59，「B 類」，「原因理由」）

また、近藤（2012:55）は（14）のような「A 類」のテ形節は「のみ」や「だに」などの「第二種副助詞[14]」が下接するという点で「B 類」のテ形節と異なるということを指摘しているが、この点について（16）の「ず」や「で」（否定）などの「明確に副詞的な表現」と同様であることも論の補強になると述べている。

（16） a. はなやかならずのみ、侍るめるよ （紫式部日記）（近藤 2012:55，54）

b. 見えにくきさませずだになりぬれば （紫式部日記）（近藤 2012:55，55）

このように近藤（2007，2012）は中古語におけるテ形節の中に副詞的に働くものとそうでないものとの 2 種を認めていると言える。

これらの先行研究を踏まえて本論文においてもテ形節のうち、副詞的に働く場合を「副詞的用法」と呼ぶこととする。また、この「副詞的に働く」とは、主に動詞を修飾し、「動きや状態の実現のされ方に関わる諸相」（仁田 1983:18）を表す連用修飾の働きを指すものであると規定する。

なお、副詞的用法は副詞的用法でないもの（本論文における「非副詞的用法」）との対比によって相対的に決まるものであると考えられる。古代語におけるテ形節については山口（1998）、竹部（2001）の研究において意味的な観点による分類が提示されており、近藤（2007，2012）の研究において節内に含まれる要素や節に下接する要素などの観点による分類が提示されているということになる。これらを踏まえ、本論文において古代語の形容詞テ形節の副詞的用法と非副詞的用法とを分類する際には山口（1998）、竹部（2001）に示されている意味的な観点と近藤（2007，2012）に示されている「統語的環境の差」とを組み合わせて検討することとする。この分類方法については第 3 章第 2 節において詳しく述べる。

[14] この「第二種副助詞」については第 1 章第 2 節において既に整理してあることから、ここでは取り上げない。なお、特に名称については第 1 章第 2 節の脚注 18 に述べた通りである。

4. 付帯状況

ここでは「付帯状況」という用語について取り上げる[15]。日本語を対象とした研究において「付帯状況」という用語は動詞述語の副詞節[16]（動詞テ形節、動詞ナガラ節、動詞ツツ節など）に関する研究と情態修飾成分に関する研究とにおいてそれぞれ用いられてきたという経緯がある[17]。ここでは「付帯状況」という用語についてそれぞれの研究を順に概観した上で本論文における規定を提示する。

4.1. 動詞述語の副詞節に関する研究

初めに動詞述語の副詞節に関する研究において「付帯状況」という用語がどのように用いられてきたのかという点に注目し、概観する。

まず、連用修飾の修飾部と被修飾部（主要部）との関係について取り上げた寺村（1983）の研究を取り上げる。寺村（1983:40）は（17）の例を挙げ、これらは「文の主要部の表す事態と並行して存在したこと、そのことを特に意味のあることとして話し手が付け加えたもの」であるとし、これを「付帯状況」を表すものであると捉えている[18]。

（17） a. 彼は<u>雨に濡れたまま</u>、アスファルトの上を踏んで行った。

（寺村 1983:40（10））

b. <u>中国人でいて</u>、葉氏は漢字をわずかしか知らないので……

（寺村 1983:40（12））

---

[15] 後述するように「付帯状態」、「付帯節」、「付帯用法」などの用語を用いている先行研究もあるが、ここでは便宜的に「付帯状況」に統一しておく。

[16] この「副詞節」について益岡・田窪（1992:188）は「述語の修飾をしたり、文全体を修飾したりする働きを持つ」と説明し、その一例として（i）、（ii）を挙げている。

（i） 父はいつも新聞を読みながら朝食を食べる。 （益岡・田窪 1992:188,（1））

（ii） もし不満があるなら、そう言ってほしい。 （益岡・田窪 1992:188,（2））

[17] これらを合わせて扱う研究として日本語の「描写述語」について「名詞＋で」と動詞テ形節とを共に取り上げて検討した松井（2010）は示唆的であるが、本論文の対象とする範囲を超えていることからここでは措くこととする。

[18] 寺村（1983）の主な考察対象は村木（1983）にも取り上げられた「地図をたよりに、人をたずねる」のような「X ヲ Y ニ……スル」という表現である。また、この表現について取り上げている研究のうちの一つである西垣内（2019）はこれを「「付帯条件」を表すとされる構文」としている。なお、他にも三宅（2000）、氏家（2017）などが名詞句との関わりにおいてこの表現（構文）を分析している。

次に現代語の動詞テ形節の分類を試みる一連の研究においてはその用法の一つとして「付帯状況」、「付帯状態」、「付帯節」、「付帯用法」といった用語が用いられる場合がある。そのうち、「付帯状態」という用語を用いた仁田（1995a）の研究は「付帯状態」のテ形節（仁田 1995a における「シテ節」）の表す意味について「主たる事象の実現のし方」を表すものであり、テ形節の事象と主節の事象とが同時に起こり、テ形節の主体と主節の主体とが同一であると規定している。なお、仁田（1995a）は「付帯状態」の下位類として「し手容態」、「心的動作」、「し手動作」、「付属状況」の 4 種を立てており[19]、その具体例は（18）のようなものである。それぞれについて（18a）の「し手容態」は「《姿勢変化》《着脱》《携帯》とでも呼べる事象を形成する動詞によって、構成されているものである」（仁田 1995a:93）とし、（18b）の「心的動作」は「主たる動きが実現する時の主体の心的なあり方を表現する」（仁田 1995a:97）ものとし、（18c）の「し手動作」は「主体動作の同存」とし[20]、これら 3 種以外の（18d）、（18e）のような例を「付属状況」としている。なお、仁田（1995a:100-101）は「付属状況」について（18d）が「主体の容態的あり方に関わるもの」であるのに対して（18e）は「主たる事象が実現する際の状況を表し、主たる事象の実現のされ方を表現しているものの、もはや、主体の様態的なあり方とは言えないだろう」と指摘している[21]。

（18） a. 自分はそれを何気なく、<u>踞（しゃが）んで</u>見ていた。

（志賀直哉「城の崎にて）（仁田 1995a:93,（1）,「し手容態」）

b. 私はその後、<u>興奮して</u>松下課長に物語ったのだ。「松下さん、この神津さんという人は、実に驚くべき名探偵ですね。」

（高木彬光「妊婦の宿」）（仁田 1995a:97,（16）,「心的動作」）

c. <u>机を叩いて</u>、なんだ、こいつが犯人だったのか、と地団駄ふんで口惜しがったが、～　（高木彬光「妊婦の宿」）（仁田 1995a:99,（26）,「し手動作」）

d. 京極鴻二郎が<u>全身を朱に染めて</u>倒れていた。

（高木彬光「妊婦の宿」）（仁田 1995a:100,（32）,「付属状況」）

---

[19] 仁田（1995a）はいずれも「仮称」とする。

[20] 仁田（1995a:99）は「主体動作の同存は、シナガラ節の領分」であり、「主体運動を表す動詞」の場合、テ形節では基本的に「継起」を表すことを指摘した上で、テ形節においても「主体運動そのものが存続し、主たる事象と同存関係を表し、主たる事象の実現のされ方を表す場合がないわけではない」として（18c）の例を挙げている。

[21] なお、（18d）について仁田（1995a）は「前身を朱に染めて」としているが、高木彬光「妖婦の宿」（1975 年、立風書房）における当該箇所を確認したところ、「全身を朱に染めて」であったことから、ここでは修正した上で引用してある。

e. ズボンと靴をびしょびしょにして、彼は立ち上がった。

（筒井康隆「その情報は暗号」）（仁田 1995a:101，（37），「付属状況」）

なお、現代語のテ形節に関する研究は膨大な数に上ることからこれらの全てを列挙し尽くすことは困難であるが、「付帯状況」、「付帯状態」、「付帯節」、「付帯用法」といった語を用いている研究の一部を整理すると（19）のようになる[22]。

（19）　「付帯状況」…遠藤（1982）、成田（1983）、加藤（1995）、三宅（1995）、吉永（1997）、三宅（1999）、内丸（2006a）、日本語記述文法研究会（編）（2008）
「付帯状態」…仁田（1995a）、吉田（2012）
「付帯節」　…吉永（1995）
「付帯用法」…吉永（2012a，2012b）

また、「付帯状況」や「付帯状態」といった用語以外の語を用いてテ形節における同様の分類項目を説明している研究もある。例えば、森田（1980:315）はこれを「同時進行」と呼び、「“Aの状態においてBが行われている”“A の状態において B の状況が繰り広げられている”」ことを表すものであると説明している[23]。

このような動詞テ形節に関する研究に加えて、動詞述語の副詞節に関する体系的な記述として益岡・田窪（1992）の研究がある。益岡・田窪（1992:194）は「付帯状況を表す副詞節は、ある動作に付随する状態や、ある動作と同時並行的に行われている付随的な動作を表す」とし、（20）のように「付帯状況」を表す表現として「動詞タ形＋「まま（で）」」、「動詞タ形＋「きり」」、動詞テ形、「動詞連用形＋「ながら」」、「動詞連用形＋「つつ」」を挙げている[24]。

---

[22] なお、（19）に挙げた研究においても用語の規定が完全に一致している訳ではないという点には留意する必要がある。テ形節の用法におけるこれらの用語については吉田（2012）に研究史の整理があり、詳細は吉田（2012）に譲る。

[23] 森田（1980:315）はこの「同時進行」の用法について「前件が後件の修飾語的性格を帯びている。後件がどのような状態で行われるかを前件が説明しているわけである」と述べている。これは続く森田（1988）においても同様であることを確認してある。

[24] 益岡・田窪（1992）はこの他に既に述べた「X ヲ Y ニ……スル」（「ヲ格＋「に」」）の形式も「付帯状況」を表すものとして注に挙げている。なお、日本語記述文法研究会（編）（2008:248）は「付帯状況を表す様態節」として「「ながら」「つつ」，連用形＋連用形，「まま」，テ形，「きり」「なり」「ついでに」「がてら」」を挙げているものの、「～タママ」に関する廣坂（2001）の研究においては「動詞タ形＋「きり」」が「付帯状況」に含められていないなど、研究によってその所属形式に揺れのある点には留意する必要がある。

(20) a. 時々、眼鏡をかけたまま風呂に入ることがある。

（益岡・田窪 1992:195，（52），下線は引用者による）

b. 出て行ったきり、戻って来ない。

（益岡・田窪 1992:195，（53），下線は引用者による）

c. 手をつないで歩く。（益岡・田窪 1992:195，（54），下線は引用者による）

d. 本を読みながらご飯を食べた。

（益岡・田窪 1992:195，（55），下線は引用者による）

これに続く動詞述語の副詞節に関する研究においては、この益岡・田窪（1992）における説明に基づいて「付帯状況」という用語を用いる研究が見受けられる[25]。これに加えて動詞述語の副詞節の各形式に関する研究では各形式における一用法として「付帯状況」が規定されている場合がある[26]。

4.2. 情態修飾成分に関する研究

続いて情態修飾成分に関する先行研究として矢澤（2000）における「付帯状況」を取り上げる。矢澤（2000）は「動作に関わるモノのサマ」を表す「状態の修飾関係」の下位分類に「結果の修飾関係」、「状況の修飾関係」、「付帯状況の修飾関係」の 3 種を立てている[27]。矢澤（2000:213）は、(21）のような例を挙げた上で、「動作による対象の状態変化ではなく，動作が及ぼされる際の対象の付帯的な様子を表す」ものとして、このような修飾関係を「(対象の）付帯状況の修飾関係」としている。

(21) a. 太郎は次郎をトレパン姿で追い出した（矢澤 2000:212（35））

b. 太郎は次郎をパジャマ姿のままで殴った（矢澤 2000:214（50b））

つまり、矢澤（2000）は動作の対象である「次郎」が「トレパン姿／パジャマ姿」で

[25] 例えば、三宅（1995，1999）などが挙げられる。

[26] この点については仁田（2014b）も参照のこと。

[27] 矢澤(2000)における情態修飾成分の分類は矢澤(1983)を踏まえたものであるが、矢澤(1983)においては「付帯状況の修飾関係」を提示していないことからここでは矢澤（2000）の記述を引用する。

あることを表している（21）のような場合に限定して「（対象の）付帯状況の修飾関係」と看做していることになる[28]。これに対して矢澤（2000:228-229）は（22）のような「精神状況を表すデ句」が「主体の状態しか表さない」ことを述べ、このようなものを「主体めあての修飾関係」と呼んでいる。これに加えて（23）について（23b）が不自然であれば（そして（23c）が自然であれば）、（23a）も「主体めあての修飾成分の一種」であると説明している。つまり、矢澤（2000）はこれらを「（対象の）付帯状況の修飾関係」には含めないということである[29]。

（22） a. 太郎は　半信半疑で　次郎を　追い出した
　　 b. 春子は　本気で　花子を　教えた　　（矢澤 2000:228,（124））
（23） a. 太郎は　花子に　立ったままで　踊りを　見せた
　　 b. 花子が立ったままで踊りを見る
　　 c. 太郎が立ったままで踊りを見せる　　（矢澤 2000:229,（127））

4.3. 本論文の規定

最後にこれらの先行研究を踏まえて「付帯状況」という用語に関する本論文の規定について述べる。本論文ではテ形節に関する先行研究において用いられている「付帯状況」という用語を踏襲し、その規定は主に矢澤（2000）を参考として「動作が行われる際の主体、または対象の付帯的な様子を表すもの」とする。ただし、矢澤（2000）がその範囲を「対象」に限っているのに対して本論文は「主体」と「対象」とのいずれの場合も含んで

[28] 矢澤（2000）が「付帯状況」を基本的に「対象」に限定した形で規定しているのは「結果の修飾関係」、「状況の修飾関係」と合わせた枠組みにおいて「付帯状況」を捉えようとしていることに起因するものであると考えられる。

[29] なお、情態修飾成分に関する研究に関連する点として概ね同様の事態を表すものには（iii）のような表現がある。これについて益岡・田窪（1992:97）は「動きのありさま」を表す「「様態」を表すデ格」と呼んでおり、「付帯状況」という用語は用いられていないものの同様の事態を表しているものと見える。
（iii）太郎は慣れない手つきでシャツのボタンをぬい付けた。
（益岡・田窪 1992:97,（21），下線は引用者による）
また、格助詞「で」の通時的な研究である間淵（2000:17）は（23）に相当する用例を「様態」とし、「動詞の示す動作を行う動作主体の様態，行為を受ける対象の様態，作用・出来事それ自体の状態などを表す」と説明しており、このような格助詞（格成分）に関する研究との関わりにも留意する必要がある。

いるという点で矢澤（2000）の規定と異なるものであると言える。なお、動詞述語の副詞節についてはその範囲が基本的に「主体」に限られており、この点も先行研究と本論文との違いである。これは、本論文が形容詞テ形節を中心として検討するものであることに起因しており、形容詞テ形節の副詞的用法の中に（24a）のように動作時の主体の様子を表すものと（24b）のように動作時の対象の様子を表すものとのいずれも見られることを踏まえたものである。

（24） a. …つひに、いささかも、とりわきてわが心寄せと見知りたまふべきふしもなくて過ぎたまひにしことを、口惜しう飽かず悲しう思ひ出できこえたまふ

（源氏物語・匂兵部卿・21，主体の付帯状況）

b. 行事二人に、五十人づつ分かたせたまひて、僧座せられたる御堂の南面に、鼎を立てて、湯をたぎらかしつつ、御膳を入れて、いみじう熱くてまゐらせ渡したるを、思ふにぬるくこそはあらめと、僧たち思ひて、…

（大鏡・道長・400，対象の付帯状況）

また、本論文において中心的に取り上げる形容詞テ形節については副詞的用法の下位分類（修飾のタイプ[30]）の一つとして「付帯状況」を立てることから形容詞テ形節の副詞的用法が全て「付帯状況」を表すという訳ではない。つまり、動詞テ形節について副詞的なものを「付帯状況」と一括して呼び表す研究とは異なっており、この点には留意する必要がある。形容詞テ形節の副詞的用法の下位分類については第 3 章第 4 節、第 4 章第 5 節において詳しく述べる。

5. 時代区分

ここでは本論文における時代区分を示す[31]。それに先立って、言語研究における時代区分というものの捉え方について取り上げた研究のうち、特に阪倉（1977）と小柳（2018）との指摘を概観する。まず、阪倉（1977）は言語研究における時代区分について（25）のように述べている。

[30] これは形容詞テ形節が下接する動詞（被修飾語）に対して持つ意味のことである。この点については 3 章第 4 節、第 4 章第 5 節において詳しく述べる。

[31] なお、小松（1999）は「時期区分」とするのが自然であると述べているが、本論文では便宜的に「時代区分」とする。

(25)　歴史的変遷における時代区分の場合には、区分された各時代の言語は、その時代語としての絶対的な独自性をもって、過去から現在へと線条的につづく「時」のながれのなかに位置づけられているわけである。しかもまた、それぞれの連続する時代の言語は、言語現象そのものとして、かならず直接に連続している。ある一つの現象は、その一つまえの時代の状態を経過したうえでなければ、あらわれることがなく、一つの時代の言語体系は、そのすぐまえの時代の体系を直接に承けなければ、絶対に実現してこない。〔中略〕日本語という一つの言語は、刻々とうごきつづけ、変りつづけてきた。そのたえざるうごきのあとをたどりつつ、そこにいくつかのくぎりをもうけようとするのが、時代区分という困難な試みのな〔ママ〕である。　（阪倉 1977:216）

阪倉（1977:216）の述べる通り、「一つの時代の言語体系は、そのすぐまえの時代の体系を直接に承け」ており、基本的には他の時代と切り離すことは不可能である[32]。また、言語体系のうちで文法、語彙、音韻、表記などを個別に取り上げ、それに基づいて設けた時代区分は必ずしも一致するものではなく、言語体系の如何なる側面に着眼するかによって区分の仕方は当然ながら変わり得るものである[33]。

また、阪倉（1977）と同様に小柳（2018:16-17）も（26）のように述べている[34]。

(26)　1 つの時代区分内で、言語が完全に等質であることはなく、隣り合わせの時代区分で、言語が完全に異質であることもない。それぞれの時代に、前後の時代と連続する不変の事象と、前後の時代と不連続に変化した事象が共存している。その中で、連続性の方が重視されれば同区分にまとめられ、不連続性の方が際立つと判断されれば別区分に分けられる。どちらに重きを置いて時代を捉える

[32] 同様の指摘は吉田（1989）にも見られ、吉田（1989:283）は「政治上の事件のように、何年何月に勃発したとか、終結したとかはいえず、前代末と次代初とは線で区切られるものではなく、相互に重複している」と述べている。

[33] これは日本語史の時代区分について述べた築島（1988:59-60）が「巨視的な立場からの区画論を否定するわけではないが，それに先立って，音韻・文法・文字・語彙・文体などの項目ごとに，その歴史的境界を考え，その上で，総合的な検討に進むことが望ましいと思われる」と指摘していることを踏まえたものである。

[34] （26）に加えて小柳（2018:16-17）は「例えば、鎌倉時代と室町時代を同じ「中世」に収め、室町時代と江戸時代を「中世」と「近世」（あるいは「近代」）に別区分するのは、1 つの解釈である――それを言えば、「鎌倉時代」「室町時代」などの政治史のまとまりも解釈である――」として時代区分は「客観的」な基準や枠組みではなく、「解釈と歴史像の問題が浸透している」と指摘している。

かは解釈次第で、ここには研究者の視覚が介在している。　（小柳 2018:16-17）

続いて日本語史研究における時代区分を示している一部の研究（土井・森田 1975; 吉田 1989; 沖森 2017; 小柳 2018）を参考に時代区分の例を表 2-1 に示す[35]。なお、ここでは区分の仕方に着眼していることから、表 2-1 における「古代」や「中世」のような区分した時代の名称は便宜的に統一したものであり、先行研究の施した名称と一致しない場合がある[36]。また、表 2-1 における政治史区分は先行研究を参考とした便宜的なものであり、そもそも政治史を如何に区分するかという点には立ち入らない。

表 2-1：先行研究における時代区分の例

<table>
<tr><th>政治史区分</th><th>2区分</th><th>3区分</th><th>4区分</th><th>5区分</th><th>6区分①</th><th>6区分②</th><th>7区分①</th><th>7区分②</th></tr>
<tr><td>縄文・弥生・古墳時代</td><td rowspan="5">古代</td><td rowspan="3">古代</td><td rowspan="3">古代</td><td rowspan="2">上代</td><td rowspan="2">上代</td><td rowspan="2">上代</td><td rowspan="2">上代</td><td>古代</td></tr>
<tr><td>飛鳥・奈良時代</td><td>上代</td></tr>
<tr><td>平安時代</td><td>中古</td><td>中古</td><td>中古</td><td>中古</td><td rowspan="2">中古</td></tr>
<tr><td>院政期</td><td rowspan="3">中世</td><td rowspan="3">中世</td><td rowspan="3">中世</td><td rowspan="3">中世</td><td rowspan="2">中世前期</td><td rowspan="2">中世前期</td></tr>
<tr><td>鎌倉時代</td><td rowspan="2">中世</td></tr>
<tr><td>室町時代</td><td rowspan="7">近代</td><td>中世後期</td><td>中世後期</td></tr>
<tr><td rowspan="2">江戸時代</td><td rowspan="4">近代</td><td rowspan="2">近世</td><td rowspan="2">近世</td><td rowspan="2">近世</td><td rowspan="2">近世</td><td>近世前期</td><td rowspan="2">近世</td></tr>
<tr><td>近世後期</td></tr>
<tr><td>明治時代</td><td rowspan="3">近代</td><td rowspan="3">近代</td><td rowspan="3">近代</td><td rowspan="2">近代</td><td rowspan="4">近代</td><td rowspan="4">近代</td><td rowspan="3">近代</td></tr>
<tr><td>大正時代</td></tr>
<tr><td>昭和前期</td></tr>
<tr><td>昭和後期以降</td><td>現代</td><td>現代</td></tr>
<tr><td>区分を提示している研究</td><td>沖森2017</td><td>沖森2017
小柳2018</td><td>沖森2017</td><td>土井・森田
1975
沖森2017</td><td>小柳2018</td><td>沖森2017</td><td>沖森2017</td><td>吉田1989</td></tr>
</table>

次に先行研究を踏まえ、本論文における時代区分及び用語を表 2-2 に示す。本論文における時代区分は表 2-1 に示した沖森（2017）の 7 区分①に近いものであるが、吉田（1989）に倣って院政期を中古に含めた点で沖森（2017）とは異なっている。なお、本論文の議論は形容詞テ形節の副詞的用法を中心的に取り上げるものであることから、特に日本語史の中でも文法や語彙に関わるものと言える。これを踏まえ、表 2-2 に示した本論文における時代区分が日本語史における文法や語彙に関わる先行研究におけるそれと大きな相違のないことは確認してある。

[35] 日本語史における時代区分に関する研究は他にも宮地（1979）、阪倉（1982）、前田（1985）、築島（1988）などがあり、その整理は百留（2019）などの近年の概説書にも見られる。

[36] 例えば、土井・森田（1975）は 5 区分において明治時代以降を「現代」としているが、ここでは沖森（2017）に従い、便宜的に「近代」とした。

表 2-2：本論文における時代区分

<table>
<tr><th rowspan="2">政治史区分</th><th colspan="4">本論文における時代区分</th></tr>
<tr><th>時代区分</th><th colspan="3">日本語史区分</th></tr>
<tr><td>縄文・弥生・古墳時代</td><td rowspan="2">上代</td><td rowspan="7">古典語</td><td rowspan="4">古代語</td><td rowspan="2">上代語</td></tr>
<tr><td>飛鳥・奈良時代</td></tr>
<tr><td>平安時代</td><td rowspan="2">中古</td><td rowspan="2">中古語</td></tr>
<tr><td>院政期</td></tr>
<tr><td>鎌倉時代</td><td>中世前期</td><td rowspan="3">中・近世語</td><td rowspan="2">中世語</td></tr>
<tr><td>室町時代</td><td>中世後期</td></tr>
<tr><td rowspan="2">江戸時代</td><td>近世前期</td><td rowspan="2">近世語</td></tr>
<tr><td>近世後期</td></tr>
<tr><td>明治時代</td><td rowspan="3">近代</td><td colspan="2" rowspan="3">近代語</td><td rowspan="3">近代語</td></tr>
<tr><td>大正時代</td></tr>
<tr><td>昭和前期</td></tr>
<tr><td>昭和後期以降</td><td>現代</td><td colspan="2">現代語</td><td>現代語</td></tr>
</table>

また、本論文においては分析に際して特に中世と近世とをそれぞれ「前期」、「後期」と呼び分ける場合がある。加えて「古代語」や「中世語」といった日本語史区分の用語は基本的に時代区分の用語と対応するものであるが、特に時代区分の上代から近世までを併せて「古典語」とし、必要に応じて呼び分けることとする。

6. おわりに

本章では本論文における用語の規定と本論文において採用する時代区分とについて述べた。前者については本論文において特に重要であると考えられる用語として「節・テ形節」、「副詞的用法」、「付帯状況」を取り上げ、先行研究を概観した上で本論文における規定を示した。次に後者については時代区分に関する先行研究を整理し、本論文において採用する時代区分を示した。

以下、本論文では特に断らない限り、本章における規定に従って用語と時代区分とを使用することとする。また、各章において改めて用語の規定を確認する場合がある。

第 3 章
中古語における形容詞テ形節

1. はじめに

本章では中古語における形容詞テ形節を対象とし、①副詞的用法と非副詞的用法とを分類し、両者の差異を明らかにすること、②形容詞テ形節の副詞的用法と形容詞連用形の副詞的用法との差異を明らかにすることの 2 点を目的とする。まず、副詞的用法と非副詞的用法とを分類する手順について述べ（第 2 節）、量的分布と語彙的特徴との 2 つの観点から中古語における形容詞テ形節の副詞的用法と非副詞的用法との差異を検討する（第 3 節）。次に形容詞テ形節の副詞的用法について下接する動詞（被修飾語）に対して持つ意味の観点から 4 つのタイプに分けられること示し、各タイプの用例数を提示する（第 4 節）。続いて形容詞テ形節の副詞的用法と形容詞連用形の副詞的用法との差異について語彙的特徴と修飾のタイプとの 2 つの観点から明らかにすることを試みる（第 5 節）。

なお、上代語の資料においても形容詞テ形節の用例は見られるが、用例数が少ないことに加えて、和歌における用例に偏ることから本章においては中古語（特に中古和文資料）における形容詞テ形節に限って分析を実施することとした。

2. 副詞的用法と非副詞的用法との分類方法

まず、中古語における形容詞テ形節について副詞的用法と非副詞的用法とに分類する手順について述べる。

第 1 章第 2 節において取り上げたように中古語における形容詞テ形節に副詞的用法と非副詞的用法とがあることは既に先行研究によって指摘されており、それらの先行研究はテ形節の前件と後件との意味関係を記述した山口（1998）、竹部（2001）などの研究と従属節

分類における「A 類」と「B 類」との分類に関する近藤（2007，2012）の研究とに大別し得る。本章では両者の観点を組み合わせて、中古語の形容詞テ形節を副詞的用法（近藤 2007 における「副用語的なもの」）と非副詞的用法（近藤 2007 における「純粋な接続表現」）との 2 つに分類することとした[1]。本章では便宜的に形容詞テ形節のうち副詞的用法を「Ⅰ類」と呼び、非副詞的用法を「Ⅱ類」と呼ぶこととする[2]。

初めに（1）に示す近藤（2007，2012）の「統語的環境の差」に該当する用例について（1a）に該当する場合は副詞的用法、（1b）に該当する場合は非副詞的用法とした[3]。

（1）　近藤（2007）における「A 類」と「B 類」との「統語的環境の差」

a. A 類テ形節：第二種副助詞が下接する。評価の副詞が節内に入らない。

b. B 類テ形節：第二種副助詞が下接しない。評価の副詞が節内に入る。

（1）における「第二種副助詞」とは「のみ」、「さへ」、「だに」などを指し、中古語において格助詞、形容詞連用形、副助詞に下接し（近藤 1995）、「句全体に関係する」タイプの副助詞（小柳 1999b:53）のことである。なお、第二種副助詞の下接は「A 類」であるための十分条件ではあるが、必要条件ではなく、評価の副詞の生起は「B 類」であるための十分条件ではあるが、必要条件ではない。つまり、第二種副助詞の下接も評価の副詞の生起も見られない用例については「A 類」、「B 類」のいずれも存在するということになる。

また、（1）の評価の副詞が節内に入るか否かという点について近藤（2007）は評価の副詞として「まことに」のみを挙げているが、本章では中川（2000）の指摘[4]を踏まえて中古

1　なお、近藤（2007，2012）は現代語における従属節分類を示した南（1974）を踏まえ、中古語における従属節分類を提示しており、その分類において「副用語的なもの」を「A 類」に「純粋な接続表現」を「B 類」にそれぞれ位置づけている。

2　後述するように中古語における形容詞テ形節の副詞的用法の中には主節と異なる主語が現れる場合があり、この点で現代語の従属節分類を示した南（1974）における「A 類」とは異なっている可能性がある。そこで、本章では南（1974）を踏まえた近藤（2007，2012）による「A 類」、「B 類」という名称を踏襲せずに「Ⅰ類」、「Ⅱ類」と呼ぶこととした。

3　（1）は近藤（2007:183）における整理に基づいたものである。また、近藤（2007，2012）の研究の詳細は既に第 1 章第 2 節において整理してある。

4　中川（2000）は古代語における「極度・高度を表す程度副詞」として「いたく」、「いみじく」、「ことに」、「よに」、「まことに」、「げに」を取り上げ、相互承接や語順に関する調査に基づいてこれらの副詞を 4 類（「第一類」～「第四類」）に整理している。その中で中川（2000:9）は「第四類」に当たる「まことに」と「げに」とについて「話者の評価副詞（陳述副詞）的な性格を有する語と位置づけることができる」と述べており、本章ではこの中川（2000）の指摘が近藤（2007）の「評価の副詞」に対応するものと判断し、近藤（2007）の挙げる「まことに」に加えて「げに」も分類の基準に含めた。

和文資料においては「まことに」と「げに」とを評価の副詞として認め、副詞的用法と非副詞的用法との「統語的環境の差」に関与するものであるとした。

なお、形容詞テ形節に下接する助詞として「ぞ」や「なむ」などの係助詞は近藤（2007）において「A 類」、「B 類」のいずれにも下接することが示されていることから「統語的環境の差」とは看做さないこととした。これに加えて近藤（2012:57）は「A 類」と「B 類」との差異の一つに擬似分裂文を挙げており、テ形節を「なり」が受ける擬似分裂文（「～てなり」）は「A 類に分類したものがほとんどを占める」と指摘している。しかし、中古語の擬似分裂文を産出できないという点からはこれらが「A 類」であるかを判定し得ず、これに加えて擬似分裂文でないテ形節に対して「A 類」か「B 類」かを判定するために使用することも困難であると考えられる。

（1）に基づいて用例を整理すると、本章の調査において（1a）に該当する用例は副詞的用法とした全 475 例中 11 例であり、（1b）に該当する用例は同じく全 475 例中 3 例であり、いずれも少数であった[5]。前者の用例を（2a）に示し、後者の用例を（2b）に示す。

（2） a. 今参り童などのめやすきを呼びとりつつ、「かかる人御覧ぜよ。あやしくてのみ臥させたまへるは、物の怪などのさまたげきこえさせせんとするにこそ」と嘆く。

（源氏物語・浮舟・182，Ⅰ類）

b. …その衣一つ取らせて、とくやりてよ」と仰せらるれば、「これ、給はするぞ。衣すすけためり。白くて着よ」とて、投げ取らせたれば、伏し拝みて、肩にうち置きては舞ふものか。まことににくくて、みな入りにし。後ならひたるにやあらむ、常に見えしらがひありく。

（枕草子・職の御曹司におはしますころ、西の廂に・153，Ⅱ類）

更に（1）に該当しない用例については第 1 章において整理した山口（1998）、竹部（2001）と近藤（2007，2012）との対応関係に照らして、被修飾語または主節に対する意味の観点からⅠ類かⅡ類かを判断した[6]。この手順によってⅠ類とした用例を（3a）と（3b）とに示し、Ⅱ類とした用例を（3c）に示す。

---

[5] 近藤（2012）は（1b）に該当するものとして動詞テ形節のみを挙げていたが、本章の調査によってこの基準を満たす形容詞テ形節も存在することが確かめられた。

[6] なお、近藤（2007，2012）の検証として（1）によってそれぞれⅠ類、Ⅱ類としたものが主節に対する意味の観点においても当該の分類の例外とはならないという点については確認済みである。

(3)　a. きたなげなき女、いとをかしげなる子を抱きて、門のもとに立てり。この児の顔のいとをかしげなりければ、目をとどめて、「その子、こち率て来」といひければ、この女寄り来たり。近くて見るに、いとをかしげなりければ、「ゆめ、こと男したまふな。われにあひたまへ。おほきになりたまはむほどにまゐり来む」といひて、「これをかたみにしたまへ」とて、帯をときてとらせけり。

（大和物語・百六十九・412，Ⅰ類）

b.「その君こそ、今の小野宮の右大臣と申して、いとやむごとなくておはすめり。このおとどの、御子なき嘆きをしたまひて、わが御甥の資平の宰相を養ひたまふめり。末に、宮仕人を思しける腹に出でおはしたる男子は、法師にて、内供良円君とておはす。（大鏡・実頼・103[7]，Ⅰ類）

c. その春、世の中いみじう騒がしうて、松里の渡りの月かげあはれに見し乳母も、三月ついたちに亡くなりぬ。せむかたなく思ひ嘆くに、物語のゆかしさもおぼえずなりぬ。（更級日記・296，Ⅱ類）

なお、以下では「ては」、「ても」のように係助詞が下接するものや形容詞テ形節で文が終止しているものは「その他」とし[8]、副詞的用法と非副詞的用法との分類の判断に迷うものは「保留」とした上で集計し、中心的な考察の対象からは除外することとする。また、地の文、会話文、心内話文、和歌などの違いによる明確な差は認められなかったことからこれらについては特に区別しない[9]。

3. 形容詞テ形節の概観

次に前掲の手順によって中古語の形容詞テ形節を副詞的用法（Ⅰ類）と非副詞的用法（Ⅱ類）とに分け、その量的分布と語彙的特徴とについて述べる。

---

[7] 引用箇所の冒頭に付した鉤括弧について『新編日本古典文学全集』においては「世次」による語りの部分であることを示す太字の鉤括弧であるが、ここでは太字にせずに引用してある。

[8] 例えば、テ形節に「は」や「も」が下接した「ては」や「ても」については上代語を中心とした春日（1974）、桑田（1983）、山口（2016）などの研究があり、仮定を表す形式であると指摘されている。このことを踏まえると「ては」や「ても」の場合には基本的にⅡ類に該当するものと見受けられるが、中古語における様相などについて詳細な検討が求められることから本章では「その他」とした。

[9] なお、第 6 章において取り上げる節内に対象主語を含む非対格自動詞テ形節の場合には用例が和歌に偏って見られるという点で形容詞テ形節の副詞的用法とは異なっていると言える。

3.1. 量的分布

本章において対象とする中古語の形容詞テ形節の用例は全て『日本語歴史コーパス平安時代編』（以下、『CHJ 平安時代編』）を利用して収集したものであり、形容詞テ形節の用例数は計 1732 例である[10]。得られた用例を前掲の手順によってⅠ類とⅡ類とに分け、その用例数を資料別に表 3-1 に示す。

表 3-1：中古語における形容詞テ形節の内訳[11]（資料別）

	副詞的用法（Ⅰ類）		非副詞的用法（Ⅱ類）		その他		保留		計	
竹取物語	2	33.33%	3	50.00%	1	16.67%	0	0.00%	6	100.00%
古今和歌集	3	27.27%	8	72.73%	0	0.00%	0	0.00%	11	100.00%
伊勢物語	11	44.00%	11	44.00%	3	12.00%	0	0.00%	25	100.00%
土左日記	1	20.00%	4	80.00%	0	0.00%	0	0.00%	5	100.00%
大和物語	13	38.24%	13	38.24%	8	23.53%	0	0.00%	34	100.00%
平中物語	4	33.33%	7	58.33%	1	8.33%	0	0.00%	12	100.00%
蜻蛉日記	38	31.93%	61	51.26%	20	16.81%	0	0.00%	119	100.00%
落窪物語	30	18.87%	110	69.18%	19	11.95%	0	0.00%	159	100.00%
枕草子	36	32.73%	67	60.91%	7	6.36%	0	0.00%	110	100.00%
源氏物語	268	26.25%	648	63.47%	102	9.99%	3	0.29%	1021	100.00%
和泉式部日記	7	19.44%	25	69.44%	3	8.33%	1	2.78%	36	100.00%
紫式部日記	4	20.00%	14	70.00%	2	10.00%	0	0.00%	20	100.00%
堤中納言物語	8	24.24%	23	69.70%	2	6.06%	0	0.00%	33	100.00%
更級日記	9	27.27%	23	69.70%	1	3.03%	0	0.00%	33	100.00%
大鏡	35	39.33%	49	55.06%	5	5.62%	0	0.00%	89	100.00%
讃岐典侍日記	6	31.58%	10	52.63%	3	15.79%	0	0.00%	19	100.00%
計	475	27.42%	1076	62.12%	177	10.22%	4	0.23%	1732	100.00%

表 3-1 を見ると、調査対象とした資料においては形容詞テ形節 1732 例のうち約 3 割に当たる 475 例がⅠ類であることが読み取れる。また、表 3-1 における「その他」と「保留」

[10] 『CHJ 平安時代編』においては「キー」を「品詞-大分類-形容詞」且つ「活用形-大分類-連用形」とし、後方共起条件の「キーから 1 語」を「品詞-大分類-助詞」且つ「語彙素-て」としてコーパス検索アプリケーション「中納言」（Ver.2.4.2）によって形容詞テ形節の用例を収集した。調査資料の詳細は論文末の調査・引用資料に示してある。

[11] 本章においては水谷（1977:84，注 17）の「国語学の論文では、構成比を示すのに百分率で小数一位まで掲げるのが通例であるが、後日他人が利用する便を考えて、もう一桁下までは出しておいて欲しい。この事と何桁目までを使って議論するかとは別の問題である」という指摘に従い、一律に小数点以下第二位まで示すこととした。ただし、これは小数点以下第二位までを有効数字と看做し、その値に基づいて議論を進めようということを意図するものではない。

とを除外した場合には全 1551 例のうちⅠ類が約 3 割（30.63%）を占め、Ⅱ類が約 7 割（69.37%）を占めることになる。

また、表 3-1 では『CHJ 平安時代編』における「成立年」と個別の資料に関する研究や諸注釈書などにおける成立に関する指摘とを踏まえ、概ねその成立時期順に資料を列挙してある。ここで、中古（と仮に括っている時期）において資料の成立順（時期）とⅠ類の形容詞テ形節の割合との間に関連があるかという点を確認するために個別の資料の成立順とⅠ類の形容詞テ形節の割合とについて Spearman の順位相関係数を使用して相関分析を実施した[12]。その結果、個別の資料の成立順とⅠ類の形容詞テ形節の割合との間には相関が認められないという結論が得られた[13]（$\rho = -.196, p = .502, n.s.$）。つまり、本章で調査対象としている中古和文資料においては時期が下るに連れてⅠ類の形容詞テ形節の割合が次第に減る（或いは増える）というような傾向は認められないということである[14]。

3.2. 語彙的特徴

次に表 3-1 におけるⅠ類とⅡ類とについてテ形節となる形容詞とテ形節に下接する動詞との語彙的特徴の観点から検討する。ここでの検討の対象は表 3-1 における「その他」と「保留」とを除いたⅠ類 475 例、Ⅱ類 1076 例の計 1551 例である。なお、形容詞、動詞の語形については基本的に『CHJ 平安時代編』が採用している「中古和文 UniDic」に従って認定したが[15]、その表記は改めた場合がある[16]。

---

[12] 用例数の少ない資料において割合が極端に高く（或いは低く）なってしまうことから、この相関分析に当たっては形容詞テ形節全体の用例数が 10 例未満である 2 資料（『竹取物語』、『伊勢物語』）を除いた計 14 資料を用いた。

[13] 相関分析の結果に対する解釈は竹内（2012）などを踏まえたものである。

[14] このような確認を行ったのは形容詞テ形節の副詞的用法の衰退が既に中古語において起きているのかという点を明らかにするためである。また、表 3-1 を見ると、資料によってⅠ類の形容詞テ形節の占める割合は異なっているが、その違いが資料間のどのような違いを反映したものであるかという点は判然としない。

[15] 動詞については「中古和文 UniDic」と異なる語形を採用した場合があり、この点については脚注 18 に詳しく述べる。

[16] なお、本章においては形容詞によって活用形ごとの出現頻度に違いがある――例えば、連用形の出現のしやすさが形容詞によって異なっている――という点は取り上げない。これについては終止形を有する形容詞に関する調査を実施した新里（1983）や形容詞ごとに連用形・終止形・連体形の出現頻度に差があることを指摘した吉田（1990）、活用形の出現頻度と形容詞自体の意味との関係に着眼した吉田（1995）、安本（2009）などの研究がある。また、同様に現代語の形容詞に関する研究としては橋本・青山（1992）や宮島（1993）などがある。

3.2.1. テ形節となる形容詞

まず、テ形節となる形容詞について見る。I 類のテ形節となる形容詞の異なり語数は 112 語（延べ語数は 475 語）であり、II 類のそれは 202 語（延べ語数は 1076 語）である。I 類と II 類とについてそれぞれのテ形節となる形容詞のうち、用例数の上位 10 語を示したのが表 3-2 である。なお、I 類のテ形節となる形容詞についてはその全ての語と用例数とを章末に付表 A-1 として示してある。

表 3-2：テ形節となる形容詞（I 類・II 類の各上位 10 語）

I 類		II 類	
形容詞	用例数	形容詞	用例数
無し	149	無し	196
はかなし	19	いとほし	44
近し	18	悲し	39
心細し	16	多し	33
おぼつかなし	13	恥づかし	28
多し	12	をかし	27
美し	12	つれなし	24
をかし	11	うれし	23
つれなし	10	わづらはし	19
心安し	9	苦し(くるし)	18

表 3-2 を見ると、いずれも「無し」が最も多いという点で共通していることが読み取れるが、I 類においては全体の約 31％（475 例中 149 例）を「無し」が占めているのに対して II 類においては約 18%（1076 例中 196 例）に留まっており、この点で両者は異なっていると言える。また、「多し」、「をかし」、「つれなし」も I 類、II 類のいずれにおいても上位を占めていることが分かる。このように I 類、II 類のいずれも「無し」、「多し」、「をかし」、「つれなし」が多くを占めているという点についてはそもそも『CHJ 平安時代編』所収の資料において全ての形容詞の中でこれらの語の頻度が高いということを反映したものであると考えられる[17]。

[17] 実際に『CHJ 平安時代編』の全資料を対象に「キー」を「品詞-大分類-形容詞」として検索すると、全 38760 例中「無し」が 4167 例（約 11％）であり、最も多いということが分かる。また、「無し」以外の形容詞はその用例数が多い順に「いみじ」1754 例、「をかし」1493 例、「あやし」934 例、「多し」805 例、「良し」716 例、「同じ」621 例、「悲し」610 例、「いとほし」534 例、「深し」533 例と続いており、「多し」、「をかし」は特に上位であることが窺える。

また、表 3-2 において I 類のテ形節となる形容詞に着目すると、II 類の上位 10 語には見られない「近し」、「心細し」、「おぼつかなし」が上位を占めていることが分かる。これらについては下接する動詞との組み合わせがある程度、固定化していた可能性のある場合や当該の修飾のタイプに偏って見られる場合などの特徴を有しているものと考えられる。この点については以下で検討していくこととする。

3.2.2. 形容詞とⅠ類のテ形節に下接する動詞との組み合わせ

続いて I 類のテ形節に下接する動詞のうち上位 13 語を表 3-3 に用例数と共に示し[18]、I 類のテ形節となる形容詞と下接する動詞との組み合わせのうち、上位 10 形式を用例数と共に表 3-4 に示す[19]。ここでは両者の組み合わせにおいて、特に用例数の多いものを取り上げることで形容詞テ形節の副詞的用法における特徴的な形式を指摘する。なお、I 類のテ形節に下接する動詞についてはその全ての語と用例数とを章末に付表 A-2 として示してある。

表 3-3 を見ると、特に「過ぐす」、「過ぐ」、「経」のように時間が経過する意味を持つ動詞や「有り」、「おはす」、「おはします」、「侍り」、「居る」、「候ふ」のように存在の意味を持つ動詞が上位を占めていることが読み取れる。

また、表 3-4 を見ると、形容詞については表 3-2 において最も用例数の多かった「無し」が多くを占めていることに加え、この「無し」と表 3-3 において上位を占めている「過ぐす」、「止む」、「有り」といった動詞との組み合わせが多いことが確認できる。これは当然

---

[18] 既に述べたように動詞の語形は基本的に「中古和文 UniDic」に拠ったが、①「動詞連用形＋動詞」の場合はこれを 1 語として単独の動詞の場合とは別に扱うこと、②「中古和文 UniDic」において同一語形とされる「返る」・「帰る」、「立つ」・「経つ」をそれぞれ別の語形とすること、③「中古和文 UniDic」においては「名詞＋動詞「為」」と解析される「対面す」、「昼寝す」、「物語す」、「聴聞す」をぞれぞれ 1 語とすることの 3 点において「中古和文 UniDic」とは異なる処理を施してある。これは I 類の形容詞テ形節に下接する動詞を検討する際にその動詞がどのような意味を表しているかという点を重視したことに起因するものである。

[19] なお、副助詞や係助詞などに加えて形容詞テ形節と下接する動詞との間に（i）「日ごろは」のように名詞句が現れることがあるが、このような場合にも「過ぎゆく」を下接する動詞として扱っている。

（i）はかなくて日ごろは過ぎゆく。　（源氏物語・総角・331）

また、I 類の形容詞テ形節全 475 例中、（ii）、（iii）の 2 例については形容詞「多し」、「あやし」が下接している。これらは動詞が下接する用例ではないが、場面を考慮すると、（ii）「調度品（家具や道具）ばかり殊にきちんとした状態で多く残っている」、（iii）「このようなことがない状態でさえ良くなかったのに」といった意を表すものであると考えられることから、I 類に含めてある。

（ii）…御調度などばかりなん、わざとうるはしくて多かりける。　（源氏物語・橋姫・124）

（iii）…人々おどろきて上に聞こゆれば、「かかることなくてだにあやしかりつるを。」　（和泉式部日記・83）

ながら「無し」の用例数が他の形容詞に比して多い――全体に占める割合が高い――ことによるものであるが、それに対して表 3-4 において「近し」と「見る」との組み合わせが 6 例見られることは注目に値する点であると言える。この点については修飾のタイプの観点からも改めて述べることとする。

表 3-3：下接する動詞（上位 13 語）

動詞	用例数
過ぐす	35
有り	25
止む(やむ)	23
過ぐ	20
見る	19
おはす	15
成る	11
おはします	10
侍り	10
居る	9
候ふ	9
経(ふ)	9
ものす	9

表 3-4：形容詞と動詞との組み合わせ（上位 10 形式）

形容詞	動詞	用例数
無し	過ぐす	18
無し	止む（やむ）	11
無し	有り	9
無し	成る	7
近し	見る	6
無し	過ぐ	6
無し	経	5
無し	侍り	5
無し	過ぎ行く	5
無し	おはす	5

4. Ⅰ類の形容詞テ形節の修飾のタイプ

次に I 類の形容詞テ形節が下接する動詞（＝被修飾語）に対して持つ意味に着目する。これは副詞的用法の下位分類であり、以下ではこれを「修飾のタイプ」と呼ぶ。本章では先行研究の指摘も踏まえつつ I 類の形容詞テ形節の修飾のタイプを〈付帯状況〉、〈空間〉、〈時間〉、〈数量〉の 4 つの修飾のタイプに分ける[20]。ここではそれぞれのタイプについてテ形節に下接する動詞との関わりにも触れながら用例を概観し、修飾のタイプごとの用例数を示すこととする。

[20] 以下では修飾のタイプを山括弧で括って示すこととする。

4.1. 修飾のタイプ

4.1.1. 〈付帯状況〉

まず、第 2 章第 4 節において規定したように本論文では「動作が行われる際の主体、または対象の付帯的な様子を表すもの」を〈付帯状況〉と呼ぶ。I 類の形容詞テ形節における〈付帯状況〉は先行研究に照らせば、山口（1998）が「状態表示」と呼び、竹部（2001）が「情態修飾関係」と呼んだものであるが、連用修飾の分類から見れば〈付帯状況〉に限定し得るものであると考えられる[21]。中古和文資料における〈付帯状況〉の用例の一部を（4）に示す。

（4） a. 中の宮は、ふと隠れたまひぬれば、いと人少なに、心細くて臥したまへるを、「などか御声をだに聞かせたまはぬ」とて、御手をとらへておどろかしきこえたまへば、「心地にはおぼえながら、もの言ふがいと苦しくてなん。日ごろ、訪れたまはざりつれば、おぼつかなくて過ぎはべりぬべきにやと口惜しくこそはべりつれ」と息の下にのたまふ。（源氏物語・総角・318）

b. 川のかたに車むかへ、榻立てさせて、二舟にてこぎ渡る。さて、酔ひ惑ひて、うたひ帰るままに、「御車かけよかけよ」とののしれば、困じて、いとわびしきに、いと苦しうて来ぬ。（蜻蛉日記・上・166）

c. 男子は、大納言常行卿と聞こえし。御子二人おはせしも、五位にて典薬助、主殿頭など言ひて、いとあさくてやみたまひにき。（大鏡・右大臣良相・67）

d. 若宮のいとうつくしうておはしますを見たてまつりたまひても、いみじく泣きたまひて、「おとなびたまはむを、え見たてまつらずなりなむこと。忘れたまひなむかし」とのたまへば、女御、せきあへず悲しと思したり。（源氏物語・若菜下・215）

e. なほあらむよりは、あな憎とも聞き思ふべけれど、つれなうてある、宵のほど、

[21] 第 5 節において述べるように形容詞連用形にはいわゆる〈結果〉や〈評価〉などのタイプがあると考えられるが、I 類の形容詞テ形節はこのようなタイプを持たないことから形容詞連用形と比較するとその機能の範囲は限定的であったものと見える。先行研究においては（4）のような用例が「状態修飾」（山口 1998）や「情態修飾関係」（竹部 2001）と名づけられていたが、これが連用修飾節・情態修飾成分に関する分類においてどのように位置づけられるのかという点は明示されていなかったと言える。本章においてこれを〈付帯状況〉と位置づけたことで、他の連用修飾節・情態修飾成分である形式との比較や現代語との比較を実施することがより容易になったものと考えられる。

火ともし、台などものしたるほどに、せうととおぼしき人、近うはひ寄りて、懐より、陸奥紙にてひきむすびたる文の、枯れたる薄にさしたるを、取り出でたり。（蜻蛉日記・下・354）

f. 行事二人に、五十人づつ分かたせたまひて、僧座せられたる御堂の南面に、鼎を立てて、湯をたぎらかしつつ、御膳を入れて、いみじう熱くてまゐらせ渡したるを、思ふにぬるくこそはあらめと、僧たち思ひて、さぶさぶとまゐりたるに、はしたなききはに熱かりければ、北風はいとつめたきに、さばかりにはあらで、いとよくまゐりたる御房たちもいまさうじけり。（大鏡・道長・400）

（4a）は大君が自分のところに長らく訪れなかった薫に対して「この頃は訪れてくださらなかったので、あなたのことを気がかりに思ったままで日が過ぎていってしまうのか」と恨み言を伝えている場面である[22]。（4b）は初瀬詣での帰路、船で川を渡る場面において「疲れて、とても困っているのに非常に苦しい状態で帰ってきた」という意である。（4c）は常行（ときつら）卿の子息について述べている箇所であり、「ご子息が二人いらっしゃったものの、五位で典薬助、主殿頭などという極めて浅い（＝低い位の）ままで世を終わってしまって」という内容である。（4d）は紫の上が若宮を見て悲しむ場面において「若宮がとても美しい様子でいらっしゃるのをご覧になるにつけても」の意である。（4e）は人々に噂について「気にしないで（＝無関心で／考えることをせずに）いた」ことを表している。（4f）は僧たちの食膳について「鼎を立てて湯を沸かせて、そこにご飯を入れて大層熱くして（その熱い状態のままでそれを）お渡しになる」という説明の部分である。このように（4a）から（4e）は動作の主体の状態を表し、（4f）は動作の対象の状態を表していると言える。

これに関連して上代語のテ形節について吉井（2017:64）は「修飾句[23]」となる形容詞テ形（本論文におけるⅠ類の形容詞テ形節）として（5a）を挙げ、これについて「主述的な構成で、句的事態としての価値をもって句に関わるものであるが、基本的に「～の状態で」という意味を持つ」と指摘している。また、山口（1991，1998）は、「形容詞で構成された「て」連用句の状態表示で、その連用句における主語が主句のそれと異なる例」（山口1998:243）があることを指摘し、（5b）、（5c）のような例を挙げている[24]。

---

[22] 『新編日本古典文学全集』では「おぼつかなくて過ぎはべりぬべきにや」について「気がかりなままはかなくなってしまうのかしら」と現代語訳を付している。

[23] 吉井（2017）は山田（1908）における用語として「修飾句」を用いている。

[24] 同様の指摘は竹部（2001）にも見られ、これは第1章第2節において概観した通りである。

(5)　a. しきたへの枕をまきて妹と我と寐夜者無而（ぬるよはなくて）年そ経にける

（萬葉集・巻 11・2615）（吉井 2017:64，①）

b. 桜は花びらおほきに葉の色こきが、枝ほそくて咲きたる。

（三巻本枕・木の花は）（山口 1998:220）

c. 弁の少将、声いとなつかしうて「葦垣」うたふ。

（源氏・藤裏葉）（山口 1991:40，（16））

これについて山口（1998:243）は形容詞連用形との比較から「連用法による成分は、主句述語に対して逆述語的であり、主句内の連用成分としての修飾語にとどまるが、「て」連用句における述語の形容詞類は、いわば正述語的であって、それだけ主句のそれとは別個の主述関係として、より自覚的な判断を担ったと考えられる」と述べている。このような指摘は形容詞テ形節の副詞的用法が〈付帯状況〉を表すものであるという点と、形容詞テ形節が表す〈付帯状況〉には対象の状態を表すものと主体の状態を表すものとがあり得るという点とにおいて本論文の見解と整合するものである。

本論文において〈付帯状況〉を「動作が行われる際の主体、または対象の付帯的な様子を表すもの」と規定したのは、このような指摘を踏まえたものであることを改めて確認しておく。また、これは南（1974）の従属節分類における「A 類」の節には基本的に（主節と異なる）主語が現れないという特徴とは異なっていると言える[25]。

4.1.2. 〈空間〉

次に主に距離を表すものを〈空間〉とした。これは山口（1998:223）が「主句の主語や客語の占める空間、ひいては主句述語の動作や変化が生じる空間のありようを示すもの」を〈空間表示〉としたことを踏まえている。本章の調査範囲における〈空間〉の用例の一部を（6）に示す。

(6)　a.「いざ、近くて見む」とて、岸づらにもの立て、榻など取りもて行きて、下りたれば、足の下に、鵜飼ひちがふ。　（蜻蛉日記・中・262）

b. 大和守、残りのことどもしたためて、「かく心細くてはえおはしまさじ。いと御

[25] この点から I 類の形容詞テ形節と現代語の「A 類」の節との異同については慎重に検討する必要がある。これについては第 7 章において改めて言及する。

心の隙あらじ」など聞こゆれど、なほ峰の煙をだにけ近くて思ひ出できこえむと、この山里に住みはてなむと思いたり。　（源氏物語・夕霧・443）

c. またの日、今日は御仏など近うて拝みたてまつらむ、ものども取り置かれぬ先にと思ひて、まゐりてはべりしに、宮たちの諸堂拝みたてまつらせたまひし、見申しはべりしこそ、かかることにあはむとて、今まで生きたるなりけりとおぼえはべりしか。　（大鏡・道長・356）

前後の文脈を踏まえれば、(6a) は「さあ、近くで見よう」という意であり、(6b) は「峰の煙を近くで（見て母君を）思い起こし申し上げよう」という意であり、(6c) は「今日は御仏を近くで拝み申し上げよう」の意であると考えられる。〈空間〉の用例はテ形節に「見る」や「眺む」などの見ることを表す動詞が下接する場合が多く、これは表 3-4 において「近し」と「見る」との組み合わせの用例数が多く見られたこととも関連していると言える。

なお、本章の調査範囲においては〈空間〉を表す「遠くて」の用例は見られず[26]、「近し」や「け近し」などのように近いことを表す用例のみが見られた。ただし、上代語の資料に (7) のように「遠くて」の用例が見られることから、〈空間〉を表す形容詞テ形節が「近くて」に限られていた訳ではないと考えられる。

(7)　とほくてみれば、はゝきをたてたるやうにてたてり。（風土記逸文・信濃國・461）

4.1.3. 〈時間〉

次に動作・事態の速さに関わる修飾や動作・事態の起こる時期を特定する修飾を担うものを〈時間〉とした。これは山口（1998:224）が〈時間表示〉を「主句の事態の生起する時間的なありようを示すもの」と説明していることを踏まえたものである。〈時間〉の用例の一部を（8）に示す。

---

[26] 『源氏物語』に（iv）のような「遠くて」の用例が見られるが、ここでは「人に遠し」という表現で「人付き合いが悪い」の意と考えられることから〈空間〉とは見なさず、「人付き合いが悪いままでお育ちになられたので」の意を表す〈付帯状況〉と判断した。

（iv）また、「あな、まがまがし。なぞの物かつかせたまはむ。ただ、人に遠くて生ひ出でさせたまふめれば、かかることにも、つきづきしげにもてなしきこえたまふ人もなくおはしますに、はしたなく思さるるにこそ。　（源氏物語・総角・254）

(8)　a. かき絶え、慰む方なくて籠りおはするを、世人も、おろかならず思ひたまへることと見聞きて、内裏よりはじめたてまつりて、御とぶらひ多かり。はかなくて日ごろは過ぎゆく。（源氏物語・総角・331）

b. 「手なども、いとをかしうもあるかな。いかなる人、今よりかくととのひたらむ。幼くて院にも後れたてまつり、母宮のしどけなう生ほしたてたまへれど、なほ人にはまさるべきにこそはあめれ」とて、尚侍の君は、この君たちの手などあしきことを辱めたまふ。（源氏物語・竹河・74）

（8a）は「あっという間に日が過ぎていく」の意であり、（8b）は「幼いころに院に先立たれ」の意である。

4.1.4. 〈数量〉

最後に〈数量〉は「多し」、「少なし」、「無し」のテ形節によって人や物の数のありようを示すものである。〈数量〉の用例の一部を（9）に示す。（9a）は「まれに少ない人数で御車の後ろにお仕えした」の意であり、（9b）は「馬場という所で人が大勢で騒いでいる」の意である。

(9)　a. 御歩きの折は、おぼろけにて御前つがひたまはず。まれまれも数少なくて、御車のしりにぞさぶらひし。車副四人つがはせたまはざりき。（大鏡・時平・86）

b. うらやましがりて、「なほいま一つして、同じくは」など言へば、「まな」と仰せらるれば、聞き入れず、情けなきさまにて行くに、馬場といふ所にて、人おほくてさわぐ。（枕草子・五月の御精進のほど・185）

なお、〈数量〉に該当する例においては（10）のように「多い」で表される数の対象と下接する動詞の主体とが異なる場合がある。（10）の「多くて」は「男ども」（ここでは「お供の者」の意）が多い状態であることを示し、下接する「おはしぬ」は少将が出かけたという動作である。このような用例においては既に述べた〈付帯状況〉と近接するものであると考えられるが、本章では人や物の数について限定している場合には〈数量〉とした。

(10)　皆ののしりて、さざとして出でたまふすなはち、あこぎ告げに走らせやりたれば、少将、心地たがひて、例乗りたまふ車にはあらぬに、朽葉の下簾かけて、男ども多くておはしぬ。　（落窪物語・巻之二・136）

4.2. 修飾のタイプ別の量的分布

次に 4 種の修飾のタイプごとにその用例数を表 3-5 に示す。表 3-5 を見ると〈付帯状況〉の占める割合が約 9 割であり、本章において調査対象とした中古和文資料における I 類の形容詞テ形節は〈付帯状況〉が中心的なタイプであったことが分かる。また、〈付帯状況〉に次いで〈空間〉の用例が多く、〈時間〉と〈数量〉とは概ね同数であることが読み取れる。

表 3-5：修飾のタイプ別の用例数

	用例数	割合
〈付帯状況〉	419	88.21%
〈空間〉	29	6.11%
〈時間〉	13	2.74%
〈数量〉	14	2.95%
計	475	100.00%

続いて修飾のタイプ別に形容詞テ形節に下接する動詞を見ていく。表 3-3 に示した I 類の形容詞テ形節に下接する動詞の上位 13 語について形容詞テ形節の修飾のタイプ別にその用例数を示したのが表 3-6 である。表 3-6 を見ると当然ながら、全体の約 9 割を占める〈付帯状況〉に用例数が集中していることが分かるが、その中でも「見る」は他の動詞に比して〈空間〉の用例数が多いことが分かる。これは「近くて見る」などの組み合わせがある程度、固定化した表現であった可能性を示唆する結果であるとも言える。

また、表 3-6 において上位を占めている「過ぐす」、「過ぐ」、「経」は時間の経過を表す意味を持つ動詞であり、〈付帯状況〉の形容詞テ形節に下接した用例を見ると、(11) のように「～のままで｛過ごす／過ぎる／時が経つ｝」や「～の状態で｛過ごす／過ぎる／時が経つ｝」といった意を表すものであると整理することができる。同様に「有り」、「おはします」、「居る」のように主に存在の意味を持つ動詞が形容詞テ形節に下接した場合には (12) のように「～の｛ままで／状態で｝いる」の意を表す〈付帯状況〉として用いられる

ことが多いものと考えられる。

表 3-6：修飾のタイプ別に見る下接する動詞の用例数（空欄は用例なし）

	〈付帯状況〉	〈空間〉	〈時間〉	〈数量〉	計
過ぐす	33			2	35
有り	24			1	25
止む(やむ)	23				23
過ぐ	19	1			20
見る	8	10	1		19
おはす	13			2	15
成る	11				11
おはします	10				10
侍り	10				10
居る	9				9
候ふ	8			1	9
経(ふ)	8		1		9
ものす	9				9

（11） a. 中の宮は、ふと隠れたまひぬれば、いと人少なに、心細くて臥したまへるを、「などか御声をだに聞かせたまはぬ」とて、御手をとらへておどろかしきこえたまへば、「心地にはおぼえながら、もの言ふがいと苦しくてなん。日ごろ、訪れたまはざりつれば、おぼつかなくて**過ぎ**はべりぬべきにやと口惜しくこそはべりつれ」と息の下にのたまふ。（源氏物語・総角・318，再掲（4a））

b.「人々しくきらきらしき方にははべらずとも、心に思ふことあり、嘆かしく身をもてなやむさまになどはなくて**過ぐし**つべきこの世と、みづから思ひたまへし。心から、悲しきことも、をこがましく悔しきもの思ひをも、かたがたに安からず思ひはべるこそいとあいなけれ。（源氏物語・宿木・394）

c. かひなくて年**経**にけりとながむれば袂も花の色にこそしめ

（蜻蛉日記・下・309）

（12） a. なほあらむよりは、あな憎とも聞き思ふべけれど、つれなうて**ある**、宵のほど、火ともし、台などものしたるほどに、せうととおぼしき人、近うはひ寄りて、懐より、陸奥紙にてひきむすびたる文の、枯れたる薄にさしたるを、取り出でたり。（蜻蛉日記・下・354，再掲（4e））

b. 若宮のいとうつくしうて**おはします**を見たてまつりたまひても、いみじく泣き

たまひて、「おとなびたまはむを、え見たてまつらずなりなむこと。忘れたまひなむかし」とのたまへば、女御、せきあへず悲しと思したり。

（源氏物語・若菜下・215，再掲（4d））

c. その竹の中に、もと光る竹なむ一すぢありける。あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。

（竹取物語・17）

なお、これらの動詞以外に多くを占める「止む」は「過ぐ」、「有り」に次いで用例数が多く、23 例全てが〈付帯状況〉のテ形節に下接するものである。この「止む」が形容詞テ形節に下接する用例を見ると、（13）のように「～のままで死ぬ」や「～のままで関係が終わってしまう」といった意で用いられている。この「止む」は「死ぬ」や「果つ」と同様に瞬間的な事象を表す動詞であると考えられるが、その瞬間の直前まで継続していた状態（及び、その瞬間以降に変わることのない状態）を形容詞テ形節が表しているものと考えられる。

（13）　男子は、大納言常行卿と聞こえし。御子二人おはせしも、五位にて典薬助、主殿頭など言ひて、いとあさくてやみたまひにき。

（大鏡・右大臣良相・67，再掲（4c））

5. 形容詞連用形との比較

次に形容詞テ形節の副詞的用法と形容詞連用形の副詞的用法とを比較し、両者の差異について検討する。ここで取り上げる形容詞連用形の副詞的用法とは『CHJ 平安時代編』所収の各資料から得られる形容詞連用形の用例のうち[27]、「て」が下接しない形式（つまり、テ形節でないもの）であり、動詞（または主節）を副詞的に修飾するものである[28]。

[27] 『CHJ 平安時代編』においては「キー」を「品詞-大分類-形容詞」且つ「活用形-大分類-連用形」として検索し、得られた用例のうちカリ活用の連用形を除いてある。これは『源氏物語』における形容詞連用形について検討した進藤（1978:24）が「助動詞に連なるための活用形カリ活用は、述語的構文であるので副詞的修飾であるか述語的用法であるかの調査の対象にはならない」と述べていることを踏まえたものである。

[28] 形容詞連用形の副詞的用法は基本的に下接する動詞を副詞的に修飾するが、後述するように〈評価〉の場合には主節に係り、文全体を副詞的に修飾すると言える。

5.1. 差異の概観

まず、I 類の形容詞テ形節と形容詞連用形の副詞的用法との間の差異について主に修飾のタイプの観点から概観する。既に述べた I 類の形容詞テ形節における修飾のタイプに基づいて、形容詞連用形の用例を整理すると（14）のように〈付帯状況〉、〈空間〉、〈時間〉、〈数量〉のいずれも用例が見られる。

（14） a. 年ごろ、よろづに思ひ残すことなく過ぐしつれどかうしも砕けぬを、はかなきことのをりに、人の思ひ消ち、無きものにもてなすさまなりし御禊の後、一ふしに思し浮かれにし心鎮まりがたう思さるるけにや、…

（源氏物語・葵・36, 〈付帯状況〉）

b. …など思し寄りて、さるべき人して気色とらせたまひけれど、「世のはかなさを目に近く見しに、いと心憂く、身もゆゆしうおぼゆれば、いかにもいかにも、さやうのありさまはものうくなむ」と、…　（源氏物語・早蕨・366, 〈空間〉）

c. さてここちもことなることなくて、忌も過ぎぬれば、京に出でぬ。秋冬はかなく過ぎぬ。年かへりて、なでふこともなし。人の心のことなるときは、よろづおいらかにぞありける。　（蜻蛉日記・上・126, 〈時間〉）

d. 権少将は、大将殿の上の御風の気おはするにことつけて、例の泊りたまへるに、いとものさわがしく、客人など多くおはするほどなれど、いと忍びて御車奉りたまふに、左衛門尉も候はねば、時々もかやうのことに、いとつきづきしき侍にささめきて、御車奉りたまふ。　（堤中納言物語・463, 〈数量〉）

また、先行研究においても指摘のあるように中古語の形容詞連用形の副詞的用法にはこの他に〈結果〉、〈状況〉、〈内容〉、〈評価〉、〈程度〉などの修飾のタイプがあり[29]、修飾の様相はテ形節よりも広い範囲に及ぶものであったことが見受けられる。つまり、I 類の形容詞テ形節は表 3-5 に示したように用例が〈付帯状況〉に偏っていることに加えて連用修飾の分類から見れば、形容詞連用形の副詞的用法に比して限定的であったということが窺える。

この形容詞連用形の副詞的用法について（15）にその一例を挙げ、I 類の形容詞テ形節には見られない〈結果〉、〈状態〉、〈内容〉、〈評価〉、〈程度〉について概観しておく。なお、

[29] 山口（1998）、竹部（2001）、小田（2015）を踏まえている。各研究の整理は第 1 章を参照のこと。

本章は形容詞テ形節を中心的な分析対象とすることから、形容詞連用形の副詞的用法についてそれぞれのタイプの詳細には踏み込まないこととする[30]。

初めに〈結果〉は（15a）のように変化の結果の状態を表すものである[31]。次に〈状況〉は（15b）のように「動作・作用の最中に現れる状態」（矢澤 2000:211）を表すものである[32]。続いて〈内容〉は（15c）のように知覚や判断の内容を表すものであり、主に「思ふ」、「見る」、「聞く」などの動詞が下接するものである。また、〈評価〉は（15d）のように後続する節（または主節）に対する評価を表すものである。最後に〈程度〉は（15e）のように後続する節の程度を表すものである。

（15）a. 病重くなるままに、生くべくもおぼえたまはざりければ、母上に申したまひけるやう、「おのれ死にはべりぬとも、とかく例のやうにせさせたまふな。しばし法華経誦じたてまつらむの本意はべれば、かならず帰りまうで来べし」とのたまひて、…　（大鏡・伊尹・176,〈結果〉）

b. 灯のいと明かきに、御色はいと白く光るやうにて、とかくうち紛らはすことありし現の御もてなしよりも、言ふかひなきさまに何心なくて臥したまへる御ありさまの、飽かぬところなしと言はんもさらなりや。

（源氏物語・御法・509,〈状況〉）

c. 家のありしわたりを見るに、屋もなし人もなし。「いづかたへいにけむ」と悲しう思ひけり。かかる心ばへにて、ふりはへ来たれど、わがむつましき従者もなし。かかれば、たづねさすべき方もなし。（大和物語・百四十八・378,〈内容〉）

---

30 小田（2015:287）は〈評価〉（小田 2015 における「評価誘導」）の形容詞連用形について中古語の用例を挙げ、「この用法は、現代語では形容詞の連用形単独では表しにくく、現代語ではふつう、「…も」「…ことに」のような形で表す（ただし現代語でも「幸先よく～」「運悪く～」のような表現はある）」と指摘している。このような連用修飾に関する古代語と現代語との比較や検討は先行研究においても充分に試みられているとは言えず、今後の研究が俟たれるところである。

31 現代語の情態修飾成分に関する矢澤（2000:205）は「モノの状態を表す修飾成分が被修飾成分である動詞の変化の側面を修飾対象として構成する修飾関係である」と述べており、これを踏まえたものである。

32 矢澤（2000:211）は「結果の修飾関係」と「状況の修飾関係」との差異として前者は（v）や（vi）のように「動作・作用の結果に現れる状態」を表し、後者は（vi）や（vii）のように「動作・作用の最中に現れる状態」を表すと指摘している。

（v）　青い柿が　赤く　色づく　（矢澤 2000:211,（31),「結果の修飾関係」）
（vi）　電球が　白く　点く　（矢澤 2000:211,（32),「結果の修飾関係」）
（vii）　青い海が　赤く　輝く　（矢澤 2000:210,（28),「状況の修飾関係」）
（viii）　電球が　白く　光る　（矢澤 2000:210,（29),「状況の修飾関係」）

d.「よきことなり」とて、「楫取の御神聞しめせ。をぢなく、心幼く、龍を殺さむと思ひけり。今より後は、毛の一筋をだに動かしたてまつらじ」と、よごとをはなちて、立ち、居、泣く泣く呼ばひたまふこと、千度ばかり申したまふ験にやあらむ、やうやう雷鳴りやみぬ。（竹取物語・47,〈評価〉[33]）

e. 前の世にも御契りや深かりけん、世になくきよらなる玉の男御子さへ生まれたまひぬ。いつしかと心もとながらせたまひて、急ぎ参らせて御覧ずるに、めづらかなる児の御容貌なり。（源氏物語・桐壺・18,〈程度〉[34]）

次にⅠ類の形容詞テ形節に下接する動詞と形容詞連用形の副詞的用法に下接する動詞とについてそれぞれ上位 13 語を表 3-7 に示す。表 3-7 においてⅠ類の形容詞テ形節に下接する動詞については表 3-3 の再掲であり、形容詞連用形の副詞的用法に下接する動詞については形容詞に動詞が直接に下接するもののみを対象とした結果を併記した。

表 3-7：下接する動詞（形容詞テ形節・形容詞連用形の各上位 13 語）

形容詞テ形節		形容詞連用形	
過ぐす	35	思ふ	555
有り	25	思す	536
止む(やむ)	23	成る	536
過ぐ	20	覚ゆ	334
見る	19	す	249
おはす	15	侍り	239
成る	11	見ゆ	200
おはします	10	おはします	149
侍り	10	見る	145
居る	9	聞こゆ	138
候ふ	9	言ふ	103
経(ふ)	9	参る	70
ものす	9	ものす	63

[33] 小田（2015:286,（1））は同じ箇所を〈評価誘導〉の例として挙げている。

[34] 小田（2015:292,（1））は同じ箇所を「程度を表す連用修飾」の例として挙げている。なお、上代語における動詞テ形節が副詞的に用いられる場合について吉井（2017）は（ix）のような用例が「地面が裂けるほどに照る日」という意であることから、動詞テ形節の副詞的用法は「程度性」を持つと指摘している。この点で動詞テ形節の副詞的用法と形容詞テ形節の副詞的用法との間には差異がある可能性も示唆される。

（ix）六月の　地副割而（つちさへさけて）　照る日にも　我が袖干めや　君に逢はずして

（萬葉集一〇・一九九五）（吉井 2017:72⑤）

表 3-7 を見ると、形容詞連用形においては「思ふ」、「思す」、「覚ゆ」、「見ゆ」などが上位を占めており、これらは形容詞連用形が〈内容〉を表す場合の用例の多さを反映している可能性がある。また、「成る」や「す」が上位に入っていることについては「～くなる」、「～くする」の形で〈結果〉を表す用例が多いことを示唆するものと見える。

更に表 3-7 において形容詞テ形節に下接する場合と形容詞連用形に下接する場合とでいずれも上位に見られる動詞のうち、特に「見る」と「成る」とについて用例を挙げ、両者の差異を検討する。

まず、「見る」について用例を概観すると、Ⅰ類の形容詞テ形節においては（16a）のように〈空間〉の用例であるのに対して、形容詞連用形の副詞的用法においては（16b）のように〈内容〉に偏っているという特徴が認められる。

（16） a. きたなげなき女、いとをかしげなる子を抱きて、門のもとに立てり。この児の顔のいとをかしげなりければ、目をとどめて、「その子、こち率て来」といひければ、この女寄り来たり。近くて見るに、いとをかしげなりければ、「ゆめ、こと男したまふな。われにあひたまへ。おほきになりたまはむほどにまゐり来む」といひて、「これをかたみにしたまへ」とて、帯をときてとらせけり。

（大和物語・百六十九・412，再掲（3a），〈空間〉）

b. 「ただかくなむ。事そぎたるさまに世人は浅く見るべきを、さはいへど、心得てものせらるるに、さればよとなむ、いとど思ひなられはべる。大将は、公方は、やうやうおとなぶめれど、かうやうに情びたる方は、もとよりしまぬにやあらむ。（源氏物語・若菜下・277，〈内容〉）

次に「成る」について用例を概観すると、Ⅰ類の形容詞テ形節においては（17a）「便りのないままで四月になる」のように〈付帯状況〉の用例であるが、このような用例は形容詞連用形の副詞的用法に見られず、形容詞連用形においては（17b）「病気が重くなるに連れて」ように〈結果〉の用例に限られていることが窺える。

（17） a. なほしもあるべき心を、また今日や今日やと思ふに、おとなくて四月になりぬ。

（蜻蛉日記・中・221，〈付帯状況〉）

b. 病重くなるままに、生くべくもおぼえたまはざりければ、母上に申したまひけ

るやう、「おのれ死にはべりぬとも、とかく例のやうにせさせたまふな。しばし法華経誦じたてまつらむの本意はべれば、かならず帰りまうで来べし」とのたまひて、…　（大鏡・伊尹・176，再掲（15a），〈結果〉）

これらに加えて表3-7において形容詞連用形に下接する動詞としては上位を占めていないものの、I類の形容詞テ形節に下接する動詞として上位に見られる「止む」について検討する。表3-4に示したようにI類の形容詞テ形節においては「止む」は「無し」のテ形節に下接した「無くて止む」の用例が多いが、形容詞連用形の場合にはこれに対応する「無く止む」の用例が見られないという特徴がある。この「無くて止む」は（18）のような〈付帯状況〉の用例であり、「人の噂になることなく（＝ないままで）済ますことができたほどの」の意であると考えられる。

（18）　…ひとへに思し忍びつつ、あはれをも多う御覧じすぐし、すくすくしうもてなしたまひしを、かばかりにうき世の人言なれど、かけてもこの方には言ひ出づることなくてやみぬるばかりの人の御おもむけも、あながちなりし心のひく方にまかせず、かつはめやすくもて隠しつるぞかし、
（源氏物語・須磨・191，〈付帯状況〉）

なお、「止む」と同様に続いていた事態が途絶えることを示す動詞が形容詞テ形節、形容詞連用形それぞれに下接する場合を見ると両者の間に差異が認められる。（19a）、（19b）の「果つ」や（20a）、（20b）の「死ぬ」の場合には形容詞連用形が「すがすがし」、「疾し」、「はやし」などの〈時間〉や「多し」などの〈数量〉を表すものであるのに対して、形容詞テ形節は（19c）、（20c）のように〈付帯状況〉を表すものであると言える。つまり、続いていた事態が途絶えることを示す動詞が下接する場合にI類の形容詞テ形節は「{便りがないままで／後見がいないままで} 死ぬ」などのように〈付帯状況〉に偏るのに対し、形容詞連用形の副詞的用法は「{早く／多く} 死ぬ」などのように〈付帯状況〉以外の修飾のタイプに偏るという傾向があったことが示唆される。

（19）　a. 文人・擬生などいふなることどもよりうちはじめ、すがすがしう果てたまへれば、ひとへに心に入れて、師も弟子もいとどはげみましたまふ。殿にも文作りしげく、博士、才人どもところえたり。　（源氏物語・少女・30，〈時間〉）

b. 晦日の夜、追儺はいと疾くはてぬれば、歯ぐろめつけなど、はかなきつくろひどもすとて、うちとけゐたるに、弁の内侍来て、物語して、臥したまへり。

（紫式部日記・四十四・185,〈時間〉）

c. かくて、つごもりになりぬれど、人は卯の花の陰にも見えず、おとだになくて果てぬ。（蜻蛉日記・下・299,〈付帯状況〉）

（20） a. 比叡の山に、明覚といふ法師の、山ごもりにてありけるに、宿徳にてましましける大徳の、はやう死にけるが室に、松の木の枯れたるを見て、…

（大和物語・二十五・271,〈時間〉）

b. 大和心かしこくおはする人にて、筑後・肥前・肥後、九国の人をおこしたまふをばさることにて、府の内につかうまつる人をさへおしこりて、戦はせたまひければ、かやつが方の者ども、いと多く死にけるは。

（大鏡・道隆・277,〈数量〉）

c. さいふいふ、ものを語らひおきなどすべき人は京にありければ、山寺にてかかる目は見れば、幼き子を引き寄せて、わづかに言ふやうは、「われ、はかなくて死ぬるなめり。かしこに聞こえむやうは、『おのがうへをば、いかにもいかにもな知りたまひそ。（蜻蛉日記・上・130,〈付帯状況〉）

このように修飾のタイプに着目してⅠ類の形容詞テ形節と形容詞連用形の副詞的用法とを比較すると、Ⅰ類の形容詞テ形節は形容詞連用形の副詞的用法よりもその範囲が限定的であったこと、形容詞と動詞との組み合わせによってはⅠ類の形容詞テ形節が専ら〈付帯状況〉を表し、形容詞連用形の副詞的用法が〈付帯状況〉以外を表すという傾向を示す場合があることが明らかになった。

5.2.〈付帯状況〉における形容詞テ形節と形容詞連用形

次にⅠ類の形容詞テ形節において中心的な修飾のタイプである〈付帯状況〉について形容詞連用形との関係を整理する。既に述べたように形容詞と動詞との組み合わせによっては専らテ形節が〈付帯状況〉を表していたという可能性が考えられる。しかし、〈付帯状況〉を表す用例の中では両者の差異が明確ではなく、例えば、表 3-4 に示したⅠ類の形容詞テ形節において形容詞と動詞との組み合わせとして最も多く見られる「無し-過ぐす」は形容

詞連用形の副詞的用法としても用例がある。Ⅰ類の形容詞テ形節の用例を（21a）に示し、形容詞連用形の副詞的用法の用例を（21b）に示す。これを見ると、いずれも「～がないままで過ごす」というような意を表しているものと考えられ、両者の間に明確な違いを見出せないと言える。

（21） a.「人々しくきらきらしき方にははべらずとも、心に思ふことあり、嘆かしく身をもてなやむさまになどはなくて過ぐしつべきこの世と、みづから思ひたまへし。心から、悲しきことも、をこがましく悔しきもの思ひをも、かたがたに安からず思ひはべるこそいとあいなけれ。

（源氏物語・宿木・394，再掲（11b），〈付帯状況〉）

b. 年ごろ、よろづに思ひ残すことなく過ぐしつれどかうしも砕けぬを、はかなきことのをりに、人の思ひ消ち、無きものにもてなすさまなりし御禊の後、一ふしに思し浮かれにし心鎮まりがたう思さるるけにや、…

（源氏物語・葵・36，再掲（14a），〈付帯状況〉）

また、〈付帯状況〉においては存在の意味を持つ動詞が下接する（22）や（23）のような用例においても形容詞テ形節と形容詞連用形との間に明確な差異を認め難い[35]。

（22） a. 若宮のいとうつくしうておはしますを見たてまつりたまひても、いみじく泣きたまひて、「おとなびたまはむを、え見たてまつらずなりなむこと。忘れたまひなむかし」とのたまへば、女御、せきあへず悲しと思したり。

（源氏物語・若菜下・215，再掲（4d），〈付帯状況〉）

b. 御心なむいとよく、かたちもうつくしうおはしましける。

（落窪物語・巻之一・149，〈付帯状況〉）

（23） a. 聞こえさせつることの残りもまだいと多かり。艶にをかしうてはべりし。

（落窪物語・巻之一・92，〈付帯状況〉）

b. 大将も近く参りよりたまひて、御八講の尊くはべりしこと、いにしへの御事、

[35] 存在を表す動詞は「有り」、「居る」、「をり」、「いまそかり」、「はべり」、「おはす」、「おはします」、「候ふ」などがあるが、いずれも当該の用例について本動詞か補助動詞（尊敬の意を含む）かを判別することが難しい場合がある。なお、「居る」は座るという意味の変化動詞であると考えられており（金水 2006 など）、助動詞「たり」が下接した「居たり」の場合に存在を表すものであると言える。

すこし聞こえつつ、残りたる絵見たまふついでに、…

（源氏物語・蜻蛉，〈付帯状況〉）

更に山口（1991，1998）や竹部（2001）によっても指摘されていることとして中古語におけるⅠ類の形容詞テ形節と形容詞連用形の副詞的用法には主節と異なる主語が現れる(24)、(25)のような例が見られる[36]。これらは現代語における従属節分類を示した南（1974，1993）においてはA類の形容詞連用形に見られるとの指摘があるところであり、現代語では（26）のような用例がそれに該当する[37]。

（24） a. 桜は、花びら大きに、葉の色濃きが、枝ほそくて咲きたる。

（枕草子・木の花は・86，〈付帯状況〉）

b. 萩、いと色深う、枝たをやかに咲きたるが、朝露に濡れて、なよなよとひろごり伏したる。（枕草子・草の花は・121，〈付帯状況〉）

（25） a. …いたうけしきばみ横たはれる松の、木高きほどにはあらぬに、かかれる花のさま、世の常ならずおもしろし。例の弁少将、声いとなつかしくて葦垣をうたふ。（源氏物語・藤裏葉・439，〈付帯状況〉）

b. かかるところに、上臈のけぢめ、いたうは分くものか」と、あはめたまふ。「今日のたふとさ」など、声をかしうたふ。夜ふくるままに、月いと明かし。

（紫式部日記・161，〈付帯状況〉）

（26） a. 彼は憤激して，足音も高く部屋を出て行ってしまった。（南 1993:80，(35)）

b. 声高らかに歌っている。（南 1993:80，(36)）

このように主節と異なる主語が現れる副詞的用法は現代語において形容詞連用形のみに見られるものであるが[38]、中古語においては形容詞連用形でもテ形節でも共に見られるものであったと考えられる。この点については第7章において改めて取り上げる。

---

[36] 以下では主節と異なる主語を四角形で囲んで示す。また、山口（1991:40）は（24）の例について（24a）のテ形節は（24b）の連用形とは異なり、「枝ほそくて」が主述関係を持ち、「被語へと直ちに続きにくい意味の切れ目をもつということを、その「て」は示す役割を担っている」と述べている。ただし、このような意味に関する点についての検証は困難である。

[37] 南（1993）において片仮名で表記されている箇所を平仮名に改め、主節と異なる主語を四角形で囲んだ上で（26）に引用した。

[38] なお、現代語においてはそもそもⅠ類の形容詞テ形節が許容されないことに留意する必要がある。

5.3.〈空間〉〈時間〉〈数量〉における形容詞テ形節と形容詞連用形

続いて〈付帯状況〉以外の修飾のタイプにおいてⅠ類の形容詞テ形節と形容詞連用形の副詞的用法との関係について検討する。テ形節と連用形とについて〈空間〉の用例を（27）に示し、〈時間〉の用例を（28）に示し、〈数量〉の用例を（29）にそれぞれ示す。

まず、(27) に示した〈空間〉の用例についてはいずれも「近くで見る」ことを表しているものと考えられる[39]。次に（28）に示した〈時間〉の用例についてはいずれも「あっという間に過ぎる」ことを表しているものと見える。続いて（29）に示した〈数量〉の用例については人が大勢いることを表していると言える。

(27) a.「いざ、近くて見む」とて、岸づらにもの立て、榻など取りもて行きて、下りたれば、足の下に、鵜飼ひちがふ。　（蜻蛉日記・中・262，再掲（6a），〈空間〉）

b. …など思し寄りて、さるべき人して気色とらせたまひけれど、「世のはかなさを目に近く見しに、いと心憂く、身もゆゆしうおぼゆれば、いかにもいかにも、さやうのありさまはものうくなむ」と、…

（源氏物語・早蕨・366，再掲（14b），〈空間〉）

(28) a. かき絶え、慰む方なくて籠りおはするを、世人も、おろかならず思ひたまへることと見聞きて、内裏よりはじめたてまつりて、御とぶらひ多かり。はかなくて日ごろは過ぎゆく。　（源氏物語・総角・331，再掲（8a），〈時間〉）

b. さてここちもことなることなくて、忌も過ぎぬれば、京に出でぬ。秋冬はかなく過ぎぬ。年かへりて、なでふこともなし。人の心のことなるときは、よろづおいらかにぞありける。　（蜻蛉日記・上・126，再掲（14c），〈時間〉）

(29) a. うらやましがりて、「なほいま一つして、同じくは」など言へば、「まな」と仰せらるれば、聞き入れず、情けなきさまにて行くに、馬場といふ所にて、人おほくてさわぐ。　（枕草子・五月の御精進のほど・185，再掲（9b），〈数量〉）

b. 権少将は、大将殿の上の御風の気おはするにことつけて、例の泊りたまへるに、いとものさわがしく、客人など多くおはするほどなれど、いと忍びて御車奉りたまふに、左衛門尉も候はねば、時々もかやうのことに、いとつきづきしき侍にささめきて、御車奉りたまふ。　（堤中納言物語・463，再掲（14d），〈数量〉）

[39] なお、形容詞連用形の場合は「目に近く見る」という形が固定化していた可能性もある。

つまり、いずれもⅠ類の形容詞テ形節と形容詞連用形の副詞的用法との間に明確な差は認められないということになる。

6. おわりに

本章では中古語における形容詞テ形節について副詞的用法と非副詞的用法とを分類する手順を示した上で、副詞的用法と非副詞的用法との比較と形容詞テ形節と形容詞連用形との比較とを実施し、中古語における形容詞テ形節の様相を明らかにすることを試みた。本章において述べたことは次の通りである。

まず、先行研究を踏まえて形容詞テ形節を副詞的用法（Ⅰ類）と非副詞的用法（Ⅱ類）とに分ける手順を示した。その上で『CHJ 平安時代編』を利用して収集した用例についてその量的分布を概観し、中古語においてⅠ類の形容詞テ形節が全体の約 3 割を占めていたことを明らかにした。次にⅠ類の形容詞テ形節は修飾のタイプの観点から〈付帯状況〉、〈空間〉、〈時間〉、〈数量〉の 4 つに分けられることを示し、中古語においては〈付帯状況〉が約 9 割を占めていることから、これが中心的なタイプであったことを指摘した。続いて形容詞連用形の副詞的用法との差異について形容詞連用形はⅠ類の形容詞テ形節の持つ 4 つのタイプ以外にも〈結果〉、〈状況〉、〈内容〉、〈評価〉、〈程度〉などのタイプを持つことを確認し、Ⅰ類の形容詞テ形節の持つ修飾のタイプの範囲が形容詞連用形の副詞的用法の持つそれに比して限定的であったことを述べた。更に形容詞と動詞との組み合わせによってはⅠ類の形容詞テ形節が専ら〈付帯状況〉を表し、形容詞連用形の副詞的用法が〈付帯状況〉以外を表すという傾向を示す場合があることを指摘した。最後に〈付帯状況〉、〈空間〉、〈時間〉、〈数量〉の 4 つのタイプにおいてはⅠ類の形容詞テ形節と形容詞連用形の副詞的用法との間に明確な差異を認め難いことを示した。

なお、本章で取り上げた中古語における形容詞テ形節の副詞的用法について 4 つの修飾のタイプのいずれも現代語では見られなくなっていると言える。つまり、中古語において全体の約 3 割を占めていた副詞的用法は現代語に至るまでの間に衰退したということになる。この点については第 4 章において検討することとする。

付表 A-1：Ⅰ類のテ形節となる形容詞とその用例数

形容詞	用例数	形容詞	用例数	形容詞	用例数
無し	149	いぶせし	2	事騒がし	1
はかなし	19	惚れ惚れし	2	今めかし	1
近し	18	恥づかし	2	短し	1
心細し	16	悲し	2	臭し	1
おぼつかなし	13	嬉し	2	厚し	1
多し	12	覚え無し	2	すくすくし	1
美し	12	幼し	2	物々し	1
をかし	11	長し	2	装ほし	1
つれなし	10	面白し	2	いみじ	1
心安し	9	細し	2	所狭し	1
怪し	8	青し	2	親し	1
浅まし	7	尊し	2	人悪し	1
麗し	7	白し	2	艶めかし	1
やむごとなし	6	香ばし	2	様悪し	1
気近し	5	熱し	2	惚け惚けし	1
良し	5	物騒がし	2	重々し	1
高し	5	濃し	2	ゆかし	1
若し	5	きらきらし	2	よろし	1
悪し(あし)	4	事無し	2	明し(あかし)	1
端近し	4	うらなし	2	温し(ぬるし)	1
めでたし	4	目安し	2	か弱し	1
重し	4	二無し	2	悪し(わるし)	1
甲斐無し	4	心強し	1	術無し	1
悩まし	3	物悲し	1	騒々し	1
わりなし	3	むなし	1	浅し	1
苦し(くるし)	3	物憂し	1	便無し	1
口惜し	3	凄まじ	1	露けし	1
つつまし	3	心苦し	1	折好し	1
心もとなし	3	心慌ただし	1	うるさし	1
小さし	3	心恥づかし	1	公々し	1
ものはかなし	3	嘆かし	1	たどたどし	1
深し	3	憂し	1	いはけなし	1
はしたなし	3	妬し	1	ひとびとし	1
疎し	3	遠し	1	口さがなし	1
少なし	3	間近し	1	人めかし	1
心やまし	2	気遠し	1	あやなし	1
心清し	2	暗し	1		
面無し	2	折悪し	1		

付表 A-2：Ⅰ類のテ形節に下接する動詞とその用例数[40]

動詞	用例数	動詞	用例数	動詞	用例数	動詞	用例数
過ぐす	35	奉る	2	帰り来	1	伝ふ	1
有り	25	絶ゆ	2	重なる	1	積もる	1
止む	23	つく	2	語らふ	1	閉ぢ籠もる	1
過ぐ	20	積る	2	聞き居る	1	問ふ	1
見る	19	とまる	2	聞き通ふ	1	取る	1
おはす	15	成す	2	聞く	1	流す	1
成る	11	乗る	2	聞こえ語らふ	1	眺め明かす	1
おはします	10	果つ	2	聞こえかはす	1	ながらふ	1
侍り	10	隔たる	2	聞こえ馴る	1	泣く	1
居る	9	まかづ	2	競ひ帰る	1	亡くなる	1
候ふ	9	まじらふ	2	消ゆ	1	嘆く	1
経	9	まもる	2	具す	1	ならふ	1
ものす	9	詣づ	2	下る	1	濡る	1
臥す	8	添ひ臥す	2	屈す	1	寝	1
失す	7	明け暮らす	1	食ふ	1	残しとどむ	1
過ぎ行く	7	明け果つ	1	暮らす	1	残り居る	1
参る	7	明け行く	1	籠り居る	1	はじむ	1
出づ	5	遊びあふ	1	探す	1	率る	1
帰る	5	あつかふ	1	咲く	1	引き別る	1
す	5	有り経	1	探る	1	弾く	1
見ゆ	5	有り渡る	1	さすらふ	1	独りごつ	1
明く	4	生き返る	1	候ひあふ	1	昼寝す	1
聞こゆ	4	行く	1	さらす	1	ひれ臥す	1
来	4	急ぐ	1	され走る	1	臥し暮らす	1
暮れ果つ	4	出で立つ	1	騒ぎ立つ	1	臥し悩む	1
持つ	4	いどみあふ	1	騒ぐ	1	隔つ	1
明かす	3	居並む	1	死ぬ	1	参りまかづ	1
歩く	3	言ひ消つ	1	請じおろす	1	待つ	1
うたふ	3	いまそかり	1	過ぐし来	1	まもりたつ	1
着る	3	打ちあはす	1	過ぐし果つ	1	見出す	1
暮る	3	打ちそばむく	1	すぐる	1	見居る	1
御覧ず	3	打ち眺む	1	住む	1	見さす	1
立つ	3	打ち嘆く	1	添ひものす	1	見過ぐす	1
眺む	3	打ち果つ	1	添ふ	1	迎ふ	1
渡る	3	打ち臥す	1	対面す	1	巡る	1
明かし暮らす	2	打ちよむ	1	ただよふ	1	申す	1
明け暮る	2	うつる	1	立ち明かす	1	物語す	1
生ひ出づ	2	生ふ	1	立ち出づ	1	やすらひ	1
言ふ	2	拝む	1	立ち並ぶ	1	よむ	1
入る	2	起き居る	1	立ち別る	1	寄る	1
遅る	2	落ちとまる	1	近づき参る	1	領ず	1
おこす	2	衰ふ	1	聴聞す	1	別る	1
返る	2	仰す	1	散る	1	分け入る	1
かかる	2	思ひ出づ	1	仕うまつる	1	をり	1
籠もる	2	思ひ放つ	1	使ふ	1	誦す	1
経つ	2	思ふ	1	つくろふ	1		

[40] 語形の認定については脚注 18 に述べた通りである。また、ここでは脚注 19 に挙げたⅠ類の形容詞テ形節に下接する形容詞である「多し」と「あやし」とを除いてある。

第 4 章
形容詞テ形節の副詞的用法の変遷

1. はじめに

本章では第 3 章において明らかにした中古における形容詞テ形節の副詞的用法の様相を踏まえて、上代から近世にかけての形容詞テ形節の副詞的用法の変遷を明らかにすることを目的とする。形容詞テ形節の副詞的用法は中古語には用例が見られるものの、現代語においては許容されないことから中世以降に衰退したこともものと考えられる。しかし、この点については先行研究において明らかにされていないという現状にある。

そこで本章では初めに用例調査の手順について述べ（第 2 節）、上代から近世にかけての形容詞テ形節の副詞的用法の量的推移を示す（第 3 節）。次にテ形節となる形容詞と下接する動詞との語彙的特徴の観点からその変遷を記述し（第 4 節）、最後に修飾のタイプに着目して検討する（第 5 節）。

2. 用例調査の手順

本章においては上代から近世までの変遷を明らかにするに当たって基本的に第 3 章と同様の手順によって各時期の形容詞テ形節を副詞的用法と非副詞的用法とに分ける[1]。なお、本章においても第 3 章と同様に副詞的用法を「Ⅰ類」呼び、非副詞的用法を「Ⅱ類」と呼ぶこととする。

---

[1] 基本的に第 3 章と同様の手順を採用するのは各時期の用例を収集して概観したところ、形容詞テ形節の副詞的用法については中古語を対象とした分類方法を用いて他の時期の用例も区分し得ると判断したからである。ただし、第 2 節において述べるように漢文訓読系の資料においてⅡ類を認定する際の評価の副詞に近藤（2007，2012）の挙げていない副詞も含めたという点で第 3 章の手順とは僅かに異なっていることを申し添える。

2.1. 調査対象

本章では上代、中古（和文・説話）、中世前期（和文・説話・軍記物語）、中世後期（和文・謡曲集・抄物・キリシタン資料・狂言）、近世前期（浄瑠璃・浮世草子・噺本）、近世後期（噺本・人情本・洒落本）の各時期の資料[2]を対象に形容詞テ形節の用例を収集する[3]。なお、中古においては第 3 章で取り上げた和文資料の用例に加えて説話（『今昔物語集』）の用例についても検討する。

2.2. Ⅰ類とⅡ類との分類方法

本章におけるⅠ類とⅡ類との分類方法は基本的に第 3 章と同様であるが、改めてその概略を述べる。まず、近藤（2007，2012）の示した（1）の「統語的」な基準に照らして（1a）に該当する場合はⅠ類、（1b）に該当する場合はⅡ類とした[4]。

（1）　近藤（2007）における「A 類」と「B 類」との「統語的環境の差[5]」

a. A 類テ形節：第二種副助詞が下接する。評価の副詞が節内に入らない。

b. B 類テ形節：第二種副助詞が下接しない。評価の副詞が節内に入る。

なお、（1b）の評価の副詞が節内に入るか否かという点について近藤（2007）は評価の副詞として「まことに」のみを挙げているが、本章では中川（2000，2018）を踏まえて

---

[2] 調査資料の詳細は論文末の調査・引用資料に示してある。

[3] 『日本語歴史コーパス』では「キー」を「品詞-大分類-形容詞」且つ「活用形-大分類-連用形」とし、後方共起条件の「キーから 1 語」を「品詞-大分類-助詞」且つ「語彙素-て」として用例を抽出した。また、テキストデータの全文検索を使用した際には「くて」、「うて」、「ふて」の文字列を検索し、目視で形容詞テ形節の用例を抽出した。なお、この方法で文字列を検索した場合、「浅て」（あさうて／あさくて）のように活用語尾が仮名書きされていない用例は抽出できないという点には留意する必要がある。

[4] （1）は近藤（2007:183）における整理に基づいたものである。また、近藤（2007，2012）の研究の詳細は既に第 1 章第 2 節において整理してある。

[5] （1）における「第二種副助詞」とは「のみ」、「さへ」、「だに」などを指し、中古語において格助詞、形容詞連用形、副助詞に下接し（近藤 1995）、「句全体に関係する」タイプの副助詞（小柳 1999b:53）のことである。なお、第二種副助詞の下接は「A 類」であるための十分条件ではあるが、必要条件ではなく、評価の副詞の生起は「B 類」であるための十分条件ではあるが、必要条件ではない。つまり、第二種副助詞の下接も評価の副詞の生起も見られない用例については「A 類」、「B 類」共に存在するということになる。

和文系の資料では「まことに」と「げに」を評価の副詞として認め[6]、漢文訓読系の資料では「きはめて」、「はなはだ」、「すこぶる」、「もとも」を評価の副詞として認め[7]、副詞的用法と非副詞的用法との「統語的環境の差」に関与するものであるとした。

（1）に基づいて用例を整理すると、本章の調査範囲（上代から近世）において（1）に該当する用例が見られたのは中古と中世前期とに限られていた。（1a）に該当する用例は中古においてⅠ類とした全 524 例中 11 例であり[8]、中世前期において同じく全 82 例中 2 例であり、いずれも少数であった。また、（1b）に該当する用例は中古においてⅡ類とした全 1168 例中 3 例であり、中世前期において同じく全 464 例中 2 例であり、Ⅰ類の場合と同様に少数であった[9]。（1a）によってⅠ類とした用例を（2a）に示し、（1b）によってⅡ類とした用例を（2b）に示す。

（2） a. 西面、北面の者ども、面々に、「これを見あらはして高名せん」と心にかけて用心し侍りけれども、むなしくてのみ過ぎけるに、ある夜、かげかたただ一人、中嶋に寝て待ちけるに、例の光物、山より池の上を飛び行きけるに、起きんも心もとなくて、…　（宇治拾遺物語・巻第十二・二十三・394）

b. あけぼのの空になりて、瀬田の長橋うち渡るほどに、湖はるかにあらはれて、かの満誓沙弥が比叡山にてこの海を望みつつ詠めりけん歌、思ひ出でられて、「漕ぎゆく舟の跡の白波」、まことにはかなくて心細し。　（東関紀行・110）

更に（1）に該当しない用例については第 1 章において整理した山口（1998）、竹部（2001）

---

6 中川（2000）を踏まえたこの処理については第 3 章第 2 節（脚注 4）を参照のこと。

7 中川（2018）は中川（2000）を踏まえ、『今昔物語集』における「極度・高度を示す程度副詞」として「漢文訓読語（系）」、「和文語（系）」、「両者に用いられる語」についてそれぞれ調査している。そのうち「漢文訓読語（系）」の副詞としては「オホキニ」、「キハメテ」、「スコブル」、「ハナハダ」、「マコトニ」、「モトモ」が『今昔物語集』（天竺・震旦部、本朝仏法部）に見られることを示している。その上で中川（2018:13）は各副詞の「構文的特徴および意味用法」に基づいた整理によって「命題全体に係る」副詞として「キハメテ」「スコブル」、「ハナハダ」、「モトモ」を挙げている（「マコトニ」は「漢文訓読語（系）」にも「和文語（系）」にも見られる副詞であり、ここでの整理においては「和文語（系）」に含まれている）。本章においてはこの中川（2018）の指摘が近藤（2007）の「評価の副詞」に対応するものと判断し、「きはめて」、「すごぶる」、「はなはだ」、「もとも」も分類の基準に含めた。

8 既に述べたように本章では中古の資料として第 3 章において取り上げたものに加えて『今昔物語集』も対象としていることから、第 3 章において示した用例数とは異なっている。

9 なお、近藤（2012）は中古の資料において（1b）に該当するものとして動詞テ形節のみを挙げていたが、本論文の調査によってこの基準を満たす形容詞テ形節が中世前期の資料にも存在することが確かめられた。

と近藤（2007，2012）との対応関係に照らし、被修飾語または主節に対する意味の観点からⅠ類かⅡ類かを判断した[10]。この手順により、Ⅰ類とした用例を（3a）と（3b）とに示し、Ⅱ類とした用例を（3c）に示す。

（3） a. 今は昔、長門前司といひける人の、女二人ありけるが、姉は人の妻にてありける。妹はいと若くて宮仕へぞしけるが、後には家にゐたりけり。

（宇治拾遺物語・巻第三・十五・128，Ⅰ類）

b. 無量寿院ばかりぞ、そのかたとて残りたる。丈六の仏九体、いと尊くて並びおはします。（徒然草・二十五・102，Ⅰ類）

c. この夜中過ぐるまではこの蛇柱のもとに侍りつるが、明けて見侍りつれば、蛇も見え侍らざりしなり。それにあはせてかかる夢語をし給へば、あさましく恐ろしくて、かくあらはし申すなり。（宇治拾遺物語・巻第四・五・157，Ⅱ類）

なお、以下では「ては」、「ても」のように係助詞が下接するもの、形容詞テ形節で文が終止しているものは「その他」とし、副詞的用法と非副詞的用法との分類の判断に迷うものは「保留」として中心的な考察の対象から除外することとする。また、地の文、会話文、心内話文、和歌などの違いによる明確な差は認められなかったことからこれらについては特に区別しない。

3. 量的推移

続いて用例調査によって明らかになったⅠ類とⅡ類との量的推移を表 4-1 に示す。個別の資料ごとの用例数については付表 B-1、付表 B-2 として章末に示してある[11]。

---

[10] なお、第 3 章第 2 節（脚注 6）と同様に近藤（2007，2012）の検証として（1）によってそれぞれⅠ類、Ⅱ類としたものが主節に対する意味の観点においても当該の分類の例外とはならないという点については確認済みである。

[11] 付表 B-1、付表 B-2 においては「その他」と「保留」とについても用例数を示してある。これを見ると特に中世後期以降には「その他」の用例数が増えていることが見受けられる。実際に「その他」の用例を見ると、その多くは「ては」や「ても」のようにテ形節に係助詞が下接して仮定を表すものであり、このような形式が通時的に増えているという可能性も示唆される。これについては本章の議論の射程を超えていることから措くこととするが、更なる検討の余地があるものと言える。

表 4-1：Ⅰ類とⅡ類との量的推移[12]

	副詞的用法（Ⅰ類）		非副詞的用法（Ⅱ類）		計
上代	6	31.58%	13	68.42%	19
中古	524	30.97%	1168	69.03%	1692
和文	475	30.63%	1076	69.37%	1551
説話	49	34.75%	92	65.25%	141
中世前期	82	15.02%	464	84.98%	546
説話	34	23.61%	110	76.39%	144
和文	44	13.46%	283	86.54%	327
軍記物語	4	5.33%	71	94.67%	75
中世後期	20	4.29%	446	95.71%	466
和文	4	6.78%	55	93.22%	59
謡曲集	2	12.50%	14	87.50%	16
抄物	7	3.08%	220	96.92%	227
キリシタン資料	6	6.82%	82	93.18%	88
狂言	1	1.32%	75	98.68%	76
近世前期	18	3.27%	532	96.73%	550
浄瑠璃	1	1.19%	83	98.81%	84
浮世草子	3	2.17%	135	97.83%	138
噺本	14	4.27%	314	95.73%	328
近世後期	11	2.46%	436	97.54%	447
人情本	0	0.00%	52	100.00%	52
洒落本	0	0.00%	60	100.00%	60
噺本	11	3.28%	324	96.72%	335

表 4-1 を見ると、上代・中古では形容詞テ形節全体の約 3 割を占めていたⅠ類が中世前期においては約 2 割、中世後期以降においては 1 割未満となっており、次第に減少していくという傾向が読み取れる。また、個別の資料の成立順とⅠ類の形容詞テ形節の割合とに着目し、Spearman の順位相関係数を使用して相関分析を実施した結果、個別の資料の成立順とⅠ類の形容詞テ形節の割合との間に強い負の相関があるという結論が得られた[13]

[12] 本章においては第 3 章と同様に水谷（1977:84，注 17）の「国語学の論文では、構成比を示すのに百分率で小数一位まで掲げるのが通例であるが、後日他人が利用する便を考えて、もう一桁下までは出しておいて欲しい。この事と何桁目までを使って議論するかとは別の問題である」という指摘に従い、一律に小数点以下第二位まで示すこととした。ただし、これは小数点以下第二位までを有効数字と看做し、その値に基づいて議論を進めようということを意図するものではない。

[13] 用例数の少ない資料においては割合が極端に高く（或いは低く）なってしまうことから、この相関分析に当たっては形容詞テ形節全体の用例数が 10 例未満である 24 資料を除いた計 37

（$\rho = -.856, p < .001$）。つまり、時期ごとに見ても個別の資料ごとに見ても時代が下るに連れてⅠ類の形容詞テ形節が減少していく傾向が認められるのである。

4. Ⅰ類の形容詞テ形節となる形容詞と下接する動詞

続いてⅠ類の形容詞テ形節となる形容詞と下接する動詞とに着目し、各時期の形容詞、動詞、そしてその組み合わせの数をそれぞれ表 4-2 に示す。

表 4-2：形容詞・動詞の語数とその組み合わせ数[14]（丸括弧内は延べ語数）

	形容詞語数	動詞語数	組み合わせ数
上代	6（6）	5（6）	6（6）
中古	119（524）	190（524）	391（524）
中世前期	30（82）	47（82）	63（82）
中世後期	8（20）	15（20）	17（20）
近世前期	6（18）	15（18）	16（18）
近世後期	6（11）	7（11）	9（11）

表 4-2 を見ると、特に延べ語数（用例数）が大幅に減少する中世前期以降においてテ形節となる形容詞と下接する動詞とのそれぞれの異なり語数がそれ以前の時期と比較して大幅に減少していることが読み取れる。このことはテ形節となる形容詞と下接する動詞とのバリエーションの減少を反映したものである可能性がある[15]。

次にⅠ類のテ形節となる形容詞と下接する動詞とについてその具体的な語例を表 4-3 に示す。表 4-3 において中古と中世前期とについては語数が多く、全てを掲げると煩雑になることから中古の形容詞上位 14 語、動詞上位 17 語、中世前期の形容詞上位 8 語、動詞 12 語をそれぞれ示してある。なお、表中の「…」は以降を省略していることを指すものである。

表 4-3 を見ると、Ⅰ類の形容詞テ形節となる形容詞は中古から近世前期において「無し」

資料を用いた。また、相関分析の結果に対する解釈については竹内（2012）に基づいている。

[14] 中古の動詞数・組み合わせ数には第 3 章第 3 節（脚注 19）において述べたテ形節に下接する「多し」、「あやし」（各 1 例）を含めてある。

[15] 異なり語数の減少が語のバリエーションの減少を反映しているということを立証するためには影浦（2001）の示すような数理的な処理によって延べ語数による影響を加味することが必要になる。本章では数理的な処理に耐え得るほどの用例数に満たないことや時代ごとに一括りにして数理的な処理を行うことの妥当性が検証できていないことから、可能性を指摘するに留めることとする。

が最も多いのに対し[16]、近世後期においては「久し」が最も多いことが読み取れる[17]。また、Ⅰ類の形容詞テ形節に下接する動詞は中古・中世前期において「止む」、「有り」、「過ぐ」、「見る」、「居る」などが上位に見られるのに対し、中世後期以降においてはこのような動詞に顕著に偏る傾向は認められなくなると言える。

表 4-3：Ⅰ類テ形節となる形容詞と下接する動詞[18]（角括弧内は用例数）

	テ形節となる形容詞	下接する動詞
上代	間近し･木高し･遠し・近し・黒し・無し[各1]	見る[2]，逢ふ・有り・差し出す・経(ふ)[各1]
中古	無し[170]，はかなし[21]，近し[18]，心細し[16]，おぼつかなし[13]，美し･多し・甲斐無し[各12]，をかし[11]，つれなし[10]，うるはし・心安し[各9]，あやし[8]，あさまし[7]，…	止む[40]，過ぐす[37]，有り[32]，過ぐ・見る[各22]，おはす[15]，成る[12]，おはします[11]，侍り[10]，居る･失す･候ふ・経・臥す・ものす[各9]，過ぎ行く・参る[各7]，…
中世前期	無し[45]，近し[3]，をかし・若し･清し･悲し・むなし・暗し[各2]，…	有り[9]，止む・過ぐ[各7]，見る・居る[各4]，(明け)暮る・失す[各3]，候ふ･おはす・住む・読む・行く[各2]，…
中世後期	無し[12]，幼し[2]，良し・悪し・嬉し・久し・いやし・少なし[各1]	死ぬ[4]，聞く･おじゃる[各2]，有り･ござる・居る･失す･終はる・過ぐ・老ゆ・(取り)殺す・読む・見る・ながらふ･匂ふ[各1]
近世前期	無し[12]，久し[2]，安し・悪し・多し･(礼儀)正し[各1]	呼ぶ[2]，有り・参る[各2]，呼び寄す･暮らす・打ち暮らす・泊む・行く・居る・見ゆ・帰る・過ごす・見る・(お目に)かかる・仰す[各1]
近世後期	久し[5]，無し[2]，あらけなし･若し･大きい・明るし[各1]	居る[3]，逢ふ・出づ[各2]，入る･有り･侍り・(お目に)かかる[各1]

続いてⅠ類のテ形節となる形容詞と下接する動詞との組み合わせを表 4-4 に示す。

[16] 具体的には中古 170 例（32.44%）、中世前期 45 例（54.88%）、中世後期 12 例（60.00%）、近世前期 11 例（61.11%）である。

[17] 具体的には 5 例（45.45%）である。なお、Ⅰ類の形容詞テ形節の用例数が大幅に減少する中世後期以降の様相や近世前期まで多くを占めていた「無し」の用例数が近世後期になると減少するという点については否定表現や存在表現の変化が関わっている可能性がある。

[18] なお、形容詞、動詞の語形については基本的に『CHJ 平安時代編』が採用している「中古和文 UniDic」に従って認定したが、「名詞＋形容詞」の場合や「動詞連用形＋動詞」の場合にはその限りでない。表 4-3、表 4-4 においては「中古和文 UniDic」の認定においては 1 語でないものの、本章において 1 語と考えるものについて形容詞に上接する名詞や動詞に上接する動詞を丸括弧で括って示してある（例えば、「(礼儀) 正し」や「(明け) 暮る」など)。ただし、これは当該の語を切り離さずに 1 語と考えるべきであると主張するものではなく、単独の場合とは意味的に異なっている場合のあることを考慮した処理であることを強調しておく（その一例として「明け暮る」と「暮る」とを別の語として扱っていることが挙げられる)。また、「中古和文 UniDic」に基づいて認定していることに起因して中古以外の時期についても基本的に中古（和文）における語形を示しているが、その表記は改めた場合がある。

表 4-4 においてはテ形節となる形容詞と下接する動詞とを「-」で結んで表しており、これは例えば、「無し-止む」の場合には「無くて止む」という用例であることを示すものである[19]。

表 4-4：Ⅰ類のテ形節となる形容詞と下接する動詞との組み合わせ（角括弧内は用例数）

上代	間近し-逢ふ・木高し-有り・遠し-見る・近し-見る・黒し-差し出す・無し-経[各1]
中古	無し-止む[19], 無し-過ぐす[18], 無し-有り[13], 無し-成る・甲斐無し-止む[各7], 近し-見る・無し-過ぐ・無し-見る[各6], 無し-過ぎ行く・無し-経・無し-侍り・無し-おはす[各5], …
中世前期	無し-止む[5], 無し-過ぐ・無し-居る[各4], 無し-失す・無し-有り・無し-候ふ[各3], 無し-見る・近し-見る・清し-読む[各2], …
中世後期	無し-おじゃる・無し-死ぬ・幼し-聞く[各2], 無し-有り・無し-ござる・無し-失す・無し-終はる・無し-過ぐ・無し-取り殺す・無し-ながらふ・無し-匂ふ・良し-死ぬ・悪し-死ぬ・嬉し-居る・いやし-老ゆ・少なし-読む・久し-見る[各1]
近世前期	無し-呼ぶ・無し-有り[2], 無し-暮らす・無し−打ち暮らす・無し-行く・無し-居る・無し-帰る・無し-過ぐす・無し-参る・無し-呼び寄す・久し-見る・久し-(お目に)かかる・悪し-見ゆ・安し-泊む・多し-参る・(礼儀)正し-仰す[各1]
近世後期	久し-逢ふ・久し-出づ[各2], 久し-(お目に)かかる・無し-居る・無し-侍り・あらけなし-入る・若し-居る・大きい-有り・明るし-居る[各1]

表 4-4 を見ると、中古・中世前期には「無し-止む」、「無し-過ぐ」、「無し-過ぐす」、「無し-有り」などの組み合わせが他の組み合わせに比して多いことが読み取れる。これに対して中世後期以降には「無し-過ぐす」、「無し-有り」、「無し-居る」などの組み合わせ自体は見られるものの、用例数が少なく、これらの組み合わせに顕著に偏っているような傾向は認められなくなると言える。また、近世前期・近世後期には「久し-逢ふ」、「久し-見る」、「久し-（お目に）かかる」のように、「久し」のテ形節に会うことを表す動詞が下接する組み合わせが目立ち、このような組み合わせがある程度、固定化していた可能性が指摘できる。この点については第 5 節において〈時間〉の用例として改めて述べる。

[19] なお、第 3 章第 3 節（脚注 19）においても述べたように形容詞テ形節と下接する動詞との間には副助詞や係助詞などの助詞に加えて（i）のように名詞が現れる場合もある。
（i）はかなくて日ごろは過ぎゆく。（源氏物語・総角・331）

5. 修飾のタイプ

ここではⅠ類の形容詞テ形節が下接する動詞（＝被修飾語）に対して持つ意味に着目する。これは副詞的用法の下位分類であり、以下ではこれを「修飾のタイプ」と呼ぶ。本章では上代から近世後期にかけての形容詞テ形節の副詞的用法の用例を既に第 3 章において挙げた 4 つの修飾のタイプ（〈付帯状況〉、〈空間〉、〈時間〉、〈数量〉）に分けて検討する。まず、それぞれの修飾のタイプについて各時期の用例を挙げて概観した上で、各時期の用例数を示し、変遷を捉えることとする。

5.1.〈付帯状況〉

まず、〈付帯状況〉を表す用例について見る。第 2 章第 4 節において規定したように本論文では「動作が行われる際の主体、または対象の付帯的な様子を表すもの」を〈付帯状況〉と呼ぶ。本章の調査で見られた上代から近世にかけての〈付帯状況〉の用例を（4）に示す。

（4） a. しきたへの枕をまきて妹と我と寝る夜はなくて年そ経にける
〔敷栲乃枕巻而妹与吾寐夜者無而年曾経来〕　（萬葉集・巻第 11・2615，上代[20]）

b. 若宮のいとうつくしうておはしますを見たてまつりたまひても、いみじく泣きたまひて、「おとなびたまはむを、え見たてまつらずなりなむこと。忘れたまひなむかし」とのたまへば、女御、せきあへず悲しと思したり。
（源氏物語・若菜下・215，中古）

c. 使はれ人みな出で散りて、北の方、若君ばかりなんすごくて住み給ひける。その若君は主殿頭ちかみつといひしなり。この家を一条摂政殿取り給ひて、太政大臣になりて大饗行はれける。　（宇治拾遺物語・巻第六・二・201，中世前期）

d. 義経折節灸治せられて，物の具召されうずる様も無うて御座ったが，鬨の声に驚いてかっぱと起き，鎧取って着，矢掻き負い，御馬参らせいと仰せらるれば，馬に鞍置き，縁の際に引き立て打ち乗って，天竺，震旦は知らず，義経などを手込めにせうずる者は覚えぬ物をと名乗り喚いて駆け給えば，…
〔mononogu meſareôzuru yŏmo nŏte gozattaga〕
（天草版平家物語・巻第四・第二十四・376，中世後期）

[20] 吉井（2017:64①）が副詞的なテ形節としてこの用例を挙げている。

e. 住馴れし國を隔てゝ。難波の濱に通ひ。大方ならぬ浮名も皆そなたから仕掛けた事なり。追付歸るにて有べき。晦乞なくて行道さぞ面白かるべし。

（浮世草子・新色五巻書・418，近世前期）

f. これ権太郎。そちハいかにわかいとて、大酒のんだり、きほひ歩行たり、ちときをつけておとなしくなりやれ。間にハ内にもゐて、御袋の心のやすまるやうにしたがよい。そしていつまでもわかくてゐるものでハない。折／＼ハ後せうも願やれ。（噺本大系第十巻・茶のこもち・38，近世後期）

（4a）は「妹と共寝をすることがないまま（ないままで）年が過ぎてしまった」といった意であり、（4b）は紫の上が若宮を見て悲しむ場面において「若宮がとても美しい様子でいらっしゃるのをご覧になるにつけても」の意である。（4c）は世尊寺という寺で不幸があり、そこにいた使用人たちは去って行き、「北の方と若宮だけがひどく寂しい状態で住んでいた」という場面である。（4d）は「義経はちょうどその時に灸治をされていて、兵具をお召しになる様子もない状態でいらっしゃいましたが」といった意である。（4e）は「いとまごい（休むことを申し出ること）もないままで行く」の意であり、（4f）は「いつまでも若いままでいるわけではない」の意である。

5.2.〈空間〉

次に第 3 章と同様に主に距離を表すものを〈空間〉とした。第 3 章第 4 節においても述べたようにこれは山口（1998:223）が「主句の主語や客語の占める空間、ひいては主句述語の動作や変化が生じる空間のありようを示すもの」を〈空間表示〉としたことを踏まえたものである。本章の調査範囲における上代から中世前期にかけての〈空間〉の用例を（5）に示す。

（5） a. とほくてみれば、はゝきをたてたるやうにてたてり。

（風土記逸文・信濃國・461，上代）

b.「いざ、近くて見む」とて、岸づらにもの立て、榻など取りもて行きて、下りたれば、足の下に、鵜飼ひちがふ。（蜻蛉日記・中・262，中古）

c. 所のありさまを見るに、南は海近くて下れり。（方丈記・20，中世前期）

前後の文脈を踏まえれば、(5a) は「遠くから見ると、箒を立てたように立っていた」という意であり、(5b) は「さあ、近くで見よう」という意であり、(5c) は「その辺りの様子を見ると、南は海が近い所で (海に向かって) 下っている」という意であると考えられる。

5.3.〈時間〉

次に動作・事態の速さに関わる修飾や動作・事態の起こる時期を特定する修飾を担うものを〈時間〉とした。これは山口 (1998:224) における「主句の事態の生起する時間的なありようを示すもの」という説明を踏まえたものである。本章の調査範囲において見られた中古から近世後期にかけての〈時間〉の用例を (6) に示す。

(6) a. かき絶え、慰む方なくて籠りおはするを、世人も、おろかならず思ひたまへることと見聞きて、内裏よりはじめたてまつりて、御とぶらひ多かり。はかなくて日ごろは過ぎゆく。七日七日のことども、いと尊くせさせたまひつつ、おろかならず孝じたまへど、限りあれば、御衣の色の変らぬを、かの御方の心寄せわきたりし人々の、… (源氏物語・総角・331, 中古)

b. あさましがりて、人々立ちこみて見る程に、乾の方より風吹きければ、色々なる塵になんなりて、失せにけり。金の坏より外の物、露とまらず。「いみじき昔の人なりとも、骨、髪の散るべきにあらず。かく風の吹くに塵になりて吹き散らされぬるは、希有のものなり」といひて、その比、人あさましがりける。摂政殿いくばくもなくて失せ給ひにければ、この祟りにやと人疑ひけり。

(宇治拾遺物語・巻第六・二・202, 中世前期)

c. 能も、もと見し風體なれども、物數を極めぬれば、その數を盡す程〔久しし〕。久しくて見れば、また珍らしきなり。(能楽論集・風姿花伝・388, 中世後期)

d. ふるき友だち見まひに来り、久しうて御めにかゝつた。

(噺本大系第六巻・初音草噺大鑑・185, 近世前期)

e. コレかゝ。久しうて御出でなされたに、何ぞ上ましたい。

(噺本大系第九巻・聞上手・64, 近世後期)

（6a）は「あっという間に月日は過ぎていく」という場面であり、（6b）は「少しの時間もなく（＝あっという間に）」の意であり、（6c）、（6d）、（6e）はいずれも「久しぶりに」の意である。なお、近世前期以降は（6d）、（6e）のような「久しうて」のみが〈空間〉の用例として見られ、これが「久しぶりに」の意を表す表現として固定化していた可能性が高いものと見える[21]。

5.4.〈数量〉

最後に〈数量〉は「多し」、「少なし」、「無し」のテ形節によって人や物の数のありようを示すものである。本章の調査範囲において見られた中古、中世後期、近世前期の〈数量〉の用例を（7）に示す。

（7） a. 皆ののしりて、さざとして出でたまふすなはち、あこぎ告げに走らせやりたれば、少将、心地たがひて、例乗りたまふ車にはあらぬに、朽葉の下簾かけて、男ども多くておはしぬ。帯刀馬にてさきだちておこせたまへり。中納言殿には、婿の御供、おとど、北の方の御供、人三かたに男どもわかち参りて、人もなし。

（落窪物語・巻之二・136，中古）

b. …十に成らるる女子八歳の男子を車に取り乗せ，いづくを差すとも無く遣り出だいて，漸うとして雲林院と言う所へ落ち着いて，その辺りの寺に下ろし置いて，送りの者共も皆我が身の捨て難さに暇を請うて返れば：その後は幼けなう幼い人々ばかり残り留まって，又言問う人も無うておぢゃらうずる．北の方の心の内は真に推し量られて哀れな事で御座る．

〔mata coto tô fito mo nŏ te vogiarŏzuru〕

（天草版平家物語・巻第一・第四・34，中世後期）

c. としのほと六十計のちさき男の有徳らしきが、ゑもんさハやかに、四めゆひの紋つけて、なまめける女まじり、若党小者おほくて、此寺に参りけるを、寺前の茶薗より三十余の健なる男、つと走出、門外にて、彼親仁をとつてふせ、…

（噺本大系第四巻・新竹斎・182，近世前期）

---

[21] 中世後期の狂言集などには「久しうで」の形でも見られるが、これはテ形節とは異なるものと見える。

（7a）は「男ども（＝お供の者）が多い状態で（少将が）お出かけになられた」という場面であり、（7b）は「その後は幼い人ばかりが残り留まって、また訪れる人もいらっしゃらない｛状況／状態｝であった」という意であり、（7c）は「若者や年少者がたくさんこの寺に来たところ」の意であると考えられる。

5.5. 各時期の用例数

これらについて各時期の修飾のタイプごとの用例数を表 4-5 に示す。

表 4-5：各時期の修飾のタイプごとの用例数（空欄は用例なし）

	〈付帯状況〉	〈空間〉	〈時間〉	〈数量〉	計
上代	3 50.00%	3 50.00%			6 100.00%
中古	465 88.74%	29 5.53%	16 3.05%	14 2.67%	524 100.00%
中世前期	76 92.68%	3 3.66%	3 3.66%		82 100.00%
中世後期	9 45.00%		8 40.00%	3 15.00%	20 100.00%
近世前期	15 83.33%		2 11.11%	1 5.56%	18 100.00%
近世後期	6 54.55%		5 45.45%		11 100.00%

表 4-5 を見ると、各時期において〈付帯状況〉の占める割合が最も多く、中古に限らず、通時的に見ても〈付帯状況〉が I 類の形容詞テ形節の中心的なタイプであったということが窺える。時期ごとに見ると、特に中古と中世前期とではいずれも〈付帯状況〉が約 9 割を占めている。続く中世後期にはそれまで見られていた〈空間〉の用例が見られなくなり、〈時間〉の用例数が〈付帯状況〉の用例数とほぼ同数であるという点で、それ以前とは様相が異なっていると言える。更に近世前期には再び〈付帯状況〉が約 8 割を占めているものの、近世後期には〈付帯状況〉と〈時間〉とがほぼ同数であることが分かる。これらのことから、修飾のタイプの観点から見れば、I 類の形容詞テ形節の衰退には〈付帯状況〉を表す用例の大幅な減少が関わっているということになる。

なお、近世前期と近世後期の〈付帯状況〉の中には（8）のように「動的な動作・作用そのものの行なわれ方」を表す「様態相修飾」（矢澤 2000）に近い用例がそれぞれ 1 例ずつ含まれている。（8a）は「礼儀正しくおっしゃったことには」、（8b）は「乱暴に中に入ってきた」の意であり、いずれも（4）に挙げた典型的な〈付帯状況〉の用例とは異なるものであるようにも見受けられる。

（8） a. 一休もれいぎたゝしくて仰せけるハ、御心ざしのほと近比しうちやく申て候、
（噺本大系第三巻・一休関東咄（下），近世前期）
b. 女、何のいらへもなく、しやうじを立付、あらけなくて内に入ぬ。
（噺本大系第九巻・口拍子，近世後期）

これらについては用例数が少ないため判断し難いが、Ⅰ類の形容詞テ形節自体が減少していく中で他の形式（特に形容詞連用形）との機能分化において偶発的・散発的に生じた可能性があること指摘しておきたい[22]。

6. おわりに

本章では形容詞テ形節の副詞的用法について上代から近世にかけての用例調査を実施し、その変遷を明らかにすることを試みた。本章において述べたことは次の通りである。

まず、量的推移については上代・中古において形容詞テ形節全体の約 3 割を占めていたⅠ類が時代が下るに連れて減少していくという変遷を明らかにした。また、このⅠ類の形容詞テ形節の衰退に伴い、Ⅰ類の形容詞テ形節となる形容詞と下接する動詞とについても変化が見られることを述べた。次にⅠ類の形容詞テ形節の修飾のタイプに着目してⅠ類を 4 つに分けた上で時期ごとの用例数（割合）を示し、〈付帯状況〉がⅠ類の形容詞テ形節の中心的なタイプであり、〈付帯状況〉を表す用例の大幅な減少がⅠ類の形容詞テ形節の衰退に大きく関わっていることを指摘した。

なお、先行研究においては現代語に見られない形容詞テ形節の副詞的用法（本章における

[22] この「機能分化」とは特に形容詞テ形節と形容詞連用形とが古代語においていずれも副詞的な修飾を担っていたのに対し、形容詞テ形節の副詞的用法の衰退によって形容詞連用形のみが副詞的な修飾を担うようになることを指すものである。この点については第 7 章第 2 節において検討する。

Ⅰ類の形容詞テ形節）が古代語において見られるという点は指摘されていたものの、そもそも上代・中古語においてⅠ類の形容詞テ形節が全体のどの程度の割合を占めていたのかという点、いつ頃からどのように減少・衰退していったのかという点、どのような修飾のタイプを中心的に担っていたのかという点については明らかにされていなかった。本章において通時的な用例調査に基づいて分析したことにより、これらの点について明らかにすることができたと考える[23]。

[23] なお、従来の研究において形容詞テ形節の副詞的用法の変遷が取り上げられてこなかったことの理由の一つには形容詞テ形節の副詞的用法が古代語（上代・中古語）に特有の用法であると考えられていたことが挙げられるのではないか。これに関連して本章では形容詞テ形節の副詞的用法の量的推移（表 4-1）について「上代・中古において形容詞テ形節全体の約 3 割を占めていたⅠ類が時代が下るに連れて減少していく」と説明したが、中世における用例の大幅な減少を踏まえ、形容詞テ形節の副詞的用法が「古代語に特有の用法であった」と解釈することも不可能ではないものと見える。しかし、本章は通時的な用例調査の結果を記述することに重きを置くものであり、中世前期には約 2 割、中世後期以降は 1 割未満ではあるものの、複数の資料において用例が見られる（そして、用例が和歌などに偏っている訳ではない）という実態を述べるに留め、形容詞テ形節の副詞的用法が古代語に特有の用法であったかという議論には立ち入らないこととした。このように形容詞テ形節の副詞的用法が古代語に特有の用法であったかという点については本章において新たに明らかにしたその変遷に基づいて改めて議論されるべきものであると考える。

付表 B-1：資料ごとの用例数[24]（上代～中世前期）

時代区分	資料区分（表4-1）	資料名	Ⅰ類		Ⅱ類		その他		保留		計	
上代		古事記（歌謡含む）	0	0.00%	3	100.00%	0	0.00%	0	0.00%	3	100.00%
		肥前国風土記	0	0.00%	1	100.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	100.00%
		風土記逸文	3	100.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	3	100.00%
		萬葉集	3	30.00%	5	50.00%	2	20.00%	0	0.00%	10	100.00%
		催馬楽	0	0.00%	1	100.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	100.00%
		風俗歌	0	0.00%	2	100.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	100.00%
		神楽歌	0	0.00%	1	100.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	100.00%
中古	和文	竹取物語	2	33.33%	3	50.00%	1	16.67%	0	0.00%	6	100.00%
	和文	古今和歌集	3	27.27%	8	72.73%	0	0.00%	0	0.00%	11	100.00%
	和文	伊勢物語	11	44.00%	11	44.00%	3	12.00%	0	0.00%	25	100.00%
	和文	土左日記	1	20.00%	4	80.00%	0	0.00%	0	0.00%	5	100.00%
	和文	大和物語	13	38.24%	13	38.24%	8	23.53%	0	0.00%	34	100.00%
	和文	平中物語	4	33.33%	7	58.33%	1	8.33%	0	0.00%	12	100.00%
	和文	蜻蛉日記	38	31.93%	61	51.26%	20	16.81%	0	0.00%	119	100.00%
	和文	落窪物語	30	18.87%	110	69.18%	19	11.95%	0	0.00%	159	100.00%
	和文	枕草子	36	32.73%	67	60.91%	7	6.36%	0	0.00%	110	100.00%
	和文	源氏物語	268	26.25%	648	63.47%	102	9.99%	3	0.29%	1021	100.00%
	和文	和泉式部日記	7	19.44%	25	69.44%	3	8.33%	1	2.78%	36	100.00%
	和文	紫式部日記	4	20.00%	14	70.00%	2	10.00%	0	0.00%	20	100.00%
	和文	堤中納言物語	8	24.24%	23	69.70%	2	6.06%	0	0.00%	33	100.00%
	和文	更級日記	9	27.27%	23	69.70%	1	3.03%	0	0.00%	33	100.00%
	和文	讃岐典侍日記	6	31.58%	10	52.63%	3	15.79%	0	0.00%	19	100.00%
	和文	大鏡	35	39.33%	49	55.06%	5	5.62%	0	0.00%	89	100.00%
	説話	今昔物語集	49	32.89%	92	61.74%	8	5.37%	0	0.00%	149	100.00%
中世前期	和文	方丈記	1	50.00%	1	50.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	100.00%
	和文	無名抄	2	13.33%	11	73.33%	2	13.33%	0	0.00%	15	100.00%
	和文	毎月抄	0	0.00%	3	100.00%	0	0.00%	0	0.00%	3	100.00%
	軍記物	平家物語	4	4.94%	71	87.65%	6	7.41%	0	0.00%	81	100.00%
	説話	宇治拾遺物語	34	21.66%	110	70.06%	13	8.28%	0	0.00%	157	100.00%
	和文	海道記	0	0.00%	4	100.00%	0	0.00%	0	0.00%	4	100.00%
	和文	後鳥羽院御口伝	0	0.00%	2	100.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	100.00%
	和文	建礼門院右京大夫集	4	11.76%	29	85.29%	1	2.94%	0	0.00%	34	100.00%
	和文	東関紀行	1	16.67%	4	66.67%	1	16.67%	0	0.00%	6	100.00%
	和文	十訓抄	9	11.69%	63	81.82%	5	6.49%	0	0.00%	77	100.00%
	和文	十六夜日記	2	13.33%	13	86.67%	0	0.00%	0	0.00%	15	100.00%
	和文	為兼卿和歌抄	0	0.00%	2	100.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	100.00%
	和文	とはずがたり	13	9.70%	112	83.58%	9	6.72%	0	0.00%	134	100.00%
	和文	徒然草	12	30.00%	25	62.50%	3	7.50%	0	0.00%	40	100.00%
	和文	連理秘抄	0	0.00%	7	87.50%	1	12.50%	0	0.00%	8	100.00%
	和文	筑波問答	0	0.00%	4	57.14%	3	42.86%	0	0.00%	7	100.00%
	和文	十問最秘抄	0	0.00%	3	75.00%	1	25.00%	0	0.00%	4	100.00%

[24]「資料区分」については表 4-1 において集計に用いた項目を記してある。付表 B-2 も同様である。

付表 B-2：資料ごとの用例数（中世後期～近世後期）

時代区分	資料区分（表4-1）	資料名	Ⅰ類		Ⅱ類		その他		保留		計	
中世後期	和文	風姿花伝	1	5.26%	13	68.42%	5	26.32%	0	0.00%	19	100.00%
	和文	花鏡	0	0.00%	8	88.89%	1	11.11%	0	0.00%	9	100.00%
	和文	遊楽習道風見	0	0.00%	5	100.00%	0	0.00%	0	0.00%	5	100.00%
	和文	拾玉得花	0	0.00%	5	83.33%	1	16.67%	0	0.00%	6	100.00%
	和文	三道	0	0.00%	1	50.00%	1	50.00%	0	0.00%	2	100.00%
	和文	申楽談義	2	9.52%	13	61.90%	6	28.57%	0	0.00%	21	100.00%
	謡曲集	謡曲集（能）	2	10.53%	14	73.68%	3	15.79%	0	0.00%	19	100.00%
	和文	正徹物語	1	14.29%	6	85.71%	0	0.00%	0	0.00%	7	100.00%
	和文	ささめごと	0	0.00%	3	42.86%	4	57.14%	0	0.00%	7	100.00%
	和文	吾妻問答	0	0.00%	1	50.00%	1	50.00%	0	0.00%	2	100.00%
	キリシタン資料	天草版平家物語	6	8.00%	58	77.33%	11	14.67%	0	0.00%	75	100.00%
	キリシタン資料	天草版伊曽保物語	0	0.00%	24	92.31%	2	7.69%	0	0.00%	26	100.00%
	抄物	史記抄	7	1.99%	220	62.68%	118	33.62%	6	1.71%	351	100.00%
	狂言	虎明本狂言集	1	1.00%	75	75.00%	24	24.00%	0	0.00%	100	100.00%
近世前期	浄瑠璃	浄瑠璃	1	0.68%	83	56.85%	61	41.78%	1	0.68%	146	100.00%
	浮世草子	浮世草子（西鶴）	3	1.65%	135	74.18%	39	21.43%	5	2.75%	182	100.00%
	噺本	前期噺本	14	3.60%	314	80.72%	51	13.11%	10	2.57%	389	100.00%
近世後期	人情本	人情本	0	0.00%	52	70.27%	22	29.73%	0	0.00%	74	100.00%
	洒落本	洒落本	0	0.00%	60	74.07%	21	25.93%	0	0.00%	81	100.00%
	噺本	後期噺本	11	2.67%	324	78.64%	73	17.72%	4	0.97%	412	100.00%

第５章
〈付帯状況〉を表す
「形容詞＋まま」の変遷

1. はじめに

本章では現代語において〈付帯状況〉を表す形式の一つである「形容詞＋まま」を取り上げ、その変遷を明らかにすることを目的とする。

現代語における「形容詞＋まま」には、ある状態が保たれた状況で動作が行われることを表す（1）のような用例が見られる。それに対して中古語における「形容詞＋まま」には（1）のような用例は見られず、多くは（2）の「心やましきままに」（「腹が立ってくるのにまかせて」（新編全集現代語訳））のように「ままに」の形で「まま」の上接部分に示される感情や状況に任せて動作が行われることを表す用例であると見受けられる[1]。

（1）　きのうの残りのご飯を冷たいまま食べる。

（久池井 1995:56,（59a），下線は引用者による）

（2）　「いでや、ものげなしと侮りきこえさせたまふにはべるめりかし。さりとも、げに、わが君や人に劣りきこえさせたまふと聞こしめしあはせよ」と、なま心やましきままに言ふ。　（源氏物語・少女・55）

[1] なお、上代語においては「まにま（に）」があり、これが中古語において「ままに」や「まま」の形で専ら用いられるようになったことが関（1965）の用例調査によって明らかになっている（関 1965 よりも早い指摘には富士谷成章『あゆひ抄』や石垣 1955 がある）。そのような背景を踏まえつつ本章においては「ままに」や「まま」を対象とし、用例が見られるようになる中古以降を調査の対象とすることにする。また、中古語においては周辺の形式として「まに」も見られるが、形容詞が上接する用例を見出せていないことから、本章では取り上げない。

つまり、「形容詞＋まま」は現代語において〈付帯状況〉を表す形式であるが、中古語においては〈付帯状況〉を表す用例が見られないことから歴史的な変化の過程で〈付帯状況〉を表すようになった形式であると考えられる。現代語に関する「まま」と古代語に関する「まま」とについてはそれぞれ先行研究や辞典類における記述があるが、両者の差異を明らかにした上でその変遷を調査した研究は未だ見られないと言える。また、先行研究や辞典類の記述において「まま」に動詞が上接する用例の提示が多く、形容詞が上接する場合に関する詳細な議論は進められてこなかったという状況にある。

そこで、本章では先行研究を整理して本章において用法を分類する方法について述べ、それに基づいて現代語と中古語との差異を明確にする（第 2 節）。次に用例調査の結果として「まま」の用例が見られる中古から近世にかけての用例数と近代以降の用例数とを順に示し、その変遷を明らかにする（第 3 節）。更に〈付帯状況〉を表す「形容詞＋まま」の用例が増加したことの背景について検討するために「動詞連用形＋た＋まま」や形容詞テ形節の副詞的用法との関連に着目し、分析する（第 4 節）。

なお、本論文における本章の位置づけについて付言すると、本章における検討は形容詞テ形節の副詞的用法の中で中心的な修飾のタイプであった〈付帯状況〉について同様の事態を表す他の形式の変遷を明らかにすることを目的とするものである。つまり、本章における検討は第 7 章において形容詞テ形節の副詞的用法の衰退について改めて他の形式や他の現象との関連を改めて議論するための準備として位置づけられる。

また、本章においては「まま Ø[2]」、「ままに」、「ままにて」、「ままで」のように「まま」に下接する要素も検討に含めるが、これらの形式の違いを捨象して述べる際には片仮名表記「ママ」を用いることとする。

2.「形容詞＋ママ」の用法分類

2.1. 先行研究

ママについては現代語を対象としたものを中心として先行研究の蓄積があるが[3]、ここでは特に「形容詞＋ママ」の用法分類を考える上で重要となる久池井（1995）と内丸（1999）

[2] この「Ø」は「まま」に助詞が下接しないことを便宜的に示すものである。

[3] 本章で取り上げるもの以外にもママの意味用法を整理した研究としては文化庁（1975）、森田（1980）、谷部（1991）などがあり、「動詞連用形＋た＋ママ」に着目した研究としては三宅（1995，1999）、丹保（2009）などがある。

とを取り上げる。

まず、久池井（1995）は現代語を対象としたママに関する先行研究を整理し、上接語と意味との観点からママの下位分類を試みた研究である。久池井（1995:48）は「従属文を S1、主文を S2」とすると、現代語のママには「S1 ママ S2」、「S1 ママデ S2」、「S1 ママニ S2」の 3 種があることを示した上で「S1 の状態が S2 の事態・事柄に影響を与えているかどうか」によって、ママの意味記述は「その状態や事柄を続けて変えないこと」と「そのときの状態や場合にしたがう。思っているように」との 2 種にまとめられるとしている[4]。更に久池井（1995）はこの 2 種の意味記述と形態との関わりについて、前者は「ままで」が、後者は「ままに」が特徴的であることからそれぞれを「デ系」、「ニ系」と呼んでいる。一方で「まま Ø」の場合は 2 種の意味記述のいずれも見られることから、「デ」と「ニ」とは「ママ Ø」の持つ「二面性を顕在化しているだけである」（久池井 1995:49）と述べている。久池井（1995）における「デ系」、「ニ系」の説明を（3a）と（4a）とにそれぞれ示し、その用例を（3b）と（4b）とにそれぞれ示す。

（3） a. S1 の状態が自然な成り行きとして変化しないでいる時に S2 が起こったというのが、デ系の基本的な意味である。したがって、デ系では S1 と S2 の事態・事柄の間に内容的な関連性はなく、S2 が起こる際に S1 が S2 に対して影響を与えるわけではない。（久池井 1995:50）

b. 玄関に腰を下ろしたまま（で）、靴も脱がずにぼんやりしていた。

（久池井 1995:50,（15），下線は引用者による）

（4） a.「S1 ママニ S2」では、S1 は S2 の事象・事柄の拠り所として位置づけられている。したがって、ニ系の S2 はそれに先だって存在する S1 次第で変化するという性質のものである。S1 が変わればそれにつれて S2 も変わるという点で、S1 が S2 に影響を与えていると言える。（久池井 1995:53）

b. 田中先生は学生たちに町を案内されるままに黙ってついて行った。

（久池井 1995:53,（42），下線は引用者による）

次に内丸（1999）は「名詞の形式化」の観点からママを捉えた研究である。内丸（1999）は「まま（で）」と「まま（に）」とについてそれぞれ上接要素・下接要素の共起制限を

[4] これは、文化庁（1975）におけるママの意味記述を踏まえたものである。

検討している。その上で内丸（1999:31）は特に「まま（で）」について見ると、(5)、(6)のように「「まま（で）」節全体が常に主文の主語あるいは目的語の状態のどちらかを表して」いると述べている。

(5)　a. 花子が帽子をかぶったまま（で）部屋に入った

　　b. 花子が部屋に入った時、花子は帽子をかぶったままだった

（内丸 1999:31，(10)，主文の主語の状態）

(6)　a. 花子が春雨を乾いたまま（で）鍋に入れた

　　b. 花子が春雨を鍋に入れた時、春雨は乾いたままだった

（内丸 1999:31，(11)，主文の目的語の状態）

2.2. 本章における分類

本章では先行研究を踏まえつつ「形容詞＋ママ」を A〈随意〉と B〈付帯状況〉との 2 つに大別した上で B を B1〈主体の付帯状況〉と B2〈対象の付帯状況〉とに分けることとする。なお、以下では「A」、「B」、「B1」、「B2」のみで略記することがある。

2.2.1. A〈随意〉

まず、A〈随意〉は現代語においては（4）に示した久池井（1995）における「ニ系」に概ね対応するものであり、「X ママ Y」における X（感情や状況）に従って Y（動作）が引き起こされるものである。A に該当するものとして中古、近代、現代の資料における用例を（7）にそれぞれ示す。A の典型例としては（7a）、（7b）のように感情を表す形容詞が「まま（に）」に上接する場合であると見える[5]。

[5] なお、第 3 節において表 5-1 として示すように本章の調査対象のうち中古における「形容詞＋ママ」全 47 例は全て「ままに」の形であり、且つ A の用例である。この 47 例について中古における形容詞の意味分類を示している三田村（1967）、東辻（1970）、川端（1976）、吉田（1977）、西尾（1979）、阪倉（1985）、吉田（1995）、安本（2009）などの研究を踏まえ、ママに上接する形容詞の意味ごとに整理すると、「感情」、「否定」、「評価」、「状態」、「感覚」の 5 種に分けられ、「感情」が延べ用例数 47 例中 25 例（53.2%）、形容詞の異なり語数 28 語中 18 語（64.3%）であり、最も多くを占めていると言える。ママの分類と形容詞の意味分類との対応関係については現代語の「形容詞＋ママ」との関わりも含め、改めて検討する余地が残されている。

(7)　a. 草の色さへ見しにもあらずなりゆけば、しぐれむほどの久しさもまだきにおぼゆる風に、心苦しげにうちなびきたるには、ただ今も消えぬべき露のわが身ぞあやふく、草葉につけてかなしきままに、奥へも入らでやがて端に臥したれば、つゆ寝らるべくもあらず。（和泉式部日記・46）

b. …一人はまだ學齢に滿たざれど歩みて來る、此の子畫を描くを好みて常に左の手のみを用ふ、心うれしきまゝに後に母なる人のもとへよみておくりし歌のうち二首（長塚節『長塚節歌集』）

c. 八つの年に母を、十一の年に父をうしなってみなしごとなってから、ほかに身寄りもないままに蟇六夫婦の家の離れに身をよせていた―とはいうものの、ここにはいささかのしさいがある。（栗本薫『栗本薫の里見八犬伝』，2001 年）

なお、現代語においては感情を表す形容詞が「まま（に）」に上接する例のうち、A である確例は見出だし難く、(8) のような作例においても完全に自然であるとは言えない。これに関連して現代語における A は（7c）のように形容詞「ない」が「まま（に）」に上接する場合に限られている可能性も考えられる[6]。

(8)　a. ?? 友人との別れが悲しいままに一晩中泣き明かした。

b. ?? 合格がうれしいままに親に手紙を書いた。

（いずれも作例，A）

2.2.2. B〈付帯状況〉

次に B〈付帯状況〉は（3）に示した久池井（1995）における「デ系」に概ね対応するものである[7]。また、本章においては B に該当する用例の中に内丸（1999）の述べるように「主文の主語（主体）の状態」を表す場合と「主文の目的語（対象）の状態」を表す場合と

---

[6] 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を利用して用例を概観すると、助動詞の「～ないママ」は形容詞の「～ないママ」よりも用例が多く見られるようであり、〈付帯状況〉に分類し得る用例も散見される。久池井（1995）は形容詞の「ない」と助動詞の「ない」とを一括りにして議論しており、その記述を踏まえると、両者に対して同様の分析が可能であると考えられることから、現代語における当該の処理には一定の理があるものと見える。しかし、本章は通時的な変遷を明らかにすることを目指すものであり、通時的に両者を一括して扱うことの妥当性が検証できていないことから、形容詞に限って検討することとする。

[7] 第 2 章第 4 節において規定したように本論文では「動作が行われる際の主体、または対象の付帯的な様子を表すもの」を〈付帯状況〉と呼ぶ。

があることを踏まえて両者を区別し、B1〈主体の付帯状況〉、B2〈対象の付帯状況〉とする[8]。B1 は主体の状態や主体を取り巻く状況を表す（9）のような例であり、B2 は対象の状態を表す（10）のような例である。現代語ではこれらの（9a）、（9c）、（10a）、（10c）をそれぞれ（9b）、（9d）、（10b）、（10d）のように「ままに」に言い換えると、典型的には不自然になるものと見える[9]。

（9） a.　爪が長いまま（で）料理をした。

b. ??　爪が長いままに料理をした。

c.　室温が低いまま（で）薄着で過ごした。

d. ??　室温が低いままに薄着で過ごした。

（いずれも作例，（9a）と（9c）とが B1）

（10） a.　きのうの残りのご飯を冷たいまま食べる。

（久池井 1995:56，（59a），再掲（1），下線は引用者による，B2）

b. ??　きのうの残りのご飯を冷たいままに食べる。

（（10a）の「まま」を「ままに」に置換）

c.　花子がねぎを長いまま（で）洗った

（内丸 1999:32，（18d），下線は引用者による，B2）

d. ??　花子がねぎを長いままに洗った

（（10b）の「まま（で）」を「ままに」に置換）

2.2.3. 形態の対立について

ここで現代語の「形容詞＋ママ」における「まま Ø」、「ままで」、「ままに」の形態の

---

[8] なお、第 2 章第 4 節では先行研究において「主体」に関わる〈付帯状況〉と「対象」に関わる〈付帯状況〉とが別々に扱われてきたのに対し、本論文においては両者を合わせて〈付帯状況〉とすることを述べた。それにも拘わらず、本章において内丸（1999）の指摘に沿って〈付帯状況〉を〈主体の付帯状況〉と〈対象の付帯状況〉とに改めて区別するのは第 3 節で述べるように本章で実施した用例調査では〈付帯状況〉を表す「形容詞＋ママ」が増加していく過程で〈主体の付帯状況〉と〈対象の付帯状況〉とが見られ始める時期が異なっており、両者を区別して捉える方が変遷を記述する上で妥当であると判断したからである。すなわち、両者を区別することは本論文における〈付帯状況〉の規定を覆すものではなく、むしろ、その下位分類としての両者を適切に区別することにより、古代語と現代語との差異や古代語から現代語までの変遷を詳細に明らかにし得るものであると言えるのである。

[9] 特に（9b）の許容度には個人差があるものと考えられる。

対立について整理しておく。この点について久池井（1995:55）は「形容詞型の語[10]」がママに上接する場合は「ニ系デ系の区別をつけ難い」として（11）を挙げ、「～シナイママ Ø」は「「～シタ」という完了形に対する未完了形とも考えられるし、態とは無関係の事象とも受け取ることができる」と述べた上で「形容詞型の語」に下接する「ママ Ø」は「文脈によっては「ママデ」とも「ママニ」とも言い換えることができる」と指摘している。

（11）　一睡もできない｛まま／ままで／ままに｝朝になってしまった。

（久池井 1995:55-56,（55），一部改変[11]，下線は引用者による）

同様に内丸（1999:37）も「まま（で）」と「まま（に）」とのどちらでも解釈可能なものとして（12）を挙げ、「「まま」節の前接要素が動詞の場合、形態的にル形／タ形が現れるか否か、意味的にタ形が過去／結果持続と解釈されるか否かで「まま（で）・まま（に）」の判断ができる。しかし前接要素が形容詞あるいは名詞の場合、形態的にも意味的にも「まま（で）・まま（に）」の判断が難しくなる」と述べている。

（12）　a. 軍事衝突の危機をはらんだ睨み合いが疑問が解決されないまま（で・に）続いた

b. 花子が他人の話をそのまま（で・に）信じた　（内丸 1999:37,（41））

このように形態的な対立は現代語においても必ずしも明確なものではない。これに加えて歴史的に見れば、当然ながら形態自体の変化も想定されることから、本章においては形態の違いを A と B との分類基準には含めないこととする。

2.3. 現代語と中古語との差異

前掲の分類に照らすと、ママの用例が現れる最初期に当たる中古語では専ら本章の冒頭に挙げた（2）や（7a）のような A の用例が見られ、A の用例も B の用例も共に見られる現代語とは異なっていることが明確になる。

このように中古語におけるママが本章における A〈随意〉に偏っていること自体は古代

[10] 脚注 6 にも部分的に述べたように久池井（1995）は助動詞「ない」と形容詞とを合わせて「形容詞型の語」としている。

[11] 久池井（1995）における（55a）、（55b）、（55c）のママを波括弧内に並べて示した。

語に関する言及のある辞典類の記述などからも推し量ることが可能であると考えられる[12]。しかし、辞典類には「形容詞＋ママ」に限った特徴を記載するものはないようであり、その変遷の詳細は解明されていないものと言える。

以上のことから「形容詞＋ママ」について現代語と中古語とを比較すると、両者は B〈付帯状況〉の有無という点で異なっており、通時的にはこの B の用法の成立や拡大に着目する必要があることが鮮明になったと言える。以下では、特に B の用法に着目して「形容詞＋ママ」の変遷を明らかにする。

3. 用例調査

3.1. 調査対象

本章では中古から近代・現代までの資料を対象に「形容詞＋ママ」の用例を収集した[13]。なお、現代語では動詞の場合と異なり、「なかったまま」のように「形容詞＋助動詞」がママに上接する用例は基本的に見られないが[14]、中古・中世前期の資料の中には（13）のように「形容詞＋助動詞」がママに上接する用例が見られるため、これについても検討の対象に含めることとする[15]。

（13）　女も男も、いと下種にはあらざりけれど、年ごろわたらひなどもいとわろくな

---

[12] 辞典類の記述を見ると、本章における A〈随意〉についても下位分類を設けることが可能であると考えられるが、本章では特に B〈付帯状況〉の拡大に着目することから、A〈随意〉については一括して扱うこととする。また、近藤（2013:19-20）は中古語の「ままに」には「ある動作に続いて次の動作が起きることを示す場合と、ある動作が終了してその状態が継続している様子を表す場合との二通りがある」とした上で後者は「ままなり」の形を取ることを指摘している。

[13] 調査資料の詳細は論文末の調査・引用資料に示してある。また、『日本語歴史コーパス』では「キー」を「品詞-大分類-形容詞」且つ「活用形-大分類-連体形」とし、後方共起条件の「キーから 1 語」を「語彙素-侭」として用例を抽出した。これに加えてテキストデータの全文検索などを使用した際には「{き／キ／い／イ}{まま／まゝ／ママ／侭／儘}」の文字列を検索し、目視で「形容詞＋ママ」の用例を抽出した。適宜、「まま／まゝ／ママ／侭／儘」の文字列も検索してある。

[14] ただし、現代語においても僅かながら（i）のような実例が見られる。
（i）主人が忙しかったこともあり、ここ最近交流がなかったまま亡くなってしまったので、保険金といわれてもピンときません。　（Yahoo!知恵袋・2005 年）

[15]『日本語歴史コーパス』では脚注 13 の検索方法に前方共起条件の「キーから 1 語」に「助動詞」を加え、テキストデータの全文検索では基本的に脚注 13 の方法によってママの文字列を検索した上で助動詞が上接するものを目視で収集した。

りて、家もこぼれ、使ふ人なども徳ある所にいきつつ、ただふたりすみわたるほどに、さすがに下種にもあらねば、人にやとはれ、使はれもせず、いとわびしかりけるままに、思ひわびて、ふたりいひけるやう、「なほいとかうわびしうては、えあらじ」、…　（大和物語・一四八・375，A）

本章では「ままØ」、「ままに」、「ままにて」、「ままで」が後に続く動詞を副詞的に修飾する場合[16]を対象とし、連体修飾成分となる「ままの」、「ままなる」などや格成分となる「ままが」、「ままを」、条件を表す「ままには」、「ままでは」などに加えて、ママで文が終止する場合は対象としない。また、「ホシイママ」（擅・縦・恣）は本章の分類では A に該当するものであるが、固定的な表現であることを踏まえて集計や分析から除外した。

なお、以下の分析では既に述べたような形態の対立の曖昧さを考慮し、用法の分類に迷うものについては「A／B1（A とも B1 とも解し得るもの）」、「A／B2（A とも B2 とも解し得るもの）」という項目を設けて集計した[17]。

3.2. 中古から近世まで

まず、中古から近世までの用例調査の結果を概観する。本章の調査範囲において得られた用例の用例数を用法・形態ごとに示したのが表 5-1 である。

表 5-1：中古から近世における「形容詞＋ママ」の用例数（空欄は用例なし）

		A		B1			B2	A／B1		計
		ままØ	ままに	ままØ	ままに	ままにて		ままØ	ままにて	
中古			47							47
中世前期			34		1					35
中世後期		4	23		1	1			1	30
近世前期	上方	3	21	1				1		26
近世後期	上方	4	5	1	1					11
	江戸	1	20					1		22
	その他	1	1							2
計		13	151	2	3	1	0	2	1	173

[16] この「副詞的に修飾する」とは主に動詞を修飾し、「動きや状態の実現のされ方に関わる諸相」（仁田 1983:13）を表すことを指すものである。

[17] なお、内丸（1999）が述べるように「B1／B2（B1 とも B2 とも解し得るもの）」も存在するが、本章の調査では該当する用例が見られなかったことから、立項していない。

表 5-1 を見ると、用法について A は各時期に一貫して用例が見られるのに対して B1 は中世前期から僅かながら用例が見られ、B2 は近世後期まで用例が見られないということが読み取れる。また、形態について A は中古・中世前期では全て「ままに」であるのに対して中世後期以降は「まま Ø」も見られること、B1 は中世においては「ままに」、「ままにて」が見られ、近世においては「まま Ø」も見られることが分かる。中世前期と中世後期とにおける B1 と A／B1 との用例を（14）に示す。

（14） a. なか／＼にうかりしまゝにやみもせば忘るゝほどになりもしなまし
（後拾遺和歌集・巻第十三・恋三・745・和泉式部，B1）

b. 又、生得のいたづら者もあり。是ぞ古人の、「上智と下愚とは移らず」とて、いかにすれども善きは善きまゝにてとほり、悪しきは悪しきまゝにてはつる也。
（筑波問答・83，前者 A／B1，後者 B1）

c. …蟻答云、「御邊は、春秋の營みにはなに事をかし給ひけるぞ」といへば、蝉答云、「夏秋身の營みとては、木末にこたふばかりなり。その音曲に取り亂し、ひまなきまゝにくらし候」といへば、蟻申けるは、「今とてもなど歌ひ給はぬぞ。謠長じてはつゐに舞とこそは承はれ。いやしき餌食をもとめて、何にかはし給ふべき」とて、穴に入ぬ。（伊曾保物語下・第一・蟻と蝉の事，B1）

（14）に挙げた用例についてママの修飾先となる動詞（点線部）に着目すると、B1 である（14a）「止む」、（14b）「果つ」、（14c）「暮らす」は前二者が終了を表す動詞であり、いずれもママで表された状況が継続することを示していると言える[18]。また、（14b）「善きまゝにてとほり」は A／B1 としたが、これは動詞「通る」を「過ごす」という意であると捉える場合には B1 に該当し、「世間の人々に認められる」という意であると考える場合には A に該当することから一意に定め難い例であると判断した。

次に近世前期と近世後期とについて、表 5-1 では上方・江戸・その他を区別して示しているが地域差は見出だし難い[19]。近世の B1 の用例を（15）に示す。

---

[18] 中世の B1 について考える上では、『古語大辞典』（1983 年、小学館）が「まま【儘】」の項に「④事を終えたときの状態が持続していて変化のないことを表す。…（た）なりに。…（た）まま。」を立て、（14a）の例を挙げていることも参考になる。

[19] なお、廣坂（2001:94）は近世後期に成立した〈付帯状況〉の「動詞連用形＋た＋ママ」が「江戸で先に使われ出した可能性もある」と指摘している。

（15）　凡人とうまれて、佛菩薩の教の廣大なるをもしらず、愚なるまゝ、慳しきまゝに世を終るものは、其愛慾邪念の業障に攬れて、或は故の形をあらはして恚を報ひ、或は鬼となり蟒となりて祟りをなすためし、往古より今にいたるまで筭ふるに尽しがたし。　（雨月物語，近世後期，B1）

（15）では波線部のように「愚なる」（形容動詞）が「まま」に上接し、「慳しきまゝに」と共に「世を終る」を修飾していることから、このような場合の「まま Ø」と「ままに」との間に大きな差異は無かったものと考えられる。

3.3. 近代以降

続いて近代以降の用例調査の結果を概観する。得られた用例の用例数を用法・形態ごとに示したのが表 5-2 である[20]。なお、表 5-2 では西暦を概ね 10 年ごとに区切って示し、形態の差を便宜的に「Ø」、「に」、「にて」、「で」と略記する。

表 5-2：近代以降における「形容詞＋ママ」の用例数（空欄は用例なし）

	A		B1			B2				A／B1		A／B2		計
	Ø	に	Ø	に	で	Ø	に	にて	で	Ø	に	Ø	に	
1872								1						1
1891-1900	10	12	2							2		1		27
1901-1910		13	5		2	2	4							26
1911-1920	3	10	1	1			4				1			20
1921-1930	2	7	6	4		1								20
1931-1940	2	11	4	2		2	4		3	2	2			32
1941-1950	3	7	2	1		1	1		3				1	19
1951-1960	2	8	3		1						1		1	16
1981											1			1
計	22	68	23	8	3	6	13	1	6	4	5	1	2	162

表 5-2 を見ると、用法について A は近世以前と同様に用例が一貫して見られること、B1

[20]『青空文庫』所収の資料（翻訳作品は除く）における時期の区分は初出年に従い、初出年の明らかでないものは除外した。なお、除外したものを含めても B の用法が拡大する時期などに関する本章の結論が揺るがないことは確認してある。

は 19 世紀後半から継続的に用例が見られるようになること、近世以前は見られなかった B2 は 1872 年以降に見られ、A、B1 に比べると用例数は多くないものの、20 世紀に入ると用例数が増えることが読み取れる[21]。また、形態について A は「ままに」の用例数が「まま Ø」の用例数の約 3 倍であること、B1 は「まま Ø」の用例が多く、近世以前には見られなかった「ままで」が 20 世紀に入ってから確認されること、B2 は「まま Ø」、「ままに」、「ままにて」、「ままで」が見られるが、そのうち「ままに」が最も多く、現代語で B2 の典型とされる「ままで」が見られるのは 1930 年代以降であることが読み取れる。近代以降における B2 の用例を（16）に、B1 の用例を（17）に示す[22]。

（16） a. 隣の人の力はもとより力士よりも弱かるべけれども、弱ければ弱きままにてその腕を用い自分の便利を達して差しつかえなきはずなるに、いわれなく力士のために腕を折らるるは迷惑至極と言うべし。

（福沢諭吉「学問のすすめ」1872 年，B2）

b.「俺も飯でも食おうかえ」勘次は風呂敷包から弁当の残を出して冷たいままぷすぷす噛った。 （長塚節「土」1910 年，B2）

（17） お春は一人窓に寄掛つて、煦々する長閑な戸外を見てゐた。目の下は直ぐ藍染川で、泥溝の下水に櫻の花瓣が白いまゝで浮いて流れる。

（小栗風葉「轉々」『太陽』第 15 巻第 2 号 1909 年，B1）

4.〈付帯状況〉を表す「形容詞＋ママ」の増加の背景

ここでは前掲した「形容詞＋ママ」の用例調査の結果を踏まえ、①なぜ中古～近世においては〈付帯状況〉を表す「形容詞＋ママ」の用例が少なかったのかという点と②近代以降に〈付帯状況〉の用例が多く見られるようになったことは他の形式や現象と関わりがあるのかという点とを検討し、〈付帯状況〉を表す「形容詞＋ママ」の用例が増加したことの背景について分析していく。

---

[21] 1980 年代以降については B の用例が安定して広く用いられているのかという点や A の用例が縮小しているのかという点に関しての調査が新たに求められるところであり、これについては今後の課題とする。

[22] （16a）、（16b）は『青空文庫』、『CD-ROM 版新潮文庫明治の文豪』所収の本文に従って引用しており、初出となる資料とは表記などが異なることを申し添える。

まず、①なぜ中古〜近世においては〈付帯状況〉を表す「形容詞＋ママ」の用例が少なかったのかという点について検討する。これについて特に中古においてはママの前身とされる「まにま（に）」の意味・用法と関わっているものと考えられる。具体的には上代から中古にかけてのママと「まにま（に）」とを扱った研究として久永（1960）や関（1965）などがあり、これらの研究においては上代の資料に見られる〈随意〉の「まにま（に）」が中古の資料では「まま（に）」の形で現れることが示されている。このことから、特に中古では「形容詞＋ママ」の用例においても意味・用法が「まにま（に）」と同様である――A〈随意〉のみが見られる――ものと考えられる。また、中世〜近世においても専ら A の用例が見られ、B の用例が僅かしか見られないのはママの中心的な意味・用法が中古から大きく変化しておらず、(14) のように下接する動詞によって主体の状態や主体を取り巻く状況を表すものと解釈し得る場合があるのみに留まっているからであると考えられる。

これに加えて第 3 章、第 4 章において述べたように特に中古においては形容詞テ形節が〈付帯状況〉を表す形式として存在しており、(18a) のように〈主体の付帯状況〉を表すものも、(18b) のように〈対象の付帯状況〉を表すものも共に見られる[23]。

(18) a. …つひに、いささかも、とりわきてわが心寄せと見知りたまふべきふしもなくて過ぎたまひにしことを、口惜しう飽かず悲しう思ひ出できこえたまふ

（源氏物語・匂兵部卿・21,〈主体の付帯状況〉）

b. 行事二人に、五十人づつ分かたせたまひて、僧座せられたる御堂の南面に、鼎を立てて、湯をたぎらかしつつ、御膳を入れて、いみじう熱くてまゐらせ渡したるを、思ふにぬるくこそはあらめと、僧たち思ひて、…

（大鏡・道長・400,〈対象の付帯状況〉）

つまり、〈付帯状況〉を担う形式として形容詞テ形節が存在していたことから「形容詞＋ママ」が〈付帯状況〉を表すものへと拡大していなかった可能性が示唆されるということである。

次に②近代以降に〈付帯状況〉の用例が多く見られるようになったことは他の形式や現象と関わりがあるのかという点について検討する。これについては「動詞連用形＋た＋ママ」

[23] ただし、中古においても〈付帯状況〉を表す形容詞テ形節は（18a）のような〈主体の付帯状況〉を表すものが多数を占め、(18b) のような〈対象の付帯状況〉を表すものは僅かであるという点にも留意する必要がある。

（以下、「タママ」）の成立と〈付帯状況〉を表す形容詞テ形節の衰退とが関わっているものと考えられる。

まず、〈付帯状況〉を表すタママの成立について論じた廣坂（2001）は「ソノママ」の用法拡大に着目している。廣坂（2001）は中古における「ソノママ」に（19a）のような「存在維持用法」があることを示した上で中世後期～近世前期（『虎明本狂言』）にはこの「存在維持用法」に加えて（19b）のような「動作維持用法」の「ソノママ」が見られることを述べている[24]。その上で近世においても同様に（19c）のような「動作維持用法」の用例が見られることを踏まえ、「ソノママ」が用法を拡大したことを指摘している[25]。更にその影響を受けて近世後期頃に（19d）のような〈付帯状況〉のタママが見られるようになったと考えられると結論づけている。

（19） a. いみじうあはれにおぼえければ、兒もかへして、そのまゝになむゐられにしと

（堤こ[26]373-11）（廣坂 2001:92,（24））

b. それならは、不断おがみやるのに、せいたかくは、あをのひておがむもわるからふず、又さがつておがむもこしがいたからふほどに、する／＼と立よつて、そのまゝおがむやうに、人だけにつくつておまらせう

（狂中，仏師 355-14）（廣坂 2001:94,（38））

c. 下人は請取腰かゞめそのまゝ内に入にける

（堀川波鼓 734）（廣坂 2001:94,（41））

d. 床おさまつて、五ツぶとんのうへに、はをりをとつたまゝよこになり、手あぶりの中へ、火ばしのさきで何か書て居る所へ

（傾城買四十八手 390）（廣坂 2001:94,（42））

このように「ソノママ」が用法を拡大したことによって〈付帯状況〉のタママが見られる

---

[24] 廣坂（2001）は「存在維持用法」について「「そのままそこにいる」という意味」（廣坂 2001:92）であるとし、「動作維持用法」について「存在維持用法」との違いとして「ソノママに続く動詞が存在のアル・イルや「そのままにしておく」という意味のオクではなく、運動の動詞になっている」（廣坂 2001:94）と説明している。

[25] なお、廣坂（2001:95）はその前段階として中古において「「サナガラ」で表現されていた意味的範囲」を「ソノママ」が「侵食」したことを指摘している。また、廣坂（2001:89）は（19d）のようなタママの用法を「付帯用法」と呼び、「タママ節が主節の事態に対して、付帯的な状況を表現するものであり、基本的に二つの事態が空間的同時性をもつ」と説明している。

[26] この「堤こ」とは『堤中納言物語』における「このついで」という巻名の冒頭 1 字をそれぞれ抜き出して組み合わせたものと見える。

ようになったという廣坂（2001）の考察を踏まえると、本章で取り上げてきた「形容詞＋ママ」については〈付帯状況〉を表す用例が増える時期が近代以降であることに鑑みて〈付帯状況〉を表すタママの成立に影響を受けたのではないかと考えられる。

なお、廣坂（2001）は〈付帯状況〉について主体と対象とを分けておらず、本章における〈主体の付帯状況〉に該当する用例のみを挙げているが、試みに本章の調査範囲におけるタママを見てみると、(20) に示す 1874 年の資料に見られる例が〈対象の付帯状況〉を表す初出例であった。すなわち、「形容詞＋ママ」もタママも B1→B2 の順で用例が見られるようになるという点で共通しているという可能性がある[27]。

(20)　今斯う開化の世と成ては。理にかなはぬ事は一トロにいひ破られ。人の笑ひ草となる事故。何事にもこゝろを用ひて。行住座臥の事遊び事に至るまで。人にいはれて。言訳に詰るやうの事のないやうにせにやならぬ。譬へば。真ツ直ぐなものを用ひてさしつかえのない所へ。**曲りくねつた節だらけなものを**つかひ。奇麗にすればなるものを。よごれたまゝで**置く**といふやうな事がわるい事。夫も求めずしひず。　（加藤祐一「文明開化」・1874 年，B2）

更にこのように〈付帯状況〉を表すタママの成立に影響を受けて〈付帯状況〉を表す「形容詞＋ママ」の用例が増加したと考えると、既に述べたような形容詞テ形節の副詞的用法の衰退によってそれが可能になる状況が（間接的に）整ったと捉えることができる。特に中古において形容詞テ形節の副詞的用法が〈付帯状況〉を表していたものの、これが中世から近世にかけて衰退したことによって〈付帯状況〉を表す形式に空白ができたと考えられる[28]。これにより、〈付帯状況〉を表す「形容詞＋ママ」の用例が増加する――〈付帯状況〉を表す形式として定着する――ための状況が整ったと見ることが可能なのではないか。この点に関する補足として「形容詞＋ママ」が〈付帯

[27] 本章の調査範囲においては「形容詞＋ママ」の B2 の初出例（16a）と（20）とがほぼ同時期であり（厳密には（20）のタママの方が遅れており）、〈対象の付帯状況〉に限った場合の両者の影響関係については現時点では明らかでない。

[28] 第 3 章、第 4 章において述べたように形容詞テ形節の副詞的用法が持つ修飾のタイプは形容詞連用形も有しているものであり、時代が下っても形容詞テ形節の副詞的用法と同様の用例が形容詞連用形にも見られることを確認している。しかし、現代語を対象とした情態修飾成分に関する先行研究を踏まえれば、〈付帯状況〉を表す形式としては形容詞連用形よりも「形容詞＋まま」や「～で」などの方が典型的であると考えられることから、〈付帯状況〉を表す形容詞テ形節が衰退した後にその空白をどのような形式が埋めたのかという点については更なる検討が求められるところである。

状況〉を表していると解釈し得る中世の用例である（21）を見ると、「止む」、「果つ」という動詞が下接していることが分かる。これは第 3 章第 3 節、第 4 章第 4 節で示したように中古・中世前期の形容詞テ形節の副詞的用法に下接する動詞においても多く見られたものであり、両者は近接していたものと捉えられる。

（21） a. なか／＼にうかりしまゝにやみもせば忘るゝほどになりもしなまし

（後拾遺和歌集・巻第十三・恋三・745・和泉式部，再掲（14a），B1）

b. 又、生得のいたづら者もあり。是ぞ古人の、「上智と下愚とは移らず」とて、いかにすれども善きは善きまゝにてとほり、悪しきは悪しきまゝにてはつる也。

（筑波問答・83，再掲（14b），前者 A／B1，後者 B1）

なお、表 5-1、表 5-2 に示したように〈付帯状況〉を表す「形容詞＋ママ」の用例は中世から近世にかけては僅かに見られる程度に留まっており、用例の増加は主に近代以降に見られるものである。これを第 4 章において明らかにした形容詞テ形節の副詞的用法の変遷と重ね合わせて見ると、〈付帯状況〉を表す形容詞テ形節の用例が非常に少なくなる近世においても〈付帯状況〉を表す「形容詞＋ママ」は勢力を拡大しているとは言えない[29]。この点で形容詞テ形節の副詞的用法の衰退と〈付帯状況〉を表す「形容詞＋ママ」の増加との間に（直接的な）因果関係は見出だし難いものの、前者の変化によって生まれた形式の空白が後者の変化を促す一因になったという可能性があるのではないかと考えられる。

5. おわりに

本章では「形容詞＋ママ」について取り上げ、通時的な用例調査を実施してその変遷を明らかにすることを試みた。本章において述べたことは次の通りである。

まず、現代語の「形容詞＋ママ」には〈随意〉と〈付帯状況〉とがあるのに対して中古語の「形容詞＋まま」には〈随意〉の用例しか見られないという点で両者が異なっていることを指摘した。次に通時的な用例調査の結果を踏まえ、中世前期から僅かに見られる

[29] 近世において形容詞テ形節、「形容詞＋ママ」以外のどのような形式が同様の事態を表していたのかという点については更に検討する余地がある。

〈主体の付帯状況〉も近世以前には見られない〈対象の付帯状況〉も近代以降に用例数が増加することを明らかにした。また、このように〈付帯状況〉を表す「形容詞＋ママ」の用例が増加したことの背景として〈付帯状況〉を表す「動詞連用形＋た＋ママ」の成立に影響を受けた可能性があることを指摘した。更に中古において〈付帯状況〉を表していた形容詞テ形節が衰退し、〈付帯状況〉を表す形式に空白が生まれたことによって〈付帯状況〉を表す「形容詞＋ママ」の用例が増加するための状況が整ったと捉えられることを述べた。

第６章
〈付帯状況〉を表す
非対格自動詞節における変化

1. はじめに

本章では古代語において形容詞テ形節の副詞的用法と同様に〈付帯状況〉を表す形式の一つである非対格自動詞[1]のテ形節・ツツ節に着目し、特に［対象主語―非対格自動詞］という構造を取る用例について上代から中世にかけての様相を明らかにすることを目的とする。

古代語においては（1）に示す「袖ひちて」、「おもて赤みて」のような［対象主語―非対格自動詞］という構造を取るテ形節の用例が見られる[2]。それに対して現代語においては「袖を濡らして水を掬う」、「顔を赤らめて拝見している」のように［目的語―他動詞］という構造を取る方が自然であると言える。このような古代語と現代語との差異については既に佐伯（1958）、山口（1998）、北原（2006）、佐佐木（2016）、吉井（2017）などの各研究に指摘のあるところである。

（1） a. 袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくらむ
（古今和歌集・巻第一・春歌上・2・紀貫之）

b. いともかしこき方とは、これをも言ふべかりけりと、ほほ笑みて見たまふを、命婦おもて赤みて見たてまつる。（源氏物語・末摘花・300）

---

[1] 本章における「非対格自動詞」は格助詞「ガ」に関する通時的な研究である山田（2010）に倣い、影山（1993:42）の「「ころぶ，生じる，浮かぶ」のような非意図的事象を表す自動詞」という記述に従うこととする。

[2] 以下では主節と異なる主語を四角形で囲んで示す。

つまり、古代語における〈付帯状況〉を表す非対格自動詞テ形節は現代語に至るまでの間に［対象主語―非対格自動詞］という構造を取らなくなったということになる。しかし、その変化の過程について検討した研究は見受けられず、その詳細は明らかになっていないという現状にある。また、〈付帯状況〉を表すツツ節については（1）に見たテ形節と同様に［対象主語―非対格自動詞］という構造を取る用例が上代・中古の資料に見られるのかという点に関して先行研究に明確な指摘が見当たらず、節内の構造に関する議論は試みられてこなかったと言える。

そこで本章ではこの点に関連する先行研究を整理し（第 2 節）、用例調査に基づいて〈付帯状況〉を表す非対格自動詞のテ形節・ツツ節の節内に対象主語が現れる用例が見られなくなる時期を明らかにする（第 3 節）。更に当該の変化の位置づけを検討するために形容詞テ形節の副詞的用法と日本語における活格性の喪失とを取り上げ、当該の変化との関わりについて述べる（第 4 節）。

なお、本章の議論においては動詞について特に自動詞と他動詞との分類が必要になることから、この点について補足しておく。古代語においては主語や目的語は専ら無助詞によって示されることから（金水 2011）、格助詞に基づいて自動詞と他動詞とを区別することは困難である。例えば、（2）においては（2a）の「落つ」に対する（無意志の）主語に当たる「烏帽子」も（2b）の「落とす」に対する目的語に当たる「冠」も無助詞であることが分かる。

（2） a. その時ぞ通清あわて騒ぎて、前より転び落ちける程に、**烏帽子**落ちにけり。いといと不便なりけりとか。好きぬる者は、少しをこにもありけるにや。

（宇治拾遺物語・巻第十五・五・469）

b. 車、桟敷の者ども笑ひののしるに、一つの車の方ざまに歩み寄りていふやう、「君達、この馬より落ちて**冠**落としたるをば、をこなりとや思ひ給ふ。

（宇治拾遺物語・巻第十三・二・400）

これに加えて小田（2015）も述べるように古代語では（3）の「絶ゆ」のように自動詞（と看做されている語形）が「を」を取ることが多くあり、これも格助詞による自動詞と他動詞との区別を困難にしている一因であると言える。

(3)　　由良の門を渡る舟人梶を絶え行方も知らぬ恋の道かな

（百人一首 46・曾禰好忠）（小田 2015:47,（5））

一方で、古代語の自動詞と他動詞との間には明確な形態的対立があり、金水（2011:99）においても「多くの和語動詞で自動詞と他動詞の形態的対立があるので，格助詞に区別がなくても，主語か目的語かという判定にはさほど困難がないのである」と指摘されている[3]。これを踏まえ、本章では当該の動詞が自動詞であるか他動詞であるかという点について形態的な対立を根拠として判断することとする。これに際しては『日本国語大辞典第二版』を始めとする古代語に言及のある辞典類や個別の語に関する先行研究などを参照する。

また、本章では自動詞における唯一の項を「主語」と呼び、その中でも非意志的な自動詞（非対格自動詞）の項を「対象主語」と呼び、意志的な自動詞（非能格自動詞）の項を「動作主主語」と呼び分ける場合がある。また、他動詞における動作主を示す項を「動作主主語」と呼び、動作の受け手を示す項を「目的語」と呼ぶことがある[4]。

2. 先行研究

ここでは本章において取り上げる（1）のような用例に関して言及のある先行研究を順に概観する。初めに富士谷成章の『あゆひ抄』における記述とそれに関連する佐伯（1958）、北原（2006）の研究を挙げ、次に中古語のテ形節に関する山口（1998）の研究を取り上げ、続いて上代語に関する佐佐木（2016）、吉井（2017）の研究を見ていくこととする。

まず、（1）に示したようなテ形節は富士谷成章『あゆひ抄』において「しるしのて」とされているものであり、「「火をちらして戦ふ」「腹をよりて笑ふ」など言ふに同じ。「原注 6 土さへ裂けて照る日」「原注 7 思ひ出づるぞ消えて悲しき」などをはじめとして後世にはことに多し。〔つつ〕にも通ふ心あり。」（中田・竹岡 1960:313）と述べられている[5]。また、これ

---

[3] 上代語における「自動詞と他動詞との対立」について取り上げた釘貫（1990:244）はこの対立を「（Ⅰ）活用の種類による自他対応」、「（Ⅱ）語尾による自他対応」、「（Ⅲ）語幹の増加と語尾付接による自他派生」の 3 つに分けている。釘貫（1990:244）がそれぞれに該当する語例として挙げているのはそれぞれ（Ⅰ）「しる（知）四自―しる下二他」、（Ⅱ）「なる（成）自―なす他」、（Ⅲ）「ある（荒）自―あらす他」などである。

[4] これは中古初期の資料である『土左日記』と『大和物語』とを対象として無助詞名詞句の振る舞いについて考察した竹内（2012）の研究などを参考にしたものである。なお、竹内（2012）については第 4 節において詳しく述べる。

[5] これについて中田・竹岡（1960:313, 注 5）は「「……ノ状態デ」「……センバカリニ」というような口語に当てている〔て〕である」と補足している。

に関連して（1）のような古代語のテ形節が後世において他動詞を用いて表現されるという点については佐伯（1958）、北原（2006）においても指摘されているところである。特に佐伯（1958）は『古今和歌集』における「声絶えずなけやうぐひす」、「稲葉そよぎて秋風の吹く」や『萬葉集』における「裳の裾ぬれてあゆかつるらむ」をその一例として挙げ、後世であれば、それぞれ「声絶やさず…」、「稲葉そよがせ…」、「裳裾ぬらして…」と言うところであると指摘している。

続いて山口（1998:231）は中古語のテ形節（山口 1998 における「「て」連用句」）には「主述関係による状態表示と客述関係による方法表示とが、ほぼ同じ事柄の表示に用いられている」ということを指摘し、そのような事例として「人物の表情、声調、筆跡、服装」の表示を挙げている。これが本章において取り上げる（1）のような用例に該当するものである。また、このうちの「人物の表情、声調、筆跡」は和文体で自動詞を用いる傾向が強く、漢文訓読体で他動詞を用いる傾向があるのに対し、（4）のような「服装」は和文体でも自動詞、他動詞のいずれもに見られることから「いずれがより一般的だったのか」（山口 1998:234）という点については判断を保留している。

（4）　a. 袖ぬれて海人の刈りほすわたつうみのみるをあふにてやまむとやする

（伊勢物語・七十五）（山口 1998:234）

b. あまぐものはるかなりつる桂川（かつらがは）そでをひててもわたりぬるかな

（土左日記）（山口 1998:234）

c. きてみればうらみられけり唐衣（からころも）かへしやりてん袖をぬらして

（源氏物語・玉かづら）（山口 1998:234）

また、上代語における同様の用例に関しては佐佐木（2016）、吉井（2017）に指摘がある。佐佐木（2016:136）は上代語において「状況を描写した連用修飾成分に自動詞が用いられているか他動詞が用いられているかに関係なく、とにかくそれを被修飾成分の前にそのまま置くことが許容された。連用修飾成分に用いられる動詞の自他を、被修飾成分との関係で調整する必要は必ずしもなかった」と指摘している。一方で、現代語においては「連用修飾成分の表現を被修飾成分に合わせて調整し、意味的に一貫した言いかたにしなければならない」（佐佐木 2016:149）と述べている。これに続いて吉井（2017:72）は『萬葉集』における（5）のようなテ形節を挙げ、例えば（5a）については「池の水に影が映るほどまでに」のような意になることから、テ形節の「状態変化は主句の事態によって生じる変化で

ある」としてこれらのテ形節には「程度性」が見て取れると指摘している[6]。

(5)　a. 池水に　可氣左倍見要氐（かげさへみえて）　咲きにほふ　あしびの花を　袖に扱入れな

（二〇・四五一二[7]）（吉井 2017:71①）

b. 風高く　辺には吹けども　妹がため　袖左倍所沾而（そでさへぬれて）　刈れる玉藻そ

（四・七八二）（吉井 2017:72③）

c. 六月の　地副割而（つちさへさけて）　照る日にも　我が袖乾めや　君に逢はずして

（一〇・一九九五）（吉井 2017:72⑤）

これらの先行研究の指摘は①現代語において［目的語―他動詞］という構造を取るものについて古代語においては［対象主語―非対格自動詞］という構造が取られている用例が見られること、②和文体と漢文訓読体とによって自動詞と他動詞との用いられ方に差があること（山口 1998）という 2 点に整理できる。これらを踏まえ、以下ではこのような〈付帯状況〉を表す非対格自動詞節（テ形節・ツツ節）の用例がいつ頃まで見られるのかという点を用例調査に基づいて明らかにする。また、それが日本語のどのような変化と関わるものであるのかという点について検討する。

3. 用例調査

ここでは先行研究の指摘を踏まえ、本章における用例調査について述べる。まず、〈付帯状況〉について本章において取り上げる用例や現代語との関わりについて述べ、次に〈付帯状況〉を表す非対格自動詞テ形節を対象とした用例調査の手順とその結果とを示し、続いて〈付帯状況〉を表す非対格自動詞ツツ節を対象とした用例調査の手順とその結果とを示すこととする。

6　吉井（2017）は「程度性」を持つという点においてこれが現代語の「付帯状態」（仁田 1995a）と異なっていると述べている。しかし、現代語においても「顔をゆがめて泣く」や「泣いて喜ぶ」のような場合には「～ほどまでに」といった意の「程度性」が見られると考えられることから、本章ではこの「程度性」については取り上げない。

7　これは吉井（2017）が用例の末尾に記しているものであり、『萬葉集』における巻番号と歌番号とを表すものと見える。（5b）、（5c）も同様である。

3.1.〈付帯状況〉について

まず、第 2 章第 4 節において規定したように本論文では「動作が行われる際の主体、または対象の付帯的な様子を表すもの」を〈付帯状況〉と呼ぶ。これは本章において取り上げる動詞テ形節においては現代語のテ形節の分類を示した仁田（1995a）が「付帯状態」の下位分類のうち「付属状況」と呼んだ（6）のようなテ形節[8]（仁田 1995a における「シテ節」）と概ね同様の事態を表すものと言える[9]。

（6）　a. 京極鴻二郎が全身を朱に染めて倒れていた。

（高木彬光「妖婦の宿」）（仁田 1995a:100,（32）,「付帯状態（付属状況）」）

b. ズボンと靴をびしょびしょにして、彼は立ち上がった。

（筒井康隆「その情報は暗号」）（仁田 1995a:101,（37）,「付帯状態（付属状況）」）

なお、仁田（1995a:92）はこの「付帯状態」について「シテ節と主節の事象が時間的に同存し、それらの主体が同一で、シテ節が主節の事象の実現のされ方を表している」と説明している。これを踏まえると、（1）のような古代語のテ形節は［対象主語―非対格自動詞］という構造を取るという点でテ形節の「主体」が主節の「主体」と完全に同一であるとは言えない可能性があり[10]、仁田（1995a）における「付帯状態」とは異なっているということになる。しかし、山口（1998:231）の「主述関係による状態表示と客述関係による方法表示とが、ほぼ同じ事柄の表示に用いられている」という中古語のテ形節に関する指摘を踏ま

---

[8] なお、（6a）について仁田（1995a）は「前身を朱に染めて」としているが、高木彬光「妖婦の宿」（1975 年、立風書房）における当該箇所を確認したところ、「全身を朱に染めて」であったことから、ここでは修正した上で引用してある。

[9] 仁田（1995a:100-101）は（6a）について「主体の様態的あり方に関わるものである」とし、（6b）について「主たる事象が実現する際の状況を表し、主たる事象の実現のされ方を表現しているものの、もはや、主体の様態的なあり方とは言えないだろう」と説明している。また、仁田（1995a:101）はこの（6b）について「主体の様態的あり方でない度合い」は「ヲ格名詞の主体への関与性のあり方に関わっている」と述べ、（6b）の「びしょびしょにする」ように「対象変化動詞から構成されており、変化後の対象のあり様が存続し、主たる事象と同一空間に存し、主たる事象とともにより大きな事象を作る」と指摘している。つまり、仁田（1995a）は「付帯状態」の中にもその「主体の様態的あり方」の度合いに違いを認めているということになる。本章の分析においては〈付帯状況〉の中にこのような違いを積極的に認めることはしないが、仁田（1995a）の指摘を斥ける意図はないことを申し添える。

[10] （1）においてテ形節内に現れる主節と異なる主語は「袖」、「おもて」であり、いずれも動作主になり得る「主体」ではなく、あくまで非対格自動詞の「対象主語」である。ここでは仁田（1995a）の記述に沿って比較しているが、本章の立場としては「テ形節の「主語」と主節の「主語」とが完全に同一であるとは言えない可能性がある」ということになる。

えれば、古代語では同様の事態について（対象主語を含む）自動詞のテ形節でも他動詞でも表し得たということであり、仁田（1995a）の説明においては「シテ節と主節の事象が時間的に同存」するという点と「シテ節が主節の事象の実現のされ方を表している」という点とが現代語にも古代語にも概ね共通しているものと考えられる。

また、本章における検討は現代語においてある程度、前提視されてきたものと見える〈付帯状況〉を表す形式の内部構造――主節と異なる主語が現れ得るかという点――について通時的に問い直すことの一助となるものであると言える。

3.2.〈付帯状況〉を表す非対格自動詞テ形節

次に〈付帯状況〉を表す非対格自動詞テ形節の用例調査について述べる。ここでは［名詞（＋｛副助詞／係助詞「も」｝）＋非対格自動詞連用形＋テ］の用例について上代から中世にかけての資料を対象に用例調査を実施した[11]。調査対象の非対格自動詞は先行研究における挙例を踏まえて（7a）に示す 12 語（のテ形節）とした。また、（7a）に示した非対格自動詞に対応する他動詞のテ形節（［目的語―他動詞］という構造を取るもの）について〈付帯状況〉を表す用例があるかを調査した結果、用例が見られたのは（7b）の 5 語（のテ形節）であり、これらについても分析の対象とする[12]。なお、（7）においては動詞の後に活用型を丸括弧で括って示す[13]。

---

[11] 調査資料の詳細は論文末の調査・引用資料に示してある。なお、『日本語歴史コーパス』では「キー」の「語彙素」に当該の動詞を入力し、後方共起条件の「キーから 1 語」を語彙素「て」とした上で次の 2 通りの方法を用いて検索した。
（A）前方共起条件の「キーから 1 語」を「品詞-大分類-名詞」とする
（B）前方共起条件の「キーから 1 語」を「品詞-大分類-助詞」として前方共起条件の「キーから 2 語」を「品詞-大分類-名詞」とする
また、テキストデータの全文検索を使用した際には「［当該の動詞連用形］て」の文字列（漢字書き・仮名書き）を検索し、該当する用例を目視で抽出した。

[12] （7b）は（7a）の各自動詞に対応する他動詞のうち〈付帯状況〉を表すテ形節として現れる用例が見られた語を挙げているものであり、古代語の資料や辞典類の記述を見ると、基本的に各自動詞に対応する他動詞が存在することから、そもそも自動詞（のテ形節）しか選択し得なかったという可能性は低いものと考えられる。なお、「おごめく」、「腫る」に対応する他動詞である「おごめかす」、「腫らす」については古代語の資料に用例を見出だし難いようであり、古代語において対応する他動詞が存在していなかった可能性もある。

[13] これは基本的に『日本国語大辞典第二版』における当該の語に関する記述に拠ったが、個別の語に関する研究を参照して検討した場合がある。また、「おこつく」は『日本国語大辞典第二版』に立項されていないことから実際の用例から判断した。

(7)　a. 非対格自動詞 : 赤む（四）、ひづ（四、上二）、ひつ（四、上二）、濡る（下二）、乱る（四）、とよむ（四）、裂く（四）、枯る（下二）、そよぐ（四）、おこつく（四）、おごめく（四）、腫る（下二）

b. 他動詞 : 赤む（下二）、ひつ（下二）、濡らす（四）、乱す（四[14]）、とよむ（下二）

次に用例調査の結果を表 6-1 に示す[15]。表 6-1 を見ると、〈付帯状況〉を表す非対格自動詞テ形節は中世前期の資料までは見られるものの、それ以降は和歌のみに一部が残ることが読み取れる[16]。また、（7a）に示した 12 語のうち、「赤みて」以外の動詞の用例は和歌に偏って見られる傾向が認められる。

表 6-1 :〈付帯状況〉を表す非対格自動詞テ形節と他動詞テ形節（空欄は用例なし）

		上代	中古			中世前期			中世後期	計
		和歌	和歌	和文（散文）	和漢混淆文	和歌	和文（散文）	和漢混淆文	和歌	
赤みて	自			21			1			22
赤めて	他			11	2		2			15
ひづちて	自	3								3
ひちて	自		19			21			1	41
ひてて	他		3			1				4
濡れて	自	6	14			41			8	69
濡らして	他		6	4			1	1	1	13
乱れて	自	1					2		1	4
乱して	他				1					1
とよみて	自	1								1
とよめて	他	3								3
裂けて	自	1	1				1			3
(声)枯れて	自			2						2
そよぎて	自		5			4			3	12
おこつきて	自			1				1		2
おごめきて	自						1			1
腫れて	自	1								1
計		16	48	39	3	67	8	2	14	197

〈付帯状況〉を表す非対格自動詞テ形節としては（8）のような用例が見られた。

[14] 自動詞の「乱る」に対応する他動詞として四段活用の「乱る」もあるが、本章における検討の対象となるテ形節としての用例が見られなかったことから列挙していない。

[15] 表 6-1 において散文資料中の和歌は「和歌」に含めてある。また、「ひちて／ひづちて／ひてて」の自動詞・他動詞の認定については山内（1964）、こまつ（1987）を参考にした。なお、〈付帯状況〉か否かの判断に迷うものは対象から除外しているが、これが〈付帯状況〉を表す非対格自動詞テ形節が見られなくなる時期の検討には影響しないことは確認済みである。

[16] 近世の資料においても和歌や浄瑠璃の道行の場面において僅かに用例が認められる。

(8)　a. 三十ばかりなる男の丈高くものものしくふとりて、きたなげなけれど、思ひなし疎ましく、荒らかなるふるまひなど見るもゆゆしくおぼゆ。色あひ心地よげに、声いたう枯れてさへづりゐたり。懸想人は夜に隠れたるをこそよばひとは言ひけれ、さま変へたる春の夕暮なり。　（源氏物語・玉鬘・96）

b. はかなし、口惜しとかつ見つつも、ただ、わが心につき、宿世の引く方はべるめれば、男しもなむ仔細なきものははべめる」と申せば、残りを言はせむとて、「さてさてをかしかりける女かな」とすかいたまふを、心は得ながら、鼻のわたりをこつきて語りなす。　（源氏物語・帚木・86[17]）

c. 波羅門の作れる水田を食む烏瞼腫れて幡幢に居り〔瞼腫而〕

（萬葉集・巻第十六・3856）

これらについて（8a）は「声がたいそう枯れて意味が分からない言葉をしゃべっている」（「声をたいそう枯らして」）の意であり、（8b）は「鼻のまわりがおどけて見えて語り続ける」（「鼻のまわりをおどけて見せて」）の意であり、（8c）は「烏がまぶたが腫れて幡幢（という柱）に留まっている」（「まぶたを腫らした様子で[18]」）の意であると考えられる。

また、（9）～（11）のように非対格自動詞のテ形節の用例と対応する他動詞のテ形節の用例とが共に見られる場合には両者の間に具体的な差異が認められず、両者が併存していたと考えられる。なお、本章の調査においては山口（1998）が漢文訓読体として挙げていた『三宝絵』や『今昔物語集』などの資料において（顕著に）他動詞の用例に偏るという傾向は確認できなかった[19]。これに加えて非対格自動詞の場合は名詞に副助詞や係助詞「も」が下接する用例が見られるのに対し、他動詞の場合は副助詞・係助詞の下接は見られなかった。

(9)　a. 袖ひちてわが手にむすぶ水の面に天つ星合の空を見るかな

（新古今和歌集・巻第四・秋歌上・316・藤原長能）

---

[17] 河内本、湖月抄本に「をごめきて」とある。

[18] 『新編日本古典文学全集』などの注釈書を踏まえると、烏の目についてまるで瞼が腫れているように見えることから、このように詠まれたものと見受けられる。

[19] 山口（1998）は用例数を提示しておらず、どの程度の傾向が認められると判断し得るのかという点については判然としない。なお、〈付帯状況〉を表す「赤めて」は中世後期以降の資料には見られなかったが、(i) のような他動詞による表現は見られる。

(i) 中／＼用があつたもので、かほをあかふして、ふたりながらおでやつた

（虎明本狂言集・ほねかわ（骨皮）・231）

b. 天雲のはるかなりつる桂川袖をひててもわたりぬるかな　（土左日記・54）

（10） a.「世語にもしつべき宮の御言葉かな」とさゝめき、忍びもあえず笑ひのゝしれば、いとはしたなく、顔赤みて居給ひて、「いなや、おぢの宰相の、去年の御心地の折『参りしかばかう申せ』といひしことを、…　（栄花物語・巻第一・66）

b. 御子此の事を極て半無と思し食ければ、顔を赤めて立せ給るを、入鹿猶事とも思ざる気色にて立りければ、大織冠其の御沓を迷ひ取て、「我れ悪き事を翔つ」とも思ざりけり。〔顔ヲ赤メテ立セ給ルヲ、〕

（今昔物語集・巻第二十二・第一・160）

（11） a. 知らざりつ袖のみ濡れて菖蒲草かゝる泥に生ひんものとは

（金葉和歌集・第七・恋・362・小一条院）

b. 何となき老い衰へたる人だに、今はと世を背くほどは、あやしうあはれなるわざを、まして、かねての御気色にも出だしたまはざりつることなれば、親王もいみじう泣きたまふ。参りたまへる人々も、おほかたの事のさまもあはれに尊ければ、みな袖濡らしてぞ帰りたまひける。　（源氏物語・賢木・131）

3.3.〈付帯状況〉を表す非対格自動詞ツツ節

次に〈付帯状況〉を表す非対格自動詞ツツ節の用例調査について述べる。ここでは〈付帯状況〉を表す非対格自動詞ツツ節が節内に対象主語を含む例に関して（7a）に挙げた動詞[20]についてテ形節と同様に調査した[21]。その結果、上代から中世前期の資料において用例が

[20] ここでは（7a）に挙げた動詞を対象としたが、他に（ii）のような「しつつ」の用例が『萬葉集』に見られる。ただし、「す」が自動詞であるか他動詞であるかという点が判然としないことから、ここでは検討の対象に含めないこととした。これに関連して上代における「の」と「が」とに関する野村（1993a，1993b）や上代から中世にかけての「の」と「が」とについて取り上げた野村（1993c）の研究においては上代における「の」に「主格用法」、「比喩的用法」、「同格用法」、「所有格用法」、「さまざまな連体用法」の 5 つの用法がある（野村 1993c）と指摘されている。これを踏まえると、特に（ii）の「水手の声しつつ」の「の」が「主格用法」であるか「所有格用法」であるかという点を一意に定めることが難しいと言える（例えば、『新編日本古典文学全集』においては「水手の声しつつ」を「水手が声を揃え」のように「主格用法」で訳している）。これに起因して「す」が自動詞であるか他動詞であるかという点を判定できないという事情があることから、ここでは取り上げないこととした。

（ii）大船に　ま梶しじ貫き　朝なぎに　水手（かこ）の声しつつ　夕なぎに　梶（かぢ）の音しつつ　行きし君　いつ来まさむと　〔水手之音為乍（かこのこゑしつつ）〕〔梶音為乍（かじのおとしつつ）〕（萬葉集・巻第十三・挽歌・3333）

[21]『日本語歴史コーパス』では「キー」を「語彙素」として当該の動詞を入力し、後方共起条件の「キーから 1 語」を「語彙素-つつ」として用例を抽出した。また、テキストデータの全文

見られたのは（12）の 3 語（のツツ節）であった。

（12）　濡れつつ（1 例）、絶えつつ（2 例）、乱れつつ（1 例）

調査の結果、〈付帯状況〉を表す非対格自動詞ツツ節として（13）に挙げるような用例が見られた。用例が見られた資料に着目すると、「濡れつつ」は中古和文に見られ、「絶えつつ」は 2 例とも「息も絶えつつ」の形で中古和文（『源氏物語』）に見られ、「乱れつつ」は中古の和歌に見られた。また、表 6-1 に示した非対格自動詞テ形節の用例に比べると、全体の用例数が少なく、特に和歌に偏っているという傾向も認め難い。

（13）a. 御前の前栽の色々乱れたる露のしげさに、いにしへのことどもかきつづけ思し出でられて、御袖も濡れつつ、女御の御方に渡りたまへり。

（源氏物語・薄雲・458）

b.「かぎりとて別るる道の悲しきにいかまほしきは命なりけり　いとかく思ひたまへましかば」と、息も絶えつつ、聞こえまほしげなることはありげなれど、いと苦しげにたゆげなれば、かくながら、ともかくもならむを御覧じはてむと思しめすに、

（源氏物語・桐壺・23）

（13a）は「袖が濡れつつ女御の方へ移られる」（「袖を濡らしながら」）の意であり、（13b）は「息も絶えつつ申し上げたそうなこともあるけれど」（「息も｛絶やしながら／絶え絶えに｝）の意であると考えられる。

また、（13a）の「濡れつつ」については（14）のように「ぬらしつつ」という他動詞のツツ節の用例も見られることから、少なくとも中古まではテ形節と同様に両者が併存していたものと考えられる。

（14）　君がため衣のすそをぬらしつつ春の野にいでてつめる若菜ぞ

（大和物語・一七三・420）

ツツ節については節内に対象主語が現れる用例が全体として多くは見られないものの、

検索を使用した際には「［当該の動詞連用形］つつ」の文字列（漢字書き・仮名書き）を検索し、該当する用例を目視で抽出した。

僅かながら用例が見られるのは中古までであり、中世以降には見られなくなっていくというテ形節の傾向と概ね同様である可能性が示唆される。本章では特に古代語においてこのような用例が認められるという点に注目する。

4.〈付帯状況〉を表す節の内部構造の変化

続いて前掲した用例調査の結果を踏まえて〈付帯状況〉を表す節の内部構造の変化について検討する。ここでは本章において取り上げた非対格自動詞テ形節・ツツ節に生じた変化と本論文において中心的に取り上げてきた形容詞テ形節の副詞的用法との関わりについて述べ、それを踏まえて〈付帯状況〉を表す節の内部構造の変化の背景について検討を試みる。

4.1. 形容詞テ形節の副詞的用法との関わり

まず、本章において取り上げてきた〈付帯状況〉を表す非対格自動詞テ形節・ツツ節と本論文において中心的に検討してきた形容詞テ形節の副詞的用法との関わりについて述べる。第 3 章、第 4 章で検討した古代語の〈付帯状況〉を表す形容詞テ形節のうち、ここでは（15）のように節内に主節と異なる主語（対象主語）が現れる用例に着目する。（15a）は主節述語「咲く」の主語に当たる「桜」とは異なる主語である「枝（＝テ形節述語「細し」の対象主語）」が形容詞テ形節内に見られる用例であり、（15b）は主節述語「うたふ」の主語に当たる「弁の少将」とは異なる主語である「声（＝テ形節述語「なつかし」の対象主語）」が形容詞テ形節内に見られる用例である。

（15） a. 桜は、花びら大きに、葉の色濃きが、枝ほそくて咲きたる。
（枕草子・木の花は・86）

b. …いたうけしきばみ横たはれる松の、木高きほどにはあらぬに、かかれる花のさま、世の常ならずおもしろし。例の弁の少将、声いとなつかしうて「葦垣」をうたふ。（源氏物語・藤裏葉・439）

つまり、（15）のような形容詞テ形節の用例と本章における検討とを合わせて考えると、

古代語の〈付帯状況〉を表す節においては節内に主節と異なる主語（対象主語）が現れることが可能であったということが窺える。そして、用例調査の結果を踏まえれば、これらはいずれも上代・中古に中心的に見られる現象であり、その後は衰退したということになる。この点で〈付帯状況〉を表す形容詞テ形節と非対格自動詞テ形節・ツツ節とが共通していると言えるのである。すなわち、上代・中古において〈付帯状況〉を表す節に対象主語が出現していた――対象主語の出現に関する制限が中世以降に比して弱かった――という現象は形容詞テ形節に限らず、〈付帯状況〉を表す形式に広く起きていたものであると考えられる。

なお、第 3 章、第 4 章において述べたように形容詞テ形節の副詞的用法は地の文、会話文、心内話文、和歌などの違いに関係なく、用例が見られたのに対し、本章において取り上げた非対格自動詞テ形節は用例が和歌に偏って見られるという点で違いがある。この点は後者が中古において既に和歌のみに存在する（ある程度、固定化した）表現の類であった可能性も考えられる。

4.2.〈付帯状況〉を表す節の内部構造の変化の背景

次に、本章において取り上げてきた〈付帯状況〉を表す非対格自動詞テ形節・ツツ節について節内に主節と異なる主語（対象主語）が現れなくなったという変化の背景を検討していく[22]。

4.2.1. 格標示に関する議論との関連

まず、格助詞「ガ」に関する通時的な研究である山田（2010）は無助詞から「ガ」への移行や主語を表す「ノ」から「ガ」への移行に関する調査に基づき、主節においても従属節においても非対格自動詞述語・形容詞述語における「ガ」の進出が顕著であることを指摘している。これに加えて主節における他動詞述語文の無助詞目的語に対して「ヲ」の付加が顕著であることにも注目し、「非対格自動詞述語文の無助詞主語と他動詞述語文の無助詞目的語に対する助詞の付加率が高いということは、内項（対象）を表示しようとする

[22] 形容詞テ形節の副詞的用法の衰退に焦点を当てた分析は第 7 章において試みることから、ここでは特に非対格自動詞テ形節・ツツ節における内部構造の変化の背景を中心的に取り上げる。ただし、既に述べたように両者は節の内部構造について同様の変化が見られることから、本章での議論は第 7 章における検討のための準備として位置づけられるものである。

意識の現れであると考えられる」としてこれを「内項（対象）の明示化」と呼んでいる（山田 2010:153）。また、「古代語から近代語にかけて、語と語の関係性が明示化され、未分化表現から分析的表現へと変化してきたと言われるが、「内項（対象）の明示化」はその一つの流れである」と述べている（山田 2010:153）。

ここで、山田（2010）が明らかにした一連の現象のうち、本章において重視したいのは〈対象〉が目的語（「ヲ」による標示）であるのか、主語（「ガ」による標示）であるのかという違いが明示される方向に変化していったという現象である。本章において取り上げた〈付帯状況〉を表す節における対象主語は古くは目的語と同様に〈付帯状況〉を表す節に存在していたものの、時代が下るに連れて〈付帯状況〉を表す節に存在することができなくなったと言える。つまり、これは対象主語が目的語とは異なる振る舞いをするようになったということである。

4.2.2. 日本語における活格性に関する議論

次に〈付帯状況〉を表す節に存在することができないという性質は動作主主語と同様のものであることから対象主語は統語的に目的語との共通点の一つを失い、動作主主語との共通点の一つを獲得したということになる。この点は日本語における活格性の喪失という変化と関わっている可能性があると考えられることから、ここでは日本語における活格性に関する議論を概観しておく。

日本語における活格性に関する議論は Vovin（1997）に早く、その後、柳田（2007）、Yanagida and Whitman（2009）、Whitman・柳田（2009）などの一連の研究や竹内（2008a, 2008b，2012）などの研究がある[23]。ここではそれぞれについて順にその概要を述べる。

まず、Vovin（1997）は上代語の助詞「い」と助詞「を」とに着目し、「い」が他動詞の主語と自動詞（active）の主語とを示す助詞（active case maker）であるとし、「を」が他動詞の目的語と自動詞（non-active）の主語とを示す助詞（non-active case maker）であるとして上代語は主格と動作格とが組み合わさった類型（a language which combines nominative and active typology）であったことが推測されると指摘している。また、これが中古においては失われたことに言及している。なお、Vovin（1997）は無助詞を含めた上代語における格

[23] 他にも上代語の従属節や主文の連体形節・已然形節における主語標示に関する竹内（2020）などの研究、無助詞名詞句に関する小田（1997）、高山（2014）、金（2016）、山田（2021）などの研究、格助詞（無助詞を含む）の振る舞いから中古における活格性の存在に言及している鈴木（2014，2016）の研究もある。

標示を（16）のように整理している。

（16）

	main clause	subordinate clause
subject of a transitive or an active intransitive verd	Ø, i	Ø, i
subject of non-active intransitive verb	Ø, wo	Ø, wo
object of a transitive verb	Ø, wo	Ø, wo

（Vovin1997:286，（56））

次に柳田（2007）は助詞「い」と助詞「が」とに着目して上代の資料である『萬葉集』と平安初期の訓点資料である『西大寺本金光明最勝王経』とを調査し、上代語の言語類型について検討した研究である。柳田（2007）は上代語が形態的には活格言語の特徴を有し、統語的には能格言語の特徴を有していたことを指摘した上で、中古の初めに格システムが能格から対格へと移行したと述べている。また、柳田（2007:147）は主文と従属節内の格システムの違いから上代語が「能格と対格システムをもつ分裂能格言語」であると指摘している。

続いて Yanagida and Whitman（2009）は『萬葉集』と『金光明最勝王経』とにおける用例を示しつつ、上代語が「active alignment」であることの証拠を示している[24]。また、主文においては対格的であり、名詞化節（nominalized clauses[25]）においては活格的であると指摘している[26]。

また、代名詞の体系の観点から上代語の活格性について述べた Whitman・柳田（2009:211）は「「ガ」と「ノ」の名詞階層による厳密な区別」、「接辞代名詞や接頭代名詞接辞の存在」などの点を検討した上で、上代語が「活格型言語に共通する特徴」を持っていることを示している。

次に竹内（2008a，2008b，2012）の研究を取り上げる[27]。まず、竹内（2008a）は上代語の助詞「し」が主節とバ節とに現れることを確認し、主節において（17a）のような主語や

[24] Yanagida and Whitman（2009）への批判的検討として菊田（2012）がある。

[25] Yanagida and Whitman（2009）はこれに該当するものとして連体形節、已然形節、連用形節、条件を表す未然形節を挙げている。

[26] これは Yanagida（2006）における語順の整理を踏まえたものである。また、語順についてはコーパスを利用した研究である柳田（2014）もある。

[27] 竹内（2008a）は竹内（2008b）を「竹内（2008）」として引用して議論を進めているが、本章においては発行日を基準として a と b とを施し、その順に取り上げる。

（17b）のような目的語の用例があるのに対して（17c）のように他動詞文の主語を表すものは 2 例に留まることを指摘している。

（17） a. 天にある日売菅原の草な刈りそね蜷の腸か黒き髪にあくたし（飽田志）付くも（付勿）　（萬葉集・1277）（竹内 2008a:12,（12a),「非行為性の自動詞の主語」）

b. 絶等寸の山の峰の上の桜花咲かむ春へは君し（君之）偲はむ（将ㇾ思）

（萬葉集・1776）（竹内 2008a:12-13,（13a),「他動詞文の目的語」）

c. 白菅の真野の榛原心ゆも思はぬ我し（吾之）衣に摺りつ（衣尓揩）

（萬葉集・1354）（竹内 2008a:13,（14a),「他動詞文の主語」）

また、竹内（2008a:16）はバ節において主節と同様に「非行為性の自動詞文の主語、感情形容詞文の対象語、属性形容詞文の主語、他動詞文の目的語等」が見られることに加えて「他動詞文の主語ないし行為性の自動詞文の主語を示す例が普通にある」ということを指摘している。このように主節とバ節とで振る舞いが異なっていることについて竹内（2008a:17）は主節の「し」が中古以降に衰退してバ節の「し」のみが残ること、主節の「し」には非動作格性が認められることを指摘し、これらのことは「中央方言の格標示体系が活格性を消し去り、対格性を高めていく具体的な現象と見ることができる」と述べている。

次に竹内（2008b:58-59）は古代（上代から中古初期）語における格助詞「を」について分析し、「他動詞文の目的語を標示する例が圧倒的に多いが、しかし観察を詳細にすれば、非行為性の自動詞文の主語、感情形容詞文の対象語、属性形容詞の主語」を標示していることから「非動作格（inactive）という意味的な観点からの特徴づけがふさわしい」と述べている。例えば、竹内（2008b:53）は（18a）のように格助詞「を」が「聞え」に対応している用例を挙げ、この「聞ゆ」は（18b）のように「項を一つしか持たない自動詞である」と説明している。

（18） a. 道の後古波陀嬢子を（古波陀袁登賣袁）神の如聞えしかども（岐許延斯迦杼母）相枕まく　（古事記歌謡・四五）（竹内 2008b:53,（8a））

b. 天飛ぶ鳥も使そ鶴が音の（多豆賀泥能）聞こえむ（岐許延牟）時は我が名問はさね　（古事記歌謡・八五）（竹内 2008b:53,（9））

これに加えて竹内（2008b）は（19a）を中古初期の資料に見られる自動詞の主語を標示

する「を」として挙げ、(19b) を属性形容詞の述語の唯一の項を標示する「を」として挙げ、(19c) を属性形容詞によるミ語法の例として挙げている。竹内 (2008b:56) は (19c) のような属性形容詞によるミ語法が「通常の属性形容詞による理由文と意味的にも統語的にも異なるところがない」ことから、属性形容詞文や自動詞文と同様に「述語の唯一の項を標示していると考える」と述べている。

(19) a. をみなへしおほかるのべにやどりせばあやなくあだの名をやたちなむ
(古今集・229) (竹内 2008b:54, (12a))

b. 命をし (伊能知乎之) 全くしあらば (麻多久之安良婆) ありきぬのありて後にも逢はざらめやも (萬葉集・三七四一) (竹内 2008b:54, (13c))

c. 一重山隔れるものを月夜良み (月夜好見) 門に出で立ち妹か待つらむ (妹可将ㄴ待) (萬葉集・七六五) (竹内 2008b:54, (15a))

また、竹内 (2008b) は Vovin (1997) による助詞「い」に関する議論に基づき、格助詞「を」が「非動作格」であり、格助詞「い」が「動作格」であると考えられることを改めて確認している[28]。これについて竹内 (2008b:60) は平安時代以降には格助詞「を」は他動詞文の目的語のみを標示するように狭くなり、格助詞「い」は衰退するということについて「中央方言の格標示体系が対格型を指向していくより大きな変化の中でそれぞれの現象が生じているからと理解されなければならない」と述べている。

続いて平安初期の資料である『土左日記』と『大和物語』とを対象として無助詞名詞句の振る舞いについて考察した竹内 (2012) を取り上げる。竹内 (2012:26) は「〈動作主〉主語[29]」である無助詞名詞句について (20a)、(20b) のように述語との間にニ格名詞句や様態副詞、「付加的な成分や節」が介在することが可能であり、述語から「大きく離れることができる」と述べている。それに対して (20c) のような非行為性の自動詞文の主語である無助詞名詞句と (20d) のような他動詞文の目的語である無助詞名詞句とにおいては、述語

[28] なお、柳田 (2014:135) においては助詞「い」を活格と捉え、助詞「を」を絶対格と捉える Vovin (1997) の議論とそれに続く竹内 (2008b) の議論とについて「を」が非動作主語を表示する用例はミ語法に偏っており、ミ語法以外の例では「ほとんどが、ヲが隣接する動詞の主語位置にあるのではなく、構造上より高い動詞の目的語の位置にあると分析される」と指摘している。つまり、柳田 (2014:135) は上代語の「を」が「絶対格 (非対格) ではなく、対格であり、目的語を表示する」ものであると主張している。

[29] 竹内 (2012:25) は「他動詞文の主語と行為性の自動詞文の主語を一括」して「〈動作主〉主語」とし、「非行為性の自動詞文の主語を〈対象〉主語」としている。

と隣接している場合が多く、隣接していない場合にもニ格名詞句や様態副詞などが介在するに留まり、節などは介在しないことを指摘している。

（20） a. 泉の大將、故左のおほいどのにまうでたまへりけり。

（大和物語・296-1）（竹内 2012:26,（7d））

b. また、あるひと、にしぐになれど、かひうたなどいふ。

（土左日記・5-5）（竹内 2012:26,（10a））

c. 日しきりにとかくしつゝ、のゝしるうちによふけぬ。

（土左日記・1-6）（竹内 2012:27,（12a））

d. なほかみのたちにてあるじしのゝしりて、郎等までにものかづけたり。

（土左日記・2-8）（竹内 2012:27,（13a））

このような現象について竹内（2012:29）は Perlmutter（1978）の議論と Levin and Rappaport Hovav（1995）の議論とを踏まえ、「古代日本語の主節では、項構造上の外項、内項の区別が、節内の他の要素に対する振る舞いにおいて保持されており、活格性を有しているとの特徴づけが成り立つ」と指摘している[30]。

これらの先行研究における議論の概要を整理すると、主に上代語における格標示（助詞「い」、「し」、「を」や無助詞名詞句など）や語順に関する分析から上代語に活格性が見られること、その活格性が 8 世紀後半以降の中古語においては失われたことが指摘されてきたということになる。

4.2.3. 〈付帯状況〉を表す非対格自動詞節に起きた変化の位置づけ

これらの先行研究において述べられている日本語における活格性のうち、本章の議論と特に関わるのは非対格自動詞の主語である対象主語と他動詞の目的語とが同様の振る舞いをしており、対象主語と動作主主語とが異なる振る舞いをしているという点である。既に述べたように本章において取り上げてきた現象は古くは目的語と同様に〈付帯状況〉を表す

[30] 竹内（2012）の議論を整理すると、現代語では対象主語の「非対格昇格（unaccusative advancement）」が義務的であるのに対して、古代語には「非対格昇格」がなかったか、或いは義務的でなかったということになると考えられる。なお、竹内（2012）の対象とした資料と時期の近い 7 資料を対象として無助詞名詞句の振る舞いを改めて調査した山田（2020:59）の研究は「無助詞名詞句と述語との間の介在成分」に「質的な違い」は見られず、格標示の観点からも「平安期の中央語は対格型である」と指摘している。

節に存在していた対象主語が時代が下るに連れて〈付帯状況〉を表す節に存在することができなくなったという変化であると言える。つまり、中古までは〈付帯状況〉を表す節の中に目的語と対象主語とが現れ得たのに対し、中世以降は〈付帯状況〉を表す節には目的語のみが現れ、対象主語は〈付帯状況〉を表す節には現れることができなくなるということである。この点で対象主語は目的語との共通点の一つを失い、動作主主語との共通点の一つを獲得したということになるのである。このように対象主語が目的語との共通点を持っていた状態からそれを失って動作主主語との共通点を持つようになるという変化は活格性の喪失を反映した現象であると考えられる可能性がある。

なお、先行研究においては主に上代語において活格性を有していたことが指摘されており、中古語においては既に活格性を失い、対格言語へ移行したと述べるものが多い。本章で取り上げた現象は中古語の資料にも見られるという点で、先行研究とは異なる部分があるということになる。しかし、本章は中古語に活格性があった（または（強く）残っていた）と主張するものではない。先行研究において検討されている上代語を中心とした他の現象に鑑みれば、中古語における当該の形式には活格性の（部分的な）名残（のようなもの）があり、その名残（のようなもの）が中世以降には失われたと捉えられる可能性が考えられる[31]。

また、本章で取り上げた現象は節の内部構造に関わる問題であり、先行研究において主に格標示や語順のような形態的な側面から指摘されてきた活格性の喪失について、その統語的な側面に関わるものとして位置づけ得るものと考える。

5. おわりに

本章においては〈付帯状況〉を表す非対格自動詞節について節内に主節と異なる対象主語が現れるものを対象としてその変化を明らかにすることを試みた。本章において述べたことは次の通りである。

まず、〈付帯状況〉を表す非対格自動詞テ形節に主節と異なる主語（対象主語）が現れる用例が見られるのは主に中世前期までであり、それ以降は和歌に一部が残るのみとなることを指摘した。次に〈付帯状況〉を表す非対格自動詞のツツ節においてもテ形節と同様の

[31] このような捉え方は本章において取り上げた非対格自動詞テ形節・ツツ節の節内に対象主語が現れる用例が和歌に偏って見られることとも整合するものである可能性がある。

構造を取る用例が上代・中古に僅かながら見られることを示した。また、〈付帯状況〉を表す非対格自動詞テ形節・ツツ節における対象主語に関わる変化は形容詞テ形節の副詞的用法にも見られるものであることから、上代・中古において〈付帯状況〉を表す節に対象主語が出現していた――対象主語の出現に関する制限が中世以降に比して弱かった――という現象は形容詞テ形節に限らず、〈付帯状況〉を表す形式に広く起きていたものであることを確認した。その上で、日本語において「対象」が目的語（「ヲ」による標示）であるのか、主語（「ガ」による標示）であるのかという違いが明示される方向へと変化したこととの関連性を指摘すると共に、当該の変化が日本語における活格性の喪失という変化を反映した現象の一つとして捉えられる可能性があることを述べた。

第 7 章
形容詞テ形節の副詞的用法の衰退に関する文法史上の位置づけ

1. はじめに

本章では形容詞テ形節の副詞的用法の衰退についてその日本語文法史上の位置づけを試みる。本論文では第 3 章、第 4 章における用例調査によって上代・中古においては全体の約 3 割を占めていた形容詞テ形節の副詞的用法が中世以降、時代が下るに連れて減少したことを明らかにした。更に第 5 章、第 6 章においては形容詞テ形節以外の〈付帯状況〉を表す形式を取り上げ、その変遷を明らかにしてきた。このような第 3 章～第 6 章の議論に基づき、ここでは形容詞テ形節の副詞的用法の衰退についてその文法史上の位置づけを試みることとする。なお、序章第 2 節において述べたように本論文における「文法史上の位置づけ」とは他の形式や他の現象（他の形式に起きた変化）との関連において当該の現象を相対的に捉え直すことを意味するものである。

本章では形容詞テ形節の副詞的用法の衰退について形容詞連用形との棲み分け（第 2 節）、〈付帯状況〉を表す節における内部構造の変化（第 3 節）、〈付帯状況〉を表す形式の変遷（第 4 節）という 3 つの観点から文法史上の位置づけを試みる。更にこれらの検討を踏まえ、古代語における「テ」と現代語における「テ」との対応関係を試みに提示することとする（第 5 節）。

2. 形容詞テ形節と形容詞連用形との棲み分け

初めに形容詞テ形節と形容詞連用形との関係について検討する。ここでは形容詞テ形節

の副詞的用法について改めて〈付帯状況〉、〈空間〉、〈時間〉、〈数量〉の各タイプを概観し、形容詞連用形の用例と比較する。

まず、第2章第4節において規定したように本論文では「動作が行われる際の主体、または対象の付帯的な様子を表すもの」を〈付帯状況〉と呼ぶ。この〈付帯状況〉は語彙的な偏りはあるものの、中古語において（1）～（4）のように形容詞テ形節にも形容詞連用形にも同様の例が見られると言える[1]。

（1） a.「人々しくきらきらしき方にははべらずとも、心に思ふことあり、嘆かしく身をもてなやむさまになどはなくて過ぐしつべきこの世と、みづから思ひたまへし。心から、悲しきことも、をこがましく悔しきもの思ひをも、かたがたに安からず思ひはべるこそいとあいなけれ。（源氏物語・宿木・394）

b. 年ごろ、よろづに思ひ残すことなく過ぐしつれどかうしも砕けぬを、はかなきことのをりに、人の思ひ消ち、無きものにもてなすさまなりし御禊の後、一ふしに思し浮かれにし心鎮まりがたう思さるるけにや、…（源氏物語・葵・36）

（2） a. 若宮のいとうつくしうておはしますを見たてまつりたまひても、いみじく泣きたまひて、「おとなびたまはむを、え見たてまつらずなりなむこと。忘れたまひなむかし」とのたまへば、女御、せきあへず悲しと思したり。

（源氏物語・若菜下・215）

b. 御心なむいとよく、かたちもうつくしうおはしましける。

（落窪物語・巻之一・149）

（3） a. 聞こえさせつることの残りもまだいと多かり。艶にをかしうてはべりし。

（落窪物語・巻之一・92）

b. 大将も近く参りよりたまひて、御八講の尊くはべりしこと、いにしへの御事、すこし聞こえつつ、残りたる絵見たまふついでに、（源氏物語・蜻蛉・254）

（4） a. 桜は、花びら大きに、葉の色濃きが、枝ほそくて咲きたる。

（枕草子・木の花は・86）

b. 萩、いと色深う、枝たをやかに咲きたるが、朝露に濡れて、なよなよとひろごり伏したる。（枕草子・草の花は・121）

[1] 以下では（4）のように主節と異なる主語を四角形で囲んで示す。

〈付帯状況〉を表すものについては形容詞テ形節の副詞的用法の用例が 1 割未満になる中世後期以降にも形容詞テ形節・形容詞連用形ともに（5）のような用例が見られる。

（5） a. 義経折節灸治せられて，物の具召されうずる様も無うて御座ったが，鬨の声に驚いてかっぱと起き，鎧取って着，矢掻き負い，御馬参らせいと仰せらるれば，馬に鞍置き，縁の際に引き立て打ち乗って，…
〔mononogu meſareôzuru yŏmo nŏte gozattaga〕
（天草版平家物語・巻第四・第二十四・376）

b. …二十五日の卯の刻ばかりに御輿を寄せて，主上の六つに成らせらるるが，何心も無う御座ったを軈て御輿に召させまらしたれば，国母建礼門院も同じ御輿に召させられた〔nanigocoro mo nŏ gozatta uo〕
（天草版平家物語・巻第三・第六・181）

次に〈空間〉は「距離を表すもの」、〈時間〉は「動作・事態の速さに関わる修飾や動作・事態の起こる時期を特定するもの」、〈数量〉は「人や物の数を表すもの」である。これらはいずれも中古語において形容詞連用形にも同様の例が見られ、中世以降でも同様であることが窺える。〈空間〉について中古語の用例を（6）に示し[2]、中世以降の用例を（7）に示す。同じく〈時間〉について中古語の用例を（8）に示し、中世以降の用例を（9）に示し、同じく〈数量〉について（10）、（11）に示す。

（6） a.「いざ、近くて見む」とて、岸づらにもの立て、榻など取りもて行きて、下りたれば、足の下に、鵜飼ひちがふ。（蜻蛉日記・中・262）

b. …など思し寄りて、さるべき人して気色とらせたまひけれど、「世のはかなさを目に近く見しに、いと心憂く、身もゆゆしうおぼゆれば、いかにもいかにも、さやうのありさまはものうくなむ」と、…（源氏物語・早蕨・366）

（7） a. いみじく恐ろしく、ずちなけれど、親しき人々、「近くてよく見ん」とて寄りて見れば、棺より出でて、また妻戸口に臥したり。
（宇治拾遺物語・巻第三・十五・130）

b. かミ一かさねおつとりそへ、しつけしつたるわかひものが、二人してかひてで

[2] なお、形容詞連用形の場合は（6b）のように「目に近く見る」という形がある程度、固定化していた可能性もある。

う所で、そなたへおきりそひと申さうずれども、そなたのおしやらふハ、いや／＼これのはうちやう、ちかうミまいらせぬ、一手あそばひて御ミせ候へと、おしやらひでかなふまひ（虎明本狂言集・すずきぼうちょう（鱸庖丁）・417）

(8) a. かき絶え、慰む方なくて籠りおはするを、世人も、おろかならず思ひたまへることと見聞きて、内裏よりはじめたてまつりて、御とぶらひ多かり。はかなくて日ごろは過ぎゆく。（源氏物語・総角・331）

b. さてここちもことなることなくて、忌も過ぎぬれば、京に出でぬ。秋冬はかなく過ぎぬ。年かへりて、なでふこともなし。人の心のことなるときは、よろづおいらかにぞありける。（蜻蛉日記・上・126）

(9) a. ふるき友だち見まひに来り、久しうて御めにかゝつた。

（噺本大系第六巻・初音草噺大鑑・185，近世前期）

b. 「ようこそきたれ、こちへよばひ「つゞミおけもちて出て、もたせじやと云「なふひさしうミぬまに、おとなしうなつてすハ、此おりやうが所へハ、はう／＼からさゝをたくさんにたもるに、いハれぬ事をあそばいた、

（虎明本狂言集・びくさだ（比丘定・比丘貞）・121）

(10) a. うらやましがりて、「なほいま一つして、同じくは」など言へば、「まな」と仰せらるれば、聞き入れず、情けなきさまにて行くに、馬場といふ所にて、人おほくてさわぐ。（枕草子・五月の御精進のほど・185）

b. 権少将は、大将殿の上の御風の気おはするにことつけて、例の泊りたまへるに、いとものさわがしく、客人など多くおはするほどなれど、いと忍びて御車奉りたまふに、左衛門尉も候はねば、時々もかやうのことに、いとつきづきしき侍にささめきて、御車奉りたまふ。（堤中納言物語・463）

(11) a. としのほと六十計のちさき男の有徳らしきが、ゑもんさハやかに、四めゆひの紋つけて、なまめける女まじり、若党小者おほくて、此寺に参りけるを、寺前の茶薗より三十余の健なる男、つと走出、門外にて、彼親仁をとつてふせ、…

（噺本大系第四巻・新竹斎・182，近世前期）

b. 後を思案して少々は一門の衆を残されうずる事で有ったと申す者も多う御座った．飛騨の守と言う人は最愛の総領の景高が打たれたと，聞こえたれば，…

〔to mŏʃu mono mo vouô gozatta〕（天草版平家物語・巻第三・第五・174）

これらを踏まえると、いずれの修飾のタイプにおいても形容詞テ形節の用例と形容詞

連用形の用例とが共に見られることから、形容詞テ形節の副詞的用法の修飾のタイプはいずれも形容詞テ形節のみが担っていたものではないと言える。そして、形容詞テ形節の副詞的用法が衰退したことにより、その結果として連用形（「て」の下接しない形式）が副詞的用法を持ち、テ形節が非副詞的用法のみを持つという現代語と同様の状況が成立したものと考えられる。

つまり、形容詞テ形節の副詞的用法の衰退を形容詞連用形との棲み分けという観点から捉えれば、形容詞テ形節が副詞的修飾を担う形式から撤退したことで、古くは形容詞テ形節でも形容詞連用形でも担うことのできていた副詞的修飾が形容詞連用形のみによって担われるようになったということであり、これは形容詞連用形と形容詞テ形節との機能分化であると位置づけることができる。

3.〈付帯状況〉を表す節の内部構造の変化

次に〈付帯状況〉を表す節の内部構造の変化について検討する。形容詞テ形節の副詞的用法には（12）のように節内に主節と異なる主語（対象主語）が現れる場合がある。同様の現象は（13）のように非対格自動詞テ形節・ツツ節にも認められ、これらは上代・中古の資料には見られるものの、中世以降には和歌に一部が残るのみとなり、衰退したものと考えられる。

（12） a. 桜は、花びら大きに、葉の色濃きが、枝ほそくて咲きたる。

（枕草子・木の花は・86，再掲（4a））

b. …いたうけしきばみ横たはれる松の、木高きほどにはあらぬに、かかれる花のさま、世の常ならずおもしろし。例の弁少将、声いとなつかしくて葦垣をうたふ。（源氏物語・藤裏葉・439）

（13） a.「世語にもしつべき宮の御言葉かな」とさゝめき、忍びもあえず笑ひのゝしれば、いとはしたなく、顔赤みて居給ひて、「いなや、おぢの宰相の、去年の御心地の折『参りしかばかう申せ』といひしことを、…（栄花物語・巻第一・66）

b. 御前の前栽の色々乱れたる露のしげさに、いにしへのことどもかきつづけ思し出でられて、御袖も濡れつつ、女御の御方に渡りたまへり。

（源氏物語・薄雲・458）

これは〈付帯状況〉を表す節において古くは主節と異なる主語（対象主語）が存在し得たのに対して時代が下ると主節と異なる主語（対象主語）の存在が許されなくなる――存在に関する制限が強くなる――という節の内部構造の変化であると捉えられる。ここではこのような変化に関連する点として活格性の喪失との関わり、従属節分類との関わりの 2 点を取り上げ、それぞれ述べることとする。

3.1. 活格性の喪失との関わり

初めに活格性の喪失との関わりについて述べる。これは第 6 章第 4 節において述べた内容であり、その概要を改めて示すこととする。

まず、格助詞「ガ」に関する通時的な研究である山田（2010）は無助詞から「ガ」への移行や主語を表す「ノ」から「ガ」への移行に関する調査に基づいて主節においても従属節においても非対格自動詞述語・形容詞述語における「ガ」の進出が顕著であることを指摘している。これに加えて、主節における他動詞述語文の無助詞目的語に対して「ヲ」の付加が顕著であることにも注目し、「非対格自動詞述語文の無助詞主語と他動詞述語文の無助詞目的語に対する助詞の付加率が高いということは、内項（対象）を表示しようとする意識の現れであると考えられる」としてこれを「内項（対象）の明示化」と呼んでいる[3]（山田 2010:153）。

ここで山田（2010）が明らかにした一連の現象のうち、本章において重視したいのは対象が目的語（「ヲ」による標示）であるのか、主語（「ガ」による標示）であるのかという違いが明示される方向に変化したという現象である。本論文において取り上げた〈付帯状況〉を表す節における対象主語は古くは目的語と同様に〈付帯状況〉を表す節に存在していたものの、時代が下るに連れて〈付帯状況〉を表す節に存在することができなくなったと言える。つまり、対象主語が目的語とは異なる振る舞いをするようになったということである。

次に〈付帯状況〉を表す節に存在することができないという性質は動作主主語と同様のものであることから、対象主語は統語的に目的語との共通点の一つを失い、動作主主語との共通点の一つを獲得したということになる。この点は日本語における活格性の喪失という

[3] また、山田（2010:153）は「古代語から近代語にかけて、語と語の関係性が明示化され、未分化表現から分析的表現へと変化してきたと言われるが、「内項（対象）の明示化」はその一つの流れである」と述べている。

変化と関わっている可能性がある。日本語における活格性に関する議論は Vovin（1997）に早く、その後は柳田（2007）、Yanagida and Whitman（2009）、Whitman・柳田（2009）などの一連の研究や竹内（2008a，2008b，2012）などの研究に見られる[4]。これらの先行研究における議論の概要を整理すると、主に上代語における格標示（助詞「い」、「し」、「を」や無助詞名詞句など）や語順に関する分析から上代語に活格性が見られること、その活格性が 8 世紀後半以降の中古語においては失われたことが指摘されてきたということになる。

これらの先行研究において述べられている日本語における活格性のうち、本章の議論と特に関わるのは非対格自動詞の主語である対象主語と他動詞の目的語とが同様の振る舞いをしており、対象主語と動作主主語とが異なる振る舞いをしているという点である。

既に述べたように〈付帯状況〉を表す節においては古くは主節と異なる主語（対象主語）が存在し得たのに対して時代が下るとそれが許されなくなるという節の内部構造の変化が認められ、対象主語は目的語との共通点の一つを失い、動作主主語との共通点の一つを獲得したということになる。このように目的語との共通点を持っていた対象主語がそれを失って動作主主語との共通点を持つようになるという変化は活格性の喪失を反映した現象の一つであると考えることが可能であると言える[5]。また、本論文で取り上げた現象は節の内部構造に関わるものであり、先行研究において主に格標示や語順のような形態的な側面から指摘されてきた活格性の喪失についてその統語的な側面に関するものとして位置づけられる可能性がある。

3.2. 従属節分類との関わり

次に従属節分類との関わりについて述べる。本論文における形容詞テ形節の副詞的用法は南（1974，1993）による現代語の従属節分類に即して言えば、概ね「A 類」に相当する節である。南（1974，1993）は現代語の従属節分類における「A 類」について原則的に主節と異なる主語要素（ガ格の名詞句）が出現できないことを示している一方で、（14）のよう

[4] これら以外の先行研究については第 6 章第 4 節（脚注 23）に示した通りである。

[5] なお、先行研究においては主に上代語に活格性が認められることが指摘されており、中古語においては既に活格性を失い、対格言語へ移行したと述べるものが多い。本章で取り上げた現象は中古語の資料にも見られるという点で、先行研究の指摘とは異なる部分があるということになる。しかし、本章は中古語に活格性が認められる（または（強く）残っていた）と主張するものではない。先行研究において検討されている上代語を中心とした他の現象に鑑みれば、中古語における当該の形式には活格性の（部分的な）名残（のようなもの）があり、その名残（のようなもの）が中世以降に失われていったと捉えられる可能性がある。

に例外的に主語要素の現れる形容詞（形容動詞）連用形があることを指摘している[6]。

（14） a. 彼は憤激して，足音も高く部屋を出て行ってしまった。 （南 1993:80，（35））
b. 声高らかに歌っている。 （南 1993:80，（36））

古代語においては（15）のように「A 類」に相当する節である形容詞連用形・形容詞テ形節のいずれにも（14）と同様に主語要素が現れていたと言える。また、（16）のように〈付帯状況〉を表す非対格自動詞テ形節・ツツ節にも節内に対象主語が現れることを踏まえれば、古代語の「A 類」に相当する節においては主節と異なる対象主語の出現に関する制限が現代語に比して弱かったものと考えられ、この点が現代語との違いであると見ることも可能である。

（15）a. …いたうけしきばみ横たはれる松の、木高きほどにはあらぬに、かかれる花のさま、世の常ならずおもしろし。例の弁少将、声いとなつかしくて葦垣をうたふ。 （源氏物語・藤裏葉・439，再掲（12b））
b. 萩、いと色深う、枝たをやかに咲きたるが、朝露に濡れて、なよなよとひろごり伏したる。 （枕草子・草の花は・121，再掲（4b））
（16） a.「世語にもしつべき宮の御言葉かな」とさゝめき、忍びもあえず笑ひのゝしれば、いとはしたなく、顔赤みて居給ひて、「いなや、おぢの宰相の、去年の御心地の折『参りしかばかう申せ』といひしことを、…
（栄花物語・巻第一・66，再掲（13a））
b. 袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくらむ
（古今和歌集・巻第一・春歌上・2・紀貫之）
c. 御前の前栽の色々乱れたる露のしげさに、いにしへのことどもかきつづけ思し出でられて、御袖も濡れつつ、女御の御方に渡りたまへり。
（源氏物語・薄雲・458，再掲（13b））

[6] 南（1993）において片仮名で表記されている箇所を平仮名に改め、主節と異なる主語（対象主語）を四角形で囲んだ上で（14）に引用した。

4.〈付帯状況〉を表す形式の変遷

続いて〈付帯状況〉を表す形式の変遷に着目する。古代語において〈付帯状況〉を表す形式は複数あるが、本論文で述べてきたように形容詞テ形節の副詞的用法は中世にかけて衰退し、〈付帯状況〉を表す形式から撤退したと言える。一方で、動詞テ形節は古代語においては（17a）のような［対象主語―非対格自動詞］という構造と（17b）のような［目的語―他動詞］という構造とのいずれも〈付帯状況〉を表す形式として存在していたものの、中世以降には主に後者のみとなった。

（17） a. 袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくらむ

（古今和歌集・巻第一・春歌上・2・紀貫之，再掲（16b））

b. 参りたまへる人々も、おほかたの事のさまもあはれに尊ければ、みな袖濡らしてぞ帰りたまひける。（源氏物語・賢木・131）

このように〈付帯状況〉を表す形式において動詞テ形節が残存し、形容詞テ形節が衰退したのは動詞テ形節の場合には［対象主語―非対格自動詞］という構造を［目的語―他動詞］という構造に置き換えることが可能であったのに対して、同様に節内に対象主語が現れる構造を取る形容詞テ形節の場合にはそのような置き換えが不可能であったということに起因するものと考えられる。

また、形容詞テ形節の副詞的用法が衰退した後、近代以降に〈付帯状況〉を表す形式として定着したのが（18）のような「形容詞＋まま」である。中古語における「形容詞＋まま」は（18a）のように「～にまかせて」の意を表す〈随意〉の用例であり、（18b）のような〈付帯状況〉の用例は近代以降に定着したものである。

（18） a. …心苦しげにうちなびきたるには、ただ今も消えぬべき露のわが身ぞあやふく、草葉につけてかなしきままに、奥へも入らでやがて端に臥したれば、つゆ寝らるべくもあらず。（和泉式部日記・46）

b. きのうの残りのご飯を冷たいまま食べる。

（久池井 1995:56，（59a），下線は引用者による）

中古語においては形容詞テ形節の副詞的用法が〈付帯状況〉を表していたことに起因し

て「形容詞＋まま」が〈付帯状況〉を表していなかったと考え得る。しかし、形容詞テ形節の副詞的用法は中世以降に減少し、近世には〈付帯状況〉の用例も僅かになっており、このように形容詞テ形節が〈付帯状況〉を表す形式から撤退したことが「形容詞＋まま」の用法の拡大に（間接的に）繋がったものと捉えることは可能なのではないか。

つまり、形容詞テ形節の副詞的用法の衰退を〈付帯状況〉を表す形式の変遷という観点から捉えれば､動詞テ形節のように内部構造を置き換えることが不可能であったことから、〈付帯状況〉を表す形式から撤退し、そのような形容詞テ形節の副詞的用法の衰退が「形容詞＋まま」の用法の拡大（〈付帯状況〉の定着）に繋がった可能性があると位置づけられる。

5. 古代語の「テ」と現代語の「テ」との対応関係

最後に本論文において述べてきた形容詞テ形節に関する通時的な検討を踏まえ、古代語の「テ」と現代語の「テ」との対応関係を提示することを試みる。

初めに形式（形容詞テ形節／形容詞連用形）と用法（副詞的用法／非副詞的用法）とについて先行研究の指摘も踏まえつつ、古代語と現代語との対応関係を改めて整理する。まず、古代語においては形容詞テ形節に副詞的用法と非副詞的用法とが見られ、形容詞連用形にも副詞的用法と非副詞的用法とが見られる[7]。また、現代語においては形容詞テ形節に副詞的用法が認められず、非副詞的用法の用例のみが見られ[8]、形容詞連用形には副詞的用法と非副詞的用法とのいずれも見られる[9]。つまり、古代語においては形容詞テ形節・形容詞連用形が共に副詞的用法・非副詞的用法のいずれも持っていたのに対し、現代語においては形容詞テ形節が副詞的用法を持たなくなったと言える。

次にこの整理を基に古代語の「テ」と現代語の「テ」との対応関係について先行研究の指摘を踏まえつつ、検討していく。これに先立って現代語のテ形節に関する内丸（2006a, 2006b）の研究を概観することとする。

初めに現代語の動詞テ形節を統語構造に基づいて分類することを試みた内丸（2006a）の

---

[7] これは特に竹部（2001）が本論文における「非副詞的用法」に相当する分類として「因果関係」、「並立関係」を掲げていることを踏まえたものである。竹部（2001）の詳細は第 1 章第 2 節において整理した通りである。

[8] これは吉永（1995）、竹沢（2001）、津留崎（2003）、内丸（2006b）、大島（2015）の指摘を踏まえたものである。これらの研究については第 1 章第 4 節において整理した通りである。

[9] これは特に津留崎（2003）が本論文における「非副詞的用法」に相当する分類として「並列」、「前提」、「原因（「先行原因」、「条件」、「根拠」）」などを掲げていることを踏まえたものである。その詳細は第 1 章第 4 節において整理した通りである。

研究を取り上げる[10]。内丸（2006a:7）は 3 つのテスト[11]を用いて動詞テ形節を「VP で付加構造を形成」するものと「TP で等位構造を形成」するものとに二分し得ることを指摘している。更に前者（(19a)、(19b)）が従来の研究における「付帯状況」を表すものに当たり、後者（(19c)、(19d)）が同じく「継起」、「原因・理由」、「並列」を表すものに当たると述べている。また、内丸（2006a）はこの二分に基づいて「付加構造」を形成する「テ」は「アスペクトマーカー」として機能し、「等位構造」を形成する「テ」は「接続形式」として機能することを指摘している[12]。

(19) a. 花子は手を叩いて笑った （内丸 2006a:7, (32a)）
b. 花子は着物を着て料理を作った （内丸 2006a:8, (33a)）
c. 太郎はウイスキーを貰って一口飲んだ （内丸 2006a:1, (1b[13]), 「継起」）
d. 道幅が狭くなって路が急になった （内丸 2006a:1, (1d[14]), 「並列」）

これについて内丸 (2006a:7) は (19a)、(19b) のような「付帯状況」を表すテ形節が (20a)、(20b) のように「進行相あるいは結果相のアスペクトを表すという特性がある」こと、「付帯状況」を表すテ形節には「要る」、「優れる」などの「状態動詞が生起できないという特性」があることをそれぞれ確認し、「これらのことから付加構造を形成する付帯状況のテは，それ自体がアスペクトマーカーとして機能しているといえる」と述べている。

(20) a. 花子は笑った時，手を叩いていた（進行相） （内丸 2006a:8, (32b)）
b. 花子は料理を作った時，着物を着ていた（結果相） （内丸 2006a:8, (33b)）

---

[10] 内丸（2006a）はテ形節の統語構造について述べた研究である佐藤（1996）や三原（1997）などを踏まえた議論である。また、内丸（2006a）以降にテ形節を対象として統語的に検討した研究として吉永（2012a，2012b）や三原（2015）などが見られる。

[11] 具体的には「「しか―ない」テスト」、「「さえ」焦点化テスト」、「擬似分裂文テスト」である。

[12] 関連する議論は「太郎には線が曲がって見えた」（竹沢 2015:243, (1b)）のように現代語における「「見える」認識動詞構文」に現れる動詞テ形節について分析した竹沢（2015）にも見られるところである。

[13] 内丸（2006a）はこの例を「cf. 仁田 1995:105（5）」として挙げており、仁田（1995a:105）においては「和泉もウイスキーを貰って、一口飲んだ。(偕老)」という用例（実例）であることを補足しておく。

[14] 内丸（2006a）はこの例を「cf. 仁田 1995:124」として挙げており、仁田（1995a:124）においては「〈並列〉を表すシテ節」について説明する文章の中で「道幅が狭くなって路も急になる、(城の崎) →道幅ガ狭クナルシ路モ急ニナル、」のようにこの用例（実例）を示していることを補足しておく。

また、内丸（2006a:8）はこれに対して「等位構造を形成するテ形節」は（21）のように「状態動詞」が生起することから「等位構造を形成する継起，原因・理由，並列用法のテは接続形式として機能しているといえる」と結論づけている。

（21） a. 花子は芸術の分野でとても優れていて，多くの学生を抱えている

b. 花子はフランス語ができて，太郎はドイツ語ができる

（内丸 2006a:8，（34））

更に現代語における形容詞テ形節を取り上げた内丸（2006b）の議論を内丸（2006a）の指摘と照らし合わせると、現代語の形容詞テ形節の「テ」は「等位構造」を形成するものに限られており、動詞テ形節の「テ」における「アスペクトマーカー」に当たる機能はないということになる。

このような現代語の状況に鑑みれば、副詞的用法も非副詞的用法も見られる古代語の形容詞テ形節と副詞的用法が見られない現代語の形容詞テ形節との間には「テ」の機能という点で差異があると考えられる。なお、既に述べたように内丸（2006a）は「付帯状況」を表す動詞テ形節（「付加構造のテ形節」）に「状態動詞」が生起できないことなどを踏まえてこの「テ」を「アスペクトマーカー」と看做している。これに対して古代語に見られる副詞的に働く形容詞テ形節の「テ」については「状態動詞」と同様に「状態」という性質を持つ形容詞が生起できているという点で、この「テ」を動詞テ形節の場合と同様に「アスペクトマーカー」と呼ぶことは適当でないものと考えられる。

そこで、本章においては〈付帯状況〉を表す動詞テ形節（内丸 2006a における「付加構造のテ形節」）の「テ」――「アスペクトマーカー」として働く「テ」――とは異なるものとして、副詞的に働く形容詞テ形節の「テ」を「副詞的修飾化マーカー」と仮に呼ぶこととする。なお、本論文における非副詞的用法のテ形節については内丸（2006a）に倣って「接続形式」と呼ぶこととする。

これに基づいて古代語の「テ」と現代語の「テ」との対応関係を整理すると、古代語においては（22）のように形容詞テ形節の「テ」に「副詞的修飾化マーカー」と「接続形式」とのいずれも存在し、（23）のように動詞テ形節の「テ」に「アスペクトマーカー」と「接続

形式」とのいずれも存在しているのに対し[15]、現代語においては（24）のように形容詞テ形節の「テ」が「副詞的修飾化マーカー」として働くことはできず[16]、専ら「接続形式」として働き、動詞テ形節については（25）のように「アスペクトマーカー」と「接続形式」とのいずれも存在しているということになる。

（22） a. その竹の中に、もと光る竹なむ一すぢありける。あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。

（竹取物語・17,「副詞的修飾化マーカー」の「テ」）

b. その春、世の中いみじう騒がしうて、松里の渡りの月かげあはれに見し乳母も、三月ついたちに亡くなりぬ。せむかたなく思ひ嘆くに、物語のゆかしさもおぼえずなりぬ。（更級日記・296,「接続形式」の「テ」）

（23） a. 御子此の事を極て半無と思し食ければ、顔を赤めて立せ給るを、入鹿猶事とも思ざる気色にて立りければ、大織冠其の御沓を迷ひ取て、「我れ悪き事を翔つ」とも思ざりけり。〔顔ヲ赤メテ立セ給ルヲ、〕

（今昔物語集・巻第二十二・第一・160,「アスペクトマーカー」の「テ」）

b.「いとかたはらいたきざわかな。物の音すむべき夜のさまにもはべらざめるに」と聞こゆれど、「なほあなたに渡りて、ただ一声ももよほしきこえよ。空しくて帰らむがねたかるべきを」とのたまへば、…

（源氏物語・末摘花・268,「接続形式」の「テ」）

---

[15] なお、古代語においては（i）、（ii）のように「状態動詞」（「あり」、「優る」）のテ形節が副詞的に働いていると見受けられる用例があり、これは現代語において「アスペクトマーカー」の「テ」によるテ形節に「状態動詞」が生起できないという内丸（2006a）の議論とは異なるものである。この点で、現代語における「アスペクトマーカー」の「テ」と古代語におけるそれとを全く同じものと看做し得るかという点については検討の余地が残されている。

（i） 御息所は、心ばせのいと恥づかしく、よしありておはするものを、いかに思しうむじにけん、といとほしくて参でたまへりけれど、（源氏物語・葵・26）

（ii）いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。

（源氏物語・桐壺・17，近藤 1997:50 に「A 類」として挙げられている）

[16] 現代語における形容詞テ形節の中には（iii）、（iv）のような「～ていらっしゃる」の用例があり、このような場合の「テ」は「副詞的修飾化マーカー」の「テ」に相当するようにも見えるものである。しかし、これは「いらっしゃる」という動詞にほぼ限定された固定的な形式と看做し得ることから、本章ではこれを形容詞テ形節が動詞「いらっしゃる」を副詞的に修飾しているとは考えないこととする。

（iii）ところで陛下は、生物だけではなく科学全般に造詣が深くていらっしゃる。

（松崎敏彌『明仁天皇陛下』三心堂出版社・1995）

（iv）「警視は、ご主人を亡くされたあと独身のままだ、とうかがいました。まだお若くていらっしゃるのに、なぜ再婚なさらないのかと不思議なのです」

（逢坂剛『鴦の巣』集英社・2002）

(24) a. *美しくて座っている　（「副詞的修飾化マーカー」の「テ」を想定した作例）

b. そのトマトは赤くて，おいしい　（内丸 2006b:43，(1a)，「接続形式」の「テ」）

(25) a. 花子は手を叩いて笑った

（内丸 2006a:7，(32a)，再掲（19a)，「アスペクトマーカー」の「テ」）

b. 太郎はウイスキーを貰って一口飲んだ

（内丸 2006a:1，(1b)，再掲（19c)，「接続形式」の「テ」）

なお、内丸（2006a）などの指摘を踏まえれば、現代語における動詞テ形節の「テ」が「アスペクトマーカー」として働く場合には節内に主語要素を含み得ないということになるものの、本論文において述べてきたように古代語においては動詞テ形節の場合にも形容詞テ形節の場合にも（26）のように節内に主節と異なる主語（対象主語）が現れる用例がある。このように古代語の副詞的に働く節――多くは〈付帯状況〉を表す節――においてどのように主語を認可していたのかという点については更に検討する余地が残されていると言える[17]。

(26) a. 袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくらむ

（古今和歌集・巻第一・春歌上・2・紀貫之，再掲（16b)）

b. 桜は、花びら大きに、葉の色濃きが、枝ほそくて咲きたる。

（枕草子・木の花は・86，再掲（4a)，(12a)）

最後に改めて南（1974）における現代語の従属節分類との対応関係について確認しておくこととする。内丸（2006a）は「アスペクトマーカー」として働く「テ」による動詞テ形節（付加構造）と「接続形式」として働く「テ」による動詞テ形節（等位構造）との違いは南（1974）の従属節分類における「A 類」と「B 類、C 類」との区別に対応するものであることを指摘している。

すなわち、南（1974）に即した形で従属節分類を捉えた場合には古代語における「A 類」の節に当たる分類に所属する形式の中に「形容詞テ形節」（本章における「副詞的修飾化

[17] 本章では古代語の動詞テ形節において副詞的に働くものを内丸（2006a）に倣って「アスペクトマーカー」としたが、古代語では節内に主節と異なる主語が現れ得たということに鑑みれば、現代語における「アスペクトマーカー」と全く同じものとは言えない可能性もある。これについては脚注 15 において述べた点と共に更に検討を深める余地がある。

マーカー」の「テ」による形容詞テ形節）も含まれていたということになる。このような検討の結果は従属節の各分類に所属する形式が時期ごとに異なっている可能性を示唆するものであると言える。

6. おわりに

本章では形容詞テ形節の副詞的用法の衰退について形容詞連用形との棲み分け、〈付帯状況〉を表す節における内部構造の変化、〈付帯状況〉を表す形式の変遷の 3 つの観点から文法史上の位置づけを試みた。更に古代語の「テ」と現代語の「テ」との対応関係を試みに提示した。本章において述べたことは次の通りである。

まず、形容詞連用形との棲み分けについては形容詞テ形節が副詞的修飾を担う形式から撤退したことにより、古くは形容詞テ形節でも形容詞連用形でも担うことのできていた副詞的修飾が形容詞連用形のみによって担われるようになったと言える。これは形容詞連用形と形容詞テ形節との機能分化であると位置づけられる。

次に〈付帯状況〉を表す節の内部構造の変化については古くは節内に主節と異なる主語（対象主語）が存在し得たのに対して時代が下るとその存在が許容されなくなるという変化であると位置づけられる。更にこれが日本語における活格性の喪失という変化と関わっている可能性があること、古代語の「A 類」に当たる節には主節と異なる対象主語の出現が許されていた可能性があることが示唆される。

続いて〈付帯状況〉を表す形式の変遷については動詞テ形節が内部構造を［対象主語―非対格自動詞］から［目的語―他動詞］に置き換えることが可能であったのに対し、同様に節内に対象主語が現れる構造を取る形容詞テ形節はそのような置き換えが不可能であったことから、〈付帯状況〉を表す形式から撤退したと考えられる。また、形容詞テ形節の副詞的用法の衰退が「形容詞＋まま」の〈付帯状況〉の用法への拡大に繋がった可能性がある。

最後に古代語の「テ」と現代語の「テ」との対応関係について古代語では形容詞テ形節の「テ」の中に「副詞的修飾化マーカー」として働く「テ」があり、これが現代語の形容詞テ形節の「テ」には認められないという対応関係を試みに提示した。つまり、本論文において中心的に検討してきた形容詞テ形節の副詞的用法の衰退という現象は古代語に存在していた「副詞的修飾化マーカー」として働く「テ」が無くなるという変化であると位置づけられる可能性があることを指摘した。

終章

1. 本論文の結論

本論文では形容詞テ形節の副詞的用法について通時的な用例調査を実施し、その変遷を明らかにしてきた。ここでは第 3 章～第 7 章において述べたことを改めて示すことを以て本論文の結論とする。

第 3 章では中古語における形容詞テ形節について副詞的用法と非副詞的用法とを分類する手順を示した上で、副詞的用法と非副詞的用法との比較、形容詞テ形節と形容詞連用形との比較をそれぞれ行い、中古語における形容詞テ形節の様相を明らかにすることを試みた。まず、副詞的用法と非副詞的用法とを分類する手順について述べた上で、用例調査を実施し、中古語において副詞的用法が形容詞テ形節全体の約 3 割を占めていたことを明らかにした。次に形容詞テ形節の副詞的用法について修飾のタイプの観点から〈付帯状況〉、〈空間〉、〈時間〉、〈数量〉の 4 つに分けられることを示し、中古語においては〈付帯状況〉が約 9 割を占めていることから、これが中心的なタイプであったことを指摘した。続いて形容詞連用形の副詞的用法との差異については形容詞テ形節の副詞的用法に比して形容詞連用形の副詞的用法の修飾のタイプが多様であり、形容詞テ形節の副詞的用法の修飾のタイプの方が限定的であることを示した。更に形容詞と動詞との組み合わせによっては I 類の形容詞テ形節が専ら〈付帯状況〉を表し、形容詞連用形の副詞的用法が〈付帯状況〉以外を表すという傾向を示す場合があるものの、基本的に〈付帯状況〉、〈空間〉、〈時間〉、〈数量〉の 4 つのタイプにおいては両者の間に明確な差異が認め難いことを述べた。

第 4 章では上代・中古から近世にかけての用例調査を実施し、形容詞テ形節の副詞的用法の変遷を明らかにすることを試みた。通時的な用例調査においては特に量的推移、テ形節となる形容詞とテ形節に下接する動詞との語彙的特徴、修飾のタイプの 3 つの観点から形容詞テ形節の副詞的用法が衰退していく過程を捉えることを目指した。まず、量的推移としては上代・中古において約 3 割を占めていた副詞的用法が中世から近世にかけて次第

に減少していくという変遷を明らかにした。次に語彙的特徴としては副詞的用法の著しい減少に伴ってテ形節となる形容詞や下接する動詞の語彙的な偏りが認められなくなること、テ形節となる形容詞と下接する動詞との組み合わせのバリエーションにも変化が見られることを指摘した。続いて修飾のタイプに着目すると、上代から近世に至るまで〈付帯状況〉がⅠ類の形容詞テ形節の中心的なタイプであり、この〈付帯状況〉を表す用例の大幅な減少がⅠ類の形容詞テ形節の衰退に大きく関わっていることを明らかにした。

第 5 章では形容詞テ形節の副詞的用法における修飾のタイプの中で大部分を占めていた〈付帯状況〉に着目し、同じく〈付帯状況〉を表す形式である「形容詞＋まま」の変遷を取り上げた。まず、現代語と中古語とにおける「形容詞＋まま」を比較すると、現代語には〈随意〉を表す用例と〈付帯状況〉を表す用例とがあるのに対して、中古語においては〈随意〉を表す用例のみが見られるという両者の差異を明確にした。その上で〈付帯状況〉を表す用例に着目し、通時的な用例調査を実施した結果、〈主体の付帯状況〉は中世前期から僅かに見られ、〈対象の付帯状況〉は近世以降に見られるようになり、いずれも近代以降に定着することを明らかにした。また、「形容詞＋まま」が〈付帯状況〉を表すようになったことの背景として〈付帯状況〉を表す「動詞連用形＋た＋まま」の成立や〈付帯状況〉を表す形容詞テ形節の衰退が関わっている可能性を指摘した。

第 6 章では〈付帯状況〉を表す非対格自動詞節（テ形節・ツツ節）に主節と異なる主語（対象主語）が現れる用例を取り上げ、上代から中世にかけての用例調査を実施した。その結果、〈付帯状況〉を表す非対格自動詞のテ形節に主節と異なる主語（対象主語）が現れる用例が見られるのは主に中世前期までであり、それ以降は和歌などに一部が残るのみとなること、ツツ節にも同様の構造を取る用例が上代・中古に見られることを明らかにした。また、このような〈付帯状況〉を表す節内に主節と異なる主語（対象主語）が現れなくなるという変化は形容詞テ形節の副詞的用法と同様であることを示した。更にこのような非対格自動詞節における変化について対象が目的語（「ヲ」による標示）であるのか、主語（「ガ」による標示）であるのかという違いが明示される方向へと変化したこととの関連性を指摘した上で、当該の変化が日本語における活格性の喪失という変化を反映した現象の一つとして捉えられる可能性があることを述べた。

第 7 章では形容詞テ形節の副詞的用法の衰退について形容詞連用形との棲み分け、〈付帯状況〉を表す節における内部構造の変化、〈付帯状況〉を表す形式の変遷の 3 つの観点から文法史上の位置づけを試みた。まず、1 点目については形容詞テ形節が副詞的用法を担う形式から撤退したことにより、古くは形容詞テ形節でも形容詞連用形でも担うことのでき

ていた副詞的用法が形容詞連用形のみによって担われるようになったという形容詞連用形と形容詞テ形節との機能分化という変化であると位置づけ得ることを指摘した。次に 2 点目については古くは節内に主節と異なる主語（対象主語）が存在し得たのに対して時代が下るとその存在が許容されなくなるという変化であると位置づけられることを述べた。更にこれは対象主語が目的語との共通点を失い、動作主主語との共通点を獲得するという変化であることから、日本語における活格性の喪失という変化と関わっている可能性が示唆されることを述べた。続いて 3 点目については動詞テ形節が内部構造を［対象主語―非対格自動詞］から［目的語―他動詞］に置き換えることが可能であったのに対し、同様に節内に対象主語が現れる構造を取る形容詞テ形節の副詞的用法はそのような置き換えが不可能であったことに起因して〈付帯状況〉を表す形式から撤退したものと捉えられることを指摘した。更に形容詞テ形節の副詞的用法の衰退が「形容詞＋まま」の〈付帯状況〉の用法への拡大に繋がった可能性があることを述べた。最後に古代語における「テ」と現代語における「テ」との対応関係については古代語において形容詞に下接する「テ」の中に「副詞的修飾化マーカー」が存在したと考え得ることから、形容詞テ形節の副詞的用法の衰退は古代語に存在していた「副詞的修飾化マーカー」としての「テ」が無くなっていくという変化であると位置づけられる可能性があることを示した。

2. 本論文の成果

次に本論文の成果を述べる。序章第 3 節において述べたように、本論文は特にテ形節に関する研究、副詞的修飾に関する研究、従属節に関する研究に対して意義を持つものであると考えられることから、ここではそれぞれに対する成果を順に掲げることとする。

まず、テ形節に関する研究においては、これまでの研究で通時的に扱われてこなかった形容詞テ形節の副詞的用法の変遷を明らかにしたという点で、新規性を持つものであると言える。本論文における主な調査対象が古典語（上代語～近世語）であることに照らして古典語におけるテ形節の実態の一部を解明したものと位置づけられると同時に、どのような過程を経て現代語におけるテ形節（の用法や機能）が成立したのかという点で現代語のテ形節への示唆も含むものであると考えられる。更にこれまでの研究においては技術的に困難であった用例の収集に関する課題をコーパスの利用によって解決し、質的な分析に加えて量的な分析を導入するというアプローチはテ形節の通時的研究において新たな方法

を提示するものであると言える。

次に副詞的修飾に関する研究においては、形容詞テ形節の副詞的用法を通時的に捉え、実際にその変遷を描き出すことを通して副詞的修飾を担う形式について通時的な変化を問い直す必要性を提示したものであると位置づけられる。本論文においては形容詞テ形節の副詞的用法と形容詞連用形の副詞的用法とを比較し、古代語における両者の関係と中世以降の機能分化の可能性とについて指摘した。また、形容詞テ形節以外に「形容詞＋まま」と非対格自動詞テ形節・ツツ節とを取り上げることで、形容詞テ形節の副詞的用法が担う修飾のタイプの中で特に大部分を占める〈付帯状況〉を表す形式についてその内部構造の変化や形式間の関係の変化についても論じた。このような副詞的修飾を担う形式としての形容詞連用形や形容詞テ形節は古代語と現代語とを比較することも古代語から現代語にかけて通時的に検討することも詳細には試みられてこなかったものであり、本論文はこのような研究において先駆的な試みとして位置づけられる。本論文の視点や方法はこれまで共時的な分析に留まっていた当該分野の研究を通時的な分析へと押し進める指針となるのではないだろうか。

続いて従属節に関する研究においては、形容詞テ形節の副詞的用法が「A 類」の節（南 1974，1993）に相当するものであることから、本論文においてその変遷を明らかにしたことは従属節分類の一部（「A 類」に相当する節）に関する通時的な研究を進展させたという点で意義を持つものと言える。本論文では南（1974，1993）に即した従属節分類において古代語では「A 類」に相当する形式の中に形容詞テ形節も含まれていたことを指摘した。これは「A 類」に相当する節に属する形式が時期ごとに変わる――入れ替わりがある――ということを示唆するものであり、その一例を具体的に提示したことが本論文の成果であると考えられる。

3. 本論文の課題

最後に本論文において扱いきれなかった課題について述べる。

まず、第 4 章で明らかにした形容詞テ形節の副詞的用法の変遷についてはテ形節となる形容詞ごとに個別に検討することが求められる。具体的に言えば、特に大部分を占める「無し」のテ形節について存在表現――存在しないことの表し方――との関わりを検討することや近世以降に目立って見られる「久し」のテ形節について「久しうで」や「久しぶり

に」などの周辺の形式との関わりを検討することなどが課題として挙げられる。また、第4章において示した形容詞テ形節全体の通時的な用例調査の結果（付表 B-1、付表 B-2）を見ると、時代が下るに連れて「ては」や「ても」のように係助詞が下接して仮定を表すものが増えているという可能性も示唆される。本論文においては議論の射程を超えていることから、措くこととしたが、このような形容詞テ形節の非副詞的用法の変遷についても検討の余地がある。

次に第 5 章で取り上げた「形容詞＋まま」については本論文において中心的な分析の対象としなかった〈随意〉の用法の変遷を明らかにすることや「形容詞＋まま」の用法と形容詞の意味分類との関わりを検討することにより、「形容詞＋まま」の変遷の全体像が明らかになるものと考えられる。また、これに関わる点として〈付帯状況〉を表す「形容詞＋まま」と他の形式との関係について論ずる上では本論文において言及した「動詞連用形＋た＋まま」に加えて「動詞連用形＋た＋なり（に／で）」などの形式についても検討する余地があると言える[1]。

続いて第 6 章第 4 節、第 7 章第 3 節においては形容詞テ形節の副詞的用法や非対格自動詞テ形節・ツツ節について節内に主節と異なる主語（対象主語）が現れる用例が見られなくなるという変化が日本語における活格性の喪失という変化と関連づけられる可能性を示した。この活格性の喪失という変化については先行研究においても様々な議論のあるところであり、更なる検討が必要であるように思われる。

また、第 7 章第 5 節において試みに提示した古代語の「テ」と現代語の「テ」との対応関係については古代語における「副詞的修飾化マーカー」に関する詳細な検討や古代語と現代語とにおける動詞テ形節の「アスペクトマーカー」が同様のものと看做し得るのかという点に関する検討を次なる課題としたい。

これらに加えて、本論文では形容詞テ形節の副詞的用法を中心的に扱い、それに関わる形式として中古語における形容詞連用形、上代から現代にかけての「形容詞＋まま」、上代から中世にかけての非対格自動詞節の一部についても取り上げてきた。特に中古語における形容詞連用形についてはその一部に現代語と異なる用法が見受けられるようであり[2]、通時的な用法の変化を検討することは今後の課題である。更にこのような形容詞連用形における変化が形容詞テ形節の副詞的用法の変化とどのように関わっているのかという点について

---

1 具体的には近世以降に見られる（i）のような用例である。
（i）とかく磯江や小つゆは帯したなりに寐つけてゐるよつて　（洒落本・嘘之川・62）

2 第 3 章第 5 節（脚注 30）において述べたように〈評価〉を表す連用修飾について古代語と現代語との間に差異が見られることを小田（2015）が指摘している。

も明らかにすることが求められる。また、現代語における形容詞連用形には主節と異なる主語が現れる場合があり[3]（南 1973，1993）、現代語における「A 類」に相当する節に例外的に主語が現れることについてはその条件などに関して検討の余地があると考えられる[4]。

これに関連して本論文において取り上げた形式以外にも形容詞テ形節の副詞的用法と近い用法を持つ周辺の形式として、形容動詞テ形節・連用形、「名詞＋にて」、「名詞＋で」、「形容詞連用形＋して」、「形容詞＋ながら」などがある。これらについても本論文と同様の方法で通時的変化を明らかにし得る可能性がある。また、動詞節については「～ず」、「～ながら」などの〈付帯状況〉を表す形式を取り上げることで、〈付帯状況〉を表す節の体系的な変遷や形式間の競合関係についてもより詳細に解明し得ると考えられる。また、このような検討は従属節分類（特に「A 類」に相当する節）を通時的に捉えるという点においても意義のあるものであると言える。

なお、本論文では形容詞テ形節・連用形について取り上げたものの、形容詞連用形のウ音便については扱い得なかった。形容詞連用形のウ音便は主に中古語を対象とした辛島（1961）、桜井（1966）、北原（1967）、江口（1975）、甲斐（1978）などの各研究によって「く」の直前の音節の母音が i、e、a、o、u の順にウ音便率が高いこと（北原 1967; 甲斐 1978）や青表紙本『源氏物語』においては形容詞連用形の文中での用法によってウ音便率が異なること（甲斐 1978）などが指摘されている。また、近世期の形容詞連用形のウ音便を扱った矢島（1986）も文中での用法によってウ音便率が異なることを指摘している。本論文における形容詞テ形節の副詞的用法と非副詞的用法との分類や副詞的用法のうちの修飾のタイプについてウ音便の生起と何らかの関連があるかという点を検討することは課題として残されている。

更に本論文においては専ら日本語における形容詞テ形節を対象としてきたが、内丸・金・朴・竹沢（2011）のように現代日本語の形容詞テ形節とそれに対応する韓国語の「고(go)」形とを照らし合わせ、形容詞の等位接続に現れる形態の共通点・相違点を指摘した研究もある。このような研究を参考にして古代語の形容詞テ形節と他言語の対応する形式とを照らし合わせるという試みも今後の課題と言える。

---

[3] 具体的には第 3 章第 5 節などでも挙げたように（ii）のような用例である。これに関連して「名詞＋形容詞」という語構成に関する斎賀（1957）、野村（1977）、竝木（1988）などの研究や統語論の立場から「名詞＋形容詞」を取り上げた由本（1990）、岸本（2014）などの研究があるが、いずれも従属節分類との関わりについては言及していない。

（ii）彼は憤激して，足音も高く部屋を出て行ってしまった。

（南 1993:80，（35），片仮名を平仮名に改め、主節と異なる主語を四角形で囲んだ）

[4] これについては田窪（1987）や金水（1987）にも部分的に指摘のあるところである。

付録　本論文の調査範囲における形容詞テ形節の副詞的用法の全用例

・「資料区分」は第 4 章における付表 B-1、付表 B-2 の「資料区分」に対応する

・「タイプ」は第 3 章・第 4 章における「修飾のタイプ」の各分類に対応する

・「ページ等」の山括弧内の数字は同一資料が複数巻（冊）ある場合の巻番号を示す

時代区分	資料区分	資料名	巻名等	ページ等	用例	タイプ
上代		風土記逸文	信濃國	461	とほくてみれば、はゝきをたてたるやうにてたてり。	空間
上代		風土記逸文	信濃國	461	ちかくてみれば、それに似たる木もなし。	空間
上代		風土記逸文	日向國	525	始テホリ出サルル時、頭ノ黒クテサシ出タリケル故ニヤ。	付帯状況
上代		萬葉集	巻第十一・2615	〈3〉230	しきたへの枕をまきて妹と我と寝る夜はなくて年そ経にける〔無而〕	付帯状況
上代		萬葉集	巻第十四・3524	〈3〉505	まを薦のふの間近くて逢はなへば沖つま鴨の嘆きそ我がする〔知可久弖〕	空間
上代		萬葉集	巻第十九・4209	〈4〉324	谷近く家は居れども木高くて里はあれどもほととぎす〔許太加久氐〕	付帯状況
中古	和文	竹取物語		17	それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。	付帯状況
中古	和文	竹取物語		60	みやつこまろが申すやう、「いとよきことなり。なにか。心もとなくてはべらむに、ふと御幸して御覧ぜば、御覧ぜられなむ」	付帯状況
中古	和文	古今和歌集	巻第五・秋歌下・297	132	見る人もなくて散りぬる奥山の紅葉は夜の錦なりけり	付帯状況
中古	和文	古今和歌集	巻第十三・恋歌三・629	247	あやなくてまだきなき名の龍田河渡らでやまむものならなくに	付帯状況
中古	和文	古今和歌集	巻第十七・雑歌上・927	351	主なくてさらせる布をたなばたにわが心とや今日はかさまし	付帯状況
中古	和文	土左日記		52	なかりしもありつつ帰る人の子をありしもなくて来るがかなしさ	付帯状況
中古	和文	伊勢物語	一	113	思ほえず、ふる里にいとはしたなくてありければ、心地まどひにけり。	付帯状況
中古	和文	伊勢物語	六	119	まだいと若うて、后のただにおはしける時とや。	付帯状況
中古	和文	伊勢物語	二十二	134	むかし、はかなくて絶えにける仲、なほや忘れざりけむ、女のもとより、	付帯状況
中古	和文	伊勢物語	二十三	136	さて年ごろふるほどに、女、親なく、頼りなくなるままに、もろともにいふかひなくてあらむやはとて、	付帯状況
中古	和文	伊勢物語	三十四	145	いへばえにいはねば胸にさわがれて心ひとつに嘆くころかな おもなくていへるなるべし。	付帯状況
中古	和文	伊勢物語	六十五	169	仏の御名を御心に入れて、御声はいと尊くて申したまふを聞きて、女はいたう泣きけり。	付帯状況
中古	和文	伊勢物語	六十九	173	わが人をやるべきにしあらねば、いと心もとなくて待ちをれば、	付帯状況
中古	和文	伊勢物語	七十八	181	いくばくもなくてもて来ぬ。	時間
中古	和文	伊勢物語	八十三	187	しひて御室にまうでておがみたてまつるに、つれづれといとものの悲しくておはしましければ、やや久しくさぶらひて、	付帯状況
中古	和文	伊勢物語	百四	204	むかし、ことなることなくて尼になれる人ありけり。	付帯状況
中古	和文	伊勢物語	異十五	225	男来て見ればなし。いとねたくてをりけり。	付帯状況
中古	和文	大和物語	七	259	いささかなることによりてはなれにけれど、あくとしもなくてやみにしかばにやありけむ、男もあはれと思ひけり。	付帯状況
中古	和文	大和物語	九十一	314	よしある女なりければ、よくておこせてむと思ひたまひけるに、	付帯状況
中古	和文	大和物語	九十一	314	色などもいと清らなる扇の、香などもいとかうばしくておこせたる。	付帯状況
中古	和文	大和物語	百六	332	夜な夜なにいづと見しかどはかなくて入りにし月といひてやみなむ	付帯状況
中古	和文	大和物語	百二十六	347	筑紫にありける檜垣の御といひけるは、いとらうあり、をかしくて世を経たる者になむありける。	付帯状況
中古	和文	大和物語	百四十八	375	男は、「かくはかなくてのみいますかめるを見捨ててはいづちもいづちも、えいくまじ」	付帯状況
中古	和文	大和物語	百四十八	376	むつかしきことなどもなくてありければ、	付帯状況
中古	和文	大和物語	百四十八	376	「いかであらむ」など、悲しくてよみける。	付帯状況

時代区分	資料区分	資料名	巻名等	ページ等	用例	タイプ
中古	和文	大和物語	百四十九	383	久しくいかざりければ、つつましくて立てりける。	付帯状況
中古	和文	大和物語	百四十九	383	さてかいまめば、われにはよくて見えしかど、いとあやしきさまなる衣を着て、大櫛を面櫛にさしかけてをり、	付帯状況
中古	和文	大和物語	百五十五	389	むかし、大納言の、むすめいとうつくしうてもちたまうたりけるを、帝に奉らむとてかしづきたまひけるを、	付帯状況
中古	和文	大和物語	百六十九	412	近くて見るに、いとをかしげなりければ、	空間
中古	和文	大和物語	百七十三	418	声をかしうていへば、女おどろきて、人もなしと思ひつるに、	付帯状況
中古	和文	平中物語	三	460	女、いとあさましと思ひよる気色を、男見てぞ、かの人いと近くて使ふ人に語らひつきて、	空間
中古	和文	平中物語	七	465	「夜ふけにければ、局もなくてなむ、よるべもなくてある」	付帯状況
中古	和文	平中物語	七	466	はかなくて騒ぎ立ちぬる群鳥は飛び帰るべき巣をぞもとむる	付帯状況
中古	和文	平中物語	三十二	513	さのみものはかなくてありわたる、おのづから年月経にけり。	付帯状況
中古	和文	蜻蛉日記	上	109	なにか来たるとて見入れねば、いとはしたなくて帰ること、たびたびになりぬ。	付帯状況
中古	和文	蜻蛉日記	上	122	きみとわれなほしら糸のいかにして憂きふしなくて絶えむとぞ思ふ	付帯状況
中古	和文	蜻蛉日記	上	126	さてここちもことなることなくて、忌も過ぎぬれば、京に出でぬ。	付帯状況
中古	和文	蜻蛉日記	上	130	「われ、はかなくて死ぬるなめり。	付帯状況
中古	和文	蜻蛉日記	上	131	ただ言ふこととては、かくものはかなくてあり経るを夜昼嘆きにしかば	付帯状況
中古	和文	蜻蛉日記	上	131	かくて、とかうものすることなど、いたつく人多くて、みなしはてつ。	数量
中古	和文	蜻蛉日記	上	142	「いとあやしう、おこたるともなくて日を経るに、いと惑はれしことはなければにやあらむ、おぼつかなきこと」など、	付帯状況
中古	和文	蜻蛉日記	上	148	かくてやむやうもありなむかし、と思へば、心細うてながむるほどに、出でし日使ひし泔坏の水は、	付帯状況
中古	和文	蜻蛉日記	上	159	忍びやかにと思ひて、人あまたもなうて出で立ちたるも、わが心のおこたりにはあれど、われならぬ人なりせば、	数量
中古	和文	蜻蛉日記	上	163	帰さは、忍ぶれど、ここかしこ、饗しつつとどむれば、もの騒がしうて過ぎゆく。	付帯状況
中古	和文	蜻蛉日記	上	166	「御車かけよかけよ」とののしれば、困じて、いとわびしきに、いと苦しうて来ぬ。	付帯状況
中古	和文	蜻蛉日記	中	176	たはぶれにも御気色のものしきをば、いとわびしと思ひてはんべめるを、いと大きなることなくてはべらむには、	付帯状況
中古	和文	蜻蛉日記	中	191	あやしと、人知れず今宵をこころみむと思ふほどに、はては消息だになくて久しくなりぬ。	付帯状況
中古	和文	蜻蛉日記	中	215	うちこぼるる涙のあつくてかかるに、おぼゆるやう、	付帯状況
中古	和文	蜻蛉日記	中	241	「かくてのみとしも思ひたまへねど、ながむるほどになむ、はかなくて過ぎつつ、日数ぞつもりにける。	付帯状況
中古	和文	蜻蛉日記	中	229	暑ければ、しばし戸おし開けて見渡せば、堂いと高くて立てり。	付帯状況
中古	和文	蜻蛉日記	中	234	人やりならぬわざなれば、とひとぶらはぬ人ありとも、夢につらくなど思ふべきならねば、いと心やすくてあるを、	付帯状況
中古	和文	蜻蛉日記	中	241	「いとあさましくて帰りにしかば、またまたも、さこそはあらめ、憂く思ひ果てにためればと、	付帯状況
中古	和文	蜻蛉日記	中	221	なほしもあるべき心を、また今日や今日やと思ふに、おとなくて四月になりぬ。	付帯状況
中古	和文	蜻蛉日記	中	214	「いで、日暮れにけり。内裏より召しありつれば」とて立ちにしままに、おとづれもなくて、十七八日になりにけり。	付帯状況
中古	和文	蜻蛉日記	中	258	人いと多く、きらぎらしうてものすめり。	付帯状況
中古	和文	蜻蛉日記	中	262	「いざ、近くて見む」とて、岸づらにもの立て、榻など取りもて行きて、下りたれば、足の下に、鵜飼ひちがふ。	空間
中古	和文	蜻蛉日記	下	275	あさましううちとけたること多くてあるところに、	付帯状況
中古	和文	蜻蛉日記	下	299	かくて、つごもりになりぬれど、人は卯の花の陰にも見えず、おとだになくて果てぬ。	付帯状況
中古	和文	蜻蛉日記	下	269	白馬やなどいへども、ここちすさましうて七日も過ぎぬ。	付帯状況
中古	和文	蜻蛉日記	下	274	昼つかた、かへしうち吹きて、晴るる顔の空はしたれど、ここちあやしうなやましうて暮れはつるまで、ながめ暮らしつ。	付帯状況
中古	和文	蜻蛉日記	下	285	定めつるかひもなく、さきだたれにたれば、いふかひなくてあるほどに、とばかりありて来ぬ。	付帯状況
中古	和文	蜻蛉日記	下	293	またの日、かへさ見むと、人々の騒ぐにも、ここちいと悪しうて、臥し暮らさるれば、見むここちなきに、	付帯状況
中古	和文	蜻蛉日記	下	301	ただ、いまは、この大夫を人々しくてあらせたまへなどばかりを申したまへ」と書くにぞ、	付帯状況
中古	和文	蜻蛉日記	下	304	ここに移ろひて、類多く、事騒がしくて明け暮るるも、人目いかにと思ふ心あるまでおとなし。	付帯状況
中古	和文	蜻蛉日記	下	308	人告げに来たるも、何事もおぼえねば、憂くてやみぬ。	付帯状況
中古	和文	蜻蛉日記	下	309	かひなくて年経にけりとながむれば袂も花の色にこそしめ	付帯状況
中古	和文	蜻蛉日記	下	316	移りにけりと思へば、うつし心もなくてのみあるに、住むところはいよいよ荒れゆくを、	付帯状況
中古	和文	蜻蛉日記	下	318	ありしものどもはして、文もなくてものしつ。	付帯状況
中古	和文	蜻蛉日記	下	330	「いとおぼつかなくてまかでにしを、いかで」とつねにあり。	付帯状況

時代区分	資料区分	資料名	巻名等	ページ等	用例	タイプ
中古	和文	蜻蛉日記	下	342	かくて、月はてぬれば、はるかになりはてぬるに、思ひ憂じぬるにやあらむ、おと**なうて**月たちぬ。	付帯状況
中古	和文	蜻蛉日記	下	354	あな憎とも聞き思ふべけれど、**つれなうて**ある、宵のほど、火ともし、台などものしたるほどに、せうととおぼしき人、	付帯状況
中古	和文	蜻蛉日記	下	361	**かひなくて**年暮れはつるものならば春にもあはぬ身ともこそなれ	付帯状況
中古	和文	落窪物語	巻之一	33	「誰々かとまりたまへる」とさりげ**なくて**案内問ふ。	付帯状況
中古	和文	落窪物語	巻之一	46	かくて籠めすゑたてまつりたまひて、使ひたてまつりたまはむの心のいと**深くて**、あらせ聞こえたまふにはあらずや」と、	付帯状況
中古	和文	落窪物語	巻之一	61	＜いかに思ふらむ＞と、**恥づかしうて**添ひ伏したまへり。	付帯状況
中古	和文	落窪物語	巻之一	63	「あはれ。これより帰りなむ。屎つきにたり。いと**臭くて**行きたらば、なかなかうとまれなむ」とのたまへば、	付帯状況
中古	和文	落窪物語	巻之一	92	艶にを**かしうて**はべりし。	付帯状況
中古	和文	落窪物語	巻之一	95	交野の少将のわたくしもの設けむ時はしも、**おほやけおほやけしくて**取られむ」と笑ふ。	付帯状況
中古	和文	落窪物語	巻之二	136	朽葉の下簾かけて、男ども**多くて**おはしぬ。	数量
中古	和文	落窪物語	巻之二	137	門だに引き出でてければ、男どもいと**多くて**、二条殿におはしぬ。	数量
中古	和文	落窪物語	巻之二	153	**はかなくて**消えなましかば思ふとも　と書くを、あはれに見たまふ。	付帯状況
中古	和文	落窪物語	巻之二	160	面は白き物つけ化粧したるやうにて白う、鼻をいららがし、さし仰ぎてゐたるを、人々**あさましうて**まもるに、	付帯状況
中古	和文	落窪物語	巻之二	161	「こはいかで、かく**おぼえなく**てものしたまへるぞ。いとあやしく」	付帯状況
中古	和文	落窪物語	巻之二	180	おぢきこえたまへしかど、**間近くて**聞こえ語らはむの本意ありてなむ、しひてそそのかしきこえたるを、	空間
中古	和文	落窪物語	巻之二	182	君はまづねびまさりて、いと**めでたうて**居たまへれば、＜いみじくさいはひおはしける＞とおぼゆ。	付帯状況
中古	和文	落窪物語	巻之二	187	はじめも、さいみじかりし雨に、**わりなくて**参りしを、足白の盗人とは興ぜられしぞかし。	付帯状況
中古	和文	落窪物語	巻之三	213	故上の『ここ失はで住みたまへ。故大宮のいと**をかしうて**住みたまひし所なれば、いとあはれになむおぼゆる』と	付帯状況
中古	和文	落窪物語	巻之三	216	女君はあつけにや、**悩ましうて**見たまはねば、男君、「我見む」とて出でおはす。	付帯状況
中古	和文	落窪物語	巻之三	217	「年ごろは対面**なくて**なりもて行くもあはれに思うたまへつるを」とて、	付帯状況
中古	和文	落窪物語	巻之三	224	さやうに券**なくて**領じたまふが、をこなるやうになむ」と言ひ出だしたまへれば、衛門督殿に参りたれば、	付帯状況
中古	和文	落窪物語	巻之三	237	三の君は、わが夫取りたる人の類なれば、**近うて**聞き通はむを、＜ねたし＞と思ふ。	空間
中古	和文	落窪物語	巻之三	240	遠からぬほどに、御消息も**なくて**渡らせたまふは、	付帯状況
中古	和文	落窪物語	巻之三	246	心なむ、いと**うつくしくて**はべる。	付帯状況
中古	和文	落窪物語	巻之三	247	「殿の『酔はしたてまつれ』とのたまふに、**青くて**出でたまはば、便なし。若人たち、盃まゐりたまへ」とて	付帯状況
中古	和文	落窪物語	巻之三	254	母君には、**小さくて**おくれたてまつりし後、見馴れたてまつりしままに	時間
中古	和文	落窪物語	巻之三	259	「まだ**幼くて**おのがもとにわたりたまひにしかば、	時間
中古	和文	落窪物語	巻之三	261	阿闍梨、律師など、いとやんごとなき人**多くて**、あはれに尊き経どもとて、経一部を、一日にあてて、九部なむはじめたりける。	数量
中古	和文	落窪物語	巻之四	305	**はかなくて**月日過ぎて、女君服脱ぎたまふ	付帯状況
中古	和文	落窪物語	巻之四	338	限りなくかしづきたまふほどに、**はかなくて**年もかへりぬ。	時間
中古	和文	落窪物語	巻之四	339	弁の北の方にて、あまたの子生み出でて、いと**おもおもしくて**、参りまかでしける。	付帯状況
中古	和文	落窪物語	巻之四	341	尼に、いと**めでたくて**なしたまへりけるを、喜びのたまひいますかりける。	付帯状況
中古	和文	落窪物語	巻之四	342	面白は、病**重くて**法師になりにければ、音にも聞こえぬなるべし。	付帯状況
中古	和文	枕草子	二一 清涼殿の丑寅の隅の	55	『なほ、この事、勝ち負け**なくて**やませたまはむ、いとわろし』とて	付帯状況
中古	和文	枕草子	三三 小白川といふ所は	78	まだ童なる君など、いと**をかしくて**おはす。	付帯状況
中古	和文	枕草子	三五　木の花は	86	桜は、花びら大きに、葉の色濃きが、枝**ほそくて**咲きたる。	付帯状況
中古	和文	枕草子	四三　にげなきもの	101	また老いたる女の、腹**高くて**ありく。	付帯状況
中古	和文	枕草子	四五　主殿司こそ	102	若くかたちよからむが、なりなど**よくて**あらむは、ましてよからむかし。	付帯状況
中古	和文	枕草子	四五　主殿司こそ	103	装束時にしたがひ、裳、唐衣など、**今めかしくて**、ありかせばやとこそおぼゆれ。	付帯状況
中古	和文	枕草子	七二　ありがたきもの	127	男女をばいはじ、女どちも、契り**深くて**語らふ人の、末までなかよき人かたし。	付帯状況
中古	和文	枕草子	七三　うちの局	128	居るべきやうも**なくて**立ち明かすもなほをかしげなるに、	付帯状況
中古	和文	枕草子	七四　職の御曹司におはしますころ、西の廂に	153	「これ、給はするぞ。衣すすけためり。**白くて**着よ」とて	付帯状況
中古	和文	枕草子	七四　職の御曹司におはしますころ、西の廂に	157	つごもり方に、すこし小さくなるやうなれど、なほいと**高くて**あるに	付帯状況
中古	和文	枕草子	七四　職の御曹司におはしますころ、西の廂に	158	さて雪の山**つれなくて**年も返りぬ。	付帯状況

時代区分	資料区分	資料名	巻名等	ページ等	用例	タイプ
中古	和文	枕草子	八四　めでたきもの	167	なりあしく、物の色**よろしくて**まじはらむは、言ふかひなき事なり。	付帯状況
中古	和文	枕草子	八六　宮の五節出ださせたまふに	170	「五節の局を日も暮れぬほどにみなこぼちすかして、ただ**あやしうて**あらする、	付帯状況
中古	和文	枕草子	九五　五月の御精進のほど	185	「まな」と仰せらるれば、聞き入れず、情けなきさまにて行くに、馬場といふ所にて、人**おほくて**さわぐ。	数量
中古	和文	枕草子	一〇四　方弘は、いみじう	211	下襲の色、うへの衣なども、人よりも**よくて**着たるをば、「これをこと人に着せばや」など言ふに	付帯状況
中古	和文	枕草子	一一五　あはれなるもの	218	かならずよも『**あやしうて**詣でよ』と御嶽さらにのたまはじ」とて、	付帯状況
中古	和文	枕草子	一二四　関白殿、黒戸より出でさせたまふとて	234	いと物々しく清げによそほしげに、下襲の裾長く引き、**所せくて**候ひたまふ。	付帯状況
中古	和文	枕草子	一二七　二月、官の司に	239	「左大弁に物聞えむ」と、侍して呼ばせたれば、いとよく**うるはしくて**来たり。	付帯状況
中古	和文	枕草子	一二九　故殿の御ために、月ごとの十日	243	かばかり年ごろになりぬる得意の、**うとくて**やむはなし。	付帯状況
中古	和文	枕草子	一三七　殿などのおはしまさで後、世の中に事出で来	260	八、九人ばかり朽葉の唐衣、薄色の裳に、紫苑、萩など**をかしうて**ゐ並みたりつるかな。	付帯状況
中古	和文	枕草子	一三七　殿などのおはしまさで後、世の中に事出で来	261	例ならず仰せ言なども**なくて**、日ごろになれば、心細くてうちながむるほどに、	付帯状況
中古	和文	枕草子	一三七　殿などのおはしまさで後、世の中に事出で来	261	例ならず仰せ言などもなくて、日ごろになれば、**心細くて**うちながむるほどに、	付帯状況
中古	和文	枕草子	一三七　殿などのおはしまさで後、世の中に事出で来	264	みな、にくく、愛敬**なくて**あなたによりて、ことさらに負けさせむとしけるをなど、かた時のほどに思ふに、	付帯状況
中古	和文	枕草子	一五四　心もとなきもの	281	とみの物縫ふに、なま**暗うて**針に糸すぐる。	付帯状況
中古	和文	枕草子	一五五　故殿の御服のころ	283	その夜さり、暑くわりなき闇にて、何ともおぼえず、せばく**おぼつかなくて**明かしつ。	付帯状況
中古	和文	枕草子	一五八　たのもしげなきもの	293	七、八十ばかりなる人の、心地**あしうて**、日ごろになりたる。	付帯状況
中古	和文	枕草子	一八一　病は	318	はては、ただそこはかと**なくて**物食はれぬ心地。	付帯状況
中古	和文	枕草子	一八五　大路近なる所にて聞けば	323	「遊子なほ残りの月に行く」といふ詩を、声**よくて**誦したるもをかし。	付帯状況
中古	和文	枕草子	二一二　九月二十日あまりのほど	350	夜ふけて、月の窓より洩りたりしに、人の臥したりしどもが衣の上に、**白うて**うつりなどしたりしこそ、	付帯状況
中古	和文	枕草子	二一八　短くてありぬべきもの	352	**短くて**ありぬべきもの　とみの物縫ふ糸。	付帯状況
中古	和文	枕草子	二二一　よろづの事よりも、わびしげなる車に	354	よろづの事よりも、わびしげなる車に装束**わるくて**物見る人、いともどかし。	付帯状況
中古	和文	枕草子	二三五　月は	371	有明の、東の山ぎはに**ほそくて**出づるほど、いとあはれなり。	付帯状況
中古	和文	枕草子	二六〇　関白殿、二月二十一日に、法興院の	404	「**さまあしうて**、高う乗りたりとも、かしこかるべき事かは。	付帯状況
中古	和文	枕草子	二六〇　関白殿、二月二十一日に、法興院の	413	大納言二所、三位中将は、陣につかうまつりたまへるままに、調度負ひて、いとつきづきしう**をかしうて**おはす。	付帯状況
中古	和文	枕草子	二七四　成信の中将は、入道兵部卿宮の御子にて	425	さらで、日ごろも見えず、**おぼつかなくて**過ぐさむ人の、かかるをりにしも来むは、さらに、心ざしのあるにはせじとこそおぼゆれ。	付帯状況
中古	和文	枕草子	二八二　三月ばかり物忌しにとて	435	ただ今もまゐりぬべき心地するほどにしも、仰せ言のあれば、いと**うれしくて**見る。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	桐壺	〈1〉38	「今は、誰も誰もえ憎みたまはじ。母君**なくて**だにらうたうしたまへ」とて、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	桐壺	〈1〉42	さぶらふ人々、御後見たち、御兄弟の兵部卿の親王など、かく**心細くて**おはしまさむよりは、内裏住みせさせたまひて、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	帚木	〈1〉55	大殿油**近くて**書どもなど見たまふ	空間
中古	和文	源氏物語	帚木	〈1〉64	**近くて**見む人の聞きわき思ひ知るべからむに語りもあはせばやと、うちも笑まれ、	空間
中古	和文	源氏物語	帚木	〈1〉68	わが心あやまち**なくて**見過ぐさば、さし直してもなどか見ざらむとおぼえたれど、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	帚木	〈1〉100	心も騒ぎて、慕ひ来たれど、動も**なくて**、奥なる御座に入りたまひぬ。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	帚木	〈1〉111	とてもかくても、今は言ふかひなき宿世なりければ、無心に心づき**なくて**やみなむ、と思ひはてたり。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	空蟬	〈1〉117	思し懲りにけると思ふにも、やがて**つれなくて**やみたまひなましかばうからまし、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	夕顔	〈1〉145	あはれと思さぬにしもあらねど、**つれなくて**聞きゐたらむことの恥づかしければ、まづこなたの心見はててと思すほどに、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	夕顔	〈1〉154	いと忍びがたく苦しきまで思ほえたまへば、なほ誰と**なくて**二条院に迎へてん、もし聞こえありて、便なかるべきことなりとも、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	夕顔	〈1〉157	「いざ、ただこのわたり近き所に、**心やすくて**明かさむ。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	夕顔	〈1〉165	いと**か弱くて**、昼も空をのみ見つるものを、いとほしと思して、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	夕顔	〈1〉165	風すこしうち吹きたるに、人は**少なくて**、さぶらふかぎりみな寝たり。	数量
中古	和文	源氏物語	夕顔	〈1〉178	この尼君の子なる大徳の声**尊くて**経うち読みたるに、涙の残りなく思さる。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	夕顔	〈1〉183	いといたく面痩せたまへれど、なかなかいみじく**なまめかしくて**、ながめがちに音をのみ泣きたまふ。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	夕顔	〈1〉194	若君の上をだにえ聞かず、あさましく行く方**なくて**過ぎゆく。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	若紫	〈1〉222	御車に奉るほど、大殿より、「いづちとも**なくて**おはしましにけること」とて、御迎への人々、君たちなどあまた参りたまへり。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	若紫	〈1〉226	うちみじろきたまふこともかたく、**うるはしうて**ものしたまへば、思ふこともうちかすめ、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	若紫	〈1〉231	いかがたばかりけむ、いと**わりなくて**見たてまつるほどさへ、現とはおぼえぬぞわびしきや。	付帯状況

時代区分	資料区分	資料名	巻名等	ページ等	用例	タイプ
中古	和文	源氏物語	若紫	〈1〉235	この月ごろは、ありしにまさるもの思ひに、ことごとなくて過ぎゆく。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	若紫	〈1〉235	秋の末つ方、いとも心細くて嘆きたまふ。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	若紫	〈1〉244	「いかで、かう人少なに心細うて、過ぐしたまふらむ」とうち泣いたまひて、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	若紫	〈1〉261	児ども、いとめづらかにいまめかしき御ありさまどもなれば、思ふことなくて遊びあへり。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	末摘花	〈1〉267	故常陸の親王の末にまうけていみじうかなしうかしづきたまひし御むすめ、心細くて残りゐたるを、もののついでに語りきこえければ、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	末摘花	〈1〉268	「なほあなたに渡りて、ただ一声ももよほしきこえよ。空しくて帰らむがねたかるべきを」とのたまへば、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	末摘花	〈1〉269	うちつけにや思さむと心恥づかしくて、やすらひたまふ。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	末摘花	〈1〉275	こころみにかすめたりしこそ、はしたなくてやみにしか」と愁ふれば、されば よ、言ひ寄りにけるをや	付帯状況
中古	和文	源氏物語	末摘花	〈1〉282	よろしき御衣奉りかへ、つくろひきこゆれば、正身は、何の心げさうもなくておはす。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	末摘花	〈1〉288	かのわたりには、いとおぼつかなくて、秋暮れはてぬ。なほ頼みこしかひなくて過ぎゆく。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	末摘花	〈1〉288	御暇なきやうにて、切に思す所ばかりにこそ、ぬすまはれたまへ、かのわたりには、いとおぼつかなくて、秋暮れはてぬ。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	末摘花	〈1〉289	ところせき御もの恥を見あらはさむの御心もことになうて過ぎゆくを、またうち返し、見まさりするやうもありかし、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	末摘花	〈1〉290	年経にける立処変らず、おしやりなど乱れねば、心もとなくて、御達四五人ゐたり。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	末摘花	〈1〉305	無文の桜の細長なよよかに着なして、何心もなくてものしたまふさまいみじうらうたし。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	紅葉賀	〈1〉317	ここかしこの御暇なくて、暮るれば出でたまふを、慕ひきこえたまふをりなどあるを、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	紅葉賀	〈1〉318	藤壺のまかでたまへる三条宮に、御ありさまもゆかしうて、参りたまへれば、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	紅葉賀	〈1〉319	さるべきことなどは、仰せ言もはべらむこそうれしく」など、すくすくしうて出でたまひぬ。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	紅葉賀	〈1〉319	心とけぬ御気色も恥づかしういとほしければ、何のしるしもなくて過ぎゆく。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	紅葉賀	〈1〉320	大殿いとやむごとなくておはし、ここかしこあまたかかづらひたまふをぞ、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	紅葉賀	〈1〉320	また、親もなくて生ひ出でたまひしかば、まばゆき色にはあらで、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	紅葉賀	〈1〉324	この月はさりともと宮人も待ちきこえ、内裏にもさる御心まうけどもある、つれなくてたちぬ。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	紅葉賀	〈1〉325	中将の君は、いとど思ひあはせて、御修法など、さとはなくて所どころにせさせたまふ。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	紅葉賀	〈1〉327	かくのみ言ひやる方なくて帰りたまふものから、人のもの言ひもわづらはしきを、わりなきことにのたまはせ思して、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	紅葉賀	〈1〉333	「雨降りはべりぬべし」など言ふに、姫君、例の、心細くて屈したまへり。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	紅葉賀	〈1〉340	「瓜作りになりやしなまし」と、声はいとをかしうてうたふぞ、すこし心づきなき。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	葵	〈2〉26	いとど近くて見えむまでは思しよらず。	空間
中古	和文	源氏物語	葵	〈2〉37	二度の御祓のいそぎとり重ねてあるべきに、ただあやしうほけほけしうて、つくづくと臥しなやみたまふを、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	葵	〈2〉37	おどろおどろしきさまにはあらず、そこはかとなくて月日を過ぐしたまふ。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	葵	〈2〉38	御几帳の帷子ひき上げて見たてまつりたまへば、いとをかしげにて、御腹はいみじう高うて臥したまへるさま、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	葵	〈2〉47	かつ損はれたまふことどものあるを見る見るも尽きせず思しまどへど、かひなくて日ごろになれば、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	葵	〈2〉50	願はしきさまにもなりなましと思すには、まづ対の姫君のさうざうしくてものしたまふらむありさまぞ、ふと思しやらるる。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	葵	〈2〉57	さのものとなりにたる御文なれば咎なくて御覧ぜさす。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	賢木	〈2〉84	たはやすく御心にまかせて参でたまふべき御住み処にはたあらねば、おぼつかなくて月日も隔たりぬるに、院の上、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	賢木	〈2〉100	まして大将殿は、ものうくて籠りゐたまへり。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	賢木	〈2〉106	静心なくて出でたまひぬ。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	賢木	〈2〉107	いかなるをりにかありけん、あさましうて近づき参りたまへり。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	賢木	〈2〉119	御返り、中将、「紛るることなくて、来し方のことを思ひたまへ出づるつれづれのままには、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	賢木	〈2〉122	をりよくて御覧ぜさせたまへ。	時間
中古	和文	源氏物語	賢木	〈2〉133	あはれのみ尽きせねば、胸苦しうてまかでたまひぬ。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	賢木	〈2〉140	殿上人も大学のもいと多う集ひて、左右にこまどりに方分かせたまへり。賭け物どもなど、いとニなくて、いどみあへり。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	賢木	〈2〉144	女房どもも怖ぢまどひて近う集ひまゐるに、いとわりなく出でたまはん方なくて、明けはてぬ。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	須磨	〈2〉164	若君はいとうつくしうて、され走りおはしたり。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	須磨	〈2〉170	宿直姿どもをかしうてゐるを見たまふにも心細う、年月経ば、かかる人々もえしもありはてでや行き散らむなど、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	須磨	〈2〉191	かばかりにうき世の人言なれど、かけてもこの方には言ひ出づることなくてやみぬるばかりの人の御おもむけも、	付帯状況

時代区分	資料区分	資料名	巻名等	ページ等	用例	タイプ
中古	和文	源氏物語	須磨	〈2〉211	人のそねみ重くて亡せたまひにしかど、この君のとまりたまへるいとめでたしかし。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	須磨	〈2〉213	人柄のいとよければ、時世のおぼえ重くてものしたまへど、世の中あはれにあぢきなく、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	明石	〈2〉223	雲間もなくて明け暮るる日数にそへて、京の方もいとどおぼつかなく、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	明石	〈2〉227	心魂なくてあるかぎりまどふ。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	明石	〈2〉237	御心地にもをかしと聞きおきたまひし人なれば、かくおぼえなくてめぐりおはしたるも、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	明石	〈2〉246	都離れし時より、世の常なきもあぢきなう、行ひよりほかのことなくて月日を経るに、心もみなくづほれにけり。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	明石	〈2〉260	ただそこはかとなくて過ぐしつる年月は、何ごとをか心をも悩ましけむ、かういみじうもの思はしき世にこそありけれと、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	明石	〈2〉261	あはれとは月日にそへて思しませど、やむごとなき方のおぼつかなくて年月を過ぐしたまふが、ただならずうち思ひおこせたまふらむが、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	澪標	〈2〉310	「心細くてとまりたまはむを、かならず事にふれて数まへきこえたまへ。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	澪標	〈2〉311	「かかる御事なくてだに、思ひ放ちきこえさすべきにもあらぬを、まして心の及ばむに従ひては、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	澪標	〈2〉316	世の中の人もさやうに思ひよりぬべきことなるを、ひき違へ心清くてあつかひきこえむ	付帯状況
中古	和文	源氏物語	蓬生	〈2〉337	さても、かばかりつたなき身のありさまを、あはれにおぼつかなくて過ぐしたまふは、心憂の仏、菩薩や、とつらうおぼゆるを、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	蓬生	〈2〉339	睦びきこえさせんも憚ること多くて過ぐしはむべるを、世の中のかくさだめもなかりければ	数量
中古	和文	源氏物語	蓬生	〈2〉352	年ごろさまざまのもの思ひにほれぼれしくて隔てつるほど、つらしと思はれつらむといとほしく思す。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	関屋	〈2〉359	筑波嶺の山を吹き越す風も浮きたる心地して、いささかの伝へだになくて年月重なりにけり。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	絵合	〈2〉375	かく隙間なくて二ところさぶらひたまへば、兵部卿宮、すがすがともえ思ほし立たず、帝おとなびたまひなば、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	松風	〈2〉401	のがれがたくていまはと思ふに、年経つる浦を離れなむことあはれに、入道の心細くて独りとまらんことを思ひ乱れて、よろづに悲し。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	松風	〈2〉408	かやうにものはかなくて明かし暮らす。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	松風	〈2〉413	わざとはなくて言ひ消つさま、みやびかによしと聞きたまふ。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	薄雲	〈2〉444	うつしざまなるをり少なくはべりて、口惜しくいぶせくて過ぎはべりぬること」と、いと弱げに聞こえたまふ。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	薄雲	〈2〉459	「過ぎにし方、ことに思ひ悩むべきこともなくてはべりぬべかりし世の中にも、なほ心から、すきずきしきことにつけて、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	朝顔	〈2〉475	心やましくて立ち出でたまひぬるは、まして寝ざめがちに思しつづけらる。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	朝顔	〈2〉477	なほかく昔よりもて離れぬ御気色ながら口惜しくて過ぎぬるを思ひつつ、えやむまじく思さるれば、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	朝顔	〈2〉480	かかりけることもありける世をうらなくて過ぐしけるよと、思ひつづけて臥したまへり。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	朝顔	〈2〉495	なかなか飽かず悲しと思すにとく起きたまひて、さとはなくて所どころに御誦経などせさせたまふ。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	少女	〈3〉36	姫君の御さまのいときびはにうつくしうて、箏の御琴弾きたまふを、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	少女	〈3〉44	姫君は、何心もなくておはするに、さしのぞきたまへれば、いとらうたげなる御さまをあはれに見たてまつりたまふ。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	少女	〈3〉64	いとけけしうもてなしたれば、ものつつましきほどの心には嘆かしうてやみぬ。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	少女	〈3〉75	命長くてかかる世の末を見ることと取り返さまほしう、よろづを思しむつかりける。	時間
中古	和文	源氏物語	玉鬘	〈3〉95	むすめどもも泣きまどひて、「母君のかひなくてさすらへたまひて、行く方をだに知らぬかはりに、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	玉鬘	〈3〉109	日暮れぬと急ぎたちて、御灯明のことどもしたためはてて急がせば、なかなかいと心あわたたしくて立ち別る。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	胡蝶	〈3〉186	世とともの心にかけて忘れがたきに、慰むことなくて過ぎつる年ごろを、かくて見たてまつるは、夢にやとのみ思ひなすを、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	蛍	〈3〉198	宰相の君なども、人の御答へ聞こえむこともおぼえず恥づかしくてゐたるを、埋れたりと引きつみたまへばいとわりなし。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	蛍	〈3〉214	小さき女君の、何心もなくて昼寝したまへる所を、昔のありさま思し出でて、女君は見たまふ。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	常夏	〈3〉234	何のおぼえかはたけからむ、ことなることなき納言の際の、二心なくて思はむには、劣りぬべきことぞ、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	常夏	〈3〉240	昔は何ごとも、深くも思ひ知らで、なかなか、さし当たりていとほしかりし事の騒ぎにも、面なくて見えたてまつりけるよ、と今ぞ、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	野分	〈3〉264	露もとまるまじく吹き散らすを、すこし端近くて見たまふ。	空間
中古	和文	源氏物語	行幸	〈3〉297	内裏などにも、ことなるついでなきかぎりは参らず、朝廷に仕ふる人ともなくて籠りはべれば、よろづうひうひしう、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	行幸	〈3〉307	何ともなくて積もりはべる年齢にそへて、いにしへのことなん恋しかりけるを、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	行幸	〈3〉313	例の壺どもに、唐の薫物、心ことに薫り深くて奉りたまへり。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	行幸	〈3〉314	紫のしらきり見ゆる霰地の御小袿と、よき衣箱に入れて、つつみいとうるはしうて奉れたまへり。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	行幸	〈3〉317	いとわりなき御うちつけごとになん」と聞こえたまへば、「いと道理になん」と、聞こえやる方なくて出でたまひぬ。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	藤袴	〈3〉328	夕暮の空あはれげなるけしきを、端近うて見出だしたまへるさまいとをかし。	空間
中古	和文	源氏物語	藤袴	〈3〉330	答へたまはん言もなくて、ただうち嘆きたまへるほど、忍びやかにうつくしくいとなつかしきに、なほえ忍ぶまじく、	付帯状況

時代区分	資料区分	資料名	巻名等	ページ等	用例	タイプ
中古	和文	源氏物語	真木柱	〈3〉352	大将は、名に立てるまめ人の、年ごろいささか乱れたるふるまひなくて過ぐしたまへるなごりなく心ゆきて、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	真木柱	〈3〉357	かの疑ひおきて皆人の推しはかりしことさへ、心清くて過ぐいたまひけるなどを、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	真木柱	〈3〉358	「今は、しかいまめかしき人を渡してもてかしづかん片隅に、人わろくて添ひものしたまはむも、人聞きやさしかるべし。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	真木柱	〈3〉371	君たちは何心もなくて歩きたまふを、母君みな呼びすゑたまひて、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	真木柱	〈3〉381	男踏歌ありければ、やがてそのほどに、儀式いといかめしう二なくて参りたまふ。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	真木柱	〈3〉383	童なる八郎君はむかひ腹にて、いみじうかしづきたまふが、いとうつくしうて、大将殿の太郎君と立ち並びたるを、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	真木柱	〈3〉395	ついでなくてあるべきことにあらず。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	藤裏葉	〈3〉445	罪も残るまじうぞ、まめやかなる御心ざまなどの、年ごろ異心なくて過ぐしたまへるなどを、ありがたく思しゆるす。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	藤裏葉	〈3〉459	中の廊の壁をくづし、中門を開きて、霧の隔てなくて御覧ぜさせたまふ。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	若菜上	〈4〉38	外ざまの心もなくて過ぐしてしを、あやにくに、今さらにたち返り、にはかにものをや思はせきこえむ、なのめならず、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	若菜上	〈4〉51	さることやあるとも問ひきこえたまはず、何心もなくておはするに、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	若菜上	〈4〉54	今はさりともとのみわが身を思ひあがり、うらなくて過ぐしける世の、人笑へならむことを下には思ひつづけたまへど、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	若菜上	〈4〉56	幼き君もいとうつくしくてものしたまふ。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	若菜上	〈4〉56	いと恥づかしけれど、なほけざやかなる隔てもなくて、御物語聞こえかはしたまふ。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	若菜上	〈4〉76	院御覧じて、何ごともいと恥づかしげなめるあたりに、いはけなくて見えたまふらむこといと心苦しう思したり。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	若菜上	〈4〉88	御仲うるはしくて過ぐしたまへと思す。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	若菜上	〈4〉91	「おなじかざしを尋ねきこゆれば、かたじけなけれど、分かぬさまに聞こえさすれど、ついでなくてはべりつるを。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	若菜上	〈4〉120	あはれなるありさまに、おぼつかなくてやみなむのみこそ口惜しけれ。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	若菜下	〈4〉163	「親王たちは、のどかに二心なくて見たまはむをだにこそ、はなやかならぬ慰めには思ふべけれ」とむつかりたまふを、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	若菜下	〈4〉165	同じ筋なれど、思ひ悩ましき御事なうて過ぐしたまへるばかりに、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	若菜下	〈4〉170	さるは、「尼君をば、同じくは、老の波の皺のぶばかりに人めかしくて詣でさせむ」と、院はのたまひけれど、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	若菜下	〈4〉180	宮は、もとより琴の御琴をなん習ひたまひけるを、いと若くて院にもひきわかれたてまつりたまひにしかば、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	若菜下	〈4〉181	まだ聞こしめしどころあるもの深き手には及ばぬを、何心もなくて参りたまへらんついでに、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	若菜下	〈4〉194	この御方をば、何ごとも思ひ及ぶべき方なく、け遠くて年ごろ過ぎぬれば、いかでか、ただ、おほかたに、	空間
中古	和文	源氏物語	若菜下	〈4〉208	ただかく何となくて過ぐる年月なれど、明け暮れの隔てなきうれしさのみこそ、ますことなくおぼゆれ。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	若菜下	〈4〉215	若宮のいとうつくしうておはしますを見たてまつりたまひても、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	若菜下	〈4〉216	また重りわづらひたまふこと、いつとなくて月日を経たまふは、なほ、いかにおはすべきにか、よかるまじき御心地にやと思し嘆く。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	若菜下	〈4〉221	ただ、御後見なくてただよはしくおはしまさむよりは、親ざまにと譲りきこえたまひしかば、かたみに、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	若菜下	〈4〉222	御衣のつまばかりを見たてまつりし春の夕の飽かず世とともに思ひ出でられたまふ御ありさまをすこしけ近くて見たてまつり、	空間
中古	和文	源氏物語	若菜下	〈4〉225	なかなかかけかけしきことはなくてやみなむと思ひしかど、いとさばかり気高う恥づかしげにはあらで、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	若菜下	〈4〉257	「ここには、しばし、心やすくてはべらむ。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	若菜下	〈4〉267	そのこととなくて、しばしばも聞こえぬほどに、おぼつかなくてのみ年月の過ぐるなむあはれなりける。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	若菜下	〈4〉267	御祈祷など、今年は、紛れ多くて過ぐしたまふ。	数量
中古	和文	源氏物語	若菜下	〈4〉281	事なくて過ぐすべき頃は心のどかにあいな頼みして、いとしもあらぬ御心ざしなれど、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	柏木	〈4〉295	この世は、かう、はかなくて過ぎぬるを、長き世の絆にもこそと思ふなむいといとほしき。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	柏木	〈4〉298	御心の中は、あな口惜しや、思ひまずる方なくて見たてまつらましかば、めづらしくうれしからまし、と思せど、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	柏木	〈4〉309	「世の中の、今日か明日かにおぼえはべりしほどに、また知る人もなくてただよはむことのあはれに避りがたうおぼえはべしかば、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	柏木	〈4〉325	御答へもなうて、ひれ臥したまへり。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	柏木	〈4〉337	一叢薄も頼もしげにひろごりて、虫の音添へむ秋思ひやらるるより、いとものあはれに露けくて、分け入りたまふ。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	柏木	〈4〉338	「うき世の中を思ひたまへ沈む月日の積もるけぢめにや、乱り心地もあやしう、ほれぼれしうて過ぐしはべるを、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	横笛	〈4〉351	人の御ありさまも思ふに飽かぬところなくてものしたまふべきを、かく思はざりしさまにて見たてまつることと思すにつけてなむ	付帯状況
中古	和文	源氏物語	横笛	〈4〉358	「妹と我といるさの山の」と、声はいとをかしうて、独りごちうたひて	付帯状況
中古	和文	源氏物語	横笛	〈4〉363	御袖してさし隠したまへば、いとうつくしうて率てたてまつりたまふ。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	鈴虫	〈4〉388	かの院にはいみじう隠したまひけるを、おのづから人の口さがなくて伝へ聞こしめしける後、いと悲しういみじくて、	付帯状況

時代区分	資料区分	資料名	巻名等	ページ等	用例	タイプ
中古	和文	源氏物語	夕霧	〈4〉396	麓近くて、請じおろしたまふゆゑなりけり。	空間
中古	和文	源氏物語	夕霧	〈4〉397	この君は、いとかしこう、さりげなくて聞こえ馴れたまひにためり。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	夕霧	〈4〉421	後にいささかも聞きたまふことあらんに、つれなくてありしよと思しあはせむも、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	夕霧	〈4〉423	宮も、もののみ悲しうとり集め思さるれば、聞こえたまふことも**なくて**見たてまつりたまふ。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	夕霧	〈4〉430	隠したまへらむほどもなければ、いと心やましくて明けぬれど、とみにも起きたまはず。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	夕霧	〈4〉430	女君の寝たまへるに、昨夜の御座の下など、さりげなくて探りたまへどなし。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	夕霧	〈4〉433	かく書きたまうつらむ、つれなくて今宵の明けつらむ、と言ふべき方のなければ、女君ぞいとつらう心憂き。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	夕霧	〈4〉443	なほ峰の煙をだにけ近くて思ひ出できこえむと、この山里に住みはてなむと思いたり	空間
中古	和文	源氏物語	夕霧	〈4〉449	幼くより生ほしたてたまうければ、衣の色いと濃くて、橡の喪衣一襲、小袿着たり。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	夕霧	〈4〉455	六条院にも聞こしめして、いとおとなしうよろづを思ひしづめ、人の譏りどころなく、めやすくて過ぐしたまふを、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	夕霧	〈4〉465	おはしまし着きたれば、殿の内悲しげもなく、人気多くてあらぬさまなり。	数量
中古	和文	源氏物語	夕霧	〈4〉476	ともかうも聞こえん、この御服のほどは、一筋に思ひ乱るることなくてだに過ぐさむとなん深く思しのたまはするを、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	御法	〈4〉509	言ふかひなきさまに何心なくて臥したまへる御ありさまの、飽かぬところなしと言はんもさらなりや。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	御法	〈4〉518	今日やとのみ、わが身も心づかひせられたまふをり多かるを、はかなくてつもりにけるも、夢の心地のみす。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	幻	〈4〉524	中納言の君、中将の君など、御前近くて御物語聞こゆ。	空間
中古	和文	源氏物語	幻	〈4〉526	かのおしなべてには思したらざりし人々を御前近くて、かやうの御物語などをしたまふ。	空間
中古	和文	源氏物語	幻	〈4〉541	何ごとにつけても、忍びがたき御心弱さのつつましくて、過ぎにしこといたうものたまひ出でぬに、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	匂兵部卿	〈5〉21	とりわきてわが心寄せと見知りたまふべきふしもなくて過ぎたまひにしことを、口惜しう飽かず悲しう思ひ出できこえたまふ。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	紅梅	〈5〉44	後ぞあはれにうしろめたけれど、世を背く方にても、おのづから人笑へにあはつけきことなくて過ぐしたまはなん」などうち泣きて、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	紅梅	〈5〉52	この宮をだにけ近くて見たてまつらばやと思ひ歩くに、うれしき花のついでなり。	空間
中古	和文	源氏物語	竹河	〈5〉61	冷泉院より、いとねむごろに思しのたまはせて、尚侍の君の、昔、本意なくて過ぐしたまうしつらさをさへとり返し恨みきこえたまうて、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	竹河	〈5〉72	少将も、声いとおもしろうて、「さき草」うたふ。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	竹河	〈5〉74	幼くて院にも後れたてまつり、母宮のしどけなう生ほしたてたまへれど、	時間
中古	和文	源氏物語	竹河	〈5〉79	暗うなれば、端近うて打ちはてたまふ。	空間
中古	和文	源氏物語	竹河	〈5〉84	つれなくて過ぐる月日をかぞへつつもの恨めしき暮の春かな	付帯状況
中古	和文	源氏物語	竹河	〈5〉97	夜一夜、所どころかき歩きて、いとなやましう苦しくて臥したるに、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	竹河	〈5〉101	女一の宮一ところおはしますに、いとめづらしくうつくしうておはすれば、いといみじう思したり。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	竹河	〈5〉102	かくて、心やすくて内裏住みもしたまへかしと思すにも、いとほしう、少将のことを、母北の方のわざとのたまひしものを、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	竹河	〈5〉104	そこらさぶらひたまふ御方々にかかることなくて年ごろになりにけるを、おろかならざりける御宿世など世人おどろく。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	竹河	〈5〉105	「かからで、のどやかにめやすくて世を過ぐす人も多かめりかし。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	竹河	〈5〉105	女一の宮を限りなきものに思ひきこえたまひしを、かくさまざまにうつくしくて数そひたまへれば、めづらかなる方にて、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	竹河	〈5〉105	院の内の上下の人々、いとやむごとなくて久しくなりたまへる御方にのみことわりて、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	橋姫	〈5〉119	本意も遂げまほしうしたまひけれど、見ゆづる人なくて残しとどめむをいみじく思したゆたひつつ、年月も経れば、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	橋姫	〈5〉124	わざとうるはしくて多かりける。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	橋姫	〈5〉127	峰の朝霧晴るるをりなくて明かし暮らしたまふに、この宇治山に、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	橋姫	〈5〉128	世の中をばいとすさまじく思ひ知りながら、行ひなど人に目とどめらるばかりは勤めず、口惜しくて過ぐし来れ、と人知れず思ひつつ、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	橋姫	〈5〉156	暮れぬれば、大殿油近くて、さきざき見さしたまへる文どもの深きなど、阿闍梨も請じおろして、	空間
中古	和文	源氏物語	椎本	〈5〉169	六条院より伝はりて、右大殿しりたまふ所は、川よりをちにいと広くおもしろくてあるに、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	椎本	〈5〉175	人々あまた参り集ひ、もの騒がしくて競ひ帰りたまふ。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	椎本	〈5〉178	いかなることといぶせく思ひわたりし年ごろよりも、心苦しうて過ぎたまひにけむいにしへざまの思ひやらるるに、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	椎本	〈5〉187	御衣ども綿厚くて急ぎせさせたまひて、奉れなどしたまふ。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	椎本	〈5〉195	何ごとも心やすくて過ぐしつれ、心より外にながらへて、思はずなることの紛れつゆにてもあらば、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	椎本	〈5〉203	「さても、あさましうて明け暮らさるるは月日なりけり。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	椎本	〈5〉203	いみじうたへがたきこと」と、二ところうち語らひつつ、乾す世もなくて過ぐしたまふに、年も暮れにけり。	付帯状況

時代区分	資料区分	資料名	巻名等	ページ等	用例	タイプ
中古	和文	源氏物語	椎本	〈5〉203	ただいつとなくのどかにながめ過ぐし、もの恐ろしくつつましきことも**なくて**経つるものを、風の音も荒らかに、例見ぬ人影も、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	椎本	〈5〉211	かの御移り香もて騒がれし宿直人ぞ、鬘鬚とかいふ頬つき心づき**なくて**ある、はかなの御頼もし人やと見たまひて、召し出でたり。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	総角	〈5〉240	姫宮は、人の思ふらむことのつつましきに、とみにもうち臥されたまはで、頼もしき人**なくて**世を過ぐす身の心憂きを、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	総角	〈5〉245	「昔の御おもむけも、世の中をかく**心細くて**過ぐしはつとも、なかなか人笑へに軽々しき心つかふななどのたまひおきしを、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	総角	〈5〉252	すべてはかばかしき後見**なくて**落ちとまる身どもの悲しきを思ひつづけたまふに、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	総角	〈5〉254	ただ、人に**遠くて**生ひ出でさせたまふめれば、かかることにも、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	総角	〈5〉289	**わりなくて**おはしましては、ほどなく帰りたまふが飽かず苦しきに、宮ものをいみじく思したり。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	総角	〈5〉301	この世にはいささか思ひ慰む方**なくて**過ぎぬべき身どもなめり、と心細く思す。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	総角	〈5〉302	この君たちの御ありさまけはひも、ことなること**なくて**世に衰へたまはむことの惜しくもおぼゆるあまりに、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	総角	〈5〉316	御枕上**近くて**もの聞こえたまへど、御声もなきやうにて、え答へたまはず。	空間
中古	和文	源氏物語	総角	〈5〉317	「**近くて**だに見たてまつらむ」とて、南の廂は僧の座なれば、	空間
中古	和文	源氏物語	総角	〈5〉318	日ごろ、訪れたまはざりつれば、**おぼつかなくて**過ぎはべりぬべきにやと口惜しくこそはべりつれ」と息の下にのたまふ。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	総角	〈5〉318	中の宮は、ふと隠れたまひぬれば、いと人少なに、**心細くて**臥したまへるを、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	総角	〈5〉324	人やりならず心細うて、**疎くて**やみぬべきにやと思ふ契りはつらけれど、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	総角	〈5〉325	光も**なくて**暮れはてぬ。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	総角	〈5〉326	いかなる契りにて、限りなく思ひきこえながら、つらきこと**多くて**別れたてまつるべきにか、	数量
中古	和文	源氏物語	総角	〈5〉331	かりそめに京にも出でたまはず、かき絶え、慰む方**なくて**籠りおはするを、世人も、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	総角	〈5〉331	**はかなくて**日ごろは過ぎゆく。	時間
中古	和文	源氏物語	総角	〈5〉339	かくてのみやは、新しき年さへ嘆き過ぐさむ、ここかしこにも、**おぼつかなくて**閉ぢ籠りたまへることを聞こえたまへば、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	早蕨	〈5〉368	「朝夕の隔てもあるまじう思うたまへらるるほどながら、そのことと**なくて**聞こえさせんも、なかなか馴れ馴れしき咎めやと	付帯状況
中古	和文	源氏物語	宿木	〈5〉373	そのしるしと見ゆるふしも**なくて**年経たまふに、中宮には、宮たちさへあまたここらおとなびたまふめるに、さやうのことも少なくて、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	宿木	〈5〉389	この人こそと、とりたてて心とまる絆になるばかりなることは**なくて**過ぐしてんと思ふ心深かりしを、いでさもわろく、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	宿木	〈5〉394	、心に思ふことあり、嘆かしく身をもてなやむさまになどは**なくて**過ぐしつべきこの世と、みづから思ひたまへし。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	宿木	〈5〉397	「世のうきよりはなど、人は言ひしをも、さやうに思ひくらぶる心もことに**なくて**年ごろは過ぐしはべりしを、今なん、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	宿木	〈5〉403	命**長くて**今までもながらふれば、	時間
中古	和文	源氏物語	宿木	〈5〉411	「かごとがましげなるもわづらはしや。まことは、**心やすくて**しばしはあらむと思ふ世を、思ひの外にもあるかな」	付帯状況
中古	和文	源氏物語	宿木	〈5〉419	かりそめの戯れ言をも言ひそめたまへる人の、**け近くて**見たてまつらばやとのみ思ひきこゆるにや、	空間
中古	和文	源氏物語	宿木	〈5〉434	さても、あさましくたゆめたゆめて、入り来たりしほどよ、昔の人に**疎くて**過ぎにしことなど語りたまひし心ばへは、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	宿木	〈5〉437	小唐櫃などやうの物をも、さりげ**なくて**探したまへど、さる物もなし、ただ、いとすくよかに言少なにてなほなほしきなどぞ、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	宿木	〈5〉469	**はかなくて**年も暮れぬ。	時間
中古	和文	源氏物語	宿木	〈5〉478	今は、さりともむつかしかりしすずろごとなどは、紛れたまひにたらんと思ふに、**心やすくて**対面したまへり。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	宿木	〈5〉479	さらなることなれば、憎げならんやは、ゆゆしきまで白く**うつくしくて**、たかやかに物語し、うち笑ひなどしたまふ顔を見るに、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	宿木	〈5〉485	按察も、昔すぐれたまへりし御声のなごりなれば、今もいと**ものものしくて**、うち合はせたまへり。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	東屋	〈6〉36	この、いと言ふかひなく、情なく、さまあしき人なれど、ひたおもむきに二心なきを見れば、**心やすくて**年ごろをも過ぐしつるなり。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	東屋	〈6〉63	「何ごとぞ」とて探り寄るに、袿姿なる男の、いと**かうばしくて**添ひ臥したまへるを、例のけしからぬ御さまと思ひよりにけり。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	東屋	〈6〉68	泔のなごりにや、心地も**なやましくて**起きゐはべるを、渡りたまへ。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	浮舟	〈6〉105	人柄のまめやかにをかしうもありしかなと、いとあだなる御心は、**口惜しくて**やみにしこととねたう思さるるままに、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	浮舟	〈6〉110	いと若やかなる手にて、「**おぼつかなくて**年も暮れはべりにける。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	浮舟	〈6〉114	いかなる幸ひ人の、さすがに**心細くて**ゐたまへるならむとなむ、ただこの十二月のころほひ申すと聞きたまへし」と聞こゆ。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	浮舟	〈6〉129	「初瀬の観音、今日**事なくて**暮らしたまへ」と、大願をぞ立てける。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	浮舟	〈6〉129	日高くなれば、格子など上げて、右近ぞ**近くて**仕うまつりける。	空間
中古	和文	源氏物語	浮舟	〈6〉146	をりにあひたる物の調べどもに、宮の御声はいと**めでたくて**、梅が枝などうたひたまふ。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	浮舟	〈6〉153	二の宮を、いと**やむごとなくて**、持ちたてまつりたまへるありさまなども語りたまふ。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	浮舟	〈6〉164	今日ものたまへるを、いかにせむ、と心地**あしくて**臥したまへり。	付帯状況

時代区分	資料区分	資料名	巻名等	ページ等	用例	タイプ
中古	和文	源氏物語	浮舟	〈6〉166	こまやかに見えたてまつりきこえさせむも何かはと、つつましくて過ぐしはべりつるを、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	浮舟	〈6〉170	かどかどしき者にて、供にある童を、「この男にさりげなくて目つけよ。左衛門大夫の家にや入る」	付帯状況
中古	和文	源氏物語	浮舟	〈6〉182	「かかる人御覧ぜよ。あやしくてのみ臥させたまへるは、物の怪などのさまたげきこえさせんとするにこそ」と嘆く。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	浮舟	〈6〉185	児めきおほどかに、たをたをと見ゆれど、気高う世のありさまをも知る方少なくて生ほしたてたる人にしあれば、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	浮舟	〈6〉192	右近は、言ひ切りつるよし言ひゐたるに、君は、いよいよ思ひ乱るること多くて臥したまへるに、	数量
中古	和文	源氏物語	浮舟	〈6〉194	すべて、いかになりけむと、誰にもおぼつかなくてやみなんと思ひ返す。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	蜻蛉	〈6〉202	幼かりしほどより、つゆ心おかれたてまつることなく、塵ばかり隔てなくてならひたるに、今は限りの道にしも我をおくらかし、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	蜻蛉	〈6〉220	昔、御覧ぜし山里に、はかなくて亡せはべりにし人の、同じゆかりなる人、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	蜻蛉	〈6〉220	心やすくらうたしと思ひたまへつる人の、いとはかなくて亡くなりはべりにける。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	蜻蛉	〈6〉220	宿直などに、そのこととなくてはえさぶらはず、そこはかとなくて過ぐしはべるをなん。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	蜻蛉	〈6〉238	そのほどを過ぐしつるに、はかなくて日ごろも経にけることをなん。	時間
中古	和文	源氏物語	蜻蛉	〈6〉250	例の、安からずもの思はせむとするにやあらむ、とかつは静心なくてまもり立ちたるほどに、こなたの対の北面に住みける下臈女房の、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	蜻蛉	〈6〉255	もとより数まへさせたまはざらむをも、かく親しくてさぶらふべきゆかりに寄せて、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	蜻蛉	〈6〉256	この君をばなほ恥づかしく、人も用意なくて見えざらむかしと思いたり。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	蜻蛉	〈6〉258	かくあやしうて失せたまへること、人に聞かせじ、おどろおどろしくおぞきやうなりとて、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	蜻蛉	〈6〉260	これに思ひわびてさしつぎには、あさましくて亡せにし人の、いと心幼く、とどこほるところなかりける軽々しさをば思ひながら、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	手習	〈6〉299	ただ、いかでこの世にあらじと思ひつつ、夕暮ごとに端近くてながめしほどに、前近く大きなる木のありし下より人の出で来て、	空間
中古	和文	源氏物語	手習	〈6〉310	「隔てきこゆる心もはべらねど、あやしくて生き返りけるほどに、よろづのこと夢のやうにたどられて、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	手習	〈6〉315	「人にもの聞こゆらん方も知らず、何ごとも言ふかひなくのみこそ」と、いとつれなくて臥したまへり。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	手習	〈6〉324	はかなくて世にふる川のうき瀬にはたづねもゆかじ二本の杉	付帯状況
中古	和文	源氏物語	手習	〈6〉327	ただ、け近くて聞こえんことを、聞きにくしとも思しことわれ」と、	空間
中古	和文	源氏物語	手習	〈6〉335	「世の中にはべらじと思ひたちはべりし身の、いとあやしくて今まではべるを、心憂しと思ひはべるものから、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	手習	〈6〉347	この御前なる人も、姉君の伝へに、あやしくて亡せたる人とは聞きおきたれば、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	手習	〈6〉355	我世になくて年隔たりぬるを、思ひ出づる人もあらむかしなど、思ひ出づる時も多かり。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	手習	〈6〉367	「あさましうて失ひはべりぬと思ひたまへし人、世に落ちあぶれてあるやうに、人のまねびはべりしかな。	付帯状況
中古	和文	源氏物語	夢浮橋	〈6〉378	この老人どものとかく申して、この月ごろ音なくてはべりつるになん」と申したまへば、さてこそあなれとほの聞きて、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	夢浮橋	〈6〉385	ものの聞こえのあるにやと苦しう、もの隠ししけると恨みられんを思ひつづくるに、答へん方なくてゐたまへるに、	付帯状況
中古	和文	源氏物語	夢浮橋	〈6〉389	この童の顔は小さくて見し心地するにもいと忍びがたけれど、	時間
中古	和文	源氏物語	夢浮橋	〈6〉395	いつしかと待ちおはするに、かくたどたどしくて帰り来たれば、すさまじく、なかなかなりと思すことさまざまにて、	付帯状況
中古	和文	和泉式部日記		35	なほひとりながめゐたるほどに、はかなくて明けぬ。	付帯状況
中古	和文	和泉式部日記		40	いつぞやも参り来てはべりしかど、折あしうてのみ帰れば、いと人げなき心地してなむ。	時間
中古	和文	和泉式部日記		44	近うてだにいとおぼつかなくなしたまふに、かくわざとたづねたまへる、をかしうて、	空間
中古	和文	和泉式部日記		46	晦日がたに、風いたく吹きて、野分だちて雨など降るに、つねよりものの心細くてながむるに、御文あり。	付帯状況
中古	和文	和泉式部日記		73	「思ふことなくて過ぎにし一昨日と昨日と今日になるよしもがな　と思へど、かひなくなむ。なほおぼしめし立て」	付帯状況
中古	和文	和泉式部日記		83	人々おどろきて上に聞こゆれば、「かかることなくてだにあやしかりつるを。	付帯状況
中古	和文	和泉式部日記		88	宮入らせたまへば、さりげなくておはす。	付帯状況
中古	和文	紫式部日記		184	御物忌におはしましければ、御前にもまゐらず、心ぼそくてうち臥したるに、前なる人々の、	付帯状況
中古	和文	紫式部日記		186	朔日の装束はとらざりければ、さりげもなくてあれど、はだか姿は忘られず、	付帯状況
中古	和文	紫式部日記		197	ただことなるとがなくて過ぐすを、ただめやすきことにおぼしたる御けしきに	付帯状況
中古	和文	紫式部日記		202	かく、かたがたにつけて、ひとふしの、思ひ出でらるべきことなくて、過ぐしはべりぬる人の、ことに行末のたのみもなきこそ、	付帯状況
中古	和文	堤中納言物語	ほどほどの懸想	425	まだ定めたるかたもなくておはしますに、いかによからむ、程遙かになれば、思ふままにも参らねば、	付帯状況
中古	和文	堤中納言物語	ほどほどの懸想	426	君の御方に若くて候ふ男、このましきにやあらむ、定めたるところもなくて、この童に言ふ。	付帯状況
中古	和文	堤中納言物語	逢坂越えぬ権中納言	441	宮は、さすがにわりなく見えたまふものから、心強くて、明けゆくけしきを、中納言も、えぞ荒だちたまはざりける。	付帯状況
中古	和文	堤中納言物語	貝合	450	塗り籠めたるところに、みな取り置きつれば、つれなくて居たるに、	付帯状況

時代区分	資料区分	資料名	巻名等	ページ等	用例	タイプ
中古	和文	堤中納言物語	貝合	454	喜び騒ぐさまの、いとものぐるほしければ、いと**をかしくて**見居たまへりとや。	付帯状況
中古	和文	堤中納言物語	思はぬ方に泊りする少将	457	年に添へて人目まれにのみなり行く古里に、いと**心細くて**おはせしに、	付帯状況
中古	和文	堤中納言物語	思はぬ方に泊りする少将	459	人の御心もいとたのみがたく、いつまでとのみながめられたまふに、四、五日**いぶせくて**積りぬるを、「思ひしことかな」と心細きに、	付帯状況
中古	和文	堤中納言物語	はいずみ	491	泣くほどに、来れば、さりげ**なくて**、うちそばむきて居たり。	付帯状況
中古	和文	更級日記	上洛の旅	290	水の世のつねならず、すりこなどを**濃くて**流したらむやうに、白き水はやく流れたり。	付帯状況
中古	和文	更級日記	上洛の旅	294	あはれに人はなれて、いづことも**なくて**おはする仏かなとうち見やりて過ぎぬ。	付帯状況
中古	和文	更級日記	宮仕えの記	324	頼もしげなく心ぼそくおぼゆるに、きこしめすゆかりある所に、「なにとなくつれづれに**心ぼそくて**あらむよりは」と召すを、	付帯状況
中古	和文	更級日記	宮仕えの記	328	いといふかひなく、詣でつかうまつることも**なくて**やみにき。	付帯状況
中古	和文	更級日記	物詣での記	348	草の上に、行縢などをうち敷きて、上にむしろを敷きて、いと**はかなくて**夜を明かす。	付帯状況
中古	和文	更級日記	物詣での記	351	荒磯はあされどなにのかひ**なくて**うしほに濡るる海人の袖かな	付帯状況
中古	和文	更級日記	晩年の記	356	送りの人々、またの日かへりて、「いみじう**きらきらしうて**下りぬ」などいひて、	付帯状況
中古	和文	更級日記	晩年の記	357	かうのみ心に物のかなふ方**なうて**やみぬる人なれば、功徳もつくらずなどしてただよふ。	付帯状況
中古	和文	更級日記	晩年の記	360	人々はみなほかに住みあかれて、ふるさとに一人、いみじう心ぼそく**悲しくて**、ながめ明かしわびて、久しうおとづれぬ人に、	付帯状況
中古	和文	讃岐典侍日記	上	393	これがやうに苦しげに見まゐらすることは**なくて**、過ぐさせたまへる、かくおはしませば、いかならんずるにかと、	付帯状況
中古	和文	讃岐典侍日記	上	394	「おどろかせたまひて、**近くて**御有様聞かんとて、にはかに北の院に御幸ありて」と奏す。	空間
中古	和文	讃岐典侍日記	上	422	かひなき御顔ながらも、**明くて**まもりまゐらせてあらんとこそ、思ひつれ」と	付帯状況
中古	和文	讃岐典侍日記	上	423	「何ごとのたまふぞ。**うるはしくて**おはしましつる御顔を、	付帯状況
中古	和文	讃岐典侍日記	下	436	参らでやみなんずるなめりと思ふ、くちをしくわりなきに、「人ども来ぬれば。とく」といへば、**うれしくて**乗りぬ。	付帯状況
中古	和文	讃岐典侍日記	下	439	局に行き着きて見れば、こと所にわたらせたまひたる心地して、その夜は何と**なくて**明けぬ。	付帯状況
中古	和文	大鏡	天　六十八代 後一条院　敦成	55	植木は根を**おほくて**、つくろひおほしたてつればこそ、枝も茂りて木の実をもむすべや。	数量
中古	和文	大鏡	天　右大臣良相	67	御子二人おはせしも、五位にて典薬助、主殿頭など言ひて、いと**あさくて**やみたまひにき。	付帯状況
中古	和文	大鏡	天　左大臣時平	73	醍醐の帝の御時、このおとど、左大臣の位にて年いと**若くて**おはします。	付帯状況
中古	和文	大鏡	天　左大臣時平	85	まれまれも数**少なくて**、御車のしりにぞさぶらひし。	数量
中古	和文	大鏡	天　太政大臣忠平 貞信公	95	「我よりは御位**高くて**居させたまへるなむ、くるしき」と申したまひければ、	付帯状況
中古	和文	大鏡	天　太政大臣実頼 清慎公	103	「その君こそ、今の小野宮の右大臣と申して、いと**やむごとなくて**おはすめり。	付帯状況
中古	和文	大鏡	天　太政大臣頼忠廉義公	107	古は、物節のかぎり、一人づつありて、府生は**なくて**はべりしなり。	付帯状況
中古	和文	大鏡	天　太政大臣頼忠 廉義公	112	されば、**術なくて**もてまゐりたれば、宮も人々も大納言をにくみたまふ。	付帯状況
中古	和文	大鏡	天　左大臣師尹	123	「この位去りて、ただ**心やすくて**あらむとなむ思ひはべる」と聞こえさせたまひければ、	付帯状況
中古	和文	大鏡	地　右大臣師輔	171	御物の怪こはくて、いかがと思し召ししに、大嘗会の御禊にこそ、いと**うるはしくて**、わたらせたまひにしか。	付帯状況
中古	和文	大鏡	地　太政大臣伊尹 謙徳公	172	いと**若くて**うせおはしましたることは、九条殿の御遺言を違へさせおはしましつる故とぞ人申しける。	付帯状況
中古	和文	大鏡	地　太政大臣伊尹 謙徳公	190	『明理・行成』と一双に言はれたまひしかども、一の大納言にて、いと**やむごとなくて**さぶらはせたまふに、	付帯状況
中古	和文	大鏡	地　太政大臣伊尹 謙徳公	193	はては乗らむとさへせさせたまふに、すべき方も**なくて**さぶらひあひたまへるほどに、さるべきにやはべりけむ、	付帯状況
中古	和文	大鏡	地　太政大臣兼通 忠義公	212	心ばへ有識に、世おぼえ**重くて**まじらひたまひしほどに、	付帯状況
中古	和文	大鏡	地　太政大臣兼通 忠義公	224	この殿たちの兄弟の御仲、年頃の官位の劣り優りのほどに、御仲**悪しくて**過ぎさせたまひし間に、	付帯状況
中古	和文	大鏡	地　太政大臣兼通 忠義公	225	もののつかせたまへるか、現心も**なくて**仰せらるるかと、あやしく見たてまつるほどに、御冠召し寄せて、	付帯状況
中古	和文	大鏡	地　太政大臣兼家	248	御前などにさるべき人多くて、いとこそ**めでたくて**まゐらせたまふめりしか。	付帯状況
中古	和文	大鏡	地　内大臣道隆	256	御年二十にて、**あさましうて**やませたまひにしかは。	付帯状況
中古	和文	大鏡	地　内大臣道隆	257	末の世は、一条わたりにいと**あやしくて**おはするとぞ聞こえたまひし。	付帯状況
中古	和文	大鏡	地　内大臣道隆	269	いま一所は、大宮にまゐりて、帥殿の御方とて、いと**やむごとなくて**さぶらひたまふめるこそは、思しかけぬ御有様なめれ。	付帯状況
中古	和文	大鏡	地　内大臣道隆	275	節会・行幸には、掻練襲奉らぬことなるを、単衣を**青くて**つけさせたまへれば、紅葉襲にてぞ見えける。	付帯状況
中古	和文	大鏡	地　右大臣道兼	287	言ひなしてしかば、いと**便なくて**やみにき。	付帯状況
中古	和文	大鏡	地　右大臣道兼	290	人にいみじう怖ぢられたまへりし殿の、あやしく**末なくて**やみたまひにしなり。	付帯状況
中古	和文	大鏡	人　太政大臣道長	300	内・東宮・宮々と、あかれあかれ**よそほしくて**おはしませど、いづ方にもわたりまゐらせたまひては、さし並びおはします。	付帯状況
中古	和文	大鏡	人　太政大臣道長	318	内大臣殿をだに、**近くて**え見たてまつりたまはぬよ。	空間

時代区分	資料区分	資料名	巻名等	ページ等	用例	タイプ
中古	和文	大鏡	人　藤原氏物語	351	さて、やむごとなくならせたまひて、御堂建てさせにおはします御車に、貞信公はいと小さくて具したてまつりたまへりけるに、	付帯状況
中古	和文	大鏡	人　藤原氏物語	355	またの日、今日は御仏など近うて拝みたてまつらむ、ものども取り置かれぬ先にと思ひて、	空間
中古	和文	大鏡	人　雑々物語	368	父が、やがてその御社の禰宜の大夫が後見つかうまつりて、いとうるさくてさぶらひし宿りにまかりて、一夜は宿して、	付帯状況
中古	和文	大鏡	人　雑々物語	394	またも聞かまほしかりしかども、さもなくてやみにしこそ、今に口惜しくおぼゆれ」とこそのたまふなれ。	付帯状況
中古	和文	大鏡	人　雑々物語	399	同じほどの説法者なれば、いかがすると聞きに、頭つつみて誰ともなくて聴聞しければ、	付帯状況
中古	和文	大鏡	人　雑々物語	400	鼎を立てて、湯をたぎらかしつつ、御膳を入れて、いみじう熱くてまゐらせ渡したるを、	付帯状況
中古	和文	大鏡	人　雑々物語	401	ぬるくてまゐりたりとも、別の勘当などあるべきにはあらねど、殿をはじめたてまつりて、	付帯状況
中古	和文	大鏡	人　雑々物語	404	怪と人の申すことどもの、させることなくてやみにしは、前一条院の御即位の日、大極殿の御装束すとて人々集まりたるに、	付帯状況
中古	和文	大鏡	人　雑々物語	406	夢も現も、「これはよきこと」と人申せど、させることなくてやむやうはべり。	付帯状況
中古	和文	大鏡	人　後日物語	428	よき女房多く、伊賀少将・小弁・小侍従などいひて、手書き・歌よみなど、はなやかにていみじうて、さぶらはせたまふ」	付帯状況
中古	説話	今昔物語集	巻第十二・第二	〈1〉160	父母恋ヒ悲ムト云ヘドモ、甲斐無クテ止ヌ。	付帯状況
中古	説話	今昔物語集	巻第十二・第二十四	〈1〉217	止事無キ仏ノ、跡形モ無クテ坐スルガ極テ悲キ也。	付帯状況
中古	説話	今昔物語集	巻第十二・第三十	〈1〉235	此ノ経ヲ取出奉ザル事ヲ歎キ合ヘリト云ヘドモ、甲斐無クテ止ヌ。	付帯状況
中古	説話	今昔物語集	巻第十二・第三十四	〈1〉254	長短ニテ身太クテ力強ゲナルガ、赤髪ナル、何コヨリトモ無クテ出来テ	付帯状況
中古	説話	今昔物語集	巻第十二・第三十八	〈1〉279	彼ノ南星ノ峰ニシテ法花経ヲ誦シテ貴クテ失ニケリトナム語リ伝ヘタルトヤ。	付帯状況
中古	説話	今昔物語集	巻第十七・第三十三	〈1〉380	親クテ語ハムニモ糸吉カルベシ。	付帯状況
中古	説話	今昔物語集	巻第十七・第三十三	〈1〉378	而ル間、墓無クテ三年ニ成ヌ。	付帯状況
中古	説話	今昔物語集	巻第十七・第四十四	〈1〉404	祖ニテ有シ人ニモ幼クテ送クレニシカバ	時間
中古	説話	今昔物語集	巻第二十・第二	〈3〉31	此ノ国ニ渡リ給テ、甲斐無テ返ナムハ、震旦ノ為ニ面目無カルベシ	付帯状況
中古	説話	今昔物語集	巻第二十・第十	〈3〉57	頭ツキ姿細ヤカニテ、額ツキ吉ク、有様此ハ弊シト見ユル所無シ、微妙クテ臥タリ。	付帯状況
中古	説話	今昔物語集	巻第二十・第十	〈3〉58	道範此ヲ見ルニ、見可過キ心地無クテ思フニ、当リニ人モ無ケレバ	付帯状況
中古	説話	今昔物語集	巻第二十・第三十五	〈3〉126	其ノ後、墓無クテ任モ最レバ、一供奉モ京ニ上ヌ。	時間
中古	説話	今昔物語集	巻第二十七・第三	〈4〉28	本ハ寺ニモ無クテ有ケル時ニ、西ノ宮ノ左ノ大臣ナム住給ケル。	付帯状況
中古	説話	今昔物語集	巻第二十七・第十三	〈4〉48	静心無クテ見レバ、薄色ノ衣ノ［ナヨ］ヨカナルニ	付帯状況
中古	説話	今昔物語集	巻第二十七・第十三	〈4〉52	皆泣キ騒ギ迷ヘドモ、甲斐無クテ止ニケリ。	付帯状況
中古	説話	今昔物語集	巻第二十七・第十四	〈4〉53	然気無クテ見レバ、其ノ蓋細目ニ開タリケレバ	付帯状況
中古	説話	今昔物語集	巻第二十七・第十六	〈4〉61	女更ニ其ニ然ル事有ラムト知ヌ由ヲゾ答ヘケレドモ、甲斐無クテ止ニケリ	付帯状況
中古	説話	今昔物語集	巻第二十七・第十七	〈4〉64	トゾ人々口々ニ云ヒ合タリケレドモ、甲斐無クテ止ニケリ。	付帯状況
中古	説話	今昔物語集	巻第二十七・第二十二	〈4〉74	此ノ箱ヲ遠助ガ置ケルヲ、妻然気無クテ見テ、	付帯状況
中古	説話	今昔物語集	巻第二十七・第二十二	〈4〉74	「只我ガ主ハ馬ヨリ下テ、由無クテ立テルヲ」	付帯状況
中古	説話	今昔物語集	巻第二十七・第二十五	〈4〉81	「此テ京ニ有付ク方モ無クテ有ルヨリハ、我ガ任国ニ将行テ	付帯状況
中古	説話	今昔物語集	巻第二十七・第二十五	〈4〉82	ト肝身ヲ剥グ如ク也ケレバ、万ヅ心スゴクテ過ケル程ニ	付帯状況
中古	説話	今昔物語集	巻第二十七・第二十七	〈4〉89	此ノ牛俄ニ何コヨリ来リトモ無クテ歩ビ入タリ。	付帯状況
中古	説話	今昔物語集	巻第二十七・第二十九	〈4〉95	亦物ノ霊ニヤ有ケム、知ル事無クテ止ニケリ、トナム語リ伝ヘタルトヤ。	付帯状況
中古	説話	今昔物語集	巻第二十七・第三十一	〈4〉101	然テ住ケル間、聊ニ怖シキ事無クテ止ニケリ。	付帯状況
中古	説話	今昔物語集	巻第二十七・第三十八	〈4〉120	ト妬ク悔シク思エケレドモ、甲斐無クテ止ニケリ。	付帯状況
中古	説話	今昔物語集	巻第二十九・第三	〈4〉291	物食ヒ拈メナドシテ、昼ハ常ノ事ナレバ人モ無クテ有ケル程ニ、男ヲ	付帯状況
中古	説話	今昔物語集	巻第二十九・第三	〈4〉293	ト云テ、取ザリケレバ、首ト思シクテ去テ立テリケル者、請思タリケリ。	付帯状況
中古	説話	今昔物語集	巻第二十九・第三	〈4〉296	「然也ケリ」ト心得ル事無クテ止ニケリ	付帯状況
中古	説話	今昔物語集	巻第二十九・第三	〈4〉297	其レモ慥ニ不知ネバ、不審クテ止ニケリ。	付帯状況
中古	説話	今昔物語集	巻第二十九・第四	〈4〉297	「祖モ無クテ、身一ツ便々シクテ過ス女ナム有ル」	付帯状況
中古	説話	今昔物語集	巻第二十九・第四	〈4〉297	皆着物ナド目安クテ着タリ。	付帯状況
中古	説話	今昔物語集	巻第二十九・第四	〈4〉298	我ガ装束、小舎人童ナドノ着物ナド糸吉クテ有セケリ。	付帯状況
中古	説話	今昔物語集	巻第二十九・第四	〈4〉300	御志替ズシテ御マサバ、御身一ツハ楽クテ御マシナム。	付帯状況

時代区分	資料区分	資料名	巻名等	ページ等	用例	タイプ
中古	説話	今昔物語集	巻第二十九・第四	〈4〉302	亦近江ニ知ケル所ヲモ偏ニ我ガ領ニシテゾ**楽クテ**過ケル程ニ、	付帯状況
中古	説話	今昔物語集	巻第二十九・第五	〈4〉303	家豊ニシテ万ヅ**楽シクテ**過ケル程ニ、其ノ家ニ怪ヲシタリケレバ、	付帯状況
中古	説話	今昔物語集	巻第二十九・第七	〈4〉313	夜半過テ入タル盗人ナレバ、其ノ後幾モ**無クテ**夜明ヌ。	時間
中古	説話	今昔物語集	巻第二十九・第八	〈4〉317	卜世ニ云ヒ喧シカドモ、其ノ賞モ**無クテ**止ニキ。	付帯状況
中古	説話	今昔物語集	巻第二十九・第九	〈4〉321	未ダ者モ瞰失ハデ**直クテ**有ケレバ、	付帯状況
中古	説話	今昔物語集	巻第二十九・第十一	〈4〉326	但シ祖ハ更ニ**事無クテ**止ニケリ。	付帯状況
中古	説話	今昔物語集	巻第二十九・第十七	〈4〉345	此レ誰シタルト可知キニモ非ラネバ、云フ甲斐**無クテ**止ニケリ。	付帯状況
中古	説話	今昔物語集	巻第二十九・第二十	〈4〉351	然テ盗人ハ逃ニケレバ、云フ甲斐**無クテ**止ニケリ。	付帯状況
中古	説話	今昔物語集	巻第二十九・第二十四	〈4〉362	然レバ家主云フ甲斐**無クテ**止ニケリ。	付帯状況
中古	説話	今昔物語集	巻第二十九・第二十五	〈4〉366	然ル気**無クテ**出シ立レバ、酉時許ニ出立ヌ。	付帯状況
中古	説話	今昔物語集	巻第二十九・第二十七	〈4〉374	其ノ飽田ノ狩ノ原ハ今ニ石一ツモ無ク**直シクテ**有ナレバ、此レヲ思フニ	付帯状況
中古	説話	今昔物語集	巻第二十九・第二十九	〈4〉383	然レバ**甲斐無クテ**止ニケリ。	付帯状況
中古	説話	今昔物語集	巻第二十九・第三十	〈4〉385	跡ヲ暗クシテ失ニケレバ、云フ甲斐**無クテ**止ニケリ。	付帯状況
中古	説話	今昔物語集	巻第二十九・第三十四	〈4〉397	親王ノ手ニテ此ク**弊クテ**失ニケルハ、	付帯状況
中古	説話	今昔物語集	巻第二十九・第三十七	〈4〉406	蜂被巻テ可逃キ様モ**無クテ**有ケルヲ、其ノ御堂ノ預也ケル法師此レヲ見テ	付帯状況
中世前期	和文	方丈記		20	所のありさまを見るに、南は海**近くて**下れり。	空間
中世前期	和文	無名抄	井手款冬蛙事	50	此事、心にしみていみじく覺えしかど、**かひなくて**三年には成りぬ。	付帯状況
中世前期	和文	無名抄	關清水事	51	『我死なん後は、又知る人も**なくて**やみぬべき事』と	付帯状況
中世前期	軍記物語	平家物語	巻第三	〈上〉215	つゐにはなどか赦免**なうて**候べき	付帯状況
中世前期	軍記物語	平家物語	巻第三	〈上〉239	おぼしめされ候し御心の内、さながら**むなしうて**やみ候にき。	付帯状況
中世前期	軍記物語	平家物語	巻第十	〈下〉287	肝たましひをけすより外の事**なくて**おはしけるが、	付帯状況
中世前期	軍記物語	平家物語	灌頂巻	〈下〉428	長時不断の御念佛、おこたる事**なくて**月日を送らせ給ひけり	付帯状況
中世前期	説話	宇治拾遺物語	巻第一・一	25	五条の斎曰く、「清くて読み参らせ給ふ時は、梵天、	付帯状況
中世前期	説話	宇治拾遺物語	巻第一・一	26	されば、はかなく、さは読み奉るとも、**清くて**読み奉るべき事なり。	付帯状況
中世前期	説話	宇治拾遺物語	巻第一・十四	48	奥の方よりさりげ**なくて**持て行くに、この聟の君は衣を引き被きてのけざまに臥したりけり。	付帯状況
中世前期	説話	宇治拾遺物語	巻第一・十五	49	さてさりげ**なくて**走り先だちけるを、この鮭に具したる男見てけり。	付帯状況
中世前期	説話	宇治拾遺物語	巻第一・十七	53	恐ろしと思へども、すべきやうも**なくて**ゐたれば、おのおのみなゐぬ。	付帯状況
中世前期	説話	宇治拾遺物語	巻第一・十七	53	**近くて**見れば、目一つつきたりなどさまざまなり。	空間
中世前期	説話	宇治拾遺物語	巻第三・十三	125	仏師等食物**なくて**日比経しに、この法師信心をいたして、	付帯状況
中世前期	説話	宇治拾遺物語	巻第三・十五	128	妹はいと**若くて**宮仕へぞしけるが、後には家にゐたりけり。	付帯状況
中世前期	説話	宇治拾遺物語	巻第三・十五	130	いみじく恐ろしく、ずちなけれど、親しき人々、「**近くて**よく見ん」と	空間
中世前期	説話	宇治拾遺物語	巻第三・十七	138	御門ほほゑませ給ひて、**事なくて**やみにけり。	付帯状況
中世前期	説話	宇治拾遺物語	巻第四・四	151	浦々求めけれども、なかりければ、いふかひ**なくて**やみにけり。	付帯状況
中世前期	説話	宇治拾遺物語	巻第五・八	185	「この男の年比**ずちなくて**ありけん、不便の事なり」とて、	付帯状況
中世前期	説話	宇治拾遺物語	巻第六・二	201	北の方、若君ばかりなん**すごくて**住み給ひける。	付帯状況
中世前期	説話	宇治拾遺物語	巻第六・二	202	金の坏**うるはしくて**据ゑたりけり。	付帯状況
中世前期	説話	宇治拾遺物語	巻第六・二	202	摂政殿いくばくも**なくて**失せ給ひにければ、この祟りにやと人疑ひけり。	時間
中世前期	説話	宇治拾遺物語	巻第七・四	234	立ち並みて見けれども、すべきやうも**なくて**、やみにけりとなん。	付帯状況
中世前期	説話	宇治拾遺物語	巻第八・三	256	さていかに**寒くて**おはしつらん。	付帯状況
中世前期	説話	宇治拾遺物語	巻第八・四	260	心きたなく、身**けがらはしうて**書き奉りたる経は、	付帯状況
中世前期	説話	宇治拾遺物語	巻第八・四	261	ともかくもいふべき方**なうて**行く程に、恐ろしげなるもの走りあひて、	付帯状況
中世前期	説話	宇治拾遺物語	巻第八・四	264	いかでよき歌詠まんなど思ひける程に、**暇なくて**、はかなく年月過ぎて、	付帯状況
中世前期	説話	宇治拾遺物語	巻第八・五	267	かの鯖の杖の木、三十四年が前までは葉は**青くて**栄えたり。	付帯状況
中世前期	説話	宇治拾遺物語	巻第九・三	284	いとほしと思へども、すべきやうも**なくて**ゐたるなり	付帯状況

時代区分	資料区分	資料名	巻名等	ページ等	用例	タイプ
中世前期	説話	宇治拾遺物語	巻第九・三	288	その後思ひかはして、また横目する事なくて住みければ、	付帯状況
中世前期	説話	宇治拾遺物語	巻第十・五	310	いかにして失せたるといふ事なくて失せにけり。	付帯状況
中世前期	説話	宇治拾遺物語	巻第十・十	325	まことに頼もしくてありし身なり。	付帯状況
中世前期	説話	宇治拾遺物語	巻第十・九	325	いく程なくて殃にあひて死にけりとぞ。	時間
中世前期	説話	宇治拾遺物語	巻第十・十	326	見れば、廿五六ばかりの男の清げなるぞ、主と思しくてある。	付帯状況
中世前期	説話	宇治拾遺物語	巻第十一・六	344	さりげなくて過ぎ行く程に、すでにその日になりぬれば、	付帯状況
中世前期	説話	宇治拾遺物語	巻第十一・七	346	身の程の思ひ知られて、悲しくて申すやう、	付帯状況
中世前期	説話	宇治拾遺物語	巻第十二・十二	378	さてそこより行方もなくて失せにけり。	付帯状況
中世前期	説話	宇治拾遺物語	巻第十二・二十三	394	むなしくてのみ過ぎけるに、ある夜、かげかたただ一人、	付帯状況
中世前期	説話	宇治拾遺物語	巻第十三・六	407	何となくてゐたれば、告げつる男、あやしと思ひて、	付帯状況
中世前期	説話	宇治拾遺物語	巻第十四・十一	453	それが弟にて、司もなくてある者ありけり。	付帯状況
中世前期	説話	宇治拾遺物語	巻第十五・一	460	この国のすのまたの渡に舟もなくて立ち給ひたりけるに、	付帯状況
中世前期	和文	建礼門院右京大夫集	六十四　焚く藻のけぶり	73	心強くて過ぎしを、この思ひの外なることを、はやいとよう聞きけり。	付帯状況
中世前期	和文	建礼門院右京大夫集	七十一　つらさのまさる	78	「ただやあらまし」とかへすがへす思ひしかど、心弱くて行きたりしに、	付帯状況
中世前期	和文	建礼門院右京大夫集	八十二　星合の空	85	心の中もいつとなくもののみ悲しくてながめしころ、秋にもややなりぬ。	付帯状況
中世前期	和文	建礼門院右京大夫集	百十五　今や夢　昔や夢と	121	深き心をしるべにて、わりなくて尋ねまゐるに、	付帯状況
中世前期	和文	東関紀行		135	見とどむる暇もなくて打ち過ぎぬるこそ、心ならず覚ゆれ。	付帯状況
中世前期	和文	十訓抄	第一・三十八	81	はばかるかたなくて思ふさまに吹きける。	付帯状況
中世前期	和文	十訓抄	第一・四十三	90	月の光くまなくて、さし入りたるに、いとつつみたるさまもせず	付帯状況
中世前期	和文	十訓抄	第一・四十三	91	はかばかしくも振舞はず、させることなくてやみぬ。	付帯状況
中世前期	和文	十訓抄	第一・四十四	92	若くて文章生にてありけり。	付帯状況
中世前期	和文	十訓抄	第一・五十二	101	俊頼、述ぶるかたなくて居たるに、	付帯状況
中世前期	和文	十訓抄	第八・七	362	この妻、ねためる気色もなくて過ぎけり。	付帯状況
中世前期	和文	十訓抄	第九・四	375	顕基中納言の、つねは「罪なくて、配所の月を見ばや」といはれけるには似給はず。	付帯状況
中世前期	和文	十訓抄	第十・二十八	418	少しも御気色にたがふこともなくて、過ぎ給ひけるに、ある時、叡慮の心よからぬやうに見えければ、	付帯状況
中世前期	和文	十訓抄	第十・七十七	487	君、聞こしめして、笑はせ給ひて、ことなる沙汰なくて、やみにけり。	付帯状況
中世前期	和文	十六夜日記	一　路次の記	286	いと暗くてたどり渡る。	付帯状況
中世前期	和文	十六夜日記	二　東日記	298	その歌の傍らに、文字小さくて、返しをぞ書きそへてやる。	付帯状況
中世前期	和文	とはずがたり	巻一	258	いたく取りたることなくて、日も暮れぬ。	付帯状況
中世前期	和文	とはずがたり	巻一	260	ことなるわづらひもなくて日数過ぎぬれば、	付帯状況
中世前期	和文	とはずがたり	巻一	261	人間のならひ、苦しくてのみ明け暮るる、	付帯状況
中世前期	和文	とはずがたり	巻一	264	慰む方なくて明け暮れはべりしほどに、	付帯状況
中世前期	和文	とはずがたり	巻一	268	思ひつることよと、をかしくてあれば、	付帯状況
中世前期	和文	とはずがたり	巻二	299	思ひ焦がるる心はなくて、後夜過ぐるほどに、	付帯状況
中世前期	和文	とはずがたり	巻三	355	よろづ世の中つつましくて明け暮れしほどに、	付帯状況
中世前期	和文	とはずがたり	巻三	379	今宵はさしたることなくて果てぬ。	付帯状況
中世前期	和文	とはずがたり	巻三	382	彼の今宵亡くて生れたると聞くを、	付帯状況
中世前期	和文	とはずがたり	巻三	400	ただ泣くよりほかのことなくて、暮れゆけば、	付帯状況
中世前期	和文	とはずがたり	巻三	400	何と申すべき言の葉なくてさぶらふに、	付帯状況
中世前期	和文	とはずがたり	巻五	489	これには幾ほどの逗留もなくて上りはべりし。	付帯状況
中世前期	和文	とはずがたり	巻五	509	のどかに経をも読みて、しばしは紛るる方なくてさぶらはむなど思ひて、	付帯状況
中世前期	和文	徒然草	第一段	83	手などつたなからず走りがき、声をかしくて拍子とり、いたましうするものから、下戸ならぬこそ男はよけれ。	付帯状況
中世前期	和文	徒然草	第五段	85	顕基中納言の言ひけん、配所の月、罪なくて見ん事、さも覚えぬべし。	付帯状況
中世前期	和文	徒然草	第六段	85	まして数ならざらんにも、子といふ物なくてありなん。	付帯状況

時代区分	資料区分	資料名	巻名等	ページ等	用例	タイプ
中世前期	和文	徒然草	第二五段	102	丈六の仏九体、いと**尊くて**並びおはします。	付帯状況
中世前期	和文	徒然草	第二九段	105	手なれし具足なども、心も**なくて**変らず久しき、いとかなし。	付帯状況
中世前期	和文	徒然草	第五五段	125	**浅くて**流れたる、遥かにすずし。	付帯状況
中世前期	和文	徒然草	第七六段	142	さるべき故ありとも、法師は人に**うとくて**ありなん。	付帯状況
中世前期	和文	徒然草	第一三九段	195	さやうのもの、**なくて**ありなん。	付帯状況
中世前期	和文	徒然草	第一八八段	229	説経習ふべき隙**なくて**、年寄りにけり。	付帯状況
中世前期	和文	徒然草	第一九一段	234	よきはよく、もの言ひたる声も、**暗くて**聞きたる、用意ある、心にくし。	付帯状況
中世前期	和文	徒然草	第二三一段	260	ただ、その事と**なくて**とり出でたる、いとよし。	付帯状況
中世前期	和文	徒然草	第二三八段	268	いと**久しくて**出でたりしを、「あなわびし。	時間
中世後期	和文	風姿花伝		388	**久しくて**見れば、また珍らしきなり。	時間
中世後期	和文	申楽談義		499	こゝの段は、**幼くて**聞し間、能もおぼえず。	時間
中世後期	和文	申楽談義		521	是は、**おさなくて**聞がき也間、委細ならず。	時間
中世後期	謡曲集	能（世阿弥）	井筒	275	忍ぶ顔にていつまでか、待つこと**なくて**ながらへん、	付帯状況
中世後期	謡曲集	能（世阿弥）	井筒	279	萎める花の、色**無うて**匂ひ、残りて在原の、	付帯状況
中世後期	和文	正徹物語		185	人**數すくなくて**、十首・十五首讀む時に、	数量
中世後期	キリシタン資料	天草版平家	巻第一・第三	29	誰して言わうとも分く方が**無うて**おぢゃって御座る〔nõte〕	数量
中世後期	キリシタン資料	天草版平家	巻第一・第四	34	又言問う人も**無うて**おぢゃらうずる〔nõte〕	数量
中世後期	キリシタン資料	天草版平家	巻第一・第十	75	遂には何故に赦免**無うて**有らうずるか〔nõte〕	付帯状況
中世後期	キリシタン資料	天草版平家	巻第四・第五	250	彼等が天晴我が父は**良うて**死んだか，悪しゅうて死んだか〔yõte〕	付帯状況
中世後期	キリシタン資料	天草版平家	巻第四・第五	250	**悪しゅうて**死んだかと思わうずる所が不憫なれば，〔axũte〕	付帯状況
中世後期	キリシタン資料	天草版平家	巻第四・第二十四	376	物の具召されうずる様も**無うて**御座ったが，〔nõte〕	付帯状況
中世後期	抄物	史記抄	史記本紀抄一之四	33オ	成王は幼少にして周の天下は武王の定られていくほとも**なうて**崩せられたほとに	時間
中世後期	抄物	史記抄	本紀五	17オ	已に周襄王から賀以金鼓せられて三十七年に伯とはなつたれともいくほとも**なうて**三十九年に卒たほとに	時間
中世後期	抄物	史記抄	本紀五	18オ	繆公は盟主となるまてはほとも**なうて**死れたほとにないてこそあれはや霸となりたは東征なり	時間
中世後期	抄物	史記抄	本紀十之十一	9ウ	東牟侯は別したる功も**なうて**此は過きたそ	付帯状況
中世後期	抄物	史記抄	列傳抄十一之卅	43オ	なにさま豫讓か勢力を入て擊たほとにやかて襄子はい〈く〉ほとも**なうて**死たと云そ	時間
中世後期	抄物	史記抄	列傳抄三十一之四十四	26オ	吾は**いやしうて**老たほとに釋之の益かないそ	付帯状況
中世後期	抄物	史記抄	列傳抄四十六之六十	4ウ	いくほとも**なうて**とりころされたそ	時間
中世後期	狂言	虎明本狂言	ざぜん（座禅）		手をひいてゆかるゝほどに、心も心ならず**うれしうて**いたれハ	付帯状況
近世前期	浄瑠璃	丹波與作待夜の小室節	中之巻	103	泊らんせ泊まらんせ旅**篭安うて**泊めませう。	付帯状況
近世前期	浮世草子	新色五巻書		419	晦乞**なくて**行道さぞ面白かるべし。	付帯状況
近世前期	浮世草子	西鶴織留		381	いはんや生ある人の、此心ざし**なくて**有べからず。	付帯状況
近世前期	浮世草子	西鶴織留		397	是をとゝのへければ、**聲なうて**人をよびよせ、	付帯状況
近世前期	噺本	第一巻	戯言養気集	〈1〉55	年のくれまてゆるされも**なくて**居たりし時、…	付帯状況
近世前期	噺本	第二巻	醒睡笑	〈2〉119	是非**なうて**参りたれハ、かくれかない、熟しくさいはと	付帯状況
近世前期	噺本	第二巻	醒睡笑	〈2〉137	是非**なうて**過しつるに、ある時彼児、人なしとやおほしけん	付帯状況
近世前期	噺本	第三巻	一休関東咄	〈3〉87	一休もれいぎ**たゝしくて**仰せけるハ、	付帯状況
近世前期	噺本	第三巻	狂哥咄	〈3〉144	何事もさかふ心**なくて**暮しけるか、	付帯状況
近世前期	噺本	第三巻	一休諸国物語	〈3〉274	ゐんのむすびやうの**わるくて**見ゆるぞ、是へおハしませ、	付帯状況
近世前期	噺本	第三巻	一休諸国物語	〈3〉312	御ばうのをどりを**ひさしうて**見申たり、	時間
近世前期	噺本	第四巻	杉楊子	〈4〉166	一大事の道を尋へき人も**なくて**、只ひとりうつらうつらとうち暮しけるが、	付帯状況
近世前期	噺本	第四巻	新竹斎	〈4〉182	若党小者**おほくて**、此寺に参りけるを、	数量
近世前期	噺本	第四巻	篭耳	〈4〉237	むかしより声**なうて**人よぶといふハ此事にやと、の給ひしと也。	付帯状況

時代区分	資料区分	資料名	巻名等	ページ等	用例	タイプ
近世前期	噺本	第四巻	篭耳	〈4〉238	世話に声**なふて**人よぶと申ますほどにといひけれバ、	付帯状況
近世前期	噺本	第五巻	軽口大わらひ	〈5〉94	其隣の者やかましく思へども、せんかた**なくて**有けり。	付帯状況
近世前期	噺本	第六巻	初音草噺大鑑	〈6〉185	ふるき友だち見まひに来り、**久しうて**御めにかゝつた。	時間
近世前期	噺本	第七巻	軽口福蔵主	〈7〉124	彼祐筆も返答**なくて**かへられた。	付帯状況
近世後期	噺本	第九巻	聞上手	〈9〉58	**久しうて**御出なされたに、何ぞ上ましたい。	時間
近世後期	噺本	第九巻	鹿の子餅	〈9〉64	扨**久しうて**あふた。まづ貴様もまめでめでたい。	時間
近世後期	噺本	第九巻	口拍子	〈9〉131	何のいらへもなく、しやうじを立付、**あらけなくて**内に入ぬ。	付帯状況
近世後期	噺本	第十巻	稚獅子	〈10〉6	**久しうて**あいました。ヤレ、よい女中にならしやつた。	時間
近世後期	噺本	第十巻	茶のこもち	〈10〉38	そしていつまでも**わかくて**ゐるものでハない。	付帯状況
近世後期	噺本	第十一巻	蝶夫婦	〈11〉245	**久しうて**お目に懸りましたと、挨拶して居る所へ、	時間
近世後期	噺本	第十三巻	馬鹿大林	〈13〉315	戸塚金左衛門と云人、きハめて金**大きくて**有けるが、	付帯状況
近世後期	噺本	第十四巻	玉尽一九噺	〈14〉13	女中**なうて**ゐてハ間に合んと、いぬる…	付帯状況
近世後期	噺本	第十五巻	落噺顕懸鎖	〈15〉287	仏書におゐてハ何事も**明るくて**いらせらるゝが、	付帯状況
近世後期	噺本	第十七巻	書集津盛噺	〈17〉162	コレかゝ、**久しうて**おいでなされたに、なんぞ上ましたいの。	時間
近世後期	噺本	第十九巻	白癡物語	〈19〉228	たゞ一所とかきくなる鳴門に、いかで御堂の**なくて**はべるべき	付帯状況

付録、以上

調査・引用資料

本論文の第 1 章を除く各章において調査に使用した（集計に含めた）資料、引用した資料の出典は次の通りである。また、用例調査の際に利用したコーパスやデータベースなどについても併記する。

なお、用例調査に当たっては複数の注釈書や研究書を参照し、異同や解釈について検討しているが、それらの書名などは省略する。

序章

上代：『新編日本古典文学全集』…萬葉集

中古：『新編日本古典文学全集』…蜻蛉日記、枕草子、源氏物語、和泉式部日記、大鏡

現代：『現代日本語書き言葉均衡コーパス』収録資料

第 2 章　用語と時代区分

中古：『新編日本古典文学全集』…源氏物語、大鏡

第 3 章　中古語における形容詞テ形節

中古：『新編日本古典文学全集』…竹取物語、古今和歌集、伊勢物語、土左日記、大和物語、平中物語、蜻蛉日記、落窪物語、枕草子、源氏物語、和泉式部日記、紫式部日記、堤中納言物語、更級日記、大鏡、讃岐典侍日記

※用例調査に当たっては次のコーパスを利用した。

国立国語研究所（2016）『日本語歴史コーパス平安時代編』（https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/heian.html、2021 年 9 月 8 日最終確認）。

第４章　形容詞テ形節の副詞的用法の変遷

上代：『新編日本古典文学全集』…萬葉集

『日本古典文学大系』…古事記（歌謡含む）、肥前国風土記、風土記逸文、催馬楽、風俗歌、神楽歌

中古：［和文］『新編日本古典文学全集』…竹取物語、古今和歌集、伊勢物語、土左日記、大和物語、平中物語、蜻蛉日記、落窪物語、枕草子、源氏物語、和泉式部日記、紫式部日記、堤中納言物語、更級日記、大鏡、讃岐典侍日記

［説話］『新編日本古典文学全集』…今昔物語集

中世前期：［説話］『新編日本古典文学全集』…宇治拾遺物語

［和文］『新編日本古典文学全集』…方丈記、海道記、建礼門院右京大夫集、東関紀行、十訓抄、十六夜日記、とはずがたり、徒然草

［和文］『日本古典文学大系』…無名抄、毎月抄、後鳥羽院後口伝、為兼卿和歌抄、連理秘抄、筑波問答、十問尤秘抄

［軍記物語］『日本古典文学大系』…平家物語（覚一本）

中世後期：［和文］『日本古典文学大系』…風姿花伝、花鏡、遊楽習道風見、拾玉得花、三道、申楽談儀、正徹物語、ささめごと、吾妻問答

［謡曲集］『日本古典文学大系』…謡曲集（能）

［抄物］京都大学附属図書館清家文庫蔵本…史記抄

［キリシタン資料］大英図書館蔵本…天草版平家物語、天草版伊曽保物語

［狂言］大塚光信（編）（2006）『大蔵虎明能狂言集翻刻注解』（清文堂出版）…虎明本狂言集

近世前期：［浄瑠璃］『日本古典文学大系』…浄瑠璃

［浮世草子］『日本古典文学大系』…西鶴集、浮世草子

［噺本］『噺本大系』第一～八巻（東京堂出版）…前期噺本

近世後期：［噺本］『噺本大系』第九～一九巻（東京堂出版）…後期噺本

［人情本］国立国語研究所「日本語史研究用テキストデータ集」（国立国語研究所・東京大学国語研究室所蔵の底本を翻刻したもの、https://textdb01.ninjal.ac.jp/dataset/）…人情本

［洒落本］『洒落本大成』（中央公論社）…洒落本

※用例調査に当たっては次のコーパス、データベースなどを利用した。

国立国語研究所（2017）『日本語歴史コーパス奈良時代編』（https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/nara.html、コーパス検索アプリケーション「中納言」（ver.2.4.4）、2019 年 8 月 26 日用例取得）
国立国語研究所（2016）『日本語歴史コーパス平安時代編』（https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/heian.html、コーパス検索アプリケーション「中納言」（ver.2.4.4）、2019 年 8 月 26 日用例取得）
国立国語研究所（2017）『日本語歴史コーパス鎌倉時代編』（https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/heian.html、コーパス検索アプリケーション「中納言」（ver.2.4.4）、2019 年 8 月 26 日用例取得）
国立国語研究所（2018）『日本語歴史コーパス室町時代編』（https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/muromachi.html、コーパス検索アプリケーション「中納言」（ver.2.4.4）、2019 年 8 月 26 日用例取得）
国立国語研究所（2019）『日本語歴史コーパス江戸時代編』（https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/edo.html、コーパス検索アプリケーション「中納言」（ver.2.4.4）、2019 年 8 月 26 日用例取得）
国文学研究資料館電子資料館『日本古典文学大系本文データベース』（http://base1.nijl.ac.jp/~nkbthdb/、2019 年 6 月 14 日用例取得）
『噺本大系本文データベース』（http://base1.nijl.ac.jp/infolib/meta_pub/CsvSearch.cgi、2019 年 8 月 24 日用例取得）
『史記抄』テキストデータ（住谷芳幸氏作成、http://www.gijodai.ac.jp/user/sumiya/kaken.htm、2020 年 4 月 12 日用例取得）

第５章 〈付帯状況〉を表す「形容詞＋まま」の変遷

中古：『新編日本古典文学全集』…大和物語、落窪物語、蜻蛉日記、枕草子、源氏物語、和泉式部日記
『日本古典文学大系』…宇津保物語、浜松中納言物語、經信集
『新日本古典文学大系』…後撰和歌集
中世前期：『新編日本古典文学全集』…今昔物語集、宇治拾遺物語、十訓抄、とはずがたり
『日本古典文学大系』…栄花物語・平家物語（覚一本）・為兼卿和歌抄・栂尾明恵上人遺訓
『新日本古典文学大系』…後拾遺和歌集
中世後期：『日本古典文学大系』…沙石集、増鏡、曽我物語、義経記、太平記、連歌集、謡曲集（能）、連歌論集、伊曾保物語、御伽草子集
大塚光信（編）（2006）『大蔵虎明能狂言集翻刻注解』（清文堂出版）…虎明本狂言集

近世前期：『新編日本古典文学全集』…紀行文（鹿島詣・笈の小文・嵯峨日記）
『日本古典文学大系』…芭蕉文集、芭蕉句集、浮世草子、戴恩記、浄瑠璃集
『噺本大系』第一～八巻（東京堂出版）…前期噺本

近世後期（上方）：『日本古典文学大系』…雨月物語、春雨物語、膽大小心録、黄表紙本、近世和歌集（小沢蘆庵）
『噺本大系』第九～一九巻（東京堂出版）…後期噺本

近世後期（江戸）：『日本古典文学大系』…椿説弓張月・近世文学論集（荻生徂徠）・歌舞伎十八番集
国立国語研究所「日本語史研究用テキストデータ集」（国立国語研究所・東京大学国語研究室所蔵の底本を翻刻したもの、https://textdb01.ninjal.ac.jp/dataset/）…人情本

近世後期（その他）：『日本古典文学大系』…近世和歌集（橘曙覧）
『松浦武四郎紀行集（中）』…他計甚麽（竹島）雑誌

近代：『日本語歴史コーパス明治・大正編』所収の雑誌（女学雑誌、太陽、女学世界）・教科書（高等小学校国語 1 期）、
『CD-ROM 版新潮文庫明治の文豪』所収作品
『青空文庫』所収作品（翻訳作品以外の「日本文学／小説」、「日本文学／小説以外」）

※用例調査に当たっては次のコーパス、データベースなどを利用した。

国立国語研究所（2016）『日本語歴史コーパス平安時代編』（https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/heian.html、コーパス検索アプリケーション「中納言」（ver.2.4.5）、2021 年 8 月 14 日最終確認）

国立国語研究所（2017）『日本語歴史コーパス鎌倉時代編』（https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/heian.html、コーパス検索アプリケーション「中納言」（ver.2.4.5）、2021 年 8 月 14 日最終確認）

国立国語研究所（2018）『日本語歴史コーパス室町時代編』（https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/muromachi.html、コーパス検索アプリケーション「中納言」（ver.2.4.5）、2021 年 8 月 14 日最終確認）

国立国語研究所（2021）『日本語歴史コーパス江戸時代編』（https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/edo.html、コーパス検索アプリケーション「中納言」（ver.2.4.5）、2021 年 8 月 14 日最終確認）

国立国語研究所（2021）『日本語歴史コーパス明治・大正編』（https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/edo.html、コーパス検索アプリケーション「中納言」（ver.2.4.5）、2021 年 8 月 14 日最終確認）

国文学研究資料館電子資料館『日本古典文学大系本文データベース』（http://base1.nijl.ac.jp

/~nkbthdb/、2021 年 5 月 20 日用例取得）

『噺本大系本文データベース』（http://base1.nijl.ac.jp/infolib/meta_pub/CsvSearch.cgi、2021 年 5 月 20 日用例取得）

『CD-ROM 版新潮文庫明治の文豪』

『青空文庫』（全文検索システム『ひまわり』ver.1.6.9）

第６章　〈付帯状況〉を表す非対格自動詞節における変化

上代：［和歌］『新編日本古典文学全集』…萬葉集

中古：［和歌］『新編日本古典文学全集』…古今和歌集

『和歌文学大系』…金葉和歌集

『新編国歌大観』…私家集・歌論書

中古：［和文］『新編日本古典文学全集』…竹取物語、伊勢物語、土左日記、大和物語、落窪物語、枕草子、源氏物語、紫式部日記、堤中納言物語、大鏡、讃岐典侍日記

『日本古典文学大系』…夜の寝覚、浜松中納言物語、狭衣物語、栄花物語

中古：［和漢混淆文］『新編日本古典文学全集』…今昔物語集

『新日本古典文学大系』…三宝絵

中世前期：［和歌］『新編日本古典文学全集』…新古今和歌集

中世前期：［和歌］『新編国歌大観』…私家集・歌論書

中世前期：［和文］『新編日本古典文学全集』…徒然草、建礼門院右京大夫集、とはずがたり

中世前期：［和文］『日本古典文学大系』…無名抄・増鏡

中世前期：［和漢混淆文］『新編日本古典文学全集』…宇治拾遺物語集

中世後期：［和歌］『新編国歌大観』

・これ以外に『東大寺諷誦文稿』、『打聞集』、『古本説話集』などは個別の索引を用いて用例調査を実施したが、該当する用例は得られなかった。

※用例調査に当たっては次のコーパス、データベースなどを利用した。

国立国語研究所（2020）『日本語歴史コーパス奈良時代編』（https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/nara.html、コーパス検索アプリケーション「中納言」（ver.2.5.2）、2020 年 10 月 8 日最終確認）

国立国語研究所（2016）『日本語歴史コーパス平安時代編』（https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/heian.html、コーパス検索アプリケーション「中納言」（ver.2.5.2）、2020 年 10 月 8 日最終確認）

国立国語研究所（2017）『日本語歴史コーパス鎌倉時代編』（https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/heian.html、コーパス検索アプリケーション「中納言」（ver.2.5.2）、2020 年 10 月 8 日最終確認）
国文学研究資料館電子資料館『日本古典文学大系本文データベース』（http://base1.nijl.ac.jp/~nkbthdb/、2020 年 10 月 8 日最終確認）
「新編国歌大観」編集委員会（編）『「新編国歌大観」CD-ROM 版 Ver.2』角川書店

第 7 章　形容詞テ形節の副詞的用法の衰退に関する文法史上の位置づけ

中古：『新編日本古典文学全集』…古今和歌集、蜻蛉日記、落窪物語、枕草子、源氏物語、和泉式部日記、堤中納言物語
『日本古典文学大系』…栄花物語

中世前期：『新編日本古典文学全集』…宇治拾遺物語

中世後期：大英図書館蔵本…天草版平家物語
大塚光信（編）（2006）『大蔵虎明能狂言集翻刻注解』（清文堂出版）…虎明本狂言集

近世前期：『噺本大系』第一～八巻（東京堂出版）…第四巻、第六巻

現代：『現代日本語書き言葉均衡コーパス』収録資料

終章

近世後期：『洒落本大成』（中央公論社）…洒落本

参考文献

青木伶子（1961）「てにをは研究の歴史」佐伯梅友・中田祝夫・林大（編著）『国語国文学研究史大成 15 国語学』，280-308，三省堂.

石垣謙二（1955）『助詞の歴史的研究』，岩波書店.

氏家啓吾（2017）「「地図をたよりに」構文と非飽和名詞」『東京大学言語学論集』38，287-301，東京大学大学院人文社会系研究科・文学部言語学研究室.

内丸裕佳子（1999）「「名詞の形式化」に関する一考察―「まま」の場合―」『筑波応用言語学研究』（6），27-40，筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科応用言語学コース.

内丸裕佳子（2006a）「動詞のテ形を伴う節の統語構造について―付加構造と等位構造との対立を中心に―」『日本語の研究』2（1），1-15，日本語学会.

内丸裕佳子（2006b）「等位接続に現れる形容詞・形容動詞のテ形について」『筑波応用言語学研究』（23），43-56，筑波大学大学院博士課程人文社会科学研究科文芸・言語専攻応用言語学領域.

内丸裕佳子・金英淑・朴江訓・竹沢幸一（2011）「形容詞の等位接続に現れる形態について―日本語のテ形と韓国語の고（go）形の統語的共通点と相違点―」『留学生教育』（16），65-71，留学生教育学会.

江口正弘（1975）「中古和文資料における動詞の音便形―源氏物語のイ音便ウ音便を中心に―」『國語と國文學』52（5），47-59，東京大学国語国文学会.

遠藤裕子（1982）「接続助詞「て」の用法と意味」『音声・言語の研究』（2），51-63，東京外国語大学音声学研究室.

大島資生（2015）「現代日本語における形容詞連用形・テ形の機能について」『人文学報』（507），1-18，首都大学東京人文科学研究科.

大堀壽夫（1999）「類型論から見た文構造の階層性―南モデルと RRG の接続理論―」『言語』28（11），103-109，大修館書店.

沖森卓也（2017）『日本語全史』，筑摩書房.

小田勝（1990）「中古和文における接続句の構造」『國學院雑誌』91（8），38-47，國學院大學.
小田勝（1994）「接続句の制約からみた中古助動詞の分類」『國學院雑誌』95（7），16-25，國學院大學.
小田勝（1997）「源氏物語における無助詞の名詞」『聖徳学園岐阜教育大学紀要』33，372-378，岐阜聖徳学園大学.
小田勝（2015）『実例詳解古典文法総覧』，和泉書院.
尾上圭介（1999a）「南モデルの内部構造」『言語』28（11），95-102，大修館書店.
尾上圭介（1999b）「南モデルの学史的意義」『言語』28（12），78-83，大修館書店.
甲斐睦朗（1978）「青表紙本源氏物語における形容詞連用形のウ音便について―その表現への志向―」『國語國文』47（8），1-18，京都大学文学部国語学国文学研究室.
影浦峡（2001）「延べ語数と異なり語数―量的尺度としての問題―」『日本語学』20（5），99-107，明治書院.
影山太郎（1993）『文法と語形成』ひつじ書房.
春日和男（1967）「助詞研究の歴史と展望」『國文學―解釈と教材の研究―』12（2），21-28，學燈社.
春日和男（1974）「万葉集の末句三題―「ては」と「てば」、その他―」境田教授喜寿記念論文集刊行会（編）『境田教授喜寿記念論文集上代の文学と言語』，327-340，境田教授喜寿記念論文集刊行会.
加藤陽子（1995）「テ形節分類の一試案―従属度を基準として―」『世界の日本語教育』（5），209-224，国際交流基金日本語国際センター.
辛島稔子（1961）「伊勢物語の三元的成立の論」『文学』29（10），80（1270）-93（1283），岩波書店.
川端善明（1976）「用言」大野晋・柴田武（編）『岩波講座日本語 6 文法Ⅰ』，169-217，岩波書店.
川端善明他（編）（1981）『講座日本語学 3 現代文法との史的対照』，明治書院.（奥付に「川端善明他」とあり、これに従った）
菊田千春（2012）「上代日本語のガ格について―活格説の問題点―」『同志社大学英語英文学研究』（89），89-123，同志社大学人文学会.
岸本秀樹（2014）「「名詞＋ない」型形容詞と名詞編入」岸本秀樹・由本陽子（編）『複雑述語研究の現在』，41-65，ひつじ書房.
木田章義（2011）「形容詞の活用が揃うまで」『訓点語と訓点資料』127，65-79，訓点語学会.

北﨑勇帆（2021）「中世・近世における従属節末の意志形式の生起」『日本語の研究』17（2），19-36，日本語学会.

北原保雄（1967）「形容詞のウ音便―その分布から成立の過程をさぐる―」『國語國文』36（8），19-36，京都大學國語學國文學研究室.

北原保雄（1969）「中古の助動詞の分類―文構造解明への一つの接近―」『人文学部紀要』3，35-48，和光大学.

北原保雄（1984）「文法論の進むべき道」北原保雄『文法的に考える―日本語の表現と文法―』，118-134，大修館書店.

北原保雄（2006）「「おもて赤みて居たり」の文構造は？」北原保雄『北原保雄の日本語文法セミナー』，214-219，大修館書店.

金銀珠（2016）「中古語の名詞修飾節における主語の表示―無助詞と「の」と「が」の相互関係―」『日本語の研究』12（4），118-134，日本語学会.

京極興一（1973）「助詞とは何か―研究史の展望―」鈴木一彦・林巨樹（編）『品詞別日本文法講座 9 助詞』，25-68，明治書院.

金水敏（1987）「時制の表現」山口明穂（編）『国文法講座第六巻』，280-298，明治書院.

金水敏（1995）「日本語史からみた助詞」『言語』24（11），78-84，大修館書店.

金水敏（2006）『日本語存在表現の歴史』，ひつじ書房.

金水敏（2011）「統語論」金水敏・高山善行・衣畑智秀・岡﨑友子『シリーズ日本語史 3 文法史』，77-166，岩波書店.

釘貫亨（1990）「上代語動詞における自他対応形式の史的展開」佐藤喜代治（編）『国語論究第 2 集文字・音韻の研究』，240-284，明治書院.

久池井紀子（1995）「「まま（儘）」の機能と下位分類―主文と従属文の関係を中心に―」『紀要』（国際学友会日本語学校）（18），45-62，国際学友会.

桑田明（1983）「「てば」と「ては」」『就實語文』（4），6-18，就実女子大学日本文学会.

言語学研究会・構文論グループ（1989）「なかどめ―動詞の第二なかどめのばあい―」『ことばの科学 2』，11-47，むぎ書房.（稿末の執筆者名には「新川忠，樋口文彦，比毛博，山内和夫，湯本昭南」とある）

小池清治（1997）「連用修飾」小池清治・小林賢次・細川英雄・犬飼隆（編）（1997）『日本語学キーワード事典』，460，朝倉書店.

此島正年（1966）『国語助詞の研究―助詞史の素描―』，桜楓社.

此島正年（1970）「助詞の研究史と課題」『國文學―解釋と鑑賞―』35（13），133-141，至文堂.

こまつひでお（1987）「袖ひちて」『文藝言語研究・言語篇』11，25-52，筑波大学文芸・言語学系.

小松英雄（1999）『日本語はなぜ変化するか―母語としての日本語の歴史―』，笠間書院.

小柳智一（1998）「中古の「ノミ」について―存在単質性の副助詞―」『國學院雑誌』99（7），14-28，國學院大學.

小柳智一（1999a）「万葉集のノミ―史的変容―」『實踐國文學』55，38-52，実践国文学会.

小柳智一（1999b）「中古のマデ―第一種副助詞―」『国語学』199，42-54，国語学会.

小柳智一（2011）「古代の助詞ヨリ類―場所格の格助詞と第 1 種副助詞―」青木博史（編）『日本語文法の歴史と変化』，1-24，くろしお出版.

小柳智一（2018）「言語の歴史、言語変化、その記述」小柳智一『文法変化の研究』，1-38，くろしお出版.

近藤泰弘（1991）「中古語のモダリティの助動詞の体系」『日本女子大学紀要文学部』（40），39-49，日本女子大学.

近藤泰弘（1995）「中古語の副助詞の階層性について―現代語と比較して―」益岡隆志・野田尚史・沼田善子（編）『日本語の主題と取り立て』，261-275，くろしお出版.

近藤泰弘（1997）「「文の構造」をどう扱うのか―古典語の複文構造の概観―」『国文学解釈と鑑賞』62（7），45-52，至文堂.

近藤泰弘（2000）『日本語記述文法の理論』，ひつじ書房.

近藤泰弘（2007）「平安時代語の接続助詞「て」の機能」『國學院雑誌』108（11），174-183，國學院大學綜合企画部広報課.

近藤泰弘（2012）「平安時代語の接続助詞「て」の様相」『國語と國文學』89（2），49-60，東京大学国語国文学会.

近藤泰弘（2013）「電子化コーパスを用いた古典語のテンス・アスペクト研究」『日本語学』32（12），16-29，明治書院.

斎賀秀夫（1957）「語構成の特質」岩淵悦太郎（編）『現代国語学Ⅱことばの体系』，217-248，筑摩書房.

佐伯梅友（1958）「古今集と私」『日本古典文學大系月報 11』，6-7，岩波書店.

阪倉篤義（1977）「国語史の時代区分」松村明（編）『講座国語史第 1 巻国語史総論』，201-260，大修館書店.

阪倉篤義（1982）「時代区分」川端善明他（編）『講座日本語学 1 総論』，1-20，明治書院.（編者について奥付に「川端善明他」とあり、これに従った）

阪倉篤義（1985）「歌ことばの一面」『文学・語学』（105），51-63，全国大学国語国文学会.
桜井茂治（1966）「形容詞音便の一考察―源氏物語を中心として―」『立教大学日本文学』16，2-9，立教大学日本文学会.
佐佐木隆（2016）「連用修飾語と被修飾語とが作る構文―「地さへ裂けて照る日」の類―」佐佐木隆『上代日本語構文史論考』，132-150，おうふう.
佐藤喜代治（1969）「て（で）―接続助詞〈古典語・現代語〉―」松村明（編）『古典語現代語助詞助動詞詳説』，443-448，學燈社.
佐藤直人（1996）「「テ」で導かれる句の構造的な大きさと時称的解釈」『新潟大学国語国文学会誌』38，17-38，新潟大学人文学部国語国文学会.
佐藤宣男（1984）「助詞研究の歴史」鈴木一彦・林巨樹（編）『研究資料日本文法第5巻助辞編（一）助詞』，137-195，明治書院.
澤田治美（1983）「Snシステムと日本語助動詞の相互連結順序」『日本語学』2（12），66-80，明治書院.
新里博樹（1983）「終止形を有する形容詞群の考察」『国語研究』（46），39-50，国学院大学国語研究会.
進藤咲子（1973）「接続助詞」鈴木一彦・林巨樹（編）『品詞別日本文法講座9助詞』，171-208，明治書院.
進藤義治（1978）「源氏物語の形容詞の連用形の機能について」『南山国文論集』3，7-24，南山大学.
鈴木重幸（1972）『日本語文法・形態論』，むぎ書房.
鈴木泰（2014）「古典日本語における対象を表すはだか格とヲ格―宇津保物語を資料として―」『類型学研究』4，34-57，類型学研究会.
鈴木泰（2016）「ツ・ヌの淵源について」『日本語学』35（5），38-50，明治書院.
関一雄（1965）「「まにまに」「ままに」考」『山口大學文學會志』16（1），13-28，山口大学文学会.
高山道代（2014）『平安期日本語の主体表現と客体表現』，ひつじ書房.
高山善行（1987）「従属節におけるムード形式の実態について」『日本語学』6（12），85-97，明治書院.
高山善行（1992）「中古語モダリティの階層構造―助動詞の意味組織をめざして―」『語文』58，35-45，大阪大学国語国文学会.
高山善行（2002）『日本語モダリティの史的研究』，ひつじ書房.

田窪行則（1987）「統語構造と文脈情報」『日本語学』6（5），37-48，明治書院.
竹内理（2012）「相関分析入門（1）―関係を探るには―」竹内理・水本篤（編著）『外国語教育研究ハンドブック―研究手法のより良い理解のために―』，121-131，松柏社.
竹内史郎（2008a）「助詞シの格助詞性について―非動作格性と品詞分類―」『語学と文学』（44），9-23，群馬大学語文学会.
竹内史郎（2008b）「古代日本語の格助詞ヲの標示域とその変化」『國語と國文學』85（4），50-63，東京大学国語国文学会.
竹内史郎（2012）「古代日本語の主節の無助詞名詞句―活格性との関わりから―」『第 1 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』，23-32，国立国語研究所.
竹内史郎（2020）「上代語の従属節、主文連体形・已然形節における主語標示―ガ、ノ、無助詞における意味的、統語的な制限の検討―」青木博史・小柳智一・吉田永弘（編）『日本語文法史研究 5』，41-72，ひつじ書房.
竹沢幸一（2001）「日本語の状態記述二次述部と品詞分類―記述的考察を中心に―」『筑波大学「東西言語文化の類型論」特別プロジェクト研究研究報告IV平成 12 年度』，237-264，筑波大学「東西言語文化の類型論」特別プロジェクト研究.
竹沢幸一（2015）「「見える」認識構文の統語構造とテ形述語の統語と意味」由本陽子・小野尚之（編）『語彙意味論の新たな可能性を探って』，243-273，開拓社.
竹部歩美（2001）「中古のテについて―形容詞・形容動詞に下接する場合に着目して―」『国学院大学大学院紀要.文学研究科』32，255-273，国学院大学大学院.
丹保健一（2009）「「～たまま」の意味用法―マイナスイメージの出どころをめぐって―」『三重大学教育学部研究紀要』60，41-52，三重大学教育学部.
築島裕（1988）「日本語史の時代区分」金田一春彦・林大・柴田武（編）『日本語百科大事典』，59-65，大修館書店.
坪井美樹（2005）「テ形接続形式と文法化」『國語と國文學』82（11），13-25，東京大学国語国文学会.
津留崎由紀子（2003）「形容詞の中止形を用いた複文における先行句節と後続句節の関係」『日本語科学』13，7-32，国立国語研究所.
寺村秀夫（1983）「「付帯状況」表現の成立の条件―「X ヲ Y ニ……スル」という文型をめぐって―」『日本語学』2（10），38-46，明治書院.
土井忠生・森田武（1975）『新訂国語史要説』，修文館.
中川祐治（2000）「古代語における極度・高度を示す程度副詞の機能と体系」『国文学攷』

（166），1-12，広島大学国語国文学会.
中川祐治（2018）「『今昔物語集』における極度・高度を示す程度副詞の諸相」『言文』（65），1-16，福島大学国語教育文化学会.
中田祝夫・竹岡正夫（1960）『あゆひ抄新注』，風間書房.
中田祝夫・和田利政・北原保雄（1983）『古語大辞典』，小学館.
竝木崇康（1988）「複合語の日英対照―複合名詞・複合形容詞―」『日本語学』7（5），68-78，明治書院.
成田徹男（1983）「動詞の「て」形の副詞的用法―「様態動詞」を中心に―」渡辺実（編）『副用語の研究』，137-158，明治書院.
西尾光雄（1979）「源氏物語の形容詞について」『東京女子大学日本文学』51，1-16，東京女子大学.
西垣内泰介（2019）「「地図をたよりに」の構造と派生」『日本語文法』19（1），37-53，日本語文法学会.
仁田義雄（1983）「動詞に係る副詞的修飾成分の諸相」『日本語学』2（10），18-29，明治書院.
仁田義雄（1995a）「シテ形接続をめぐって」仁田義雄（編）『複文の研究（上）』，87-126，くろしお出版.
仁田義雄（1995b）「日本語文法概説（複文・連文編）」宮島達夫・仁田義雄（編）『日本語類義表現の文法（下）複文・連文編』，383-396，くろしお出版.
仁田義雄（2007a）「句」飛田良文・遠藤好英・加藤正信・佐藤武義・蜂谷清人・前田富祺（編）『日本語学研究事典』，254，明治書院.
仁田義雄（2007b）「節」飛田良文・遠藤好英・加藤正信・佐藤武義・蜂谷清人・前田富祺（編）『日本語学研究事典』，254，明治書院.
仁田義雄（2014a）「節」日本語文法学会（編）『日本語文法事典』，347-345，大修館書店.
仁田義雄（2014b）「付帯状況」日本語文法学会（編）『日本語文法事典』，543-544，大修館書店.
日本語記述文法研究会（編）（2008）『現代日本語文法 6 第 11 部複文』，くろしお出版.
日本国語大辞典第二版編集員会（編）（2000-2002）『日本国語大辞典第二版』，小学館.
野田尚史・小田勝（編）（2021）『日本語の歴史的対照文法』，和泉書院.
野村剛史（1993a）「上代語のノとガについて（上）」『國語國文』62（2），1-17，京都大学文学部国語学国文学研究室.
野村剛史（1993b）「上代語のノとガについて（下）」『國語國文』62（3），30-49，京都大学

文学部国語学国文学研究室.
野村剛史（1993c）「古代から中世の「の」と「が」」『日本語学』12（11），23-33，明治書院.
野村雅昭（1977）「造語法」大野晋・柴田武（編）『岩波講座日本語 9 語彙と意味』，245-284，岩波書店.
橋本修（2003）「日本語の複文」北原保雄（監・編）『朝倉日本語講座 5 文法 I』，181-199，朝倉書店.
橋本三奈子・青山文啓（1992）「形容詞の三つの用法―終止，連体，連用―」『計量国語学』18（5），201-214，計量国語学会.
服部隆（2000）「「クローズ」論の展開（一）」『上智大学国文学科紀要』17，103-127，上智大学.
服部隆（2001）「「クローズ」論の展開（二）」『上智大学国文学科紀要』18，73-100，上智大学.
東辻保和（1970）「古典語感情形容詞研究の一視点」『文学・語学』（56），80-91，全国大学国語国文学会.
久永紀子（1960）「「ままに」の変遷」『甲南大學文學會論集』（11），25-36，甲南大学文学会.
百留康晴（2019）「日本語の歴史のための資料」大木一夫（編）『ガイドブック日本語史調査法』，43-70，ひつじ書房.
廣坂直子（2001）「付帯状況を表すタママ節について」『語文』75・76，89-96，大阪大学国語国文学会.
文化庁（1975）『外国人のための基本語用例辞典（第二版）』，大蔵省印刷局.
Whitman, J.・柳田優子（2009）「人称と活格類型―上代日本語の代名詞体系の観点から―」坪本篤朗・早瀬尚子・和田尚明（編）『「内」と「外」の言語学』，175-214，開拓社.
前田富祺（1985）「語彙史の時代区分」前田富祺『国語語彙史研究』，826-846，明治書院.
益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法―改訂版―』，くろしお出版.
松井夏津紀（2010）「日本語の描写述語とその周辺」影山太郎（編）『レキシコンフォーラム No.5』，219-241，ひつじ書房.
松尾捨次郎（1970）『國語法論攷追補版』，白帝社.
松下大三郎（1930）『改撰標準日本文法』中文館書店.
間淵洋子（2000）「格助詞「で」の意味拡張に関する一考察」『国語学』51（1），15-30，国語学会.
水谷静夫（1977）「語彙の量的構造」大野晋・柴田武（編）『岩波講座日本語 9 語彙と意味』，44-86，岩波書店.

三田村紀子（1967）「形容詞の意味分類」『研究年報』（奈良女子大学文学会）10，14-25，奈良女子大学文学会.
南不二男（1961）「文論の分析についての一つの試み」『國語學』43，82-93，国語学会.
南不二男（1964a）「複文」時枝誠記・遠藤嘉基（監）森岡健二・永野賢・宮地裕・市川孝（編）『講座現代語 6 口語文法の問題点』，71-89，明治書院.
南不二男（1964b）「述語文の構造」『国語研究』（18），1-19，国学院大学国語研究会.
南不二男（1974）「文の構造」南不二男『現代日本語の構造』，105-182，大修館書店.
南不二男（1993）「従属句の構造と種類」南不二男『現代日本語文法の輪郭』，74-120，大修館書店.
南不二男（1999）「階層的構造観―その問題点と展望―」『言語』28（11），88-94，大修館書店.
南不二男・鈴木重幸（1963）「構文」国立国語研究所『国立国語研究所報告 23 話しことばの文型（2）―独話資料による研究―』，64-177，秀英出版.
三原健一（1997）「連用形の時制指定について」『日本語科学』1，25-36，国立国語研究所.
三原健一（2015）「テ形」三原健一『日本語の活用現象』，77-105，ひつじ書房.
三宅知宏（1995）「～ナガラと～タママと～テ―付帯状況の表現―」宮島達夫・仁田義雄（編）『日本語類義表現の文法（下）』，441-450，くろしお出版.
三宅知宏（1999）「日本語の付帯状況文」『国文鶴見』（34），84-74，鶴見大学日本文学会.
三宅知宏（2000）「名詞の「飽和性」について」『国文鶴見』（35），89（1）-79（11），鶴見大学日本文学会.
宮地敦子（1979）『身心語彙の史的研究』，明治書院.
宮島達夫（1993）「形容詞の語形と用法」『計量国語学』19（2），94-104，計量国語学会.
明星学園・国語部（1968）『にっぽんご 4 の上』，むぎ書房.
村木新次郎（1983）「「地図をたよりに、人をたずねる」という言いかた」渡辺実（編）『副用語の研究』，267-292，明治書院.（原文では題目の「地図をたよりに」の部分に傍線が施されている）
森田良行（1980）『基礎日本語 2―意味と使い方―』，角川書店.
森田良行（1988）『基礎日本語辞典』，角川書店.
矢澤真人（1983）「情態修飾成分の整理―被修飾成分との呼応及び出現位置からの考察―」『日本語と日本文学』（3），30-39，筑波大学国語国文学会.
矢澤真人（2000）「副詞的修飾の諸相」仁田義雄・村木新次郎・柴谷方良・矢澤真人『日本語の文法 1 文の骨格』，187-233，岩波書店.

矢島正浩（1986）「近松世話浄瑠璃における形容詞連用形のウ音便化について」『国語学』147，14-27，国語学会.

安本真弓（2009）「構文的機能から見た中古形容詞の特徴―意味との関わりから―」『国語学研究』48，119(28)-105(42)，東北大学大学院文学研究科国語学研究室内「国語学研究」刊行会.

柳田優子（2007）「上代語の能格性について」長谷川信子（編）『日本語の主文現象―統語構造とモダリティ―』，147-188，ひつじ書房.

柳田優子（2014）「言語類型論からみた上代日本語の主語表示・目的語表示―「ガ」と「ヲ」と「ゼロ」表示について―」『日本語学』33（14），124-137，明治書院.

谷部弘子（1991）「副詞的修飾成分「～まま」の意味と用法―話し手の表現意図との関連において―」『東京学芸大学紀要第 2 部門人文科学』42，71-78，東京学芸大学.

山内洋一郎（1964）「動詞「漬つ」について」『國語學』59，77-86，国語学会.

山口堯二（1980）「「て」「つつ」の表現性」山口堯二『古代接続法の研究』，255-277，明治書院.

山口堯二（1991）「古代語の修飾法」『表現研究』（54），35-42，表現学会.

山口堯二（1998）「中古語「て」連用句とその周辺」佐藤喜代治（編）『国語論究第 7 集中古語の研究』，211-247，明治書院.

山口堯二（2000）『構文史論考』，和泉書院.

山口佳紀（2016）「『万葉集』におけるテハとテバの用法」『成蹊大学文学部紀要』（51），23-36，成蹊大学文学部学会.

山田昌裕（2010）『格助詞「ガ」の通時的研究』，ひつじ書房.

山田昌裕（2020）「平安期中央語の言語類型―活格性の有無―」『恵泉女学園大学紀要』(32)，47-61，恵泉女学園大学.

山田昌裕（2021）「無助詞名詞句の格と運用法―平安期鎌倉期の実態より―」『日本語文法』21（1），4-20，日本語文法学会.

山田孝雄（1908）『日本文法論』，寶文館.

山田孝雄（1936）『日本文法學概論』，寶文館.

由本陽子（1990）「日英対照複合形容詞の構造―「名詞＋形容詞・形容動詞」の型について―」『言語文化研究』（16），353-372，大阪大学言語文化部大学院言語文化研究科.

吉井健（2017）「「白妙の袖さへ濡れて朝菜摘みてむ」―万葉集のテ形による副詞句―」芳賀紀雄（監）鉄野昌弘・奥村和美（編）『萬葉集研究第三十七集』，53-81，塙書房.

吉田金彦（1977）『国語意味史序説』，明治書院．（吉田金彦（2010）『吉田金彦著作選 8 動詞・形容詞』，明治書院．に再録されたものを参照した）

吉田金彦（1989）「日本語史」加藤彰彦・佐治圭三・森田良行（編）『日本語概説』，281-306，桜楓社．

吉田妙子（2012）『日本語動詞テ形のアスペクト』，晃洋書房．

吉田光浩（1990）「主成分分析法による形容詞の活用分析―『枕草子』を資料として―」『大妻国文』（21），1-16，大妻女子大学国文学会．

吉田光浩（1995）「平安期形容詞の意味と終止用法について―『枕草子』『源氏物語』『栄花物語』を資料として―」宮地裕・敦子先生古稀記念論集刊行会（編）『日本語の研究宮地裕・敦子先生古稀記念論集』，112-145，明治書院．

吉永尚（1995）「なかどめ形節分類についての考察」『日本語・日本文化研究』（5），93-106，大阪外国語大学日本語講座．

吉永尚（1997）「付帯状況を表すテ形動詞と意味分類」『日本語教育』（95），73-84，日本語教育学会．

吉永尚（2012a）「テ形節における統語的考察」『園田学園女子大学論文集』（46），113-123，園田学園女子大学．

吉永尚（2012b）「テ形節の意味と統語」三原健一・仁田義雄（編）『活用論の前線』，79-114，くろしお出版．

和田利政（1987）「形容詞の機能」山口明穂（編）『国文法講座第二巻』，139-164，明治書院．

Levin, B. and Rappaport Hovav, M.（1995）Unaccusativity, *At the Syntax-Lexical Semantics Interface*, MIT Press.

Perlmutter, D. M.（1978）Impersonal Passives and the Unaccusative Hypothesis, P*roceedings of the Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society* 38, 157-189, Berkeley Linguistics Society.

Vovin, A.（1997）On the Syntactic Typology of Old Japanese, *Journal of East Asian Linguistics*, 6（3）, 273-290, Kluwer Academic Publishers.

Yanagida, Y.（2006）Word Order and Clause Structure in Early Old Japanese: *Journal of East Asian Linguistics* 15（1）, 37-67.

Yanagida. Y. and Whitman, J.（2009）Alignment and Word Order in Old Japanese, *Journal of East Asian Linguistics* 18（2）, 101-144.

本論文の構成と既発表論文との関係

序章

書き下ろし

第１章　先行研究

書き下ろし

第２章　用語と時代区分

書き下ろし

第３章　中古語における形容詞テ形節

菊池そのみ（2018）「中古語における形容詞テ形をめぐって―形容詞の意味分類との関わりから―」『言語資源活用ワークショップ発表論文集』3，12-26，国立国語研究所.（※大幅に加筆し、修正を施した）

第４章　形容詞テ形節の副詞的用法の変遷

菊池そのみ（2021）「古典語における形容詞テ形節の副詞的用法の変遷」『国語語彙史の研究四十』，37-55，国語語彙史研究会.

第５章　〈付帯状況〉を表す「形容詞＋まま」の変遷

菊池そのみ（2022 予定）「〈付帯状況〉を表す「形容詞＋まま」の史的展開」『論究日本近代語』第 2 集，日本近代語研究会.（※採録決定済み、2022 年 3 月刊行予定）

第６章　〈付帯状況〉を表す非対格自動詞節における変化

菊池そのみ（2020）「付帯状況を表す非対格自動詞節の変遷―「袖ひちて」「面赤みて」の構造―」『日本語文法学会第 21 回大会発表予稿集』，122-129，日本語文法学会.

第７章　形容詞テ形節の副詞的用法の衰退に関する文法史上の位置づけ

書き下ろし

終章

書き下ろし